ＢＳＡＡ学園！

龍の骨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＳＡＡ学園！

【Ｎコード】
Ｎ０７８０Ｍ

【作者名】
龍の骨

【あらすじ】
美少女アニメと美少女ゲームキャラが通うＢＳＡＡ学園（女子高ではない）に北郷零斗が転校してきた。しかし、零斗は『マイティ真拳』の使いである。零斗はＢＳＡＡ学園でどんなギャグを見せるのか？

キャラ設定

北郷零斗

イメージＣＶ　中井和哉

『ゾンビゲーム』の主人公。『ゾンビゲーム』とは異なり、『マイティ真拳』という武術の継承者である。前継承者に「マイティ真拳をＢＳＡＡ学園で活かせ」と言われ、ＢＳＡＡ学園に編入することになった。迅速能力があり、なのはのスターライトブレイカーをかわしたり、フェイトのプラズマザンバーブレイカーを受け止めたり、はやてのラグナロクをかわし、カウンター攻撃をするなどの荒技を持つ。また、武器を携帯しており、二丁ベレッダとコルト・パイソン等登校する時でも肌身離さず持っている。主人公ながらもボケ役である。主な必殺技は「パトリオットキック」

アリス・チェンバース

イメージＣＶ　後藤麻衣

『ゾンビゲーム』のヒロイン。零斗ＬＯＶＥな女の子であり、劉備と並ぶ巨乳である。
零斗に助けられた過去があり、ヤクザに絡まれたとき零斗の『マイティ真拳』でヤクザをたおした所で惚れたという。また、零斗がＢＳＡＡ学園に来るまでは胸が熱くなっていたという。こちらもボケ役である。

バレット・フランケン

イメージＣＶ　宮野真守

ツッコミ担当であり、零斗のボケにいつも突っ込んでる。
実はマーシャルアーツの達人であり、アクロバットな動きが得意。
バインドを一秒で解く等の荒技を持ち、魔導士では手をつけられないという
身体能力がある。主な必殺技は「バルカンマシンガン」

キャラ設定（後書き）

次回から本編です。

第一話　やってきた転校生　その名も　北郷零斗

ＢＳＡＡ学園の二年Ａ組で転校生が来るとの話で盛り上がっている。

なのは
「私達のクラスに転校生が来るらしいよ！」

ジル
「どんな人なんだろ～」

ちなみにこのジル・バレンタインは無邪気で明るい性格である。

及川
「かわい子ちゃんなら大歓迎やで！」

皆が転校生の話で盛り上がっているのに、二人だけその話に入ってない。

フランケン
「転校生ぐらいで何でワイワイキャッキャと言っているんだ？」

一刀
「さぁな、ここは黙って見守るのが大人だぜ」

するとチャイムが鳴り、全員静まる。

そして、シェバが教室に入る。

シェバ

「皆さん、今日このクラスに転校生が来ます。紹介をしたいところなんですが、
諸葛亮先生が・・・」

???

「はわわ～！しゅみましぇん！遅れちゃいました！」

そう二年A組の担当教師諸葛亮である通称『ちびっこ先生』。因みに今いるシェバ・アローマは

副担任である。

シェバ

「もう、諸葛亮先生！何してたんですか！？また昨日あの本を・・・」

諸葛亮

「それは言わないでください！」

諸葛亮とシェバのやりとりで笑う生徒達。

諸葛亮

「皆さん、このクラスに転校生が来ます！では、入ってくださ～い」

そして、ワイシャツの上に黒い革ジャケを来た男が入ってくる。

これを見た生徒と教師達は黙り込む。

零斗

「北郷零斗、そして俺は『マイティ真拳』の継承者だ、よろしく」

諸葛亮
「あの～『マイティ真拳』というのは・・・」

零斗
「いわゆる自在といったほうがいいな、すべての世界のアニメキャラとゲームキャラの
技などを取り入れた武術である。それと、自分で考えた必殺技を生み出すことができる。
弱点は・・・無いぜ！」

これを聞いた生徒達と教師達は、不信そうな目を見る。

零斗
「しょうがねぇな、マイティ真拳奥義！なのはトークン召喚！」

すると地面からなのはが出てきて、全員驚く。

諸葛亮
「はわわ～！」

シェバ
「本当だわ！」

しかし、これを見たなのはは、黒いオーラを放ちながら零斗に近付いてくる。

なのは
「少し、頭冷やそう・・・」

零斗
「あ、こんな所に爆弾が！ってうっそ～ん」

なのは
（ブチ！）

ジル
（なのはちゃん怖いよ～）

及川
（まずいで～あいつ死んだわ～）

零斗
「そうか、その状態にしては俺と勝負したいようだな、いいだろうグランドで勝負だ、ついて来い」

諸葛亮
（はわわ～どうしよう）

シェバ
（なのはさん、あなたは負けましたよ）

そしてグランド

バリアジャケットを着たなのははレイジングハートを構え、零斗は銃剣を構える。

なのは
「エクセリオン！バスター！」

放たれた砲撃は零斗に直撃した。しかし、零斗は無傷であった。

零斗
「マイティ真拳奥義、パンチシールド、放たれた砲撃の中心点にストレートパンチを
する必殺技だ！」

なのは
「ふ～んこれがマイティ真拳か～」

零斗
「まだまだあるぞ！マイティ真拳奥義！栗投げぇーーーーー！」

零斗は大量の栗をなのはに投げつける。

なのは
「イタタタタタタタタタタタタ」

流石のなのはは痛がるだろう。

零斗
「どうだ！これぞマイティ真拳だ！」

生徒達
（いや、完全になのはさんを怒らしてるよ！）

なのは
「零斗君、少し頭冷やそうか・・・」

零斗

「させるか！マイティ真拳奥義！巨大化！」

しかし、零斗の体は小さくなり、花くらいの大きさになった。

諸葛亮
（巨大化って、小さくなってますよ）

ところがなのはに蹴飛ばされ、元に戻る。

零斗
「いった～よくもやったな～マイティ真拳マル秘奥義！かめはめ波！」

すると零斗のかめはめ波はなのはに直撃する。なのははダメージを食らった。

なのは
「だったらこっちも本気だよ！」

なのははは、スターライトブレイカーを放つ構えをした。

零斗
「来い！止めてやる！」

なのは
「スターライトォ！ブレイカーーーーーーー！」

そしてスターライトブレイカーを放たれた。

零斗

「ならばこっちもいくぜ！マイティ真拳超奥義！ドリルスマッシャー！」

ドリルスマッシャーでスターライトブレイカーが防がれる。

なのは
「そんな！」

零斗
「ふふふ、最後のシメだ！」

零斗は学校くらいの高さで飛んだ。

生徒達
「エェーーーーーーーーーーーーーー！」

諸葛亮
「はわわーーーーーーーー！」

シェバ
「ありえないわ！」

零斗
「マイティ真拳奥義！パトリオットキック！」

そしてパトリオットキックがなのはに向かっていく。

なのはは逃げようとするが、零斗のパトリオットキックを食らった。

そして、なのははダウンした。

零斗
「魔法を使いすぎると後で自分に返ってくるぞ！」

なのは
「ハイ、ワカリマシタ・・・・」

フランケン
（まさか、なのはを倒す奴がいるなんて、面白そうだな）

零斗
「ふぅ～これでいいかな？」

そして、屋上から零斗を見る者がいた。

？？？
「北郷零斗、ついに来たか」

その後、マイティ真拳奥義ヒーリングでなのはは治り、授業が始まった。

諸葛亮
「それでは、授業を始めましょう」

こうして、零斗の伝説が始まったのであった。

第一話　やってきた転校生　その名も　北郷零斗（後書き）

次回はヒロインを出します。

第二話　マイティ真拳使いＶＳ魔法使い

ＢＳＡＡ学園二年Ａ組では、北郷零斗が来てからは更に明るくなった。

雄真
「なぁ、マイティ真拳って、魔法より強いのか！？」

零斗
「あぁ、確かに強いぜ、マイティ真拳の達人になれば、魔法も武術も全部使えるぜ、自分の考えた技を出す事だってできるぜ」

しかし、それを認めない者もいた。

？？？
「なによ、マイティ真拳の達人になったら魔法も使えるとか、そんなもの
無くたって魔法ぐらいつかえるわよ」

零斗
「ほーう、お前は柊杏子か」

杏璃
「杏璃よ！」

零斗
「どうやら、俺と勝負がしたいようだな、だが今はそれどころではないな」

杏璃
「はぁ？」

零斗
「放課後、グランドで勝負だ！」

杏璃
「望むところよ！」

雄真
「杏璃、零斗もやめろよ！」

チャイムが鳴り、劉備ガンダムが入ってくる。

劉備ガンダム
「え～授業を始めるぞ、特に関羽老けているな」

関羽
（ブチ！）

あーあ、怒らしちゃったよ、関羽にボコボコにされて授業が始まった。

零斗の隣の席はアリスである。

アリス
（零斗君、かっこいいな～なんだろう、胸がチクチクするこれってもしかして・・・）

そして放課後になった。

零斗
「逃げずによくきたな」

杏璃
「あなたが言ったことでしょ？」

零斗
「ふっ俺にビビッて逃げたんじゃないのか？」

杏璃
「うっさいわね！こんぐらいで逃げるわけないでしょ！」

零斗
「ならば、マイティ真拳奥義！コピー変身！」

すると零斗は光り出し、みるみるうちに杏里に変身するのだった。

しかし、服装は変わっていない。

パエリア
「な、なんと！」

フランケン
「変わってねえ！しかも服装だけ！」

R杏璃
「ははははははは、マイティ真拳ショート奥義！ゴロゴロアタック！」

零斗（杏璃）は横になり、杏璃に向かってゴロゴロ転がるが、よけられた。

向かった先は倉庫だった。すると倉庫に頭をぶつけた。

R杏璃
「痛ぇーーーーーーーーー！」

フランケン
「うわー意味ねぇ！」

杏璃
「今度は私の番よ！」

パエリア
（零斗さん、杏璃様のご無礼をお許しください）

するとパエリアから魔方陣が出た。

春姫
「あれは攻撃魔法よ！」

R杏璃
「関係ねぇ！マイティ真拳最終・・・あれ待てよ・・・今最終奥義を使ったらやばいよな・・・この状態で最終奥義を出すには全裸にならないとな・・・」

男子達
「オォーーーーーーーーーーーー！」

杏璃
「キャーーーーーーーーーーーーやめてぇーーーーーーーーーーーー！」

R杏璃
「よし、脱ごう！」

杏里
「イヤーーーーーーーーーーーーーー！」

R杏璃
「なーんてやらねぇよ、解除」

すると零斗は元に戻った。しかし、杏里は怒りで魔力があがる。

杏璃
「よくも、よくも恥をかかせてくれたわねぇーーーーーーー！」

零斗
「うわぁ～～～～～」

杏璃
「地獄に堕ちなさい！」

零斗
「うわぁ～～～～～～」

杏璃
「あはははははははははは」

零斗
「と見せかけてドーン！」

杏璃
「キャア！」

杏璃は蹴り飛ばされた。

そして劉備ガンダムが現れた。

劉備ガンダム
「コラ！お前達、何をしている！」

零斗
「ちょうどいいところに来ましたね」

杏璃
「まさか、助けを求めて私を倒そうとしているんじゃないでしょうね」

零斗
「いや、合体する！」

雄真
「合体！？」

春姫
「するの！？」

これを聞いた生徒達は混乱し始める。

劉備ガンダム
「合体って・・・」

零斗
「いくぞ！マイティ真拳奥義！フュージョンゲート！」

すると周りが網みたいな世界になる。

杏璃
「な、何よこれ！」

零斗
「いくぞ！零斗フュージョン！」

すると零斗と劉備ガンダムが光り出し、劉備ガンダムの体が分離する。

そして劉備ガンダムのパーツが零斗に装着する。

劉備ガンレイ
「フュージョン完了！」

生徒達
「ワァーーーーーーーーーーーー！」

杏璃
「だ、誰・・・」

劉備ガンレイ

「俺は劉備ガンレイ、貴様を地獄に落とす！」

杏璃
「いい気にならないで！これでも食らいなさい！」

杏璃は攻撃魔法で攻撃するが、ガンレイには効かなかった。

ガンレイは二つの剣を取り出し、杏里に向かって歩く。

杏璃はガンレイが近付くと、足をガクガク震えさせた。

杏璃
「待って、ここは話し合いを・・・」

劉備ガンレイ
「マイティ真拳奥義・・・双龍斬撃！」

杏璃
「キャアーーーーーーーーーーーーーー！」

そして杏里は双龍斬撃でダウンした。

劉備ガンレイ
「ふ、所詮はこんな程度かマイティ真拳奥義ヒーリング」

そして杏璃の傷が消えていった。それと同時に元に戻る。

二人
「やったーーーーーー！」

零斗
「俺達、力をあわせれば何でもできるんだね」

劉備ガンダム
「そうだね～バンザーイ！」

杏璃
「よくも、よくもやってくれたわねぇ～！」

劉備ガンダム
「さ、もう帰ろうか」

零斗
「そうだね」

二人は杏璃に背をむいて校門に向かったのだった。

杏璃
「待ちなさい！」

零斗
「あと、さっきの技だが、それを食らうと全裸になるといわれている」

杏璃
「え？」

すると杏里の服が破れ、全裸になった。

男子達

「オォーーーーーーーーーーーーーー！」

杏璃
「キャーーーーーーーーーーーーーーーー！見るなぁ！」

アリス
「零斗君、かっこいい・・・うっとりしちゃう・・・」

シェバ
「アリスさん・・・・」

諸葛亮
「挑んだ杏璃さんも自業自得ですね・・・・」

翌日、杏璃は学校に来なかったという。

しかし、学校に潜む零斗の敵がいた。

？？？
「全く、あの力は欲しくなるな、僕のコレクションにしよう」

一体誰なのか！

おまけ

零斗
「そういや、杏璃が登校拒否していたけどなんでかな～？」

雄真

（それはお前が全裸にさせたからだ）

杏璃の家では・・・

諸葛亮
「杏璃さん、杏璃さん?」

諸葛亮が呼びかけても出てこなかった。

一週間後、杏璃は諸葛亮の説得（?）により登校した。

それはまた別の話。

第二話　マイティ真拳使いＶＳ魔法使い（後書き）

次回は零斗の敵組織が来ます！

第三話　迫り来るハンター

夜　それは物騒な時間。セイバーと謎の男が闘っている。

セイバー
「ぐ、なんて力・・・」

???
「悪いが大人しく捕まれ」

セイバー
「誰が！エクスカリバー！」

セイバーのエクスカリバーは炸裂するが、

???
「こんな程度か・・・・」

セイバー
「そんな、エクスカリバーが・・・」

セイバーは膝蹴りを食らい、気絶した。

そして謎の男はセイバーをどこかに運んだ。

翌日。

春姫
「そういや、零斗君は？」

雄真
「あれ?まだ来てないのか」

零斗
「おはよ~」

フランケン
「あ、零斗」

そこにはガトリングを持った零斗の姿だった。

フランケン
「ギャーーーーーーー!何でガトリング!」

零斗
「いや~家にあったから自慢しようと思ってね」

フランケン
「むしろ自慢するどころじゃないよ!危ないよ!」

零斗
「そうか?俺はそう思わないけど・・・・」

すると零斗はガトリングを上に向けて撃った。

生徒達
「うわぁーーーーーーーー!」

杏璃

「わ～やめてやめて！」

春姫
「というより誰か止めてーーーーーーー！」

するとガトリングの弾が出てこなくなった。

そう、弾切れになってしまったのだ。

そして、チャイムが鳴った。

諸葛亮
「あの～何があったんですか？」

零斗
「え～謎のガトリング男に襲われ、天井が蜂の巣になりました」

シェバ
「ガトリング男って・・・」

こうして諸葛亮のホームルームが始まった。

諸葛亮
「最近、このあたりの路地で失踪事件が起きています」

これを聞いた生徒達はざわめく。

諸葛亮
「なので皆さん、夜の外出は控えましょう」

零斗
「せんせーい、このあたりで失踪事件が起きていると言いましたよねだったら見つけたら捕まえればいいんじゃないですか？」

シェバ
「それは無理よ、犯人はアメリカンバイクに乗ってて、フェイトさんでも勝てない相手なのよ」

これを聞いた零斗はある人物を思い出す。

零斗
「まさか、奴か！」

そして生徒達は驚くように零斗に注目した。

しかし零斗は気にせず言葉を走らせる。

零斗
「暴走族集団ブラッド・スコーピオンのリーダー、ポイズン・カルロか！」

生徒達
「えぇーーーーーーーーーーーー！」

諸葛亮
「はわわー！」

シェバ
「知ってるの！」

零斗
「魔導師、魔法少女、そして戦士と女戦士を自分のコレクションにする男！
俺の師匠は、俺が継承者になった日に殺されたんだ！」

生徒達
「えぇーーーーーーー！」

春姫
「私がストーキングされているのも・・・」

関羽
「鈴々が登校してなかったのも・・・」

零斗
「あぁ、全部奴の仕業だ」

これを聞いたなのははこう言った。

なのは
「フェイトちゃんとはやてちゃんが登校しなかったのは・・・・」

零斗
「カルロ、ぜってぇ許さねぇーーーーーーーー！」

そして授業のチャイムがなり、曹操ガンダムが入った。

曹操ガンダム
「余の授業の時間だ、さぁ、始めるぞ！」

生徒達
「はぁ・・・・」

諸葛亮
「もう、悪いタイミングで現れないで下さい・・・」

曹操ガンダム
「何があったというのだ！」

シェバは曹操ガンダムに新聞を渡す。新聞を見た曹操ガンダムは驚きながらこう言った。

曹操ガンダム
「こ、これは・・・そういうことだったのか、零斗がいってた人物はサーシャでも
勝てないらしいといわれている」

まふゆ
「サーシャでも勝てないの！？」

零斗
「あぁ、今夜奴とケリをつける」

シェバ
「ちょっと待って！！相手は強者よ！いくらあなたでも無理だわ！」

零斗
「奴と一度戦ったことがある、奴のつかう真拳はマイティ真拳だ」

これを聞いた全員は驚き、混乱する。

ナツル
「同じ真拳使い・・・・」

紅音
「じゃあ、あの人も弟子・・・」

そして、下校時間になり、生徒達は全員帰った。

夜、零斗は失踪事件が起きた現場に立っている。

するとバイクが零斗の方へ向かって来る。

零斗の間合いでバイクが止まった。

カルロ
「久しいな、零斗」

零斗
「お前もな、カルロ」

カルロ
「俺はお前と同じマイティ真拳の達人の弟子だ」

零斗
「師匠のマイティ真拳を受け継いだ力を見せてやる！」

カルロ
「それは面白いな、見せてもらおう」

零斗
「マイティ真拳奥義！全力全開！スターライトブレイカー！」
放たれたスターライトブレイカーはカルロにめがけているが、
カルロ
「マイティ真拳奥義、無力化バリア」
無力化バリアでスターライトブレイカーは消えた。
零斗
「これで苦戦させたのか、ならばマイティ真拳奥義！神坂春姫召喚！」
すると地面から神坂春姫が出てくる。
カルロ
「ふ、甘いなマイティ真拳奥義！ヘルポリマー！」
ヘルポリマーによって春姫はカルロの元へ行ってしまう。
カルロ
「さらに、マイティ真拳奥義！ダークフュージョン！」
するとカルロの後ろから黒い空間が出てきて、二人は黒い空間に入った。
そして、出てきたのは、春姫とカルロが融合した姿だった。
零斗

「そんな馬鹿な」

？？？

「私はダーククロッサー、貴様を葬ってやろう」

ダーククロッサーは迅速で零斗に攻撃する。

しかし零斗は何とかかわし、迅速でダーククロッサーについていくのであった。

だが、ダーククロッサーは零斗の攻撃をかわし、ストレートパンチでダメージをあたえた。

零斗

「くそ、何故だ！」

ダーククロッサー

「お前は私についてこられるようだが、隙をつくってしまったな。」

零斗

「くそぉ、皆を返せ！」

ダーククロッサー

「無駄だなあがきはよせ」

零斗

「あきらめてたまるか！」

ダーククロッサー

「止めだ、ダークマイティ真拳奥義！ブラックスコーピオン！」

零斗
「ぐはぁ！」

ブラックスコーピオンで零斗は倒れた。それと同時にカルロと春姫は元に戻る。

カルロ
「まぁ所詮はこんなもんだろう、今日は気分がいいからな、見逃してやる」

翌日。

カルロがバイクで去ると同時に春姫は倒れた。

諸葛亮
「そうだったんですか、春姫さんは・・」

劉備ガンダム
「今は大丈夫だ、だが零斗はカルロに負けて心に深いダメージを負っている」

シェバ
「零斗君も辛いでしょう、どうしたら・・・」

？？？
「それなら、僕が零斗の特訓相手になろう」

三人
「あ、あなたは！」

果たして、三人の前に現れた人物とは一体！

第三話　迫り来るハンター（後書き）

次回は零斗が特訓します。

2年A組の名簿（前書き）

2年A組の名簿です。

2年A組の名簿

零斗
「何？2年A組の名簿を知りたい？だったら教えてやる」

2年A組名簿

1　ユーノ・スクライア

2　アレックス・ウェスカー

3　エリオ・モンティアル

4　バレット・フランケン

5　北郷一刀

6　小日向雄真

7　及川拓

8　上条信哉

9　高溝八輔

10　ライアン・ハート

11　瀬能ナツル

12 東田幹仁
13 クロノ・ハラオウン
14 北郷零斗
15 渡良瀬準
16 ジル・バレンタイン
17 神坂春姫
18 柊　杏璃
19 高峰小雪
20 美嶋紅音
21 三郷　雫
22 近堂三琴
23 関羽
24 張飛
25 高町なのは
26 フェイト・テスタロッサ

２７　八神はやて

２８　キャロ・ル・ルシエ

２９　蔡ボウ

３０　アリス・チェンバース

３１　織部　まふゆ

担任　諸葛亮

副担任　シェバ・アローマ

零斗

「どうだ？これが２年Ａ組だ。次回は俺が特訓するぞ」

2年A組の名簿（後書き）

どうでしたか？これからのＢＳＡＡ学園をよろしくお願いします。

第四話　零斗の特訓！

三人の先生の前に現れたのはエリオ・モンティアルだ。
しかし彼は人間ではなく、ギリシャ界の住人である。
とある理由で人間の姿になり、ＢＳＡＡ学園に通学している。

エリオ
「話は聞きました。零斗君と俺は一週間休みます」

これを聞いた諸葛亮はこう答えた。

諸葛亮
「分かりました、許可します！」

こうしてエリオと零斗は一週間休むことになった。

エリオは、零斗をギリシャ界に連れて行き、特訓をさせるようだ。

一方2年Ａ組では、エリオと零斗が一週間休むと聞いて変化が起こった。

準
「零斗とエリオが一週間休むの？」

ジル
「成績に影響するよ～」

アリス
（零斗君、何で？）

八輔
「うぉ～い！零斗ぉ！何で休むんだーーーー！」

フランケン
「零斗が休みなんてめずらしいな、信哉はどう・・・」

信哉は石になった。

フランケン
「何で石になるんだよ！？」

八輔
「あ～こいつ、零斗がいないと石になるんだよな～」

フランケン
「そうなのか！？だけど石なるなんてやっぱおかしいから！」

高峰
「そういえば私、誰かに呼ばれたような気がしますが・・・」

杏璃
「気のせいじゃないですか？」

春姫
「まあそれはともかく、零斗君が来るまで待ちましょう」

高峰

「そうですね」

準
「こうなったら、零斗君が来ないなら脱ぐよ！」

八輔
「ギャ～やめてーーーーーーーーー！」

準
「だったら！これしかない！」

すると準が光りだした。

準
「さようなら・・・・」

八輔
「やめろーーーーーーー！」

そして、爆発した。

その頃ギリシャ界では、

零斗
「ほ～すげ～な」

エリオ
「お前はここで特訓してもらう」

零斗

「え？マイティ真拳の継承者の俺が？」

するとエリオは零斗の弱点に近いことを言う。

エリオ
「お前の弱点は、感情を入れたまま闘うことだ。これではマイティ真拳奥義が出しにくくなり、大きな隙を作ってしまうことだ」

零斗
「つーことは、師匠を殺したカルロに対する感情を入れているからか？」

エリオ
「あぁ思いっきり感情丸出しだ」

零斗
「特訓って、何をすればいいんだ？」

エリオは特訓することを零斗に口にする。

エリオ
「俺と勝負しろ」

零斗
「は？」

エリオ
「弱点を克服するには、これしかないんだ」

零斗
「よーし分かった！マイティ真拳奥義！高峰小雪召喚！」

しかし何も起きない。そう、ここはギリシャ界なので平行世界から召喚できない。

零斗
「あれ？おっかしーなー？」

エリオ
「それだ、それが弱点だ。召喚したところで融合しようとするのは大きな隙ができる」

零斗は昨日の夜を思い出す。召喚したところで、カルロのヘルポリマーで奪われることを

それに気付いた零斗はエリオにこう言った。

零斗
「じゃあ、どうすれば」

エリオ
「こうするんだ、イカロス真拳奥義！召喚融合（フュージョン）！」

すると周りが網状の世界になり杏里が現れる。そしてエリオと杏里が白い空間に入り

後ろに翼をもった杏里の姿があらわれる。その名はアルティメットイカロスである。

Aイカロス
「どうだ、これで参考になったか」

零斗
「嘘だろ・・・召喚できないのに!?」

Aイカロス
「融合素材を頭に浮かべて召喚し、融合する。召喚された融合素材は奪われることはない」

零斗
「そうか・・・だからあの時・・・・その奥義、やってみるぜ!マイティ真拳奥義!召喚融合(フュージョン)!」

また周りが網状の世界になり今度は曹操ガンダムが現れる。白い空間い入ろうとしたが、すぐに消えてしまった。

それと同時に曹操ガンダムも消えてしまった。

零斗
「そんな、できないなんて・・・」

エリオ
「融合素材のイメージを維持し続けなければすぐ消えてしまう。これは元々イカロス真拳のものなんだ
ほかの奥義でやって成功させるのは難しい。成功するには一週間かかる」

零斗
「だから一週間休みに・・・・」

エリオ
「その通りだ、続けてくれ」

零斗の特訓が始まってから三日後。

杏璃
「私昨日変な世界にいた夢を見たんだけど・・・」

雄真
「俺もだ」

零斗の特訓でギリシャ界に連れ去られた者もいた。

タマちゃん
「僕も呼ばれたような気がするんだけど・・・・」

高峰
「私もそうだったわ」

春姫
「わたし、ギリシャの世界に連れ去られた夢を見たわ・・・」

ギリシャ界では、まだまだ特訓していた。

零斗
「マイティ真拳奥義！召喚融合（フュージョン）！」

しかし失敗した。

零斗
「何故だ、何故出来ない！」

そしてエリオはこう答えた。

エリオ
「それは、お前には復讐の感情が入っているからだ、それを捨てて闘うことだけに集中しろ
焦ることはない」

零斗
「・・・そうか、だったらその気持ちを捨てて！皆を救う気持ちを入れよう！」

エリオ
（いや、そういう意味じゃなくて・・・・）

零斗
「マイティ真拳奥義！召喚融合（フュージョン）！」

すると周りが網状の世界になり、劉備ガンダムと杏璃が現れる。三人は白い空間に入った。

そして白い空間から現れたのは、劉備ガンレイ杏璃である。

劉備ガンレイ杏璃
「や、やったぞ・・・やったぞーーーーーーーーー！」

エリオ
（馬鹿な、一週間かかるというのにたった三日間で・・・確かに継

承者だ・・・
前継承者、零斗を継承者にして正解だったな）

劉備ガンレイ杏璃
「よし、勝負だ！」

エリオ
「ふ、お前に教えることもうは無い、その奥義でカルロを懲らしめて来い」

劉備ガンレイ杏璃
「その～融合した姿でいられんの三時間だけど・・・・・」

エリオ
「はぁ～」

そしてエリオと零斗は夜に平行世界に戻り、失踪事件の現場に向かった。

その夕方に、生徒達は下校していた。

するとアメリカンバイクが零斗のほうへ向かってきて、零斗の間合いで止めた。

カルロ
「待ってたぞ・・・」

零斗
「あぁ！新しい技を手に入れたからな！」

カルロ
「そうか、俺に勝ったらコレクションにされている奴らを解放してやる」

零斗
「悪くないな！いざ勝負！」

こうして、零斗とカルロの勝負は切って落とされた！

第四話　零斗の特訓！（後書き）

次回はカルロ編完結です。

第五話　ついに決着！悲しみの勝利

カルロと零斗は赤いオーラを出しながら構えていた。

エリオはそんな二人を見守っている。

零斗
「見せてやるよ、一週間かけて手に入れた奥義を！」

エリオ
（いや、一週間じゃ無いぞ）

カルロ
「面白い、その奥義を見せてもらおうか！」

零斗
「行くぜ！マイティ真拳奥義！柊　杏璃召喚！」

すると地面から杏璃が出てくる。しかし、機嫌が悪そうだ。

杏璃
「な、ちょっと！昨日のあの夢はあんたの仕業ね！」

零斗
「ちょっと協力してくれ！」

杏璃
「いやよ！なんで私を巻き込むのよ！」

二人が言い合っている内にカルロの手から黒い炎が出る。

カルロ
「ふ、また同じことをマイティ真拳奥義ヘルポリマー！」

零斗
「甘いのはお前じゃーーーーー！」

カルロ
「何！」

零斗
「マイティ真拳奥義！杏璃マグナム！」

杏璃
「何すんのよ！」

零斗は杏璃をストレートパンチでカルロへ吹き飛ばした。

杏璃
「キャーーーーーーーーーーーーーー！」

そして杏璃がカルロにぶつかり、二人同時に大ダメージを受けた。

二人
「ゴブァーーーーーーーーー！」

零斗
「どうだーこれが新しい奥義だー！」

エリオ
（お前、ある意味すごいよ）

カルロ
「ぐぅ、こうなったらダークフュ・・・」

零斗
「させるかーマイティ真拳奥義！零斗マジック！」

そして零斗マジックで、カルロの手に長ネギがあり、零斗の元では杏璃がいた。

カルロ
「長ネギだと！」

零斗
「ははははは！これで阻止したぞーーーーー！」

カルロ
「クソ～この長ネギと融合するぞ！ダークフュージョン！」

するとカルロが紫の光に包まれ、どんどん小さくなっていく。

そして長ネギを持った幼女になった。

杏璃
「誰ぇ！？」

長ネギちゃん
「私、長ネギちゃんって言うの、よろしくね☆」

長ネギちゃんの笑顔で零斗達はジト目で見る。

すると元のカルロに戻った。

カルロ
「ちくしょーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

カルロの叫びで怒りがＭＡＸになった。

カルロ
「許さねぇ、許さねぇ！マイティバーサーク真拳奥義！皇帝ペンギン一号！」

すると地面から赤いペンギンと丸い気弾が出てきて、赤いペンギン達がカルロの足に噛み付いた。

そしてカルロは気弾を蹴り、それと同時に赤いペンギン達が気弾を輪になるように囲み、零斗に向かっていった。

杏璃
「すごいの出たぁーーーーーーーーーーー！」

零斗
「ならばこっちもいくぜ！マイティ真拳奥義！いかりのてっつい！」

零斗の後ろから魔人が出てきて、零斗が鉄槌をやるような構えをすると魔人も同じくやる。

放たれた皇帝ペンギン一号は零斗が振り下ろしたと同時に潰される。

杏里
「エェーーーーーーーーーーーーーー！」

零斗
「お前はこのまま続けると自我を失うぞ！」

カルロ
「うるせえ！お前に何が分かる！俺の妹が囚われて苦しんでいる気持ちが分かるかぁーーー！」

零斗
「何！？」

カルロ
「正直、マイティ真拳の伝承等どうでも良かった！妹のためにマイティ真拳を手に入れたのだからな！
だが師匠は俺を破門した！妹のためなら、破門されたっていい！」

零斗
「これがカルロがマイティ真拳に触れる理由だったのか・・・」

杏璃
「じゃああの事件は起こしたのは妹のためだったの？」

カルロ
「それを奪った奴らが許さねぇーーーーーーーーー！」

するとカルロの体から黒い翼が生えた。

零斗
「これがカルロの力なのか・・・」

カルロ
「ダークマイティ真拳奥義、スペースサテライトレーザー！」

カルロは翼を使い、高く飛んだ。そして右手からレーザーが出る。

すると、零斗の周りのものが爆発する。

カルロ
「ははははははははははははははは」

しかし、零斗は無事だったものの、杏璃が倒れた（気絶した）。

これを見た零斗は怒りをカルロに見せる。

零斗
「よくも、よくも俺のクラスメイトを傷つけたな！絶対に許さーーーん！」

すると零斗は新たな奥義をあみ出す！

零斗
「マイティ真拳究極奥義！召喚融合（フュージョン）！」

そして周りが網状の世界になり、なのはと劉備ガンダムが出てきた。

三人は白い空間に入り、劉備ガンレイハートが出てきた。

劉備ガンレイハート
「フュージョン完了」

カルロ
「これで強くなったからっていい気になるなよ」

劉備ガンレイハートは二つの剣を取り出し、カルロはデビルソードを取り出した。

そして、二人の剣どうしの打ち合いが始まった。

劉備ガンレイハート
「ふ、まだまだ甘いな」

カルロ
「ち！」

そして二人はその場で離れた。

劉備ガンレイハート
「レイジングマイティ真拳最終奥義！」

カルロ
「ダークマイティ真拳最終奥義！」

劉備ガンレイハート
「スターライトブレイカーＶ２！」

カルロ
「エクセリオンバスターＶ２！」

二人の光線が押し合うが、スターライトブレイカーＶ２に押され
カルロは落ちる。それと同時に元に戻った。
劉備ガンレイハート
「これで終わったな・・・・」
すると三人は元に戻った。
カルロのポケットからネックレスらしきものが出てくる。
零斗
「ん？何だこれ？」
カルロ
「それは妹のネックレスだ・・・」
なのは
「妹の？」
カルロ
「あぁ、お前が継承者になる前に金山企業に誘拐された」
三人
「え！？」
カルロ
「金山企業は俺に『妹を返してほしければ、強いキャラをさらい、我々に渡せ』と」

劉備ガンダム
「なんて卑劣な」

カルロ
「仕方が無かったんだ！マイティ真拳の達人を殺せと言われたんだ！妹のために」

零斗
「なぁ、顔上げろよ」

カルロ
「え？」

すると零斗は手をさしのべる。

カルロ
「この俺を許してくれるのか！？」

零斗
「すまないな、妹のためだとは知らなかったからさ」

カルロ
「れ、零斗ぉ～～～～～」

零斗
「カルロぉ～～～～～～～」

すろと零斗は、右腕でカルロに殴った。

零斗
「甘えるんじゃねぇーーーーーーーーーーーーーー！」

カルロ
「グハァーーーーーーーーーーーーーーーー！」

二人
「えぇーーーーーーーーーーーーーーーー！」

カルロは気絶した。その後、劉備ガンダムは杏璃を家まで運び、
なのはとエリオはカルロに捕らえられたキャラを救出した。

これにより、事件は解決した。

そして朝になり、零斗は元気に登校した。

零斗
「おはよーーーーーーー！」

全員
「零斗！」

そしてアリスは零斗の抱きついた。

アリス
「うわぁーーーーん！零斗ぉーーーー寂しかったよーーーーーーー！」

零斗

「はははははは、そんなに寂しいのか～心配してくれるなんて俺、嬉しいぞ～」

そしてチャイムが鳴った。諸葛亮とシェバが教室に入ってくる。

諸葛亮
「皆さん、今日は嬉しいお知らせがあります。このあたりの路地の事件が解決されました！」

シェバ
「この中で、解決してくれた人がいます。」

生徒達がざわめき始める。

諸葛亮
「北郷零斗さんです！」

全員
「ワァーーーーーーーーーーーーーーーー！」

そして、零斗はクラスメイトに胴上げされた。

零斗
「嬉しいなぁ～」

しかし、零斗は気付かなかったのだった、この先にあるもっと恐ろしい影を

第五話　ついに決着！悲しみの勝利（後書き）

次回はアックスと蔡ボウ（朱愛）を出します。

第六話　ドキッ隣の席はメイドさん！？（前書き）

途中でエロがありますが、お楽しみください。

第六話　ドキッ隣の席はメイドさん！？

ＢＳＡＡ付近の路地の失踪事件が終わった後、ＢＳＡＡ学園は今日も平和だ。

ある日、こんな事が起こった。

ジル
「ねぇねぇ？気になるんだけどさ、なんで蔡ボウとアックスはいつも一緒なの？」

ジルはアックスと蔡ボウついて知りたがる。

まふゆ
「え？席はいつも一緒じゃない」

ジル
「違うよ～登校する時も下校するときも電車にいる時もいつも一緒だよ！
それに帰り道も一緒だよ！」

ナツル
「確かに、言われてみればそうだよな・・・」

雄真
「それに、過剰に仲がいいとか・・・」

ジル
「もしかして、二人は恋人関係じゃない？」

全員
「えぇーーーーーーーーーーーーーー！」

蔡ボウ
「おはようございます」

アックス
「おはよう！」

するとジル達は二人の元へ行き、どう言う関係か問い始める。

ジル
「ねぇねぇ！二人はもしかして、付き合ってる！？」

まふゆ
「どうなのよ！」

雄真
「正直に言ってくれ！」

すると蔡ボウの口からとんでもない発言をしてしまう。

蔡ボウ
「別に～付き合っているとかそういうことじゃないんです。アックス様のメイドですから～」

すると全員固まる。

蔡ボウ

「あれ?どうしたんですか?」

全員
「ウソォーーー

蔡ボウ
「ここは・・・」

アックス
「ここは僕の家だよ、君は路地裏で倒れてたから僕の家に運んだよ」

蔡ボウ
「何で、私なんかに助けるんですか？」

アックス
「え？それは決まっているだろう、女の子を路地裏で寝かせるわけにはいかないんだ」

蔡ボウ
「私なんかを助けて、何の得があるんですか？」

アックス
「え？」

蔡ボウ
「私は厄病神だから、親に捨てられた、それに行く当てもなく・・・」

すると蔡ボウは泣き出す。アックスは泣いている蔡ボウに抱きしめた。

アックス
「そうかそこまでひどかったのか、ごめん。でもね、助けてあげたんだからさ、

厄病神とかいわないでおくれよ。」

そして蔡ボウはなきやみ、すこし微笑んだ。

蔡ボウ
「では、私はあなたに真名を授けます。私の真名は朱愛です。」

アックス
「朱愛、いい真名だね、じゃあ僕の事をアックスってよんで」

蔡ボウ
「はい、アックス様」

アックス
「朱愛、好きだよ」

蔡ボウ
「私も好きです。アックス様」

こうして蔡ボウは、アックスのメイドになった。

蔡ボウ
「というわけなんです。」

これを聞いたジルとまふゆは涙を流し始める。

ジル
「うぅ～そうだったの！？ごめん！知らなくて！」

まふゆ

「こんな悲しい過去があったのね！」

すると零斗はフランケンに小声でこう言った。

零斗
「（小声で）なぁ、メイドだけに冥土の土産だよな」

フランケン
「（小声で）バカ！！そんな駄洒落を言うな！雰囲気がぶち壊しだぞ！」

零斗
「なら、フランケン屋上に来い」

フランケン
「えぇ～（めんどくせぇ～なぁ～）」

そして屋上

零斗
「カルロから聞いた話だと、あの事件は金山企業に関わっているらしい」

フランケン
「金山って、あの有名な貿易会社の！？」

零斗
「あぁ、それにヤクにも関わっている」

フランケン

「じゃあ、お前狙われるぞ！」

零斗
「大丈夫だ、今は動きが見えないが特に修学旅行が心配だな」

フランケン
「そうだな、修学旅行に刺客が送られるからな」

零斗とフランケンは修学旅行のときの対策を練った。

そして夜、アックスは風呂上りに牛乳を飲み、歯磨きを終えた後、自分の部屋へ行った。

すると自分の部屋にはニーソックスだけ残した全裸姿の蔡ボウの姿だった。

蔡ボウ
「アックス様、今日はご奉仕します」

アックス
「ちょっと朱愛！何て格好を」

蔡ボウ
「アックス様に恩返しをしたくて」

アックス
「いや、恩返しは受けまくってるよ」

蔡ボウ
「いいえ、私は今夜一晩アックス様の相手になるのが私の恩返しで

す」

するとアックスは顔を赤くしながらも服を脱ぎ、全裸になった。

アックス
「じゃあ、一晩だけだよ」

蔡ボウ
「はい、アックス様」

そして二人は顔を合わせ、唇を重ねた。

蔡ボウ
「ん／／／／／／」

アックス
「ん／／／／／／」

二人は熱い夜を過ごした。

翌日

諸葛亮
「あの、アックスさんと蔡ボウさん、昨日くんずほぐれつをしたんですか？」

アックス
「え！？」

諸葛亮

「昨日の帰りに、アックスさんの自宅から喘ぎ声が聞こえたんですが・・・」

アックス
「あ、あれはその～なんていうか～」

すると蔡ボウが現れ、アックスに抱きつき、豊満な胸を押し付ける。

アックス
「ちょ、朱愛！先生の前だぞ！」

蔡ボウ
「そんなの気にしないで下さい！」

すると諸葛亮の怒りがＭＡＸになり、アックスに怒鳴りつける。

諸葛亮
「もういいです！そんなに豊満な胸を持つ人が好きならその人と仲良くしてください！
部外者の私にはもう何も言いませんから！」

そして諸葛亮はその場から離れていった。

アックス
「あぁ、やばい」

蔡ボウ
「どうしたんですか？」

アックス

「孔明先生が怒った・・・孔明の罠が出る・・・・・」

アックスは気絶した。

蔡ボウ
「アックス様！どうなされたんですか！」

そして、アックスの言うとおり、孔明の罠が始まった・・・かもしれない。

おまけ

居酒屋で、三人の教師がいた。

諸葛亮
「うぅ～私だって、わたしだって～（泣）」

劉備ガンダム
「孔明先生が泣いているんだが、どうなされたんだ？」

曹操ガンダム
「あまり聞くものじゃないぞ」

零斗
「男って、豊満な胸が好きなのか？って思っているらしいぜ～」

二人
「え！そうなの！？」

何故零斗がいるかと言うと、居候をしているからだ。

ちなみにクラウザーは居酒屋の親父である。

第六話　ドキッ隣の席はメイドさん！？（後書き）

次回は修学旅行編です。

第七話　修学旅行はやっぱり楽しいもう！

ＢＳＡＡ学園では、二泊三日の修学旅行がある。その行き先は静岡であり、

一日目は、街を観光し、買い物したりする。二日目は、『シズオカテーマパーク』という遊園地に行き

エンジョイする。三日目は修学旅行の最終日にバスで観光する。

しかし心配なのはアックスと蔡ボウと諸葛亮である。前回で、蔡ボウがアックスにぱふぱふ攻撃をしたため

それを見た諸葛亮はキレ出したのである。多分、アックスに孔明の罠が振りかかる。

しかし、今のところ零斗が来ない。

フランケン
「零斗のやつ、この日に限って遅刻か？」

諸葛亮
「は～いみなさ～ん行きますよ～」

フランケン
「ちょっと待って！零斗君がいません！」

諸葛亮
「いいですよ、どうせ後悔すると思いますから」

フランケン
（うわ～ひでぇ～）

全員バスに乗り、出発した。

フランケン
（すまん、零斗）

そして、バスが行った後、ハマーがバスの後についていく。

そして高速に入り、生徒達はお菓子など食べている。

蔡ボウ
「アックス様あ～ん」

アックス
「いいよ～自分で食べるから」

ちなみにこの二人はラブラブ？である。

これを見た諸葛亮は黒いオーラを出しながら嫉妬している。

諸葛亮
（何でアックスさんの隣が蔡ボウさんなの！？）

そして諸葛亮は、一刀とラブラブになっている妄想をし始める。

諸葛亮
（でも、一刀君なら・・・）

諸葛亮ビジョン開始。

一刀
「孔明先生、今日は俺の家に夜来てください、待ってますよ」

諸葛亮
「は、はい」

そして一刀の家

諸葛亮
「え～っと一刀君、話とは何ですか？」

一刀
「俺、ずっと前から孔明先生のことが好きでした」

諸葛亮
「は、はわ！」

一刀
「生徒の指導も頑張っているところを見ると、胸が熱くなってしまって」

諸葛亮
「そんな、私みたいな教師なんか、大したことは・・・」

一刀
「そんなことはありません、先生は一生懸命頑張っていると思います」

諸葛亮
「で、でも私のことが好きだとか冗談は・・・」

一刀
「冗談なんかじゃありません、俺が体で証明します」

すると一刀は服を脱いだ。

諸葛亮
「はわわーーーーーーーー！／／／／／／／／／／な、何をしているんですか！」

一刀
「何って?体で証明するに決まっているじゃないですか」

諸葛亮
「で、でも口づけだけでも・・・」

一刀
「それだったら、先生は他の男のものになってしまいます、そんなの嫌です！」

諸葛亮は顔を赤くして、一刀に優しく服を脱がされた。

諸葛亮
「では、一刀君に真名を授けます、私の真名は朱里です」

一刀
「では、始めましょう朱里先生」

諸葛亮
「はい、一刀君」

そして二人は顔を合わせ、唇を重ねた。

一刀
「ん／／／／／」

諸葛亮
「ん／／／／／」

そして二人は禁断の夜を過ごした。

諸葛亮ビジョン終了。

諸葛亮
「はわわ～！どうしましょう！」

諸葛亮は顔を赤くした。それを見たシェバは呆れる。

そのとき、運転手はバックミラーを見て異変を感じた。

運転手
「さっきから後ろのハマーがずっとついてきているんだが」

シェバ
「あら確かに・・・」

するとハマーの上からから零斗が出てきた。

諸葛亮
「れ、零斗君!?」

フランケン
「えぇーーーーーーーーーーーーーー!」

シェバ
「運転している人は・・・・・ジョッシュさん!?」

ジョッシュ
「零斗!高速道路の空気はどうだ!」

零斗
「サイコーーーーーーでーーーーーーーーす!」

ジョッシュ
「そうかーーーーーーー!だったら目の前のバスに挨拶しろよ!」

零斗
「おいーーーーーっす」

ハマーはバスの横に行き、零斗は両手で振る。

一刀
「なんでハマーに乗ってるんだーーーーーーー!俺も乗りてぇーーーー!」

関羽
「ご主人様ーーーーーーーー!」

張飛
「零斗だけずるいのだ！鈴々も乗りたいのだー！」

関羽
「お前もボケるな！」

アリス
「あぁ～ん、零斗君かっこいい・・・」

関羽
「アリスーーーーーーー！」

そしてパーキングエリアで一休みした。

シェバ
「これはどういう意味ですか！」

ジョッシュ
「いや～2年A組を驚かせたくて～」

シェバ
「全く、とんだ迷惑です」

零斗は諸葛亮の説教を受けていた。

諸葛亮
「全く！遅刻だと思ったらジョッシュさんの車に乗ってたなんて！」

零斗

「まぁ落ち着いてください、どうしてこうなったかを全部話しますから
それは、朝五時のことだった、俺はマイペースで歩いているとジョッシュさんにであい、
ハマーで学校まで送ってもらったが、途中で眠ってしまってバスが出発した頃には起きてしまい、
これはいい機会だと思い、ジョッシュさんはそれに気付き、バスの跡についていったという感じです」

諸葛亮
「それじゃ、ジョッシュさんはただ私達と行きたいだけでは・・・」

零斗
「はい！願いを叶えさせました～」

諸葛亮
「ふざけないで下さい！（怒）」

零斗
「そうかっかしないで下さいしょうがない、マイティ真拳奥義！ハマーの中から魔女登場！」

そしてハマーの横ドアから現れたのは、とんがり帽とマントと露出の高いビキニを着た鳳統だった。

フランケン
「魔女が出た！」

シェバ
「鳳統先生！？」

諸葛亮
「雛里ちゃん！？」

鳳統は理科担当の教師である、諸葛亮と同じくちびっ子教師。諸葛亮とは幼馴染である。

手に持っているのは先に星がついているステッキだった。

鳳統
「では朱里ちゃんの願いを叶えましょう。」

そして鳳統は何らかの呪文をとなえて諸葛亮にステッキを振った。

そして諸葛亮が胸がバインバインの大人になった。

フランケン
「誰ぇーーーーーーーーーーー！しかも服ヤバッ！」

諸葛亮
「はわわ～！すごいです～あれ？でもスカートがひらひら・・」

鳳統
「そのスカートは風でめくれるようにしました～」

フランケン
「ダメだろ！」

そのとき風が来て、諸葛亮のスカートがめくれ、大人っぽいパンティが見えた。

諸葛亮はスカートを抑える。

諸葛亮
「はわわ～！」

一刀
「う、後ろ見えてますよ」

一刀は鼻血をだしながらツッコむ。その後ろには黒いオーラを出している関羽が

関羽
「ご主人様・・・・」

一刀
「うわぁ！」

零斗
「ははははーーーこれにて一件落着！」

鳳統
「流石零斗君ですね」

アリス
「零斗君！一生ついていきます！」

零斗
「願いが叶うと嬉しいよねぇ～」

諸葛亮
「雛里ちゃん、零斗君、少し頭冷やしましょうか・・・・」

零斗
「やべぇ、マイティ真拳奥義！透明フェイント！」

鳳統
「魔術真拳奥義、インビシブル！」

二人は透明になって逃げた。

諸葛亮
「待ちなさーーーーーーい！」

その後二人は諸葛亮の説教を受けた。そして静岡に着き、街で自由行動したのは

それはまた別のお話。

第七話　修学旅行はやっぱり楽しいもう！（後書き）

次回は街で零斗のギャグが炸裂！？

第八話　街を見るときは、お土産を買うのもいいね（前書き）

鳳統
「私の事知りたいの？だったら教えてあげる」

鳳統

ＢＳＡＡ学園の教師、理科担当であり、諸葛亮と同じチビッ子教師。原作とは異なり、エロに関しては平気であり、積極的。魔術真拳を使うので生徒から「魔女っ子先生」と呼ばれている。本人はそれを気に入っている。一刀を自分の色気で落とすなど得意。しかしその一方では諸葛亮に嫉妬されていることには気付かない。マントはいつも付けている。たまに露出の高いビキニを着ることがある。

鳳統
「これで分かったかしら、では本編スタートよ」

第八話　街を見るときは、お土産を買うのもいいね

静岡に着き、グループごとに行動することになった2年A組。
するとフランケンは鳳統の格好にツッこんだ。

フランケン
「あの～鳳統先生、一つ言っていいですか？」

鳳統
「いやらしい事はお断りよ～」

フランケン
「違いますって！いつまでその格好でいるんですか？」

鳳統
「え？私のビキニ姿嫌い？」

フランケン
「ちッがーーーーう！マントと露出の高いビキニ姿で街へ出たら狙われますよ！」

鳳統
「あら～どんな男でも大歓迎よ～特に獣のように私を襲う男がいいわ～」

フランケン
「これ以上やめてください！このままだったらこの小説18禁食らいますよ！」

鳳統
「え?じゃあここで着替えましょうか」

すると鳳統は脱ぎ始めるが、フランケンは止める。

フランケン
「ちょっと待ってください!何脱ぎ始めてるんですか!」

鳳統
「え~だってここで脱がないと一刀君を落とせな・・・更衣室ないからここで着替えようと」

諸葛亮
「今一刀君を落とすって言ってなかった!?」

鳳統
「気のせいだよ~」

鳳統はステッキを取り出し、上に向けてステッキを振った。すると鳳統は軍師服になるが、マントだけは変わってない。

フランケン
「マントだけ残ってるよ!」

鳳統
「マントがないと魔女っ子失格よ」

フランケン
「はぁ・・・・」

まぁなんやかんやでグダグダになったが、グループ行動は開始した。

零斗のグループメンバーは、フランケンとアリスと一刀である。

因みにフランケンはグループのリーダーである。

そして街を歩いて、色々な物を見て歩いたりしていた。

そして零斗達は土産の店へ入った。

零斗
「いや～色んな物があるねぇ～」

フランケン
「確かに」

アリス
（これを零斗君にプレゼントしようかな～）

一刀
「へぇ～動物の飾り物か～こっちは竹光があるぞ～」

フランケン
（大丈夫かな、俺ら・・・・）

零斗達を心配するフランケンだった。

そして外に出て、再び街を見物する零斗達。

零斗
「そういや～曹操ガンダム先生と呂布トールギス先生が鳳統先生に無理矢理つれてかれたんだけど大丈夫かな～」

フランケン
（出た、鳳統先生のお仕置き）

アリス
（でも、零斗君にお仕置きされるならいいかも、ハァハァ）

一刀
（どうなっていくんでしょうね）

そう思いながらも、街を見物した。

一方鳳統は、

鳳統
「曹操ガンダム先生、呂布トールギス先生、今日一日私の下僕です」

曹操ガンダム
「何故、余が鳳統先生の下僕なんだ！」

鳳統
「逆らったら・・・私の鞭が降りかかりますよ」

曹操ガンダムは鳳統の威圧に怯える。

呂布トールギス

「こんな魔女っ子の下僕なんてごめんだぜ」

鳳統
（ブチ！）

呂布トールギス
「大体！下僕なんておかしいだろ！」

鳳統
「では、お仕置きが必要ですね」

呂布トールギス
「はい、分かりました。今日一日あなたの下僕になります」

鳳統
「よろしい、じゃあ行きましょう」

こうして曹操ガンダム達は今日一日鳳統の下僕になった。

その頃零斗達は

零斗
「腹減ったな」

フランケン
「そうだな、そろそろ昼飯にしよう」

お昼は蕎麦屋の店に行った。

零斗

「俺は、トンカツ定食にするか～」

フランケン
「じゃあ俺も」

一刀
「俺は普通の蕎麦にしょう」

アリス
「わたしも～」

零斗達は店を出て、再び街を見物する。

ここで、バインバインの諸葛亮が現れる。

なにやら顔を赤くしながら歩いているようだ。

諸葛亮
「うぅ～恥ずかしいです～」

一刀
「あれ？誰ですか～」

諸葛亮
「一刀君！私ですよ！」

一刀
「え？そうだったんですか？」

そして一刀は諸葛亮の胸を片手で触り、揉んだ。

諸葛亮
「はわわ～！揉まないでぇ～」

フランケン
「何やってんのーーーー！」

一刀
「何って？本物かどうか確かめているだけだ。この感触だとどうやら本物だ」

諸葛亮
「一刀さん、セクハラですよ」

一刀
「あ、すみません。でも手袋してるんで大丈夫ですよ」

零斗
「手袋は役に立つもんな！」

そして次に現れたのが・・・・諸葛亮と同じバインバインな鳳統だった。

それをフランケンがツッこむ。

フランケン
「何でそうなるの！？」

鳳統
「あはは～この魔法、エッチしないと元に戻れないの」

フランケン
「おぉい！１８禁にさせるきかぁーーーーーーーーーーー！」

鳳統
「嘘ですよ～♪」

フランケン
（危ね～もう少しで１８禁になりそうだった）

鳳統
「この魔法は明日になれば効果は切れるの」

フランケン
「それで、何故先生が自ら自分自身に魔法をかけたんですか？」

鳳統
「朱里ちゃん、一刀君に胸を揉まれて羨ましいなぁ～と思って」

フランケン
「ダメでしょう！そんなことしたらこの小説終わる！」

一刀
「別にいいですよちょっとだけなら」

鳳統
「じゃあ・・・」

鳳統は胸をさらけ出そうとするが、一刀に止められる。

一刀
「但しそのまんまですよ。胸をさらけだしたらヤバくなりますよ」

零斗
「そうだな！この小説が終わっちまうからな」

アリス
（あぁ～零斗君に胸を揉まれたいよ～）

そこへ劉備ガンダムが来た。

劉備ガンダム
「あの～お尋ねしますが～って孔明先生！？それに鳳統先生！？
一体どうしたんですかその姿は！」

諸葛亮
「この魔法、バインバインの大人になれる魔法を、雛里ちゃんが私にかけたんです（泣）」

劉備ガンダム
「という事は鳳統先生も！？」

鳳統
「は～いその通りです！」

劉備ガンダムは二人の姿を見て気絶した。その後劉備ガンダムは鳳統にお仕置きされ、

劉備ガンダムは鞭で叩かれた傷ができた。

そして、夕方になり、バスでホテルに向かった。

零斗
「いやぁ～楽しかったな、静岡の街は！」

アリス
「零斗君と一緒になれてよかった～」

フランケン
（劉備ガンダム先生が、大変なことになってますよ）

劉備ガンダムは、鳳統にヒモでしばられていた。

フランケン
（ここは、見なかったことにしよう）

鳳統の気にしているところに触れてはいけない。

触れると最後は・・・・・・・・・大変なことになる。

曹操ガンダム
「よ、余は曹操で・・・あるぞ・・・」

曹操ガンダムは倒れた。

呂布トールギス
「鳳統先生には敵わない・・・・」

そして呂布トールギスも倒れた。

この二人はお仕置きされたのではなく、買い物に付き合わされたそうです。

鳳統
「あら～この程度でへばってたら、調教するしかないわね」

二人
「いやぁーーー

第八話　街を見るときは、お土産を買うのもいいね（後書き）

次回はホテル編になります

第九話　ホテルでは、いっぱい盛り上がろう（前書き）

少しエロがありますが、とりあえず読んで下さい。

第九話　ホテルでは、いっぱい盛り上がろう

ホテルに着いた二学年は、それぞれ決められた部屋へ向かった。

零斗と一刀とフランケンとライアンとアックスは、２０５号室だった。

零斗
「いやーやっぱ静岡の街は色々あって楽しかったぜ」

一刀
「本当だぜ、特に孔明先生の胸も触れたしな」

フランケン
「お前それセクハラだぞ」

アックス
「こういうの関羽に見られたら物凄く怒るね」

ライアン
「静岡の街もいいけど窓からの景色も楽しめるよ」

零斗
「いや～こういう景色はいいな～あそこの滝で劉備ガンダム先生が吊るされているところ」

劉備ガンダム
「助けてくれ～」

フランケン
「えぇーーーーーーーーーーー！」

ライアン
「まぁ、劉備ガンダム先生は正直すぎるから鳳統先生にやられたあみたいだな」

アックス
「まさに、自業自得だね」

フランケン
「他人事みたいに言わないで助けにいけよ！」

零斗
「ったくめんどくせーな、マイティ真拳奥義、劉備ガンダム転送」

すると吊るされた劉備ガンダムは消えた。

零斗
「これで一安心だ」

フランケン
（なんだか嫌な予感がする）

するとノックの音がして、アックスはドアのほうへ向かった。

開けるとそれは、バインバインの鳳統先生だった。

アックス
「誰ぇーーーーーーーーーー！」

鳳統
「も～鳳統先生だよ！プンプン！」

アックス
（いや、そんな可愛く言われても～）

鳳統
「ところで、零斗ちゃんはいるかしら～」

アックス
「いますよ、景色見てますけど・・・」

鳳統
「零斗ちゃ～んこっちに来て～あと一刀ちゃんも～」

一刀
（鳳統先生、何故か俺のことをちゃん付けにするんだ？）

そして鳳統は笑顔で黒いオーラを出しながら、零斗にこう言った

鳳統
「零斗ちゃ～ん、何で劉備ガンダム先生を助けるのかな～？」

零斗
「え～劉備ガンダム先生が死んだら暗くなるし、人気が下がる」

鳳統
「そんな理由で助けたんだ～じゃあ、お仕置きしないと～」

零斗
「するなら一刀にしてください、というより一刀にそそのかされましたから」

一刀
「おい！」

鳳統
「じゃあ～今夜、滝の所へ来なさい、来なかったら・・・・うふふふふふ」

鳳統はそのまま立ち去った。

一刀
「零斗！お前、俺を鳳統先生の餌食になれというのか！？」

零斗
「しょうがないじゃん、だってお前は女たらしだから」

一刀
「ふざけんなーーーーーーー！女たらしじゃねぇよ！今の俺はハンクだ！」

零斗
「何人の女抱いて童貞卒業しやがって、それに関羽と付き合ってんだろ？関羽とヤっちまって童貞卒業したんだろ」

一刀
「う！た、確かにそうだな」

零斗
「まぁ覚悟していって来い」

一刀
「うん・・・・（泣）」

そして夕飯の時間

一刀は、あることに気付いた、関羽に睨まれ、体が震えていることだった。

零斗は気にせずご馳走を食べている。

一刀
「零斗、俺愛紗にすげー睨まれているんだけど、どうすればいい？」

零斗
「まぁ、そんなの気にしないのがいいぜ」

一刀
（零斗もだめか～）

そして、ステージから二喬があらわれる。

杏璃
「あれって、学園一の美少女双子の二喬じゃない？」

春姫
「あはは～（何で二喬がいるの？）」

雄真
「本当に出ちゃったよ、宴会ではあるまいし」

小喬
「はぁ～い！それでは、学園一の美少女双子の」

大喬
「大喬と」

小喬
「小喬が」

二喬
「歌いま～す！」

そして二喬は歌い始めた。教師、生徒問わず盛り上がった。

一刀
「何か、今夜は嫌な予感がする・・・・」

夕飯の後、零斗達はこのホテルの噂にある開かずの扉へ向かった。

零斗
「なぁ、開かずの扉って知ってるか？」

フランケン
「あぁ、何でも何年も使われていないといわれている奴でしょ？」

アックス
「そうだね、妖怪とかいるからね」

八輔
「ならその妖怪を俺達でとっちめてやろうよ」

信哉
「それはよいでござるな」

???
「お前たち、ここで何している」

後から現れたのは劉備ガンダム達だった。

零斗達
「へ？」

こうして、零斗達（八輔と信哉を除いて）は部屋に戻った。

しかし、八輔と信哉は劉備ガンダムと曹操ガンダムから逃げようともがいている。

八輔
「すっぱいですからすっぱいですから」

信哉
「すっぱくな～い」

呂布トールギス
「まったく、何だこの扉は」

呂布トールギスは開かずの扉を開けた。すると、そこには・・・・

鳳統
「も～マジ最悪～課長ったらあたしをじろじろ見るだけでなくベッタベタ触ってくんのよ～セクハラよ～」

干禁
「ほんとなの～」

オフィス服を着た鳳統と干禁がロッカールームで話しているところだった。

鳳統
「あ、課長」

呂布トールギス
「え！？」

鳳統
「いや～ん聞いてたの～嫌だったなーーーーーー！」

そして鳳統は呂布トールギスを魔弾で吹っ飛ばす。

部屋を出た後、八輔と信哉は女性用のオフィス服を着ていた。

八輔
「やめて～何すんのよ！」

信哉
「課長セクハラよ～」

鳳統
「魔術真拳奥義ぃ～キレイな花には毒がある」
鳳統はステッキを振り、魔弾で劉備ガンダムと曹操ガンダムを吹っ飛ばした。
二人
「ギャアーーーーーーーーー！」
そのころ、一刀は鳳統が言ってた滝へ着いた。冷や汗を流しながら待っていた。
一刀
（神様～どうか俺に・・・・）
そしてバインバインの鳳統が来た。
鳳統
「お待たせ～」
一刀
（来たーーーーーーーーー！）
鳳統
「実は一刀ちゃんにお願いがあるの」
一刀
「へ？」

鳳統
「わたしを抱いてくれる？」

一刀
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ！何で！」

鳳統
「愛紗ちゃんの初めてを奪ったんでしょ？私にも奪って」

一刀
「え～っと、何で知っているんですか？」

鳳統
「最初から気付いていましたから」

鳳統は服を脱いで全裸になった。

一刀
「わわわ！待ってください！」

鳳統
「ずっと好きだよ、だから抱いて？」

すると一刀は鳳統に服を脱がされる。

一刀
「じゃあ、今晩だけですよ」

鳳統
「はい」

そして二人は唇を重ねた

一刀
「ん／／／／／／」

鳳統
「ん／／／／／／」

鳳統と一刀は禁断の夜を過ごす。

翌日、関羽と諸葛亮が黒いオーラを出しながら一刀に迫る。

関羽
「ご主人様」

諸葛亮
「一刀君？」

一刀
「はい、なんでしょうか～」

関羽
「鳳統先生と、楽しい夜を過ごしてらっしゃったようでしたね」

一刀
「どこから聞いたの！？」

諸葛亮
「雛里ちゃんから聞きました」

一刀
（鳳統先生のお仕置きってこういうことだったのーーーーー！？）

関羽
「ご主人様」

諸葛亮
「覚悟してくださいね」

一刀
「アァーーーーーーーーーーーーーーー！」

その後、全員バスに乗り関羽と諸葛亮がつやつやとなり、一刀がゲッソリしている姿を見たという。

零斗
「やれやれ、モテる男は辛いよな～」

一刀
（零斗、何時か絶対ぶっとばす！）

まぁ、バスはシズオカテーマパークへ向かった。

第九話　ホテルでは、いっぱい盛り上がろう（後書き）

どうでしたか？キャラ崩壊しているところがありますが、そこはお気になさらず

次回は遊園地編です。

第十話　誕生マジカル無双戦士（前書き）

少しエロがありますのでご注意ください。

第十話　誕生マジカル無双戦士

シズオカテーマパークに着いた2年A組、ここでグループごとにエンジョイすることになる。

零斗達のグループはジェットコースターに乗りに行った。

零斗
「よっしゃー！ジェットコースターに乗るぞー！」

一刀
「ワクワクするぜ！」

アリス
「零斗君、私これ好きだよ！」

フランケン
（これに乗るのか・・・・まぁいいだろう）

そして零斗達はジェットコースターに乗った。

一方アックスたちのグループは

蔡ボウ
「アックス様、景色はどうですか？」

アックス
「とてもいいよ、僕はこの景色は大好きなんだ」

この二人は観覧車に乗っている。

これを見たナツルと雫は二人を見守っている。

ナツル
「大丈夫なんでしょうか・・・」

雫
「まぁ、二人のことなんだから」

そしてアックスと蔡ボウは・・・

アックス
「朱愛、これからもずっと一緒に」

蔡ボウ
「はい、アックス様」

そして二人は唇を重ね合わせ、ディープキスをした。

アックス
「ん、ちゅく、ピチャ／／／／／」

蔡ボウ
「ん、んふぅ、ちゅくちゅく／／／／／」

ナツル
「このフラグはもしかして・・・・」

雫

「だと思った」

一方零斗達は

零斗
「はーーー楽しかったぜーーーーーー！」

アリス
「スリルあって興奮しちゃーう」

一刀
「久しぶりのジェットコースターはやっぱ最高だ！」

フランケンは疲れ果てて倒れそうになっている。

零斗
「次はお化け屋敷だ！」

フランケン
「あれに！？ちょっと待ってよ！」

一刀
「前は苦手だったんだが、ホラー系の映画を鑑賞して克服したぞ」

アリス
（零斗君のハートをＧＥＴできるチャンス！そしたら・・・）

アリスビジョン開始

アリス

「キャー！怖～い！」

零斗
「大丈夫だ、俺が守ってやる」

アリス
「零斗君・・・」

零斗
「アリス・・・」

そして二人は唇を重ねた。

アリス
「ん／／／／／」

零斗
「ん／／／／／」

アリスビジョン終了

アリス
「キャーどうしよう！」

フランケン
（お前、零斗に心酔してんだな）

その時、一人で別行動をしている生徒を見つけた。

零斗

「ん？あいつは、俺先生に話があるって言われた、ちょっと待ってくれ！」

フランケン
「ちょっと零斗！？」

一刀
「俺も行くぞ！」

アリス
「あ～ん待ってよ～」

そして零斗達は一人の生徒を追って、人が来ない広場に着いた。

零斗
「どうして別行動しているんだ？川崎」

川崎
「僕なんて、どうでもいいと言う人がいるから」

この少年、川崎純一。２年Ｂ組の生徒であるが、過去にいじめられたことがあり、

引きこもりになったという。

一刀
「それで、一人でか・・・」

その時、黄忠と厳顔と黄蓋がやってくる。

黄忠
「こんなところにいたの？」

黄忠は、２年Ｂ組の担任であり、数学の教科を受け持っている。

厳顔
「川崎！捜したぞ」

厳顔は、２年Ｂ組の副担任である。

黄蓋
「全く、老いぼれのわしの身にもなってみろ」

黄蓋は二学年の主任である。

零斗
「お前を捜して来た人がいるけど」

川崎
「嫌だ」

一刀
「あ？」

川崎
「嫌だ！僕は戻らない！」

フランケン
「そんな、戻ろう・・・ん？それは金山企業のバッジ！」

零斗
「お前も金山企業に雇われたらしいな」

黄忠
「え？そうなの？川崎君！」

川崎
「そうだよ！零斗君を倒せば僕の存在をＢＳＡ学園の生徒に認めさせるって」

厳顔
「だがそんな事をして、またいじめられるぞ」

川崎
「うるさい！お前たちに何が分かる！百花繚乱真拳奥義！百合魔人！」

すると地面から百合魔人が出てきてフランケンに襲い掛かる。

フランケン
「甘いね！バルカンマシンガン！」

フランケンの右足キックの連発で百合魔人は倒れ、散っていった（花びらだけ）。

零斗
「百花繚乱真拳奥義か、あれは花をつかった武術だな」

フランケン

「ここはマーシャルアーツの達人の僕が」

一刀
「我流マイティの俺が行く！」

川崎
「ふん、じゃあ来いよ」

一刀
「我流マイティ真拳奥義！おやつの時間！みんなあつまれ～」

フランケン
「えぇー！ここに来るわけがないだろーーーー！」

するとテーブルにはクッキーとケーキが置いてあった。

それと同時に張飛と許緒と孟穫がやってきた。

張飛
「おやつなのだ～！」

許緒
「わ～いおやつ～」

孟穫
「おやつ～おやつ～」

フランケン
「はらぺこ将軍とねこみみ少女が来たーーーーーー！」

そして三人はケーキとクッキーを食べ始めた。

一刀
「これで勝負が出来る」

フランケン
「出来るわけがないだろーが！」

川崎
「ふふふふ、なんだ、君の奥義はこんなてい・・」

一刀
「我流マイティ真拳奥義！流星ブレード！愛紗（関羽）の嫉妬バージョン！」

すると流星ブレードは赤くなり、川崎に直撃したが・・・

川崎
「ふふふ、百花繚乱真拳奥義、ローズガード」

一刀
「クソー！愛紗の嫉妬が足らなかったか！」

フランケン
「関羽の嫉妬で強くなるのかよ！流星ブレードは！」

一刀
「え？俺の中の人は恋姫無双のドラマＣＤとイナイレに出ているから作者が・・・」

フランケン
「作者ぁーーーーーーーーー！」

イナイレのファンの皆様ごめんなさい。

川崎
「だったらこっちから行かせてもらうぜ！」

零斗
「だったら俺は！マイティ真拳奥義！メタモルフォーゼ！」

すると黄忠たちはみるみる小さくなり、馬岱くらいの身長と歳になった。

川崎
「えぇーーーーーー！」

？？？
「あれ～ボクは一体」

？？？
「私達は誰でしょうか」

？？？
「分からない・・・・」

零斗
「この三人は、メタモルフォーゼで馬岱くらいの身長と歳になっている！」

???
「ボクは、誰なの？」

一刀
「君は、葡萄紫苑」

紫苑
「いい名前だね～」

???
「私は・・・」

一刀
「君は赤川祭」

祭
「ありがとうございます～」

???
「・・・・」

一刀
「君は銀河桔梗だ」

桔梗
「あ、ありがとう」

川崎
「今更名前をつけても何も変わんねぇーんだよ！」

その時、ほうきに乗った鳳統がやってくる。

鳳統
「ふぅ～間に合った～」

フランケン
「ほうきに乗ってるーーー！」

鳳統
「この子達にはこれを授けましょう」

鳳統はステッキを振り、三つの光が三人の少女の体に入った。

紫苑
「あれ？力が」

祭
「沸いてきます～」

鳳統
「あなた達は今日から無双戦士になるのです」

桔梗
「無双戦士・・・」

鳳統
「そうです、変身するときは『リリカルマジカル無双戦士マジカルチェンジ』と唱えるのです」

紫苑
「そうなの?だったら」

三人
「リリカルマジカル無双戦士マジカルチェーンジ!」

すると三人は光り出し、無双戦士に変貌するのであった。

川崎
「僕は零斗君を倒してやる!」

???
「君の好きにはさせないよ!」

川崎
「ん?」

???
「紫の色は葡萄の色!パープルプリンセス!」

パープルプリンセスは髪の色は紫で、ツインテールである。

???
「赤の色はイチゴの色!レッドプリンセス!」

レッドプリンセスは髪の色は赤で、ポニーテールである。

???
「銀の色は銀河の色・・・シルバープリンセス・・・」

シルバープリンセスは髪の色は銀で、ショートカットヘア。

パープルプリンセス
「愛と平和と幸せを守る」

レッドプリンセス
「ちょっとお茶目な女の子トリオ」

シルバープリンセス
「マジカル無双戦士・・・」

三人
「三国ガールズ見参！」

川崎
「三国ガールズだと！ふざけるな！」

パープル
「さぁ！行くよー！」

そして、川崎と三国ガールズの戦いが始まった。

第十話　誕生マジカル無双戦士（後書き）

イメージＣＶ

葡萄紫苑ＣＶ　田村ゆかり

赤川祭ＣＶ　能登麻美子

銀河桔梗ＣＶ　今井麻美

これで分かりましたか？次回は川崎ＶＳ三国ガールズです

第十一話　魔法少女には触手あり！？（前書き）

注意　エロがあります。

第十一話　魔法少女には触手あり！？

三国ガールズの姿を見て川崎はこう言った。

川崎
「まさか、零斗のマイティ真拳と鳳統先生の魔術真拳の力でこうなったか、たとえそうだとしても僕には勝てないのさ」

パープルプリンセス
「やってみなきゃ分かんないよ！」

パープルプリンセスは迅速で川崎に向かった。

川崎は百花繚乱真拳の構えをしたが、パープルプリンセスのほうが速かった。

パープルプリンセス
「マジカル～金的蹴りぃ～」

川崎
「ガハァ！」

フランケン
「アァーーーーー！つーか金的蹴りってマジカルじゃねーよ！」

パープルは川崎の股間を蹴った。すると川崎は股間を痛そうに抑える。

川崎

「この、女ぁ～！」

レッドプリンセス
「みんなの幸せを守るのが私達三国ガールズです！」

シルバープリンセス
「だからあなたを止めます・・・・」

するとパープルの上から紫の光が現れ、薙刀となりパープルは掴んだ。

パープルプリンセス
「マジカル～ランス！」

更にレッドプリンセスの上に赤い光が現れ、弓矢となり、シルバープリンセスの上には銀の光が現れ、日本刀となった。

二人は武器を掴んだ。

レッドプリンセス
「マジカルアロー！」

シルバープリンセス
「マジカルブレード・・・」

フランケン
「一人だけなんか暗いんだけど！」

川崎
「武器を持ったからっていい気になるなよ！」

パープルプリンセスはマジカルランスを構え、川崎に向かって走っていった。

パープルプリンセス
「やぁーーーーー！」

パープルプリンセスは振り下ろしたが、かわされる。

川崎
「ふ、愚かな」

すると後ろからレッドが体当たりする。

レッドプリンセス
「マジカルタックル！」

川崎
「ぐはぁ！」

レッドプリンセス
「君に私達を倒せません！」

レッドプリンセスは矢を容赦なく川崎に放った。

それを川崎がローズガードで防ぐ。

川崎
「ぐぅ、なめんなよ！」

そしてシルバープリンセスは刀を構えてそして全てを切り裂くようにローズガードを破った。

その後川崎に殴り、マウントポジションで泣きながら川崎をフルボッコした。

シルバープリンセス
「うぇ～ん！意気地なし意気地なしー！どうして私は一刀兄様にはっきり言えないの！？」

パープルプリンセス
「シルバープリンセスー」

シルバープリンセス
「うぇ～んパープルプリンセス～」

そしてシルバーはパープルになでられた。

パープルプリンセス
「辛かったんだね」

シルバープリンセス
「うん」

パープルプリンセス
「じゃあ戦いが終わったらお兄ちゃんに言おう？」

シルバープリンセス
「うん」

そして川崎が起き上がった。

川崎
「お前等、許さないぞ！」

パープルプリンセス
「もう、怒りんぼさんなんだから～許してぇ～」

川崎
「許すかーーーーー！（怒）お前等なんか！」

三人
「え！？」

川崎
「百花繚乱真拳奥義！プラントワーム！」

すると地面から触手状の植物が出てきた。

フランケン
「何だこれーーーーー！」

触手は三国ガールズを捕らえた。

川崎
「ふふふふ、僕を馬鹿にした罰だ！さぁ僕の辱め受けるがいい！」

そして触手は三国ガールズの体をあちこち触ったり、いじったりした。

レッドプリンセス
「いやぁ！乳首らめぇ～気持ちよくなっちゃう！」

シルバープリンセス
「あは、あははは、脇をくすぐらないで～。あ、お尻触っちゃらめぇ！感じちゃう！」

パープルプリンセス
「やめて～脚が開いちゃう！いやぁ！股をいじっちゃらめぇ！ボクの初めてがなくなっちゃう！」

これを見た川崎は狂うように笑う。

川崎
「ひゃーーーはははははは！どうだ！僕の辱めの気分は！」

触手プレイ（？）を見たフランケンは鼻血を出す。

フランケン
「このままだとこの小説が終わっちまう！」

フランケンは隣を見ると、零斗と一刀は周りの事を気にせずポーカーをしていた。

フランケン
「何平気でギャンブルやってんだ！」

一刀
「えぇ～ダメなのか？」

フランケン
「あたりめーだ！このままだとこの小説が終わっちまう！」

零斗
「安心しろ、この小説事態が終わっている」

フランケン
「ふざけんなぁーーーーーーーー！はやく助けに行けよ！」

一刀
「分かったよ」

一刀のリストバンドからクナイつきのワイヤーが出てきた。

一刀
「我流マイティ真拳奥義！クリスタルカッター！」

するとワイヤーが触手を巻きつけ、全て切断され、三国ガールズは助け出された。

フランケン
「おぉ！触手がワイヤーで切断された！」

一刀
「ま、ざっとこんなもんよ」

すると三国ガールズが一刀に向かってやってくる。

パープルプリンセス
「お兄ちゃん、ありがとう！」

レッドプリンセス
「兄ぃありがとう」

シルバープリンセス
「お兄様、ありがとうございます」

川崎
「お前、よくも僕のじゃまをしたな！」

パープルプリンセス
「よくもボクたちを辱めたね！今度はこっちの番だよ！」

レッドプリンセス
「もう怒りました！」

シルバープリンセス
「地獄の底で後悔するといい」

川崎
「くそぉ！」

そして三人は空に手をかざし、その上から光が現れた。

パープルプリンセス
「これがボクたちの力！」

レッドプリンセス
「私達の思いを」

シルバープリンセス
「受けなさい！」

三人
「トライアングルバスターーーーーーー！」

そして三人はトライアングルバスターを放った。

川崎
「う、うわぁーーーー！」

川崎はトライアングルバスターに直撃する。

パープルプリンセス
「やったー！」

零斗
「いや、まだだ」

すると川崎は立ち上がった。

川崎
「お前等、殺してやる！」

パープルプリンセス
「こうなったらもう一度！」

零斗
「とどめは俺がやる」

そして零斗は白いオーラを出しながら構える。

零斗
「マイティ真拳究極奥義！召喚融合（フュージョン）！」

そして周りが網状の世界になり、そして劉備ガンダムが現れた。

さらに白い空間が出てきて、二人は白い空間に入った。

そして劉備ガンレイが出てくる。

劉備ガンレイ
「全く、これだから行きたくなるんだよ、バトルに」

川崎
「や、やめろ」

劉備ガンレイは川崎の後ろをとり、スープレックスの掴みをした。

川崎
「何をする気だ！」

劉備ガンレイ
「落とすんだよ」

そして空へ高く跳び、そこから逆さになった。

劉備ガンレイ
「マイティ真拳奥義！劉備ガンダム地獄落としぃーーー！」

急降下し、地面まであと少しのところに落ちる。

川崎
「やめろーーー！どこに落とすんだ！」

劉備ガンレイ
「一年三組じゃーーーーー！」

そして川崎は後頭部を打った。

劉備ガンレイ
「いじめられたときに人に相談するのが普通だろう、それが出来ない奴は小学校からやり直しだ
マイティ真拳奥義、ヒーリング」

ヒーリングで川崎は生き返った。それと同時に三国ガールズは元の黄忠たちに戻った。

そして川崎は元のグループへ戻り、全てを打ち明け、グループたちと仲良くなった。

鳳統
「どうでしたか？黄忠先生」

黄忠
「えぇ、楽しかったわ」

厳顔
「わしは二度とごめんじゃ」

黄蓋
「魔法少女か・・・なかなかいいのう」

鳳統
「そうですか、ではまた（ニヤリ）」

黄忠たちは鳳統の怪しい笑みに嫌な予感がしたという。

修学旅行が終わって七月の夏休みに近付く頃だった。

紫苑
「ふぇーーーーーー！ボクまた小さくなっちゃった」

黄忠だけではなかった、厳顔と黄蓋もだった。多分、鳳統の呪いだと思う。

そして、2年A組では新しい転校生がやってくる。

諸葛亮
「みなさん、このクラスに転校生が来ます、では、入ってきてください～い」

そして現れたのは、葡萄紫苑と赤川祭と銀河桔梗とゴツ突骨だった。

紫苑
「ボクは葡萄紫苑だよ！」

祭
「赤川祭です」

桔梗
「銀河桔梗、よろしく」

ゴツ突骨
「あたいはゴツ突骨だ」

するとゴツ突骨は零斗を見ると、走り、零斗に抱きついた。

ゴツ突骨
「零斗！」

これを見た生徒達は驚く。

ゴツ突骨
「会いたかった・・・」

零斗
「ははは、そりゃ俺達幼馴染だもんな」

アリス
（え！？幼馴染！？まさか、零斗君をとるんじゃ・・・）

アリスはゴツ突骨に嫉妬した。

第十一話　魔法少女には触手あり！？（後書き）

修学旅行編は終わりです。次回から夏休み編に入ります。

第十二話　夏休みはクソ暑い（前書き）

今回は『祝福のカンパネラ』のキャラを出します。

第十二話　夏休みはクソ暑い

夏休み入る前の事だった、突然転校生が四人来て葡萄紫苑と赤川祭と銀河桔梗とゴツ突骨だった。

ゴツ突骨は零斗の幼馴染であり、それを知ったアリスは零斗が奪われると思い、何か企んでいる。

そして夏休み、川崎が零斗の家に遊びに来た。

川崎
「零斗ぉ～いるか～僕だよ～」

零斗
「あ～待ってろ、今行くから」

零斗は二階から降りてきて新しいＰＳ３のソフトを持ってきた。

川崎
「ん？新しいゲームか～それってなんだ？」

零斗
「あぁこれか？『バイオハザード５ドキッマジニだらけの三国志演義』だ」

川崎
「何それ！？」

零斗

「まぁクリスとシェバとレオンが恋姫無双の世界にまよい込み、マジニを倒しまくるアクションゲームだな」

川崎
「でも、武将達は!?マジニになってるの!?」

零斗
「武将達はなってないぜ、ただ華雄がなっている。しかもこのゲーム二人プレイが出来るんだぜ!」

川崎
「へぇ～じゃあやってみようぜ!」

零斗
「オウ!イェーーー!」

二人は零斗の部屋に入り、早速ＰＳ３を起動させた。そしてゲームが始まった。

川崎は鳳統先生についての話をした。

川崎
「鳳統先生ってマイクロビキニを着るよね」

零斗
「まぁそうだよな」

川崎
「授業の時も修学旅行の時もさ、諸葛亮先生とは正反対だよな。同じ水鏡大学の卒業生なのに」

零斗
「昔は鳳統先生は引っ込み思案で『あわわ』って言ってたんだぜ」

川崎
「ふ～ん」

零斗
「金山企業に狙われたところ、ある魔女に助けられた。その魔女は魔術真拳の継承者だった。
鳳統先生は魔女の弟子になり、数々の魔術真拳を習得した。そして遂に鳳統先生は魔術真拳の継承者になった」

川崎
「ちょっと待て！マイクロビキニと魔女とどう関係があるの？」

零斗
「その魔女はエロくてマイクロビキニを着ていたため、鳳統先生はそれにうつったんだろう。最近では『あわわ』とは言わなくなった」

川崎
「そうなんだ。実は僕、百花繚乱真拳の継承者なんだ」

零斗
「そうか、どうして金山企業に入ったんだ？」

川崎
「僕は、過去の呪縛から開放するために金山企業に入った」

零斗
「で、今は？」

川崎
「捨てられたよ、だから僕も金山企業を潰したい」

零斗
「ダメだ、いくら継承者とはいえ、狙いは俺だ」

川崎
「分かってるよ、そのために零斗を守って金山企業を潰すって事」

零斗
「ははははは、本当かぁ？」

そして二人は外へ出て、街に行った。

零斗
「うぅ～クソ暑い」

川崎
「本当だよね」

二人は暑いと言いながら歩いていた。とそこへ孫権ガンダムがいた。

零斗
「あれ孫権ガンダム先生じゃない？」

川崎
「三年C組の担当だよ」

零斗
「何か捜してるっぽい」

川崎
「あまり関わるとヤバいことになるからやめとこう」

零斗
「そうだな」

零斗の手に持っているのは木刀だった。

川崎
「アァーーーーー！木刀だぁーーーー！」

零斗
「うおぉーーーーーーーーー！」

そして零斗は木刀を孫権ガンダムに投げる。木刀は孫権ガンダムに当たる。

零斗
「あーすっきりした」

川崎
「すっきりしたじゃないよ！孫権ガンダム先生が気絶してるよ！」

孫権ガンダム気絶中。

零斗

「やっべ、やっちまった、まあいいや」

川崎
「よくないよ！」

すると孫権ガンダムは起き上がった。しかし、記憶喪失になっていた。

孫権ガンダム
「ここどこ？私はだれ？」

川崎
「アァーーーー！記憶喪失になってるーーーー！」

零斗
「ふ、分かったよ。お詫びに、零斗地獄かかと落としぃ！」

孫権ガンダム
「グハァ！」

零斗かかと落としで孫権ガンダムは気絶した。

川崎
「えーっと、これでいいのかな？」

零斗
「まぁいいんじゃない？」

その後孫権ガンダムは記憶を取り戻し、二人はこっぴどく叱られた。

零斗
「あぁやんなきゃ良かった。」

川崎
「・・・・」

すると、一人の男性と少女が手をつないで歩いているところを目撃する。

零斗
「ん？あれは確か」

『祝福のカンパネラ』のレスターとミネットである。

零斗
「おい、俺より先に言うな」

ミネット
「キャーーーー！」

川崎
「今のって！」

零斗
「あぁ、金山企業だ！」

レスターとミネットはチンピラ達に絡まれている。零斗の言うとおり、このチンピラ達は金山企業の社員である。

社長の命令でミネットをさらい、会社に連れて帰れのことでチンピ

ラを演じている。

チンピラ１
「よう、兄ちゃんそこをどきな！」

レスター
「ダメだ！ミネットは渡さない！」

チンピラ２
「俺達はそこのミネットちゃんに用があるんだ」

チンピラ３
「ミネットちゃんを俺達の会社に連れて帰れば俺達の出世するのは間違いなし」

チンピラ４
「ボーナスがバンバンもらえるぜぇ～」

零斗
「チンピラにしては会社に入ってるんだな」

するとチンピラ達は零斗達のほうへ振り向く。

チンピラ１
「何だテメーは！」

零斗
「俺は、通りすがりの学生だ、覚えて置け！」

川崎

「いや、どこかの特撮ヒーローっぽく言わなくても～」

チンピラ2
「学生だったら、夏休みの宿題をやったほうがいいんじゃねーの？」

零斗
「よく言うぜ、いい大人が社長の命令でもか弱い女の子を狙うんだな。全くロリコン野郎共だな」

チンピラ3
「んだとゴラァ！って川崎じゃねーか、前は金山企業にいたそうじゃねーか」

川崎
「今は捨てられて零斗君の味方になっているけど！」

チンピラ4
「零斗？あいつか、社長が最も邪魔な存在だと言っているやつか！」

ミネット
「え！？」

チンピラ1
「野郎共！やっちまえ！」

チンピラ達は零斗達に襲い掛かるが・・・

零斗
「マイティ真拳！」

川崎
「百花繚乱真拳！」

二人
「奥義！」

零斗
「クロックアップ！」

川崎
「プラントトラップ！」

零斗は迅速でチンピラ達を倒し、川崎はツルを操りチンピラたちを吊るした。

チンピラ１
「ひぃ！待ってくれ、話し合おうじゃねーか！」

零斗
「さて、俺達の合体技を見せてやろうじゃない？」

川崎
「そうだね」

二人
「合体奥義！」

チンピラは逃げ出した。

チンピラ１

「ひぃーーーー！」

零斗
「パトリオットぉーーーー！」

川崎
「プラント！」

川崎はツルを操ってチンピラの足を捕らえ、飛ばした。

チンピラ1
「うわぁーーーーーー！」

そしてパトリオットキックが直撃し、チンピラは地面の底まで落ちた。

零斗
「ふうやったぜ」

レスター
「いや、やりすぎだよ」

零斗
「ところであんたら、何をしてんだ?」

レスター
「買い物を」

川崎
「Ｏａｓｉｓか」

ミネット
「はい」

零斗
「まぁくれぐれも気をつけな。特にそこの少女はね」

レスター
「はい、でもあの人たちは、ミネットを捕らえたら出世とかボーナスとか言ってましたけど」

零斗
「そこは気にしないのが大人ってやつだぜ」

レスター
「はぁ・・・」

レスターたちは立ち去った。

零斗
「いや～あいつらが心配だな」

川崎
「このままだと大変だぜ」

零斗
「まぁ俺達が金山企業を潰せばいいんじゃない？」

一方金山企業では・・・

???

「何?ミネットを逃がしただと?ふん!使えない奴らだそして零斗に邪魔されたとどこまで面白くさせるんだい?
そして僕の邪魔をするのかなぁ～ふふふふ」

その頃、零斗達は・・・・

零斗
「金山企業か・・・・あまりいい感じがしないな」

金山企業の裏には何があるのか、そして何故ミネットを狙うのか。

真相は次回を待て!

零斗
「最後の締めが特撮ヒーローっぽいな」

第十二話　夏休みはクソ暑い（後書き）

零斗
「へぇ～『祝福のカンパネラ』は七月に放送されたんだ」

フランケン
「今回は俺の出番がない」

零斗
「まぁ、次回があるじゃねーか」

フランケン
「もし次回俺が出なかったらブツブツ・・・」

零斗
「ウジウジすんなぁーーーー！」

フランケン
「ぐはぁーーーーーーーー！」

フランケンは零斗のアッパーを食らい、星になった。

零斗
「次回は『祝福のカンパネラ』のキャラが出るぞ！」

第十三話　特撮ヒーローって中々いい（前書き）

今回は戦隊キャラがでます。

第十三話　特撮ヒーローって中々いい

前回、零斗と川崎はＯａｓｉｓに行こうとしたところ、レスターとミネットがチンピラ達に絡まれているところを発見。

そのチンピラ達は金山企業の社員であり、いわゆるチンピラになりすましてミネットをさらうということ。

しかし零斗は最初からお見通しであり、川崎と共にチンピラ達を（色んな意味で）倒した。

一方金山企業では、社長が零斗に邪魔されてミネットを自分のコレクションに出来なかったことに機嫌を損ねる。

そして社長は、零斗をターゲットにする。

Ｏａｓｉｓの入り口では、

零斗
「ここがＯａｓｉｓか、どう思うフランケン」

フランケン
「まぁクランのリーダー、カリーナ・ベルリッティが狙われやすいね」

川崎
「まぁ魔法使いだからな」

零斗

「多分金山企業に狙われやすいと思うな」

フランケン
「金山企業が狙ってくるなら僕たちで守ろうよ」

零斗
「あぁそうだな」

そして一人のメイドが現れる。

？？？
「あの～」

零斗
「何だ？」

？？？
「あなたたちは・・・」

零斗
「俺達は、通りすがりの学生だ、覚えておけ」

？？？
「いや、特撮ヒーローっぽく言わなくても・・・」

川崎
「俺達、ＢＳＡＡ学園の学生です」

？？？
「そうですか」

フランケン
「俺はバレット・フランケン」

川崎
「川崎純一です」

零斗
「俺はマイティ真拳の継承者、北郷零斗だ！」

???
「私はニナ・リンドベルイです。ところでマイティ真拳というのは・・・」

零斗
「教えてやる。マイティ真拳とは、すべての世界のアニメキャラとゲームキャラの技を取り入れた武術
そして自分の考えたオリジナルの技を生み出すことが出来る。試しにマイティ真拳奥義！電磁戦隊しょう・・」

フランケンと川崎は零斗を止める。

零斗
「何をする！」

フランケン
「ダメだろ！こんなところで戦隊キャラを出しちゃ」

川崎
「そうだよ！せめて救急戦隊出してくれよ」

フランケン
「お前黙ってろ！」

カリーナ
「何の騒ぎですの？」

そしてカリーナがやってくる。それと同時に三人は止まる。

零斗
「あんたがカリーナか」

カリーナ
「はい」

零斗
「俺達はＢＳＡＡ学園の北郷零斗」

川崎
「川崎純一です」

フランケン
「バレット・フランケンです」

カリーナ
「零斗さんと川崎さんがレスターとミネットを助けてくださったんですか？」

零斗
「まぁそんなところだ」

川崎
（まぁ僕たちはやりすぎたんだけどね色んな意味で）

そして零斗達はクランハウスに入った。

それからレスターとミネットが来て、零斗達は自分の真拳とＢＳＡ学園について説明した。

レスター
「そうなんですか」

零斗
「では証明しましょう、マイティ真拳奥義！星獣戦隊しょう・・・」

再び止められる。

フランケン
「だからやるな！」

川崎
「そうだよ！せめて恐竜戦隊にしてくれ！」

フランケン
「黙ってろ！つーか何でスーパー戦隊なんだ？」

零斗
「作者が祝福のカンパネラとスーパー戦隊をコラボさせれば面白くなると言ってました」

フランケン
「作者ちゃんとしろ！」

ごめんなさい・・・・。

零斗
「おいおいフランケンそうかっかすんなって特にレスターがメガシルバーに変身したら面白く・・」

レスター
「えぇ！？俺！？」

フランケン
「だからやめろ！！」

零斗
「えぇ～一回だけでいいから激走戦隊出させろよ～」

フランケン
「いい加減にしろ！戦隊キャラを出すな！」

？？？
「何の騒ぎですか？」

？？？
「何があったの？」

二階からチェルシーとアニエスがやってくる。

チェルシー

「あの～もうちょっと静かにしてくれませんか？」

フランケン
「あ・・・」

零斗
「ほら～電磁戦隊を召喚させないからこうなるんだよ～」

フランケン
「仕方ない、もう何も言わない」

零斗
「よっしゃー！マイティ真拳奥義！電磁戦隊召喚！」

すると地面からメガレンジャーが出てきた。

アニエス
「えぇーーーーーーーー！」

零斗
「これがマイティ真拳だ！」

メガレッド
「メガレッド！」

メガブラック
「メガブラック！」

メガブルー
「メガブルー！」

メガイエロー
「メガイエロー！」

メガピンク
「メガピンク！」

五人
「電磁戦隊！メガレンジャー！」

これを見たレスター達は唖然する。

レスター
「何か、色んな意味ですごい」

カリーナ
「本当に凄いです」

アニエス
「・・・・」

チェルシー
「これで、闘うんですか？」

メガレッド
「で、俺達を呼んだのは・・・」

零斗
「実はな、ネジレジアが金山企業と手を組んだ」

メガレッド
「何だって!?」

零斗
「それだけじゃない、いくつかの世界の悪の組織と手を組んでいる」

川崎
「そんな情報どこから!」

零斗
「カルロから聞いた」

フランケン
「カルロの奴、いい情報を・・」

カルロは三話で登場したマイティ真拳使いである。妹を助けるために金山企業に入り、その上マイティ真拳の師匠に破門された。しかし彼は妹のためなら破門されてもおかしくないと言っている。零斗に倒された後、暴走族をやめ、妹を助けるために金山企業にいるが、零斗と情報を交換し合う関係となった。（いわゆる内通である）

レスター
「そうだったのか」

するとサルサとリトスが来た。この二人はＯａｓｉｓのライバルクラン、トルティアカンパニーに所属してあり、

サルサは副社長であり、リトスは社長である。

サルサ
「お客さんが来たって・・えぇーーーーー！誰なのこの人たちは！」

零斗
「ん？あぁ、お前等は面白いサルサとリトスじゃねーか」

リトス
「姉さんはさておき、この私を面白いだなんて、聞き捨てなりませんわね」

サルサ
「私面白いことしてないよ！」

リトス
「で、この人たちは誰ですか？」

零斗
「電磁戦隊メガレンジャー」

サルサ
「いきなり懐かしいスーパー戦隊でたぁ！」

そして零斗は何かを聞こえるように反応した。

零斗
「ん？何だ、まさか！」

零斗はクランハウスから出て行って、走っていった。

サルサ
「え？どこ行くの？」

続いてメガレンジャーも走っていった。

更にレスターたちはメガレンジャーの後についていった。

そして着いたのは、廃工場だった。そしてフードを被った男がいた。

零斗
「俺を呼んだのはお前か」

フードの男
「そうだ、それといいもの見せてやる」

零斗
「カルロ！」

何とカルロは吊るされていた。

フードの男
「零斗と内通していたのが分かり、今から処刑するのさ」

零斗
「やめろ！というより誰だ！」

フードの男
「俺か？俺はなぁ、コスモス・グランドだ」

零斗
「コスモス、まさか」

コスモス
「そう、裏切り者を切り裂く処刑人コスモスだ」

零斗
「金山企業の中で高いクラスを持つ男」

その時メガレンジャーとレスター達がやってくる。

メガレッド
「零斗！こいつは・・・処刑人コスモス！」

コスモス
「よく覚えてくれたね」

メガレッド
「あれは俺達が苦戦したネジレジアでもない、普通の人間でもない！」

全員
「え！？」

零斗
「ならばその力見せてもらおう！」

コスモス
「望むところだ」

こうしてコスモスと零斗達の戦いが始まる。

おまけ

シェリー

「あれ～みんなどこいっちゃったのかな？」

この人はシェリー・メイクラフト、レスターの母親である。

第十三話　特撮ヒーローって中々いい（後書き）

零斗

「特撮キャラも出ちゃったけど、次回は大暴れだぜ！」

第十四話　封印されしエクゾディィア降臨！（前書き）

今回は何とあのエクゾディィアが出ます！

第十四話　封印されしエクゾディア降臨！

前回、零斗達はミネットとレスターがいるＯａｓｉｓに行き、レスターとミネットのボディガードをするという事になった。

零斗達は、自分の奥義とＢＳＡＡ学園の事について説明をし、零斗は電磁戦隊メガレンジャーを召喚しようとするが

フランケンと川崎に止められる。しかし、川崎のボケでフランケンはツッコミを入れる。

その時チェルシーとアニエスが来てしまい、とうとうフランケンは諦めてしまう。

フランケン

「いや、チェルシーさんにうるさいと言われて諦めたんですよ！？」

遂に零斗は電磁戦隊メガレンジャーを召喚し、フランケンと川崎以外の全員は驚きを見せる。

その途中でトルティアカンパニーのサルサとリトスが来る。サルサはメガレンジャーを見て驚いてしまが、リトスは全く驚かない。

その時、零斗は誰かに呼ばれた気がすると感じ、廃工場へ向かった。後にメガレンジャー達は追う。

廃工場に着いた零斗の前にいたのは、金山企業の処刑人、コスモス・グランドと吊るされているカルロだった。

カルロは零斗との内通がバレてしまい、コスモスに捕まってしまう。
メガレッドによると、ネジレジアでもない、普通の人間でもないとのこと。
果たしてコスモスは、一体何者だろうか・・・・

コスモス
「君が北郷零斗か、マイティ真拳の継承者に会えて嬉しいよ。だけど残念、今俺は裏切り者の処刑をしなくちゃならなくてね」

レスター
「何故そんなことを・・・」

コスモス
「零斗と内通してたから。それに俺は処刑人だ」

零斗
「お前は処刑にしか頭に無いのか？」

コスモス
「そんな事はない、だが闇魔術真拳を見るがいい！」

メガレッド
「来るぞ！」

コスモス
「闇魔術真拳奥義！五つ星の儀式！」

すると星型の魔法陣が地面に浮く。

メガレッド
「何だか知らないけどやってみるか！ドリルセイバー！」

ドリルセイバーを取り出し、走ってコスモスに向かうが、魔法陣のシールドで防がれる。

コスモス
「無駄だ、俺の闇魔術真拳を破ることは出来ない！」

カリーナ
「闇魔術真拳って・・・」

闇魔術真拳とは、コスモスが魔術真拳を殺人式に変えたものである。しかし、コスモスが自分流で作ったため、我流魔術真拳と言うべきだろう。

コスモス
「この星型の魔法陣は、三十分でエクゾディアが生まれる」

川崎
「三十分！？三分じゃなくて！？カップラーメンの麺が伸びるぞ！」

フランケン
「だからそういう問題じゃないだろ！」

川崎
「三十分以内でこいつを倒してカップラーメンを食う！」

フランケン
「だから何でカップラーメンなんだよ！」

ミネット
「う～ん・・・・」

ミネットはこの二人の事を不安に思った。

メガレッド
「三十分以内に星型の魔法陣を破壊しないとエクゾディアが・・・」

コスモス
「この魔法陣は破壊されない。何故ならエクゾディアは無敵だからな」

フランケン
「そうか、エクゾディアは五枚のパーツをそろえるとバトルに勝利するんだった」

サルサ
「だったら破壊しないと！」

リトス
「姉さん、あの男が言ってたの忘れた？」

サルサ
「うぅ・・・・」

コスモス
「ふ、馬鹿共ばっか」

フランケン
「何だと！」

チェルシー
「許せませんね」

コスモス
「まぁ、三十分たてばエクゾディアが出てくるんだし、ちゃっちゃと片付けますか」

メガブラック
「させるか！メガロッド！」

メガロッドを取り出し、連続の突き攻撃をしたが、かわされた。
すると魔法陣が光りだした。それに気付くメガブルー

メガブルー
「今、光りましたよ？」

メガピンク
「確かに」

零斗
「この魔法陣は、時間がたつことに光りだす、つまりエクゾディア降臨のカウントダウンだ」

メガイエロー
「嘘！？」

メガレッド
「マジかよ！？」

フランケン
「魔法陣を消す方法はただ一つ、コスモスを倒すことだ！」

メガレッド
「でもあいつの弱点が知らなくちゃ、倒せないぜ」

川崎
「弱点ならある」

全員
「え！？」

カリーナ
「どういう事ですの？」

チェルシー
「是非詳しく！」

川崎
「あいつは、奥義を使った後に、右腕を撫でてた」

メガレッド
「それが？」

川崎
「闇魔術真拳は奥義を使った後に負担が大きい、奥義を使うとき右

腕を使ってた。負担を抑えるために右腕を撫でている。あいつが右腕を撫でる前にそこを狙えば」

メガレッド
「なるほど、撫でる瞬間に狙えって事か」

川崎
「そのためにはメガレッド、お前のドリルスナイパーで奴の右腕を攻撃してくれ」

メガレッド
「任せとけ！」

川崎
「チェルシー、おとりになってくれ」

チェルシー
「え？私がですか？」

川崎
「あぁ、奴の奥義を発動させるためにはおとりがいる。その間にフランケンがカルロを助けろ」

フランケン
「俺が？」

川崎
「あぁ、もし邪魔されそうなら俺の奥義でひきつける」

コスモス

「さて、そろそろ終わりにしますか」

チェルシー
「待ちなさい！あなたの相手はこの私です！」

コスモス
「ほ～う、俺にかかってくるとはな、闇魔術真拳奥義！玉砕弾！」

玉砕弾がチェルシーに飛んできた。しかし、川崎のローズガードで防がれる。

フランケンは何とかカルロを助け出した。

フランケン
「大丈夫か？」

カルロ
「その声はフランケンか」

フランケン
「さぁ、今のうちに」

コスモス
「そうはさせないよ！」

玉砕弾がフランケン達に飛んでくるが・・・

カルロ
「マイティ真拳奥義！無力化バリア！」

無力化バリアでなんとか防いだ。

コスモス
「ふ、やるじゃないか」

メガレッド
「メガニックバスター！」

メガニックバスターがコスモスの右腕に直撃する。

コスモス
「うわぁ！何故分かった！」

川崎
「簡単なことさ、お前が奥義を使った時、右腕を使ってた。それを逆手にとって攻撃しただけさ」

コスモス
「貴様ら・・・だが今更気付いても遅い！もう三十分たったからな」

川崎
「あぁーーー！カップラーメンがー！」

フランケン
「だから！やめろ！」

魔法陣が光り出し、地面からエクゾディアが出てくる。

そして、エクゾディアが召喚された。

大きさはゴジラと同じだった。そしてエクゾディアは街を破壊していく。

一方、一刀の家では、

関羽
「ご主人様、あれって・・・」

一刀
「あぁ、エクゾディアだ、何で街に」

メガレッド
「デルタメガ！」

メガブラック
「ギャラクシーメガ！」

デルタメガとギャラクシーメガが宇宙ステーションから地球へ向かっている。

そして地球に着き、メガレッドはデルタメガに搭乗し、四人はギャラクシーメガに搭乗した。

二つのマシンが宇宙へ飛び立ち、超電磁合体をする。

メガレンジャー
「超電磁合体！スーパーギャラクシーメガ！」

Sギャラクシーメガは地球へ向かい、エクゾディアに攻撃した。

零斗達は、

アニエス
「すごい！何なのあれ？」

零斗
「へ～いいじゃん」

Sギャラクシーメガは、エクゾディアの攻撃を防いだ。そしてエクゾディアは怒り出し、

怒りの業火エクゾード・フレイムを放つが、Sギャラクシーメガには効かなかった。

フランケン
「えぇーーーーーーーー！あの攻撃は破壊力抜群だぞ！」

メガレッド
「行くぜ！」

メガレンジャー
「スーパーギャラクシーナックル！」

スーパーギャラクシーナックルでやられ、それと同時にエクゾディアは破壊された」

一方コスモスは、ビルの屋上にいた。

コスモス
「エクゾディアを倒しただと？面白い」

夕方になり、カルロはバイクに乗った。

零斗
「金山企業に動きがあったら連絡しろよ」

カルロ
「あぁ、分かったよ」

カルロはバイクで帰っていった。

零斗
「それとメガレンジャー、ありがとな」

メガレッド
「おう！俺達が必要になったら呼んでくれよな」

別れを告げたと同時にメガレンジャーは消えていった。

川崎
「それとお前等、今日一日守り抜いたんだ。感謝しろよ」

レスター
「ありがとうございます」

零斗
「ＢＳＡＡ学園に来ていいんだぜ」

ミネット
「はい」

零斗
「じゃあな！」

三人が背を向けて歩く姿を、レスター達は見送った。

第十四話　封印されしエクゾディア降臨！（後書き）

零斗
「いや～楽しかったな～あのバトルは」

フランケン
「お前、出番少なかったな」

零斗
「ＢＳＡＡ学園に出番もクソもねぇ、ただ楽しめばいいんだよ」

フランケン
「はぁ・・・・・」

零斗
「次回もお楽しみに！」

第十五話　南の島でバカンス！（前書き）

零斗
「何と、南の島でバカンスだってよ！」

アックス
「そうだね！夏は思いっきり楽しまなくちゃ！」

二人
「イヤッホー！！」

第十五話　南の島でバカンス！

アックスは2年A組の生徒と副担任と鳳統先生と劉備ガンダム先生を誘い、南の島へ行くことになった。

しかし諸葛亮先生は、休み明けのテストの問題を作っているため、行けなくなった。

諸葛亮
「うぅ～私も行きたかったです～」

涙を流しながらテストを作る諸葛亮先生だった。

一方、アックスの客船では盛り上がっていた。

零斗
「いや～南の島か～楽しみだな～」

フランケン
「確かに、南の島は楽しみだな」

アリス
（もしかして、零斗君をＧＥＴできるチャンスかも！）

ゴツ突骨
「零斗～一緒に甲板に行こうぜ～」

アリス
「はう！」

零斗
「おう！待ってな！」

アリス
（どうして？零斗君、ボーイッシュが好みなの！？こうなったら私の色気攻撃で・・・）

零斗
「さて、行くか・・・」

アリス
「零斗君」

アリスは少しスカートをたくし上げた。

アリス
「私、零斗君に話が・・・」

零斗
「話なら、後にしてくれ」

アリス
「はう！！（うぅ～零斗く～ん、何で、何で私の色気攻撃は効かないの？）」

涙を流すアリスであった。

一方、甲板では・・・・

零斗
「なぁ夕化、どうしてＢＳＡＡ学園に？」

ゴツ突骨
「決まってんだろ、お前変な会社に狙われてるんだってな」

零斗
「だから、俺の護衛か？」

ゴツ突骨
「当たり前だろ、幼馴染なんだから、それにさ」

零斗
「何だ？」

ゴツ突骨
「あたい、零斗のことが好きだからさ」

零斗
「そうか？俺、彼女いないんだよね～」

ゴツ突骨
「彼女が見つかんなかったらさ、あたいがなってやるよ」

零斗
「全く夕化は、でもさ、もし彼女が見つからないとしたらだぞ」

ゴツ突骨
「ははは、そうだな」

物陰でアリスは、ゴツ突骨に嫉妬していた。

アリス
（夕化ちゃん、どうして零斗君に近付くの！？ヒロインは私のはずなのに！）

アリスはパーティ会場へ戻った。

一方、会場では・・

フランケン
「お、アリス、どうした？」

アリス
「別に・・・・」

劉備ガンダム
「はははは、それで」

ガシ！

劉備ガンダム
「うお！」

劉備ガンダムはアリスに捕まれ、どこかへ連れて行かれた。

そして倉庫では、劉備ガンダムが縛りつけられた。その時、アリスはヤンアリスになる

劉備ガンダム

「え～っと、これはどういう意味かな？」

アリス
「ねぇ先生、私の出番が少ないんだけど、どうして？」

劉備ガンダム
「それは多分、零斗が鈍感だから・・・」

アリス
「何で零斗君は私に振り向いてくれないの！？ヒロインなのに！ふふふ、零斗君は私のモノ、零斗君は私のモノ、零斗君は私のモノ！」

こうして、ヤンアリスの八つ当たりが始まった。

翌日、ボロボロになった劉備ガンダムを見た者もいた。

鳳統
「もう、零斗君も困ったものですねー女の子にヤキモチを妬かせるなんて」

と言っているうちに南の島に着いた。

2年A組は、客船から降りてバカンスを始めた。

ビーチバレーをしたり、日光浴をするものもいた。

そして、アックスと蔡ボウは・・・

アックス

「折角だから、サンオイルを塗ってあげるよ」

蔡ボウ
「え、いいんですか？」

アックス
「あぁ、だって僕たちは、恋人同士じゃないか」

蔡ボウ
「アックス様、ありがとうございます」

蔡ボウは、シートにうつ伏せになり、アックスは蔡ボウの上のビキニのヒモを外し、背中にサンオイルを塗り始めた。

一方、零斗達は・・・

零斗
「よっしゃーいくぞ～」

フランケン
「一刀！パス！」

アリス
「わわわわわ！」

ゴツ突骨
「よしいくぞー！」

ビーチバレーをやっていた。

しかし、アリスは零斗とゴツ突骨が仲良くなっていることに妬いている。

アリス
（私は、零斗君のことが好きなのに・・・）

するとアリスは、零斗達の元から離れる。

零斗
「どうした？アリス？」

アリス
「ごめん、ちょっと一人でいるから・・・」

零斗
「？」

アリスは森の中に入り、走った。

アリス
（どうして、どうして・・・私は零斗の事が好きなのに・・・・・・
私は・・・夕化ちゃんと零斗君が仲良くしているところを見るだけなの？）

アリスは涙を流した。それは、零斗がゴツ突骨に奪われると思っているからだ。

一方、アックスと蔡ボウは・・・・

蔡ボウ

「アックスさま～気持ちいいです～」

アックス
「そうかい？」

蔡ボウ
「あん、アックス様～どこ触ってるんですか～？」

アックス
「ごめんごめん」

アックスは、蔡ボウの背中をサンオイルで塗っていた。

これを見たシェバは・・・・

シェバ
（これを諸葛亮先生が見たらどうなっていたか、休み明けのテストを作らして正解だったわ）

と思うのだった。

まぁ諸葛亮先生を連れてきたらアックスをボコボコにしていたかもしれない。

劉備ガンダムはアリスの様子を見て気付いたのだった。

劉備ガンダム
（ゴツ突骨が転校してきて、気持ちが不安定だろうな）

そして夕方になり、零斗達は満足しながらホテルへ向かう。

零斗
「いやー楽しかったぜー」

フランケン
「本当、俺は思い出に残ると思うぜ」

するとアリスは・・・

アリス
「零斗君、話があるの」

零斗
「ん？」

アリスと零斗は森の中へ入る。

零斗
「どうしたんだ？」

アリス
「あのね零斗、私の気持ちを聞いて？」

零斗
「おう」

アリス
「実は私、ずっと前から零斗君の事が好きなの！」

アリスは零斗に告白した。これを聞いた零斗は、

零斗
「あぁ、そうか、それで悩んでたのか、何も知らずにごめんな。」

アリス
「え？」

零斗
「正直、俺は彼女がいなくてさ、寂しかったんだよ。だからお前に告白されたとき、すっごくうれしくてさ」

アリス
「それじゃあ」

零斗
「うん！俺はお前のことが好き！」

アリス
「零斗ぉー！」

アリスは零斗に抱きついた。零斗は嬉しそうな顔になる。

そして二人は唇を重ね、舌を絡め合わせた。

零斗
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／／」

アリス
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／／」

そして二人は、純愛の夕方を過ごした。

ホテルでは・・・

フランケン
「ん?零斗とアリス、さっきより仲良くなってる」

零斗
「そうか?」

アリス
「いつもですよ☆」

フランケン
「☆はいらないぞ」

ゴツ突骨
「へ～とうとう恋人同士になったか～」

二人
「え!?」

ゴツ突骨
「お二人さん、お幸せに」

ゴツ突骨は去っていった。

そして物陰で劉備ガンダムはアリス達を見守っている。しかし、後ろから鳳統先生が・・・

鳳統
「先生、ストーカーですよ」

劉備ガンダム
「いや、これは決してストーカーではない」

鳳統
「では、お仕置きをしないとね～」

劉備ガンダム
「え、ちょ、待って！」

劉備ガンダムは鳳統先生に連れて行かれましたとさ。

第十五話　南の島でバカンス！（後書き）

関羽
「アックスと蔡ボウに続いて零斗とアリスか！」

張飛
「でも、アリスが零斗と結ばれてよかったのだ！」

関羽
「結ばれたのはいいが、べたべたくっつくことはなかろう！」

張飛
「全くなのだ！」

アリス
「ダメなの・・・？」

関羽
「いや、決してそういうことは・・・」

アリス
「私と零斗の邪魔をしないで！」

ヤンアリスモード

張飛
「怖いのだーーーーーー！」

関羽

「分かったから抑えてくれーーーーー！」

アリス

「次回をお楽しみにしてね☆」

第十六話　空を飛ぶ魔女（前書き）

零斗
「何？空を飛ぶ魔女？」

フランケン
「確か、ストライクウィッチーズと言ってたな」

零斗
「それなら、エリオだって飛べるぞ？だって、イカロスだし、背中に翼が生えているから」

フランケン
「まぁ、それもそうだな」

第十六話　空を飛ぶ魔女

ある日、零斗達は横浜魔女博物館に行く。ちなみにエリオとキャロを誘ったのだ。

横浜魔女博物館では、ストライカーユニットについての事や魔女についての事が学べるところである。

今日はストライクウィッチーズのパフォーマンスが見られる日である。

『ストライクウィッチーズ』は女子の憧れである。

キャロ
「ストライクウィチーズが見られるなんて嬉しい～！」

この娘はキャロ・ル・ルシエ。エリオの恋人である。

キャロは背が関羽（愛紗）と同じであり、胸は李典（真桜）と同じ巨乳である。

とある出来事でエリオの恋人になる。エリオを溺愛しているため、夜にエリオの部屋に忍びこむことが多い。

エリオがイカロスと言うことも最初から気付いている。

キャロ
「エリオ君、一緒に見よ？」

エリオ
「あぁ、そうだな」

零斗
「おいおい、エリオ～デレデレになってるぜ？」

エリオ
「ま、待て！俺は・・・・」

川崎
「お熱いね～エリオ～」

エリオ
「いい加減にせぬか！」

零斗
「分かった分かった、じゃあストライクウィッチーズのパフォーマンスを見ますか」

川崎
「そうですね～」

零斗達は博物館の屋上に行った。すると人が多かった。

川崎
「これだけの数なら、こりゃ人気上昇するっしょ？」

アナウンス
「お待たせしました。それでは、ストライクウィッチーズのパフォーマンスです」

零斗
「お、始まったか」

空に十一人のストライカーユニットをつけた少女達が並んで飛んでいる。

さらにキャロは興奮した。

キャロ
「きゃー！ストライクウィッチーズだよエリオ君！」

エリオ
「確かに、これまたすごい」

零斗
「飛んでいるぜ～！」

川崎
「僕の百花繚乱真拳奥義で捕まえられるかな～」

零斗
「それはどうかな？」

そしてストライクウィッチーズはチームワークを乱さず飛び回っている。

その時、エリオは不吉な予感を感じた。

エリオ

（ん?この感じは・・・まさか金山企業か!いや、この感じは闇のオーラを出している!?）

キャロ
「どうしたの?」

エリオ
「すまない、ちょっと用事がある」

そう言ってエリオは立ち去った。

キャロ
「ほえ?」

エリオは不吉な予感をしたところに向かった。その場所は博物館の近くの公園だった。

そこにはコスモスがいた。コスモスの右手に黒い魔弾らしきものがあった。

エリオ
「貴様か、コスモス」

コスモス
「よく俺のことが分かったな・・・」

エリオ
「話は零斗から聞いた。何でも『処刑人コスモス』と言ってたな」

コスモス

「君はギリシャ界のイカロスじゃないか。エリオ・モンティアルというのは仮の名前ということかな？」

エリオ
「そうだ、貴様その右腕にある魔弾でどうする気だ」

コスモス
「そんなの決まっているだろう、この魔弾でネウロイを呼ぶんだ」

エリオ
「ほーう、ネウロイか・・・あれは俺が封印したはずだが？」

そう、数年前のことだった。エリオは日本にネウロイが来ると予知をし、その現場へ向かった。

すると大量のネウロイが向かって来る。エリオはイカロス真拳で複数のネウロイを封印した。

それを知ったコスモスは、ネウロイの封印を解こうとしていた。

コスモス
「魔弾が大きくなったとき、ネウロイの封印が解かれる」

エリオ
「やめろ！そんな事をしたら、世界が滅ぶ！」

コスモス
「ふふふ、全く世界なんてちっぽけだよ」

エリオ

「貴様！」

エリオは赤いオーラを出し、コスモスは黒いオーラを出している。

コスモス
「ならば、闇魔術真拳奥義！スターライトブレイカーＶ４！」

スターライトブレイカーＶ４とは、スターライトブレイカーのバージョン４の事である。

簡単に言えば、スターライトブレイカーの威力が四段階に進化したと言うべきだろう。

しかも威力はスターライトブレイカーとは違い、一つの国を滅ぼすくらい高い。

エリオ
「イカロス真拳奥義！イカロスシールド！」

イカロスシールドとは、自分の周りに透明のシールドが現れ防ぐ。

スターライトブレイカーや、プラズマザンバーブレイカーを防ぐことが出来る。

コスモス
「ふーん、これで防げるんだ」

エリオ
「イカロス真拳奥義！千本剣！」

千本剣とは、相手の上に千本の剣が降るという危険な技である。

しかしコスモスは魔法陣で防ぐ。

エリオ
「やるな、誰でも防げない千本剣を防ぐとはな・・・・」

コスモス
「だけど今回でおしまい、じゃあね」

エリオ
「待て！」

コスモスは黒い光に包まれ、消え去った。

エリオ
（このことは、零斗に知らせないと！）

その時、博物館からサイレンがなり始める。

アナウンス
「ネウロイが近付いてきました。館内の方は速やかに避難してください」

零斗
「これってまさか」

川崎
「そうだね、金山企業の仕業だ！」

キャロ
（エリオ君・・・）

すると、向こうからネウロイが現れた。

零斗
「川崎、お前はキャロを安全な場所に連れて行け！」

川崎
「おう！」

川崎はキャロを連れて避難場所へ行った。

零斗
「久しぶりにマイティ真拳を使うぜ！」

一方、ストライクウィッチーズは、ネウロイと戦っていた。

宮藤
「ネウロイは滅んだはず・・・・」

ミーナ
「確かにそうね、でも誰が・・・」

零斗
「マイティ真拳奥義！パトリオットキック改！」

すると零斗のパトリオットキック改でネウロイは砕け散った。

そして零斗はボードらしきものに乗る。

これを見たストライクウィッチーズは驚く

宮藤
「す、すごい」

坂本
「こいつ超人か？」

リーネ
「蹴り一発で・・・・」

ルッキーニ
「・・・・・（絶句）」

バルクホルン
「何者だ！？」

エーリカ
「マイティ真拳って・・・・」

サーニャ
「でも、何だかすごいです」

エイラ
「いや、あれは有りないだろ・・・・」

ペリーヌ
「何ですのあの男は！？」

シャーリー
「えぇ？これ絶対ヤバいよ！」

ミーナ
「あのたはいったい・・・」

零斗
「俺は北郷零斗、ＢＳＡＡ学園の生徒だ！」

こうして、ストライクウィッチーズと零斗の出会いだった。

はたして、ストライクウィッチーズと共に戦うのか？

零斗
「俺のマイティ真拳奥義を見せてやるぜ！」

ついでにストライクウィッチーズに、どんなギャグを見せるのか？

そして、そのギャグにストライクウィッチーズたちはツッコミをいれるのか！？

宮藤
「結局零斗さんのギャグに私達がツッコむことになるんですね・・・・」

第十六話　空を飛ぶ魔女（後書き）

次回は零斗のギャグにストライクウィッチーズ撃沈？

零斗

「俺のギャグにつられてみな！」

第十七話　ハジケろ！夏のサマースペシャル！（前書き）

今回は零斗のギャグが始まります。

第十七話　ハジケろ！夏のサマースペシャル！

コスモスによってネウロイの侵攻が始まった。その時、ストライクウィッチーズがネウロイの侵攻を防ぐため

攻撃をした。零斗のパトリオットキック改でネウロイは砕け散った。それを見たストライクウィッチーズは

驚きを見せる。そして零斗のギャグが始まろうとしている。

ミーナ
「あなた確か学生って言ったわね」

零斗
「確かに言ったぜ」

坂本
「学生がこんな危険なところにいていいのか？」

零斗
「俺は夏休みの宿題を終わらしたし、後は自由ってところだ」

バルクホルン
「そういう問題ではない！学生がネウロイに立ち向かうのは無茶だ！ここは家に帰れ」

零斗
「出来ませんよ、何故ならネウロイを動かしているのは金山企業の処刑人ですから」

宮藤
「処刑人？」

零斗
「そうですよ、俺さ、金山企業に狙われてるんですよ。邪魔だから」

ペリーヌ
「ネウロイとなんの関係が・・・」

零斗
「あるんですよ、金山企業と・・・・いるんだろ、隠れてないでさ・・・」

すると黒い魂がやってきた。黒い魂はコスモスに変貌した。

コスモス
「ふふふ、ようやく気付いたようだね～」

エーリカ
「えぇ？こいつ化け物！？普通ならそんな魔法出来ないよ！？」

コスモス
「僕の場合は闇魔術真拳奥義を使っているからね」

零斗
「ほーう、意外な登場だな。ならば俺はマイティ真拳でいくぜ！」

零斗は白いオーラを出し、コスモスは闇のオーラを出している。

ストライクウィッチーズは二人から少し遠ざけた。

コスモス
「闇魔術真拳奥義！ザ・フィールド！」

すると青い魔法陣が現れ、円を描くように自分も含めて零斗とストライクウィッチーズの周りを囲んだ。

この奥義は結界魔法である。しかしただの結界魔法ではなく、触れると一瞬にして消える恐ろしい奥義である。

しかし、内側の壁は触れても何も起こらない。

零斗
「ならば俺も、マイティ真拳奥義！スーパーハジケタイム！」

しかし、何も起こらなかった・・・・・

宮藤
「ダメじゃないですかぁーーーーー！」

零斗
「おっしゃー！奴をやっつけるぞー！」

これを聞いたストライクウィッチーズはしらける。

しかし、零斗の頭にはなべをかぶっており、左手にはなべのふたが持っており、右手にはおたまが持っている。

ミーナ

「それで戦うのぉーーーーーーーー！？」

零斗
「うおぉーーーーーーーー！」

坂本
「やめろ！それで戦うなら長ネギにしろ！」

宮藤
「坂本さぁーーーーーーん！」

コスモス
「ふ、愚かな・・・」

右手で魔弾を放つが、零斗のなべのふたで防がれるが、なべのふたは無傷だった。

宮藤
「なべのふたで防げませんよ！？しかも無傷ってありえません！」

さらに零斗はおたまでコスモスに攻撃をするが、魔法陣で防がれる。

そして頭に被っているなべで頭突きをした。魔法陣が砕け散ってコスモスの腹にダメージを食らった。

ペリーヌ
「なんなんですの！？あの戦いは！？」

しかし、これは幻影であった。

コスモス
「ははははははは、幻影に惑わされているとはな」

零斗
「何!?バカな・・・」

コスモス
「全く、バカ共だな」

するとルッキーニはコスモスを見て指摘した。

ルッキーニ
「おなかが痛そうな様子をしているよ?」

コスモス
「これは少し食べ過ぎただけだ!」

エイラ
「食らった瞬間に幻影使うのかよ」

サーニャ
「使った意味がない」

シャーリー
「何ていうか、タイミングが悪いね」

コスモス
「ぐ、闇魔術真拳奥義!魔弾乱舞!」

多数の魔弾を放った。ストライクウィッチーズはシールドをはる。

しかし、シールドは簡単に砕け散った。

コスモス
「俺の魔弾は絶対に防げない！そして絶対さけられない！」

坂本
「な、何ていう男だ・・・・」

宮藤
「う、そうですね・・・あれ？零斗さんは？」

零斗はボードで昼寝をしていた。

宮藤
「昼寝してるぅーーーーーーーー！」

すると零斗は起き上がった。しかし、眠そうだった。

零斗
「何だ～俺の昼寝を邪魔している奴は～」

エーリカ
「そうだったの！？」

零斗
「さーてそろそろいくか、マイティ真拳奥義！クリスとレオン召喚！」

すると上からボードに乗っているレオンとクリスだった。

リーネ
「バイオキャラが来ちゃった！」

クリス
「話は聞いた、黒いＢ・Ｉ・Ｏが多くなったのはあいつのせいだってな」

宮藤
「いやネウロイですよ！？」

レオン
「困ったモンだぜ。だったらあいつを倒すか」

零斗
「よっしゃ！俺達の奥義を見せてやる！」

三人
「必殺奥義！」

宮藤
「必殺奥義？」

坂本
「何だそれは・・・」

零斗はコスモスの後ろをとった。

コスモス
「何！？」

零斗
「食らえ！」

ドコーン！

コスモス
「うわぁーーーーーーーーーーーーー！」

コスモスは零斗の蹴りで吹き飛ばされ、クリスとレオンに向かって来る。

クリス
「行くぞ！レオン！」

レオン
「おう！」

ドカーン！

二人
「双龍牙！斬烈波！」

コスモス
「グアァーーーーーーーーー！」

宮藤
「何かすごいの出た！」

そしてコスモスはクリスとレオンの攻撃で倒れた。

三人
「やったーーーーーーー」

するとコスモスは起き上がり、闇のオーラを出した。

零斗
「さて、とどめだ。マイティ真拳奥義！」

コスモス
「うおぉーーーーーーー！」

ドゴーン！

零斗
「砕け散った怒りのロケットアタック！」

零斗の奥義でコスモスはダウンした。

レオン
「ふ、敵さんのやられ方には泣けるぜ」

それと同時にネウロイの大群は消え去った。

そして、博物館の近くの公園にて・・・・

ミーナ
「よくわからなかったけど、ありがとう」

零斗

「俺は自分の奥義をネウロイに通じるか試してみただけさ」

坂本
「お前の奥義のおかげでネウロイは消えた」

零斗
「だけど喜ぶのはまだ早いぜ、俺にとってはな」

バルクホルン
「そうだったな、お前はあの会社に狙われているんだな」

零斗
「まぁそんな感じだ」

ミーナ
「零斗君に言わなきゃならないことがあるの」

零斗
「何？」

ミーナは金山企業について関係しているものと、その人物についての事を説明した。

零斗
「それ、俺の知り合いから聞いた」

ミーナ
「え！？」

零斗

「確か、アーヴィングが麻薬の商人って言ってたけどな。そいつと金山企業と関係しているらしい」

ミーナ
「・・・・では零斗君、私達の基地についてらっしゃい」

そしてストライクウィッチーズの誘導に従い、基地に着いた。

資料室にて、ミーナは金山企業についての調査した記録を零斗に渡した。

ミーナ
「これが、私達が調査をした記録よ」

零斗は調査の記録を真剣に見た。

零斗
「やっぱりな、だいたい分かった」

ミーナ
「どういうこと?」

零斗
「噂通りだったってことだ。麻薬と関係している」

ミーナ
「そうね・・・」

零斗
「この記録が書いてやること本当だってことは俺が狙われることが

分かったぜ」

金山企業と麻薬の関係が一致し、手がかりを掴んだ。

第十七話　ハジケろ！夏のサマースペシャル！（後書き）

おまけ

キャロはエリオに胸を揉まれて喜んでいる。

モミモミモミモミ・・・・

キャロ
「あぁん、いいよぉ～エリオ君もっと～」

エリオ
（不思議だ、女は胸を揉まれて嫌がるはずだ、しかしキャロは胸を揉まれて喜んでいる）

エリオは興味深々にキャロの胸を揉み続ける。

読者の皆様、すみませんでした。

第十八話　黒いノートの恐怖（前書き）

零斗
「黒いノート？」

クリス
「何でも、Ｂ・Ｉ・Ｏより恐ろしい物なんだ」

レオン
「しかも、死神が持つノートと言われている」

クリス
「そこに人の名前を書くと、書かれた人物が死んでしまうらしい」

零斗
「それは恐ろしいな」

第十八話　黒いノートの恐怖

夏休みが終わり、休み明けの朝の打ち合わせが終わった頃のことだった。

教員達とクリスとレオンが孫権ガンダムのところに集まっていた。

孫権ガンダムが持っているのは、黒いノートだった。

しかも教員達は黒いノートを見て、青ざめたり、唖然としたりしていた。孫権ガンダムも同じだった。

どうしてそうなったか、それは夏休みの最後の日だった。

孫権ガンダムはいつものように散歩をする。その時、道端に黒いノートが落ちてあった。

黒いノートを見て不思議そうに思い、家に持ち帰った。

そして翌日、孫権ガンダムは黒いノートを学校に持ち込み、いつものように仕事をする。

しかも黒いノートで。

一方、クリスとレオンは何かを探すようにＢＳＡＡ学園の近所で動き回っている。

そう、クリスとレオンは国際警察に所属しており、極秘任務で黒いノートを探している。

クリス
「あのノートは恐ろしいノートだ」

レオン
「あぁ、あのノートは危険だ」

すると鳳統がほうきに乗ってあらわれる。

鳳統
「どうかしたんですか～？」

クリス
「あぁ、鳳統先生、これは極秘任務なので、お答えできません」

鳳統
「黒いノートのことですか？」

レオン
「！？何故それを・・・」

鳳統
「孫権ガンダム先生が黒いノートを持ってＢＳＡＡ学園に行きましたよ？」

クリス
「ご協力、ありがとうございます」

二人はＢＳＡＡ学園に向かって走っていった。

鳳統
「多分、孫権ガンダム先生は書いちゃうと思うけど」
そう言っているなら止めに行けよ！
そして二人はＢＳＡＡ学園に着いた。
二人は国際警察の証明書を出し、入った。
クリスとレオンは職員室に向かって走った。
職員室に入った後、証明書を出した。
孫権ガンダム
「どうしたんですか？」
クリス
「君、そのノートを渡してもらおうか」
孫権ガンダム
「な、何でですか？」
レオン
「そのノートは危険なんだってエェーーーー！もう書いちゃったよ！」
すでに遅かった、孫権ガンダムは自分の名前を書いてしまったのだった。
孫権ガンダム

「え?な、何!?」

二人
「はぁ～」

クリスとレオンはため息をつく。

レオン
「そのノートはな、危険なんだよ」

孫権ガンダム
「どうして!?」

クリス
「人物の名前を書いたら、その人は死んじゃうんだよ」

全員
「えぇーーーーーーーーーーーー!」

とまぁそんな感じです。

クリス
「そんな感じじゃねぇよ!（怒）」

シェバ
「そんなら消せばいいじゃん」

クリス
「消しても意味ないぞ!それにもし、その人物が死ぬ前に消しても変わらないんだよ!」

孫権ガンダム
「何てことを、俺はこのままでは・・・・・」

クリス
「これはもう・・・取り返しのつかないことだね」

諸葛亮
「はわわ～！そんな事を言わないで下さい！まだチャンスはあります！」

レオン
「だけど、時間がたてば、死ぬんだよ」

鳳統
「あれれ～？どうしたの～？」

諸葛亮
「雛里ちゃん！空気を読んで！」

鳳統
「全く、黒いノートを拾うとはね～お仕置きが必要ね」

バチン！

孫権ガンダム
「ひぃ！」

孫権ガンダムは鳳統の鞭で怯える。

クリス
「待て！そこまでしなくても・・・」

レオン
「そうだぞ！」

ウェスカー
「まぁ、待て、この理事長である私がなんとかしよう」

二人
「あんたが理事長かよ！」

クリスとレオンはウェスカーにツッコむ。

ウェスカー
「何々？この黒いノートはただのノートだ」

すると全員ズッコケた。

クリス
「ただのノートって・・・」

レオン
「どういうことですか？」

ウェスカー
「実はな、黒いノートに名前を書いたら死ぬということは嘘だったんだよ」

クリス

「嘘だったのかよ！」

ウェスカー
「だからただのノートだ」

クリス
「何だよ～人騒がせしやがって」

レオン
「ほんとだよ～疲れる」

孫権ガンダム
「あの、すみませんでした・・・」

こうして、クリスとレオンは本部に帰り、黒いノート騒動が静まった。

一方、2年A組では・・・・

一刀
「そういや、俺の黒いノートはどこだろ～？」

零斗
「どうしたんだ～？」

一刀
「実は、黒いノートが見つかんないんだよ」

零斗
「あぁ、そういうことか」

一刀
「で、心当たりあるか？」

零斗
「ん～孫権ガンダム先生が持っているんじゃない？」

一刀はリストバンドからクナイつきのワイヤーを取り出して職員室へ向かった。

その後、孫権ガンダム先生の叫びを聞こえたのは、それは別のお話である。

一刀
「やっと俺の黒いノートが見つかった」

第十八話　黒いノートの恐怖（後書き）

零斗
「結局恐怖といってもただのノートじゃん」

クリス
「いや、あの叫びが聞こえたから・・・」

レオン
「多分・・・・」

零斗
（一刀の奴、またやったのか）

第十九話　風紀委員長ＶＳマイティ真拳使い（前書き）

零斗
「風紀委員長？」

アリス
「誰だろ～ね」

第十九話　風紀委員長ＶＳマイティ真拳使い

黒いノート騒動から一週間がたった。今日も零斗は登校する。

零斗
「おっはよ～今日はロケランを持ってきたぞ～！」

零斗が持っているのはＲＰＧロケランである。

フランケン
「えぇ！？学校に危険な物を持ち込んでるー！」

春姫
「いやー！撃たないでー！」

八輔
「そうだ、ここは話し合おう」

アリス
「零斗ぉ～素敵」

フランケン
「何うっとりしてんだ～！」

その時、一人の少女があらわれる。

少女
「ちょっと、学校に危険物を持ち込んじゃダメでしょ！」

零斗の前に現れたのは『とある科学の超電磁砲』の超電磁砲（レールガン）こと御坂美琴である。

その隣には白井黒子がいた。この二人は風紀委員である。美琴は風紀委員の委員長であり

黒子は風紀委員の副委員長である。

零斗
「へぇ～マイティ真拳の継承者の俺に命令するのか？」

美琴
「関係ないわよ、とにかくあなたはふざけすぎよ」

零斗
「なるほど、上条が言ってたビリビリというのはお前のことだったんだな」

美琴
（ブチ！）

黒子
「お姉さまの電撃がくらいますわよ！」

フランケン
「零斗、風紀委員長にその言葉は禁句だよ！」

零斗
「おもしれぇ、なんならお前等二人まとめてぶっ飛ばしてやる」

美琴
「ふん！泣いて後悔しないでよね」

フランケン
（あ～あ、大変なことになっちゃったよ）

そして、校舎のグランド。

零斗
「では、マイティ真拳奥義！雷拳（かみなり）！」

すると零斗はストレートパンチで雷の鉄拳を出した、しかし美琴はよけた。

美琴
「これがマイティ真拳なの？ふ～ん、だったら余裕！」

すると美琴の右手から電気が出る。

美琴
「私の電気を食らいなさい！」

零斗
「な、何をする気だ！やめろ！」

黒子
「お姉さま！あのバカを黒焦げになる姿を・・・」

電気が零斗の方に向かい、直撃した。

美琴
「ふ、これで分かったかしら」

零斗
「それはどうかな？」

美琴
「ん？」

零斗は黒子を盾にして防いでいた。

美琴
「黒子ぉーーーーーーーーーー！」

零斗
「そして更に、黒子マグナム！」

ドカァーーーーーーー！

黒子
「キャアーーーーーーーーーーー！」

ドゴーン！

二人
「ゴブァーーーーーーーーー！」

零斗の黒子マグナムで美琴の方へ吹っ飛び、そして黒子は美琴にぶつかってダウンした。

零斗
「風紀委員の相手は疲れるぜ」

美琴
「黒子、黒子！」

黒子
「おねえ・・さま・・・もうダメ・・・」

美琴
「黒子ぉーーーーーーーーーーー！」

零斗
「全く、黒子ぐらいでガタガタ言うなよ、うるさいし」

美琴は全身に電気を出しながら電気を溜めている。

美琴
「あんた、ふざけんざないわよ！」

零斗
「ふざけてない、マイティ真拳をバカにしたからわりぃんだよ」

美琴はコインを取り出し、そしてコインで電磁加速を加えて超電磁砲（レールガン）を放った。

そして零斗に直撃した。

零斗
「うおぉーーーーーーー力が、力がわいてくるーーーー！」

すると零斗は光り出し、超電磁砲（レールガン）を空のかなたへ飛ばした。

美琴はこれをみて唖然する。

そこには、黒い革ロングコートを身にまとった零斗だった。因みにコートの背中には赤字で『自在』とかいてあり、

右腕の横には白で『魂』とかいてあり、左腕の横にも同じく書いてあった。

美琴
「な、何よあんた・・・・」

美琴の足は零斗の姿を見て震えている。

教室の窓側には生徒の全員が唖然としている。

アリス
「きゃー零斗かっこいいーーーー！零斗ぉーあ・い・し・て・る～！」

シェバ
（アリスさん、零斗ＬＯＶＥですね）

零斗
「一気に決めるか」

美琴
「ちょっと！ここは話し合いで決着を・・・・」

零斗
「美琴さん、あなたに伝えたいことがあります」

美琴
「な、何よ」

零斗はアッパーをする体勢になる。

零斗
「電気は・・・・」

ドゴォン！

美琴
「キャアーーーーーーーー！」

零斗
「大切にね！！」

そして零斗のアッパーで美琴はダウンした。

これを見た生徒たちは驚きの顔をしながらしらける。

フランケン
（とんでもないことになったな・・・・）

零斗
「お前は電気を無駄に使いすぎだ。少しは控えろ」

美琴
「ハイ、今度カラソウシマス・・・・」

零斗
「分かればよし！」

その後、美琴と黒子はヒーリングで治り、零斗は教室に戻った。

授業が再開し、諸葛亮は零斗のロングコートを着ていることに気付く。

諸葛亮
「あの～いつまでそのコートを着ているんですか？」

零斗
「さぁ？いつまでだろーね」

シェバ
「風呂に入るときも着るのかしら？」

アリス
「零斗ぉ～その格好、私好きだよ！」

零斗
「嬉しいなぁ～」

翌日、零斗との対決で、美琴と黒子が零斗を避けていた。

零斗はそのことに疑問を感じるようになる。

美琴
「零斗怖い零斗怖い零斗怖い零斗怖い・・・・・」

レオン
「？」

クリス
「何を怯えているんだ？」

美琴が零斗に対する恐怖が消えないという。

第十九話　風紀委員長ＶＳマイティ真拳使い（後書き）

クリス
「いくら何でも、風紀委員長に対してはやりすぎじゃないか？」

零斗
「まぁ、俺がパワーアップしたんだからいいじゃん」

レオン
「次回、パワーアップした零斗の実力が明らかに！」

クリス
「それじゃ行くぞ！せーの・・・」

三人
「次回も読んでね～」

第二十話　パワーアップした零斗の力！（前書き）

零斗
「おっと、パワーアップした俺の力が明らかになるのか？」

はい、というより祝福のカンパネラのキャラがまた出ますね。

零斗
「マジ！？じゃあ見せないとな！」

第二十話　パワーアップした零斗の力！

風紀委員長、御坂美琴を倒して一ヵ月たった。零斗は登校するときもまだワイシャツの上に黒い革ロングコートを着ている。

それだけではなく、授業中でも、昼食の時も、下校の時も、夕食の時も、寝る時も着ていた。

教師側では校則違反じゃないかと指摘されているが、全く気にしていない。

そして土曜日、零斗はカリーナにある事でＯａｓｉｓに呼ばれる。

零斗
「よう！」

カリーナ
「あ、零斗さ・・・えぇーーーーー！どうしたんですか！？その格好は！？」

カリーナは零斗の黒い革のロングコート姿に驚いた。

零斗
「あぁ、これは風紀委員長の超電磁砲（レールガン）でパワーアップした姿だ」

カリーナ
「パワーアップって・・・・・」

零斗

「簡単に言えばマイティ真拳の真の継承者になったってことだ！」

するとミネットとレスターが現れる。

レスター
「どうしたの？カリーナさん」

ミネット
「大きい声がしたから・・・零斗さんすごーい」

零斗
「こいつを着てみたくなったか？」

レスター
（いや、大きさ的には無理があるような・・・・）

アニエス
「どうしたの・・・えぇーーーーーーーー！零斗君かっこいいーーーー！」

チェルシー
「どうかしました・・・・零斗さん、変わった服を着ていますね」

零斗
「全く、俺の服に惚れたか～」

カリーナ
「惚れませんですの！」

零斗

「で、俺を呼んだのは何だ？」

カリーナ
「それが、ミネットちゃんが・・・・」

零斗
「野球拳がやりたいのか～」

レスター
「違うよ！」

ミネット
「実は、私、変なおじさんにつけられているんです」

零斗
「変なおじさん？」

ミネット
「はい、昨日の帰りに路地を歩いていたときに私の後をついてくるおじさんがいたんです、それで夜眠れなくて・・・」

零斗
「恐らくあいつしかいないな」

レスター
「あいつ？」

零斗
「セルゲイ・ウラジミール、奴は幼女を捕まえて自分のコレクションにしている。テイロスを使って」

そう、ここ最近、十歳の女の子の失踪する事件が起きている。犯人はセルゲイであることは零斗だけが分かる。

しかし、セルゲイは警察に『渋谷の英雄』と慕われえいるため、証拠を出すのは困難になっている。

そのためカリーナたちは零斗に頼み、ミネットから守って欲しいとことでたのんだ。

カリーナ
「テイロスってなんですの？」

零斗
「テイロスはセルゲイが作った幼女捕獲用のタイラントだ。右手に持っているロケランは、放つとネットが出る」

アニエス
「変態だね！」

チェルシー
「許せませんね」

零斗
「そうだな、今日が奴が来る日だ」

カリーナ
「何でですの？」

零斗

「あいつは平日にストーキングして、土曜日にはテイロスを使って捕獲する」

レスター
「そうなの？」

零斗
「あぁそうだ」

カリーナ
「でも、その人を捕まえるにはあのテイロスを倒さないといけませんのよ？どうやって・・・」

？？？
「それなら教えますよ～」

零斗
「はわわ先生！」

諸葛亮
「孔明です！」

カリーナ
「あなたは・・・・」

諸葛亮
「零斗君の教師の諸葛亮孔明です、話は聞きました。この諸葛亮にお任せください！」

そして諸葛亮の策に従い、零斗達は指定された配置についた。する

とセルゲイが現れた。

因みにミネットはおとりである。セルゲイが走ってきたとき、ミネットは逃げる。

その時、アニエスのオートマタ達が現れ、セルゲイに攻撃をする。ミネットは何とか距離を広げたが、

テイロスが道をふさぎ、捕獲用のロケランを放とうとしていた。次の瞬間、カリーナの魔弾がテイロスに直撃し、

チェルシーの斬撃で捕獲用のロケランが斬れた。

セルゲイ
「な、何という事だ！お前等は一体・・・」

零斗
「孔明先生の策でお前の行動はお見通しになった。名づけて『逆手の策』だ！」

セルゲイ
「『逆手の策』だとぉ！？」

零斗
「相手の行動を逆手に取る、詳しく言えば、逆手を取るにはおとりが必要だ。それの行動パターンを逆手に取ったってことだ！」

セルゲイ
「ふふふふふ、はははははははははは！見事だ！マイティ真拳と孔明の罠を合体させるとはな・・・」

零斗
「今の俺はのマイティ真拳はパワーアップしているぜ！」

セルゲイ
「ん？お前等の後ろの向こうに何か来るぞ！」

零斗達が後ろを振り向くと・・・・・

クリス
「町内会の運動会だ！」

レオン
「希望は俺達にかかっているんだ！」

バリー
「負けるわけにはいかねぇ！」

クリスとレオンとバリーがリレーのバトンを持って走っていた。そう、この三人はアックスによって助け出された後、

町内会の運動会のリレー選手にされた。そして今現在練習中である。
零斗達は道を開け、クリス達を見送った。

零斗
「いやぁ～いいよねぇ～」

セルゲイ
「どこが！？まあいい、テイロスのロケランが壊れたとき、制御が解き放たれる。体内のT進化速度は、もはや予測不可能だ。神にも

手なずけられぬバケモノが生まれるだろう！」

ミネット
「パパ、あの人怖い・・・・・」

レスター
（バケモノに・・・）

そしてテイロスの体は膨らんだ、しかし、膨らんでテイロスの体は風船みたく破裂した。

これを見た零斗達は、沈黙になり、ジト目で見た。

セルゲイ
「な、何でそんな目で見るんだ！」

零斗
「俺のマイティ真拳の強さを教えてやる、マイティ真拳奥義！」

セルゲイ
「な、なにをするつもりだ！」

零斗
「曹操ガンダム召喚！」

そして曹操ガンダムが地面から出てきた。

零斗
「そして更に！零斗ヒュージョン！」

零斗と曹操ガンダムは光り出し、そして一つになった。

これを見たカリーナは驚く。

カリーナ
「誰ですのぉーーーーー！」

曹操ガンレイ
「面白い戦いは好きだぞ」

セルゲイ
「何だ・・・・」

曹操ガンレイ
「俺様は曹操ガンレイだ、地獄に行っても覚えやがれ」

セルゲイ
「地獄って、まさか・・・・」

曹操ガンレイ
「食らえ！」

ドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴドゴ！

曹操ガンレイ
「地獄のパンチラッシュ！」

セルゲイは曹操ガンレイにボコボコにされ、気絶した。

曹操ガンレイ

「警察に自首しやがれロリコン野郎」

こうして、セルゲイは警察に自首をした。そしてセルゲイは五年牢屋に入る事になる。

翌日・・・・・

諸葛亮
「皆さん、今日は転校生が来ます！では、入ってきてくださ～い」

そして出てきたのは、レスターとカリーナとミネットとアニエスとチェルシーだった。

レスター
「レスター・メイクラフトです」

ミネット
「ミネットです」

カリーナ
「カリーナ・ベルリッティですの」

アニエス
「アニエス・ブーランシュです」

チェルシー
「チェルシー・アーコットです」

諸葛亮
「みなさ～ん仲良くしてくださいね～」

こうして、2年A組はもっとにぎやかになるだろうと零斗は思っている。

第二十話　パワーアップした零斗の力！（後書き）

零斗
「どうだ！これがパワーアップしたマイティ真拳だ！」

クリス
「どこがだ？」

零斗
「最初は曹操ガンダムと呂布トールギスと孫権ガンダムと融合はできなかったんだよ～、パワーアップしたから曹操ガンダムと出来た！」

クリス
（細いなぁ～）

第二十一話　白のけんぷファー現れる！（前書き）

今回は、ゲストが来ます。

零斗
「ん？来るの？」

フランケン
「どんなキャラか楽しみだよ！」

第二十一話　白のけんぷファー現れる！

幼女誘拐事件が終わって一週間がたった。いつものように平和でいるＢＳＡＡ学園。

零斗はまだ制服の上に黒い革のロングコートを着ている。

そして昼休みの教室にて・・・。

零斗
「そういや、屋上に白い腕輪をした女の子がいるという噂が」

フランケン
「確か、ケンプファーだっけ、そういう気がする」

するとアリスがやってくる。

アリス
「ケンプファーって確か、女の子同士で武器を使って争うらしいよ？」

零斗
「ふ、こっちには強力なケンプファーがいる！」

零斗達は、ナツルと紅音と三琴と雫を見る。なぜならナツルは『けんぷファー』の主人公であり、他の三人は

『けんぷファー』の主要キャラだから。

ナツル
「な、何で俺達を見るんだ?」

零斗
「お前ケンプファーだろ?俺らは関係ないから白のケンプファーの相手になれ」

ナツル
「ちょ、待てよ!何で!?」

フランケン
「お前達の戦いに、俺達が乱入するわけにはいかないからな」

紅音
「だからって・・・・」

零斗
「じゃあ、俺達は屋上に行ってくるぜ~」

フランケン
「頑張れよ」

ナツル
「えぇ!ちょ・・・・」

零斗達は屋上に行った。

雫
「これは私たちでやるしかないわね」

三琴
「そうだよ！零斗なんてアテにならないよ」

ナツルは、今後の事で不安を抱いていた。

一方、屋上では・・・・

洋基
「なんやあんたら！」

光軍
「つーか武器持ってる奴いるし手からなんか出している奴がいるわ！」

『白夜叉と鈴鳴の鬼』から登場、浅倉洋基とその作者の光軍である。

楓
「私たちはナツルさんに用があるの！あなたたちには興味ないわ」

『けんぷファー』から登場、沙倉楓である。

そして楓の側にいる女の子は、水色の火球を操る女の子とサーベルを持っている女の子とサブマシンガンを持っている

女の子と鎌を持っている女の子だった。

洋基
「なんや知らんけどここから先は立ち入り禁止や！」

光軍

「そうや！通りたければ僕たちを倒してからや！」

その時、屋上の扉から零斗達が現れる。

零斗
「その勝負！待った！」

全員
「！」

フランケン
「騒がしいと思ったらこういう事だったのか」

楓
「あなたは、マイティ真拳の零斗！」

零斗
「噂どおり、だったな」

洋基
「ゼットー！来てくれたんか？」

零斗
「どうも騒がしくてな、おいお前等！金山企業だな」

楓
「ええそうよ！そして私は社長の命令でナツルさんを捕まえに来たの」

零斗

「へ、それがどうした？エースケンプファーのナツルがお前等ごときで捕まる奴じゃねぇよ！」

楓
「なんですって！？」

洋基
「ところで、他の四人は誰や？」

？？？
「中尾沙也香よ、あんた達のために名乗ったんだから感謝しなさい」

フランケン
「何でツンデレながら名乗るんだよ！？」

？？？
「地上に舞い降りたボクッ娘、皆川瞳美」

フランケン
「はぁ！？何で『地上に舞い降りた』なんだよ！？」

？？？
「血まみれお医者さんごっこだよ！植田理香！」

洋基
「何か物騒な事を言っとるわ～！」

？？？
「えーっと、血の雨を降らせます、山川涼香」

光軍
「こっちも物騒なこと言っとるやん！」

零斗
「なるほど、ならば、マイティ真拳奥義！青のケンプファーと赤のケンプファー召喚！」

地面から変身後のナツルと紅音と雫と三琴が現れた。

洋基
「地面から！？何でや！？」

ナツル
「どうして俺達にまわすんだよ！？」

零斗
「こいつら相手するのメンドイから」

ナツル
「ふざけんなぁーーーーー！」

零斗
「わかったよ、参加するから、マイティ真拳奥義！ナツルマグナム！」

ナツル
「え、ちょっと・・」

ドカァーーーーーー！

ナツル
「うわぁーーーーーーーーー！」

ドォーーーーーーーン！

楓たち
「キャアーーーーーーーーーーーーーー！」

零斗のナツルマグナムで楓達はダメージを受けた。

零斗
「あぁ～すっきりした」

洋基
「どこがや！！」

光軍
「思いっきりナツルを殴り飛ばしただけやん！」

ナツルは気絶しました。

零斗
「ナツルぅーーーーーーーー！よくも俺のクラスメイトをぉー！
絶対に許さぁーーーーん！」

紅音
「お前が殴り飛ばしたせいだろうが！」

零斗
（ブチ！）

ドゴォーーン！

零斗
「鳩チョーーーーープ！」

紅音
「ぐあぁーーー！」

そして紅音も気絶しました。

フランケン
「何がしたいんだぁーーーーーーーーー！？」

楓
「ぐ、この私に・・・」

洋基
「何だか知らんけど、一気に攻め込みや！」

零斗
「待て、あいつらの様子を見ろ」

洋基
「何か、ヤバいな・・・」

雫
「零斗、あんたナツルと紅音には容赦ないわね」

？？？

「百花繚乱真拳奥義！プラントプリズン！」

するとバラが地面から現れ、瞳美達を檻に閉じ込めるように囲む。

瞳美
「な、何だこれは！？」

理香
「閉じ込められちゃった！？」

沙也香
「何よ！誰が閉じ込めろって言ったの？」

涼香
「ふえぇ！？」

そして物陰から川崎が現れる。

零斗
「川崎！」

川崎
「初めまして、ゲストさん」

洋基
「俺は浅倉洋基や！」

光軍
「僕は光軍です」

楓
「あなた、植物の川崎ね！」

川崎
「あとはあんただけだぜ」

楓
「こんな程度の檻なんて、瞳美たちは簡単に・・・」

川崎
「プラントプリズンに閉じ込められた奴は無理に出ようとすると体力を奪う、そして特殊能力を無効化させる！」

楓
「何ですって!?」

川崎
「これでわかったろ?洋基、楓に思いっきり叩き込め！お前の刀で！」

洋基
「おっしゃ！やったるで！」

楓は刀を出し、洋基は二つの刀を出した。そして洋基は楓に攻撃を仕掛けるが、楓は防ぐ

そして洋基は楓の刀を弾いた。

川崎
「洋基は下がり、光軍は前に出て戦う！」

洋基は楓に背を向けて走る。

光軍
「行くで！」

光軍は走り、楓はベレッダを取り出して撃った。しかし、光軍の流水制空拳でかわす。

楓は光軍のいないところを撃っている。

そして光軍は楓の懐まで来た。更にそこで背負い投げをする。

零斗
「よっしゃーーーーーー！」

楓と瞳美達は気絶した。

その後、瞳美達は警察に捕まるが、楓は逃走した。

警察は楓の行方を捜査する。

そして校門前では・・・・

零斗
「本当にありがとな」

洋基
「ええよ、それにＢＳＡＡ学園って楽しいところやな～」

光軍
「また、会おうな」

そして零斗は洋基達に別れを告げた後、教室へ戻るのだった。
下校の時間になり、零斗とアリスは一緒に歩いている。

アリス
「零斗、あの楓って言う人、逃走しちゃったでしょ」

零斗
「あぁ、気絶して警察が来たときにはいなかったんだ」

アリス
「ふ～ん、不思議だね」

一方、楓は・・・

楓
「ぐ、北郷零斗・・・・絶対に・・・」

???
「何だって?」

楓の前に謎の男が現れた、そして楓は謎の男を見て驚く。

楓
「あんた、零斗にやられたはず・・・」

???

「処刑人は死なない」

楓

「あなた、この私をどうするつもり！？」

？？？

「君はもう用無しだ、面汚しは消えろ！」

そして楓の地面から魔法陣が現れ、楓を沈めようとしている。

楓

「キャアーーーーーーーーーー！」

楓は沈み、そして謎の男は笑う。

？？？

「ふふふふ、ははははははははははは！」

第二十一話　白のけんぷファー現れる！（後書き）

光軍先生、ありがとうございました！

零斗
「また来いよ！」

アリス
「いつでも歓迎だよ～」

第二十二話　嫉妬ウェスカー登場（前書き）

今回はウロボロスを取り込んだウェスカーが登場します。

第二十二話　嫉妬ウェスカー登場

ＢＳＡＡ学園では、黒いオーラを出しながら仕事をする男がいる。
アルバート・ウェスカーである。ウェスカーはアックスと蔡ボウのラブラブぷりに嫉妬している。

何故嫉妬しているかと言うと、それは高校の卒業する頃の事だった。
ウェスカーはエクセラに告白をしたが、

結局ふられてしまった。理由はエクセラに好きな人がいるからだと。
そして卒業をして一ヵ月後、

富士山に登山して頂上で物凄い叫びをし、そしてその叫びによって上半身の服が敗れ、ウロボロスを取り込んだ

ウェスカーとなった。これを『嫉妬ウェスカー』と呼ぶべきだろう。

黒いオーラを出しているという事は、『嫉妬ウェスカー』になりそうな頃である。

そして2年Ａ組の放課後では・・・

ジル
「理事長が黒いオーラを出しまくってるんだって」

春姫
「そうなの？」

ジル
「何でも、アックスと蔡ボウのラブラブが原因なんだって」

春姫
「え？ここでは普通に接しているけど・・・」

ジル
「いや、実は蔡ボウは家ではすっごくラブラブだよ！」

春姫
「そんなに？」

ジル
「アックスが蔡ボウに食べられたり（別の意味で）」
すると春姫は顔を赤くする。

ジル
「蔡ボウがアックスに食べられたり（別の意味で）」

春姫
「ジルちゃん、やめたほうが・・・・」

ジル
「そして・・・」

ジルビジョン開始

アックス
「今日は僕が食べていいんだね？」

蔡ボウ
「はい、私を食べてください、ご主人様」

アックス
「ふふふ、じゃあいただきま～す」

蔡ボウ
「あぁ～ん、ご主人様～」

ジルビジョン終了

ジル
「キャーーーーーー！だいたーーーん！」

春姫
（いや、流石にそれは・・・・）

ドン！

二人
「！！！」

ウェスカー
「その話、本当なのか・・・・」

ジル
「理事長！？」

ウェスカー

「もうアックスはあのメイドと肉体関係になってしまったのか・・・・」

春姫
「り、理事長、落ち着いて・・」

ウェスカー
「うわぁーーーーーーん、お母ちゃあーーーーーーん！」

ウェスカーは叫びながら迅速で走り去った。

完全にキャラ崩壊しています。（特に泣くところと『お母ちゃん』と叫ぶところで）

屋上では・・・・

アックス
「蔡ボウ、君にプレゼントがあるんだ」

蔡ボウ
「はい？」

アックス
「今日誕生日なんでしょ？これ、腕輪なんでけど・・・」

蔡ボウ
「私なんかに・・・」

アックス
「受け取ってよ、僕達もう恋人でしょ？」

蔡ボウ
「ありがとうございます」

アックス
「それと、もうひとつは・・・」

そしてアックスは蔡ボウにキスをした。

蔡ボウは赤くなる。そしてアックスは蔡ボウの胸を触りはじめた。

ドン！！

ウェスカー
「貴様ら！ここで何をしている！」

ウェスカーは屋上のドアを蹴った

アックス
「兄さん！？」

蔡ボウ
「ウェスカー兄様！」

ウェスカー
「私に隠れて恋人関係になるとはな、その上に肉体関係になったらしいな・・・」

アックス
「ど、どうして！」

ウェスカー
「偶然通りかかったらジルたちの声がしたからな、そしたらアックスと蔡ボウは肉体関係になってたと・・・」

アックス
（ジル達め、後で覚えてろよ！）

ウェスカー
「というわけで、貴様を退学に、否、学校に行けなくなるほど傷めつけてやる！」

そしてウェスカーの上半身の服が破れ、ウロボロスを取り込んだウェスカーになった。

アックス
「な、ここでバイオ５のラスボスにならないで下さい！」

ウェスカー
「さぁ、私への嫌がらせを受けてみろ！」

すると零斗が来た。

零斗
「どうしたんだ？『ゾンビゲーム』の第二の主人公」

アックス
「零斗！兄さんを止めてくれ！あのウロボロスはただのウロボロスじゃない！嫉妬がこもっているんだ！」

零斗
「おいおい、お前等のせいでこうなったんだろ?責任くらい取れよ」

アックス
「それが出来ないから君に頼んでいるんだよ!あの状態の兄さんの弱点は確か炎だったっけ」

零斗
「だったら・・・」

そして曹操ガンダムが現れる。

曹操ガンダム
「理事長殿!何をしている!会議の時間なのに来ないから余が理事長を捜して・・・」

ガシ!

零斗
「曹操ガンダム先生・・・力を貸してくださいぃーーーーー!」

曹操ガンダム
「な、何を!」

零斗
「零斗フュージョン!」

白い空間が出てきて、零斗と曹操ガンダムは白い空間に入った。

出てきたのは、曹操ガンレイだった。

曹操ガンレイの特徴は、黒髪のオールバックに、顔立ちは零斗であり、そして赤いTシャツを着ており、

両肩には火炎弾を放つガトリングガンと、両腕には火炎放射器がついている。背中にはガトリングガンと

火炎放射器のタンクを背負っている。ジーパンとランニングシューズを履いている。

パワー重視にしているため、動きが遅いときがある。

零斗と曹操ガンダムが融合した姿。しかしその代償に『星鳳剣』がなくなる。融合を解除したとき、

曹操ガンダムの『星鳳剣』はちゃんとある。

嫉妬ウェスカー
「曹操ガンダムと融合したか・・・・」

嫉妬ウェスカーは曹操ガンレイに走り、攻撃を仕掛ける。

ウィーン、だだだだだだだだだだだだだだだだ！

嫉妬ウェスカー
「アチチチチチチチ！」

曹操ガンレイはガトリングガンで嫉妬ウェスカーに攻撃した。

曹操ガンレイ

「とどめだ！」

ピューーーー！

曹操ガンレイが口笛を吹くと、炎鳳があらわれる。そして炎鳳はキャノン砲に変形した。

曹操ガンレイ
「行くぜ！」

嫉妬ウェスカー
「うおぉーーーーーーーーーー！」

曹操ガンレイ
「食らえ！バーニングブレイカーーーーーー！」

ドォーーーーーーーーーン！ドッカーーーーーーーン！

嫉妬ウェスカー
「ギャアーーーーーーーーー！」

ウェスカーは元に戻り、黒焦げになった。

曹操ガンレイ
「いいか、嫉妬するのはそれはしょうがない、けどな、嫉妬しすぎるのはやめたほうがいいぜ、
女に嫌われるぞ」

ウェスカー
「・・・・・」

その後、ウェスカーは反省し、会議室へ向かった。

アックス
「では、続きを」

零斗
「おっと、やるなら家でしな、後々面倒だから・・・・」

こうして二人は家に帰り、熱い夜を過ごした。

翌日・・・・

諸葛亮
「アックスさん！いい加減にしてください！」

アックス
「なんのことですか？」

諸葛亮
「昨日理事長から聞きましたよ！蔡ボウさんと肉体関係だって！」

アックス
「（兄さんめ、後で覚えてろよ！）でも、ちょっとくらいなら・・・」

諸葛亮
「ダメです！いくら理事長の弟とはいえ、淫乱な行為は許しません！」

諸葛亮の説教が、放課後まで続いたという・・・・

零斗

「ラブラブになるのはいいけどさ、やり過ぎには十分気をつけろ」

第二十二話　嫉妬ウェスカー登場（後書き）

スティーブ
「おいおい、アックスやりすぎだろ」

零斗
「確かにな」

スティーブ
「このままだと蔡ボウが妊娠しちゃうぜ」

零斗
「そうだよな、次回もお楽しみに！」

第二十三話　渋谷の忍者登場（前書き）

零斗
「今回はまたまた祝福のカンパネラのキャラが出るぞ！」

クリス
「忍者が登場するのに？」

零斗
「忍者と祝福のカンパネラをコラボさせたら面白いじゃん」

第二十三話　渋谷の忍者登場

ＢＳＡＡ学園の朝のホームルームでは・・・・

諸葛亮
「最近男女の交際が激しいところがあります、例えば淫乱な行為をしたり、べたべたくっついたりと！」

シェバ
「特にアックス君、君が一番心配よ、蔡ボウさんはアックスさんのメイドだからいいんですけど、時と場所を考えてください」

諸葛亮
「ちょっとシェバ先生！何言ってるんですか！？」

シェバ
「学校ではダメとして家でやりなさいという事」

零斗
「すみませ～んそれだったら女の子は妊娠してしまいま～す」

シェバ
「避妊する程度ならいいという事よ」

零斗
「あの～諸葛亮先生が淫乱な行為と言った時点でシェバ先生の発言でこの小説はやばくなります」

シェバ

「・・・そうね、今度から気をつけるわ」

諸葛亮先生は赤くなる。

諸葛亮
「はわわー！シェバ先生も時と場所を考えてください！」

シェバ
「今更言っても遅いですよ」

生徒達
「ははははははははははは」

そして生徒達の笑い声が響く。

キーン、コーン、カーン、コーン

一時間目のチャイムがなった。一時間目は『国語』である。担当は周喩（真名　冥琳）である。

フランケンが周喩にツッコむ。

フランケン
「ちょっと待て！あんた学生じゃなかったのか！？」

周喩
「ＢＳＡＡ学園が龍の骨じゃなかったら、私は学生だった。そして雪蓮も・・・・・」

ジル

「ニートってことでしょ？」

周喩
「言うな！（怒）」

零斗
「早く始めましょうよ（時間もったいないし）」

周喩
「あぁそうだったな、では！授業を始める！」

零斗
「今日は何の授業ですか？」

周喩
「今日は、雪蓮、げふんげふん、孫策先生のビデオを見て、どう思ったかを作文に書いてもらう！」

全員
「えぇーーーーーーーーーーーー！」

周喩
「えぇーーではない！とにかく！孫策先生のビデオを見て、作文を書け！」

こうして、全員孫策先生のビデオを見て作文に書いた。

二時間目は保健である。担当は孫策（真名　雪蓮）である。

孫策

「はぁ～い皆～私の保健の授業の時間よ～」

祭
「にゃ？」

紫苑
「ほえ～？」

桔梗
「／／／／／／」

フランケン
「なんで一人だけ顔が赤くなるんだよ！」

零斗
「おいおい、フランケン、そこはツッコむな、ＢＳＡＡ学園の作者が龍の骨でよかったな」

孫策
「どういう意味？」

孫策は笑顔で黒いオーラを出している。

零斗
「もし龍の骨じゃなかったらニートになってたな」

孫策
（ブチ！）

フランケン

「おぉい！零斗！」

零斗
「あと、さっきのは一刀にそそのかされました」

カリーナ
「零斗さん、血も涙もありません・・・・」

アニエス
「見損なったよ！零斗君！」

アリス
「零斗君、そこがかっこいい～」

レスター
「何で！？」

孫策
「では一刀君、放課後、体育館の裏側に来なさい」

一刀
「結局こうなるのか・・・・」

ぐだぐだになってしまったが、授業が始まった。

そして孫策先生の授業が終わった。

数時間後、残りの二時間の授業が終わり、昼休みになった。

零斗達は屋上で昼食を食べていた。因みにレスターたちもである。

零斗
「はぁ～ウェスカー理事長もアックスも仲が悪いのかな～」

ミネット
「このままだと激しくなって・・・・」

ミネットビジョン開始

ウェスカー
「うおぉーーーーーーーー！」

アックス
「てやぁーーーーーーーーーー！」

ドン！二人の拳がぶつかり合い、渋谷は滅んだ。

そして、アックスは闇の力を引き出し、闇の魔弾を放った。

ウェスカーはウロボロスで防ぐ。二人の力がぶつかり合い、世界が滅んだ。

ミネットビジョン終了

フランケン
「ってどうしたらこんな激しくなるんだ！ウェスカー理事長はともかく、アックスが闇の力を引き出すってどういう意味だ！」

零斗
「おぉ、フランケンは太陽に向かってミネットの想像にツッコんだ

か」

レスター
「そもそも、アックスが原因じゃないのかな？」

零斗
「あぁ、多分な、兄の前でラブラブッぷりを見せたら当然怒るだろうよ」

アニエス
「でもさぁ、確かにあの二人は恋人同士になってるんだけどさ～なんでウェスカー理事長はアックスと蔡ボウさんの交際を認めないんだろう」

川崎
「その理由を教えましょう！」

カリーナ
「って川崎さん！？いつの間に！？」

川崎
「調べによるとよ～ウェスカー理事長は学生時代にエクセラと言う女性にフラれたんだって」

アニエス
「フラれたって・・・・」

川崎
「そのショックでケーキのヤケ食いしたり、挙句の果てには富士山に登って叫んで自分の中にあるウロボロスを

発動させたんだって」

零斗
「ケーキのヤケ食いかよ、よりによって」

川崎
「でもよこのウロボロスはただのウロボロスじゃねぇぞ？嫉妬がこもっているらしく、それに当たると嫉妬心を吸い尽くすんだって、吸い尽くされた人間は、嫉妬する心を失うんだって」

チェルシー
「それって・・・」

川崎
「弱点は火だ。火でやっつけると、理事長は死ぬ事はないけど、代わりに黒焦げになるという」

零斗
「前回もそうだったぞ」

川崎
「まぁ、エクセラにフラれたことでアックスに嫉妬している。ここで、ある事を言わなきゃならない。
金山企業の刺客がここに来るそうだ」

レスター
「え！？」

川崎

「今日、ここに来るかもしれない」

ミネット
「えぇ！？どうすればいいですか？」

すると黒い物体が、現れた。黒い物体の正体は金山企業の忍者である。

忍者
「零斗！お命頂戴！」

すると忍者は背中から刀を出し、襲い掛かる。

そしてカリーナはモンテッキアを取り出し、魔弾を放った。

魔弾を受けた忍者だが、消えた。そう、これは分身である。

そしてカリーナが見上げると、忍者がカリーナに襲いかかろうとする。

忍者
「姫！お命頂戴！」

カリーナ
「キャアーーーーー！」

その時、青い物体が忍者にぶつかった。青い物体の正体は茶髪のロングヘアに二十代のイケメンの顔立ちに

青い忍者服を着ている男だった。

？？？
「女を殺そうとするなんて感心しないねぇ？」

忍者
「誰でござる！」

？？？
「俺か？俺は渋谷の忍者、サスケだ！」

忍者
「サスケだと！」

アニエス
「渋谷の忍者って・・・」

ミネット
「忍者って何ですか？」

サスケ
「おなごの命を狙うとは卑怯千万！退治してやる！」

忍者
「面白い、ならば見せてもらうぞ！」

サスケ
「行くぜ！忍法！霧隠れの術！」

すると地面から霧が現れた。

忍者
「ど、どこだ！」

そしてサスケは忍者に迅速で攻撃する。

忍者
「グアァーーーーー！」

霧が晴れ、そしてサスケは・・・・

サスケ
「とどめだ！」

そしてサスケは忍者の後ろを取り、両手で掴み、高く跳び、そして逆さまになる。

サスケ
「必殺！木の葉竜巻落としーーーーーーー！」

そしてサスケは逆さ状態から回転しながら落下する。

ドカァーーーーーーン！

忍者
「グハァ！」

ドサ・・・・

そして忍者は倒れ、気絶した。

サスケ
「さーて、そろそろ帰るか・・・」

零斗
「おい、ちょっと待てよ、無断で学校に入るとは・・・いい度胸じゃねーか」

サスケ
「お前誰だ?」

零斗
「俺は北郷零斗、マイティ真拳の継承者だ、そしてＢＳＡＡ学園の生徒だ。お前をただで帰すわけには行かないな～学校のヒーローとして、お前と勝負する！」

カリーナ
「ちょっと！それはダメですの！」

アニエス
「折角助けてもらったんだよ！？」

零斗
「関係ねぇ、たとえあの忍者から助けても、不法侵入は許さねぇ」

サスケ
「お前、恩を仇で返すのか?」

零斗
「折角お前が来たんだからさ、勝負しようや」

こうして、サスケと零斗のバトルが始まる。

第二十三話　渋谷の忍者登場（後書き）

ミネット
「大変ですー！サスケさんと零斗さんのバトルが始まっちゃいますよ～」

レオン
「それは大変だな、だがサスケはスピードを重視している、気をつけろ！」

ミネット
「次回も楽しみにしてください」

第二十四話　永遠の切り札それは・・・・ジャジャジャジャスタウェイ！（前書

今回はジャスタウェイが出ます。

零斗

「あの爆弾が出るのか」

第二十四話　永遠の切り札それは・・・・ジャジャジャジャスタウェイ！

ＢＳＡＡ学園の屋上では、零斗が仁王立ちをし、そして手を頭の後ろに組んだ。

そしてレスターは、何かを感じたのだった。

レスター
（俺達は、零斗の新しいマイティ真拳を・・・・）

零斗
「マイティ真拳奥義！」

サスケ
「何！？マイティ真拳だと！？」

零斗は腰を縦に早く振った。これを見たフランケン達は、アリスとミネット以外はドン引きする。

チェルシーはあわててミネットの目を隠す。しかし、アリスは目を光らせていた。

零斗
「ジャスタウェイダンス！」

サスケはこれを見て驚いた。

レスター
「ジャ、ジャスタウェイダンス！？」

フランケン
「っていうか爆弾だよね、ジャスタウェイって」

一刀
「てか零斗の隣でクリスとレオンが零斗と一緒にやってるぞ？」

零斗の隣には、クリスとレオンが零斗と『ジャスタウェイダンス』をしていた。

フランケン
「えぇーーーーーーーーーーーー！」

一刀
「因みにセルゲイさんは出所後にジャスタウェイを集めているんだって。『ジャスタウェイこそ全てだ！他の物はいらん！』とか言ってましたよ」

フランケン
「嘘だろぉーーーーーーーーーーーーーー！」

そして零斗とクリスとレオンは止まった。周りが沈黙する。

零斗
「よっしゃーーーーー！チャージ完了！」

カリーナ
「何のチャージですの！？」

零斗

「マイティ真拳奥義！ジャスタウェイ拳！」

すると零斗の右腕がジャスタウェイに変わった。

フランケン
「えぇーーーーーーー！ありえねぇだろ！」

そしてクリスとレオンも右腕がジャスタウェイになった。

フランケン
「ギャーーーーーーーー！」

零斗
「行くぞ！」

クリス
「奴に殴るぞーーーーーー！」

レオン
「俺のジャスタウェイを受けてみろ！」

三人
「うおぉーーーーーーーーーー！」

サスケ
「何だ！何をする気だ！」

しかし、クリスとレオンと零斗がレスターのほうへ行ってしまう。

レスター

「えぇーーーーーーー！」

ドゴーーーーーーーン！

三人
「試し殴り！」

レスター
「ぐはぁーーーーーーーーー！」

カリーナ
「レスタァーーーーーーーー！」

レスターは三人のジャスタウェイ拳を食らった。そして気絶した。

しかし、ジャスタウェイは壊れなかった。

フランケン
「はぁ！？何で壊れねぇんだよ！普通は爆発するんじゃねえのかよ！」

ミネット
「ジャスタウェイすごいです～」

フランケン
「何目を光らせてんの！？ジャスタウェイは爆弾だよ！？」

一刀
「ここで一旦ＣＭに入りま～す」

フランケン
「CM!?何で?小説なのに!?」

ジャスタウェイのCM開始

クレア
「キャアーーーーーー!ゾンビーーーーーー!」

レオン
「こんな時にはジャスタウェイの出番だ!」

クレア
「おりゃあーーーーー!」

ドゴーーーーン!

クレア
「やったー!ゾンビを倒したー」

レオン
「ジャスタウェイでゾンビを殺せるね、退治爆弾ジャスタウェイ!好評発売中!」

アニエス
「みんな買ってね~」

CM終了

フランケン
「えぇーーーーーー!ゾンビを全滅させたの!?しかも何でア

ニエスが出てんだよ！」

アニエス
「いや～零斗君みたいにボケたくて～」

フランケン
「ボケなくていいよ！」

レオン
「ジャスタウェイはジャスタウェイ以外の何物でもない。それ以上でもそれ以下でもない」

フランケン
「てかジャスタウェイの正体バレバレだから！」

零斗
「マイティ真拳奥義！ジャスタウェイ投げぇーーーーーー！」

そして零斗とクリスとレオンは大量のジャスタウェイをサスケに投げた。

サスケ
「ぐ、これは厄介物だ！」

サスケは飛んできたジャスタウェイをよける。

フランケン
「お前よけるなよ！屋上が壊れるぞ！」

サスケ

「だけど！よけないと俺が死ぬ！」

フランケン
「はぁ～」

零斗
「オラオラどうしたぁ！反撃して来いよ！」

サスケ
「貴様！ならば、忍法月下手裏剣の術！」

サスケは手裏剣を右に投げた、すると手裏剣がバナナシュートのように曲がり、レオンの頭に刺さった。

レオン
「ギャアーーーーーー！いてぇよぉーーーーーー！」

フランケン
「えぇーーーーーー！」

レオン
「問題ねぇ！」

レオンは手裏剣を抜いた。

カリーナ
「あの～血が出ているんですけど～」

零斗
「レオン！今助けるぞ！マイティ真拳奥義！ヒーリング！」

零斗はヒーリングでレオンの傷を治した。

サスケ
「忍法影分身の術！」

するとサスケが増え始めた。

サスケ
「これで分からないだろう！お前等！やっちまえ！」

サスケの分身達
「うおぉーーーーーーーーー！」

クリス
「ならば、これをくれてやる！」

クリスはサスケの分身達にジャスタウェイを投げた。

サスケの分身たち
「うわぁーーーーー！」

サスケの分身達はジャスタウェイの爆発によって消滅した。

しかし、サスケの姿が無い。

サスケ
「ははははは！忍法大凧の術！」

糸はワイヤーフックで結ばれており、そしてサスケは凧にくっつい

ている。

ミネット
「忍者ってすごいです～」

フランケン
「うーん」

そして零斗はサスケにジャスタウェイを投げた。

ドカーン！

サスケ
「ぐはぁーーーーーーーー！」

フランケン
「おいーーーーーーー！」

サスケは屋上に落ちた。そして零斗はジャスタウェイをサスケに投げる。

ドカーン！

サスケ
「がはぁーーーーーーー！」

フランケン
「もうやめろぉ！」

サスケ

「ぐ、まだだ！まだ終われねぇ！」

サスケは立ち上がった。

零斗
「褒めてやるよ、だけどこれで終わりだ！」

零斗はマイティ真拳の構えをした。

零斗
「マイティ真拳奥義！」

そして零斗は学校くらいの大きさまで跳んだ。

カリーナ
「えぇーーーーー！」

アニエス
「何！？超人！？」

チェルシー
「これは一体・・・」

零斗
「パトリオットキック！」

そして零斗のパトリオットキックがサスケに向かって来る。

サスケ
「うおぉーーーーーーー！」

ドゴォーーーーーーーーン！

パトリオットキックはサスケに直撃した。

零斗
「いいか、ここは屋上だからいいけどさ、学校の中は進入するんじゃねぇ」

サスケ
「す、すまねぇ、だけどあの忍者は金山企業の刺客だったんだ」

零斗
「なるほど、だからお前は俺を・・・・」

サスケ
「分かりやすく言えばな」

零斗
「すまねぇな、分かんなくて・・・」

するとサスケが手を伸ばした瞬間・・・・

バキ！

零斗
「甘えるなぁーーーーーーーーー！」

サスケ
「ごはぁーーーーーーーー！」

フランケン
「えぇーーーーーーー！」

カリーナ
「キャーーーーーー！」

零斗の拳でサスケは気絶した。

ミネット
「いくらなんでも、殴る事は・・・」

零斗
「さて、五時間目の授業だ、遅れないようにしないとな」

零斗達はサスケを後にし、教室へ戻った。

翌日・・・

諸葛亮
「みなさ～んまたまた転校生で～すどうそ～」

入ってきたのは、サスケだった。

サスケ
「サスケです、よろしくお願いします」

こうして、２年Ａ組が更ににぎやかになるのだった。

第二十四話　永遠の切り札それは・・・・ジャジャジャジャスタウェイ！（後書き）

零斗
「どうだった!?ジャスタウェイネタは！」

フランケン
「お前、何だか悪い方向に使っているような気がする」

零斗
「気にすんなって、次回もお楽しみに～」

第二十五話　宇宙から来たパトカーと土から目覚めた青い巨神兵（前書き）

今回はあの巨大パトカーと青い巨神兵が出ます。

因みに巨大パトカーと青い巨神兵の戦闘のイメージ挿入歌は

『白バイ野郎シグナルマン』です。

これをイメージしながら読んでもいいですよ～

第二十五話　宇宙から来たパトカーと土から目覚めた青い巨神兵

遠い宇宙から、パトカーが地球へ落ちていく・・・・・・

地球では、どこかの地面から青い巨神兵が長年の眠りから目覚める・・・・・・

そして二つの力がぶつかり合うとき、激しい戦いになる。

ＢＳＡＡ学園の2年Ａ組では、痔持ち忍者こと、服部全蔵の社会の授業をやっている。

フランケン
（そういや、何か背中がかゆいな）

ドゴォーーーーーーーーーーーーン！

その時、グランドから隕石が落ちてくるような音がした！その音は、ＢＳＡＡ学園の外も中にも響く音だった。

生徒達はざわめき、全蔵は何故か冷静である。

そして生徒達は窓からグランドを見ると・・・巨大なパトカーが刺さっていた。

フランケン
「巨大パトカーがグランドに刺さってるぅーーーーーーーーーーーー！」

零斗
「あのパトカーかっこいい～乗りたいな♪」

フランケン
「おいーーーーーーーーーー！」

ミネット
「パパ、あの乗り物に乗りたいです」

レスター
「そうだね、でもあれが突き刺さってるから乗れないね」

フランケン
「ミネットさん時と場所を考えてぇーーーーーーーあとレスターはミネットが言ったことに乗らないでー！」

アックス
「あれはもしかして～・・・・」

一刀
「サイレンダーじゃないの？」

フランケン
「おい！言うなよハンク！」

アニエス
「サイレンダーって言うんだ～あれもオートマタなのかな？」

チェルシー
「ああいう乗り物に乗りたいですね」

カリーナ
「レスターと一緒なら・・・・」

フランケン
「何でお前等いっせいにボケるんだよ!?おしまいだ、こいつらおしまいだぁー!」

ドカ!

フランケン
「ぐふぅ!」

零斗
「うるせぇ、おしまいって言ったらこの小説終わるだろ?」

零斗はフランケンに膝蹴りで気絶させた。

アリス
「零斗かっこいい~」

ナツル
「あれがかっこいいの!?タダフランケンに膝蹴りで気絶させたのに!?」

零斗
「よし!サイレンダーを動かそう!」

全員
「えぇーーーーーーーーーーーーーーーー!」

一刀
「だけど地面に突き刺さったままだぞ？」

零斗
「マイティ真拳奥義！サイコキネシス！」

するとサイレンダーが上に上がり、その後は地面についた。

零斗
「やったぁーーーーーーーーーーーーー！」

全員
「す、すげぇ・・・・」

零斗
「いや～それほどでも～すごいといったら、青い体をした巨人が暴れ回っているところだよ～」

零斗が指を指している方向をみたら、青い巨神兵がＢＳＡＡ学園から離れた街で暴れ回っている。

アックス
「えぇーーーーーーーーーーーーーー！」

すると零斗がいなくなっており、グランドにあったサイレンダーもなくなっている。

アックス
「零斗君何でサイレンダーをぉーーーーー！？」

青い巨神兵が暴れ回る途中で動きが止まり、何かの音に気がついた。
その音はサイレンダーのサイレンの音である。因みにサイレンダーには零斗ガ操縦をしている。

零斗
「いいねぇ～コックピットは、あいつはオベリスクの巨神兵か、おもしれぇ！」

そう、青い巨神兵はオベリスクの巨神兵である。長年の眠りから目覚めて街で暴れている。

必殺技は『ゴッドハンドクラッシャー』である。
サイレンダーはトンネルに入った。

零斗
「スタンドアップ、サイレンダー！」

零斗はサイレンダーのシフトレバーを上げるとウィリーし、そしてフロントが展開し、
ロボモードの下半身に変形した。

トンネルから出た後に飛び、リアが顔と上半身に変形し、着地した。

零斗
「無駄な抵抗はやめろ！」

因みに零斗が言った台詞は戦闘開始である。

オベリスクは振り向くと目の前にサイレンダーがいる事に気がついた。

オベリスク
「私の眠りを妨げるものには裁きを・・・・」

零斗
「させるか！」

サイレンダーはオベリスクのストレートパンチを受け流し、攻撃した腕を掴み、膝蹴りをし、そして縦の肘打ちをした。

オベリスクは屈せずパンチラッシュをしたが、ガードされる。

零斗
「ワッパガン！」

右腕から巨大手錠のサイレンワッパーが出てきた。それをオベリスクに放った。

サイレンワッパーはオベリスクの胴体にかかった。そしてかかった瞬間に引いた。

零斗
「サイレンダガー！」

左腕からサイレンダガーが出てきて、胴体に切りつけた。

オベリスクは怒り出し、ゴッとハンドクラッシャーの体勢に入る。
すると右腕から物凄いエネルギーが集まり、
ストレートパンチをするように放った。

零斗
「サイレンシールド！」

サイレンシールドで何とかゴッドハンドクラッシャーを防いだ。

零斗
「サイレンダーシグナルフラッシュ！」

サイレンダーの胸の信号からビームが出て、オベリスクに直撃した。

零斗
「とどめだ！サイレンバルカン！」

右腕から機関砲が出てきて、胸の信号が光り出し、機関砲から赤い
弾丸が放ち、オベリスクにダメージを与えた。

そしてオベリスクは苦しみだした。そのまま倒れていき・・・・

ドカーーーーーーーーーーン！

オベリスクは爆発した・・・・

夕方になり、零斗はサイレンダーの肩に座っている。

零斗

「宇宙からの贈り物か・・・よく考えると、いや、落し物かな、もしそうだとしたら持ち主に謝らないとな
見つかるまでしばらくＢＳＡ学園（ここ）に置いとくか」

そう考える零斗であった。

数日後・・・・・・

ＢＳＡＡ学園の校舎の隣にはサイレンダーが立っている。

これを見たフランケンは驚く。

フランケン
「な、何だよこれ！」

零斗
「それ、サイレンダーだから」

フランケン
「ウソォ！？あの巨大パトカーが！？」

零斗
「俺の操縦でこうなった、因みに理事長には許可とってあるから」

フランケン
「理事長！何許可とってんだ！」

零斗
「しばらく置いとくことにした」

フランケン
「何で、何でこうなるんだぁーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

こうしてフランケンの叫びにより、サイレンダーとの学園生活が始まった。

フランケン
「始めるなぁーーーーーーーーーーーーーーーーーー！」

第二十五話　宇宙から来たパトカーと土から目覚めた青い巨神兵（後書き）

サイレンダーが加わった事で学園生活も楽しくなります。

あと、イメージＯＰとＥＤは・・・

ＯＰ『バカサバイバー』

ＥＤ『未来回帰線』です。

この小説を読むときにはさっき紹介した曲をイメージして読んでもいいですよ。

第二十六話　雄真の過去　春姫の序章（前書き）

雄真の過去というのは小さい頃の雄真の出来事で、春姫の序章はとある事のきっかけに魔法の道に入ったという・・・

零斗
「おい、それ言っちゃっていいのか、作者？」

はぴねす編の始まりですから・・・・

零斗
「そうか、だったらここで言うより本編で語ったらどうだ？」

それもそうですね、では始まります。

第二十六話　雄真の過去　春姫の序章

火曜日、天気は晴れ。ＢＳＡＡ学園の２年Ａ組では四時間目の道徳の授業である。

因みに担当は諸葛亮先生である。

何故か不機嫌であり、黒いオーラを放っている。何故そうなったかと言うと原因は零斗とアリスである。

零斗はアリスの膝で寝ている。そしてアリスは零斗の頭を撫でている。

生徒達は零斗とアリスをずっと注目している。（温かい目で）

当然この様子を見ると流石の諸葛亮先生も機嫌が悪くなる。

諸葛亮

「アリスさん、自分の膝で寝ている零斗君を起こしてください」

アリス

「ダメですよせんせぇ～零斗君を起こしてしまったら、かわいい寝顔が見れないじゃないですか～」

諸葛亮

「皆さんも見てないで零斗君を起こしなさい！（怒）」

春姫

「起こせと言われても～」

及川
「この二人には嫉妬を感じないんや～」

関羽
「むしろ和みます～」

張飛
「零斗がアリスの膝で寝ているところを見ると心も体も癒されるのだ～」

フランケン
「ツッコみたいけどツッコめな～い」

諸葛亮
（私は全然癒されませんけど！）

杏璃
「いままでの疲れがあっという間に消えていく～」

キーンコーンカーンコーン

2年A組の生徒が零斗とアリスに和まれて授業は終了し、昼休みになった。

雄真が屋上へ行こうとすると、零斗に声をかけられた。

零斗
「おい雄真」

雄真
「ん？」

零斗
「焼きそばパン買ってこいよ～もちろんお前の金だ～」

ドゴーン！

雄真
「お前いきなりボケるなよ！」

雄真の拳骨で頭にたんこぶが出来て、片手で頭をさする零斗であった。

零斗
「全くジョークだジョーク、分かるか？」

雄真
「お前の場合、７０％ジョークじゃない気がする」

零斗
「まぁいいけどよ、お前神坂春姫のこと、どう思っている？」

雄真
「どうって？」

零斗
「お前授業の時ずっと見てたけど、好きなのか？」

雄真

「なッ!?零斗何言い出すんだよ!?」

零斗
「好きなのか?好きじゃないのか?」

雄真
「その・・・なんていうか・・・・」

零斗
「全く、気持ちを伝えないと、神坂が可哀相だぜぇ?」

雄真
「お前!?」

零斗
「神坂は確か、魔法を使うんだっけ?」

すると雄真はどこかへ移動する。

零斗
「おい、雄真!」

雄真
「・・・・・」

雄真は無言で立ち去った。

零斗
「何だあいつ・・・・・」

そして零斗は屋上へ行った。

零斗
（あいつ、何で・・・そうか、俺が魔法って言ったからか、でもあいつは魔法が嫌いなのか？
とりあえずあの二人に聞くか）

そう思いながらコーヒー牛乳を飲んだ。

零斗は2年A組に戻り、八輔と準の所へ行った。

零斗
「よう、楽しそうじゃないですか？お二人さん」

八輔
「何だ？零斗」

準
「どうしたの？零斗君」

そういいながらも準は零斗にクネクネする。

零斗
「やめろ、これを見た奴に変だと思われるから、どうして雄真は魔法が嫌いなのかな？」

八輔
「いや、知らないけど・・・」

準

「小さい頃の事なんじゃないの？」

零斗
「小さい頃？ありがとな」

そう言って零斗は立ち去った。そして階段に行こうとすると、一人の少女にぶつかった。

零斗
「うわ！大丈夫か！？」

少女
「は、はい大丈夫です」

零斗
「そうか、お前よく見たら・・・小日向すももじゃねーか！」

すもも
「零斗先輩！」

この少女は小日向すももである。一年Ｂ組の生徒である。因みに雄真の義理の妹である。

零斗
「こんな所で雄真の妹さんに会えるとは、ちょうどよかった、お前の兄貴は魔法が嫌いなのか？」

すもも
「どういうことですか？」

零斗
「昼休みに、雄真と話したんだ、そしたらさ、悲しそうな目で立ち去りやがった、多分俺が魔法って言ったからそれに反応して立ち去ったんじゃないかって」

すもも
「兄さん、小さい頃にちょっとした事件が原因で魔法に対して少々否定的になったんだと思います・・・」

零斗
「おっと、すまねぇな、変な事を聞いて」

すもも
「いいえ、先輩が兄さんの事が心配なら・・・」

零斗
「ありがとよ、すもも」

そして零斗は再び屋上に行った。

屋上にて・・・・・

零斗
「ふぅ～雄真の奴、本当に魔法が嫌いなのか?俺にはそう思えない」

すると零斗の後ろに一人の男の声が聞こえた。

???
「零斗、どうしたんだ?」

零斗
「あぁ、サスケか・・・」

サスケ
「何だよぉ～渋谷忍者サスケ様がお前に話さなきゃいけないのにさぁ～」

零斗
「どうせロクなモンでもないだろ?」

サスケ
「小日向雄真の過去と神坂春姫の序章について話してやろうと思ったのにさぁ～」

零斗
「ん?だったら話してみろ」

サスケ
「雄真はな、小さい頃魔法が使ってたんだよ」

零斗
「小さい頃って・・・」

サスケ
「使えるようになったものの、魔法でいじめっ子達をとっちめたのが原因で魔法とは縁を切ったんだ」

零斗
「だけど、どうしてそんなことをしたんだ?」

サスケ
「あいつは、いじめっ子から神坂を魔法で助けたんだ、でもな、魔法の使い方によって人を傷つけるときだってある、可哀相だな、魔法って。忍者の俺には理解できないよ」

零斗
「いや、雄真は悪くないぜ」

サスケ
「どうしてそんな事が言えるんだ？」

零斗
「確かに魔法でとっちめるのは悪い、でも人間としては良い事をしていた。あいつは正義だ、正義の味方と言えるぜ」

サスケ
「まぁそうだろうね、神坂が魔法に憧れて始めたきっかけだもんな。まさに春姫の序章だな」

零斗
「そうなのか？」

サスケ
「そうだよ、お陰で神坂は魔法を長けている」

零斗
「あいつは魔法から逃げている。俺は嫌いだ、いつまでも逃げ続けたら進化はしないんだよ」

サスケ
「お前らしいよ、どうすんだ?」

零斗
「決まっている、あいつの魔法を目覚めさせる」

サスケ
「面白そうだな協力するぜ」

???
「拙者もだ!」

零斗
「信哉・・・」

そこに現れたのは、同じクラスの上条信哉だった。

信哉
「拙者はあいつが魔法から逃げていることが気に食わんでござる!」

零斗
「ふ、じゃあ決まりだな」

こうして三人は、雄真を過去から引きずり下ろす事を誓った。

第二十六話　雄真の過去　春姫の序章（後書き）

次回は信哉の妹と式守家の後継者と、あの処刑人が登場します。

零斗

「処刑人？あいつやられたんじゃないの？」

その真相は、次回へ！

第二十七話　逃げるな！戦え！（前書き）

零斗
「今回は下ネタあるかもしんない」

え？どういうことですか？

零斗
「下ネタ使ってないからたまには・・・」

おい、やめろ！

第二十七話　逃げるな！戦え！

小日向雄真、小さい頃に魔法を使っていたが、いじめっ子から一人の少女を魔法で助けた原因で魔法から縁を切ってしまう。

助けられた少女の名は神坂春姫であり、雄真に助けられたきっかけで魔法に対して強く憧れ、その道に歩む。

零斗曰く魔法でとっちめるのは良くないが、人間としては良い事をしたとの事である。

確かに魔法でとっちめるのは良くないが、彼のやっていた事は人間としては正しい事をした。

零斗は雄真は正しい事をしたのに魔法から逃げている。いつまでも逃げてたら進化はしないと

雄真の魔法を覚醒しようと決意する。これを聞いたサスケと信哉は、零斗に協力すると決意する。

零斗、サスケ、信哉の三人で雄真の魔法を覚醒させると誓った。

ＢＳＡＡ学園の２年Ａ組では・・・・・

諸葛亮

「最近、体育館の倉庫で怪しげな声が聞こえますが・・・」

諸葛亮とシェバが体育館の倉庫に入らないように注意を呼びかけている。

シェバ
「警察の調べによると、誰か入っているんじゃないかとの事よ」

零斗
「せんせ～い、何で体育館の倉庫ですか～？」

諸葛亮
「何でって・・・それは分かりません」

零斗
「当然ですね、でも聞こえたんでしょ？どんな声ですか？」

シェバ
「何でも、森ネズミ森ネズミ森ネズミと聞こえるのよ」

零斗
「それってどっかの教団共が入っているんじゃないかと思われますが・・・」

諸葛亮
「とにかくあなたは黙ってなさい・・・・（怒）」

シェバ
「というわけで、解決するまで体育館の倉庫は使っちゃだめよ」

アックス
「でも、体育の時間の時に必要なんじゃないかと思います」

シェバ

「確かにそうね、その件に関しては今検討中なの」

諸葛亮
「なので解決するまで使わないで下さい」

生徒達
「はーい」

キーンコーンカーンコーン

一時間目のチャイムが鳴り、シェバと諸葛亮は別の教室へ行った。

水曜日なので一時間目は数学である。誰が担当かというと、カルロス・オリヴェイラである。

フランケン
「ちょっと待て！何でカルロスなんだ！？」

元々は黄忠が数学担当でしたが、十話で厳顔と黄蓋と共に零斗に張飛（真名　鈴々）の歳に変えられ、鳳統先生に

魔法少女にさせられたという、十一話では川崎との戦いが終わった後、元には戻ったものの、数日後に三人共幼女になってしまったという。

その事情を知ったウェスカー理事長は三人をＢＳＡＡ学園に転校してきたという形で生徒になった。

因みに一刀に別の名前をもらったという。

カルロス
「というわけで分かったか?授業始めっか」

フランケン
(不安になってきた・・・・)

そして一時間後、カルロス先生の授業が終わる。

その頃、諸葛亮先生は・・・・・

諸葛亮
「全く、零斗君はボケが多すぎです!その上に昨日は授業中にアリスさんとラブラブになって・・・・」

陳宮
「あのチ○コの従兄弟だからいけないのです!」

こちらは陳宮(真名　音々音)である。こちらも教師であり、2年C組の担当である。

諸葛亮
「陳宮先生、零斗君に何をされたんですか?」

陳宮
「四連装ロケランで吹っ飛ばされたのです!」

諸葛亮
「私は昨日、授業中にアリスさんの膝で寝てたんですよ!零斗君が!」

陳宮
「全くあいつはバカなのです」

鳳統
「零斗と一刀に悪口言ってんのか?あぁ?」

陳宮の後ろには、ボンテージ姿と鞭を持っている鳳統先生だった。

しかも口調が、恋姫の鳳統からズレている・・・・

諸葛亮
「はわわー!雛里ちゃん!?その格好はやめて!雛里ちゃんのファンの皆が見たらショックを受けるよ!?」

鳳統
「テメーらが零斗と一刀の悪口言ったのが悪いんじゃねーかよ!あたしだってね!本当は『あわわ~』と言うはずなのよ!?お前等、よくも私のキャラを壊したな?」

諸葛亮
「それは雛里ちゃんが・・・・」

バキ!

鳳統
「このお○ん○んきゅうがぁーーーーーーーーー!」

陳宮
「がはぁーーーーーー!」

諸葛亮
「はわわー！雛里ちゃんもうやめてぇーーーーーーーー！」

そして鳳統は下ネタを言いながら陳宮を殴った、そして陳宮は気絶した。

諸葛亮
「雛里ちゃん！これ以上酷くしないでぇーーーー！」

鳳統（真名　雛里）のファンの皆様、キャラ崩壊させてごめんなさい！↑土下座

その頃、零斗達は屋上にいた。

零斗
「雄真、お前小さい頃のトラウマ抱えているんだよな、すまねぇ」

雄真
「それ、どっから聞いた？」

零斗
「サスケから・・・・」

雄真
「サスケが？」

零斗
「お前さ、逃げてばっかだと前に進めないぞ」

雄真

「俺は魔法で傷つけたくない！」

零斗
「甘ったれんな！確かにお前は魔法でいじめっ子達をとっちめた！でも人間としては正しい事をした！」

信哉
「雄真！お主は魔法は幸せにする魔法だ！それを何で隠す！」

雄真
「俺の魔法は不幸にしてしまうんだ！」

零斗
「お前、何でそうやって逃げる！どうして人を助けた事が不幸と言うんだ！？」

雄真
「俺が魔法を使えば皆不幸になる！」

バキ！

雄真は零斗に殴られた。

零斗
「さっきから何なんだ！不幸がなんだの、いい加減にしろ！逃げてばかりで、そうやって殻に閉じこもるのか！？」

雄真
「どういう事だ？」

零斗
「そこにいるんだろ!?出てこいよ!」

すると陰から春姫が出てくる。

零斗
「雄真、神坂を見ろ!」

雄真
「え?」

すると雄真は春姫のほうへ向く。

零斗
「神坂を見て、これが不幸にしたというのか!?」

雄真
「・・・・」

零斗
「お前に助けられた神坂はお前から逃げたのか!?誰のお陰で神坂は魔法に憧れたんだ!?これがお前の不幸だというのか?」

雄真
「!」

零斗
「自分の言ったことをよく考えろ!それともう一つ言っておく、逃げるな!そして戦え!」

雄真
「戦う・・・・・」

零斗
「そうだ！逃げてばかりだと前へ進めないぞ！前に進みたいなら、魔法を使うか、魔法から逃げるかのどちらかを選べ！」

そして零斗達は春姫と雄真を後にした。

体育館の倉庫では・・・・・

？？？
「なるほど、ここに宝石が」

この人は式守伊吹である。２年Ｂ組の生徒だったが、金山企業のスパイであり、金山四天王の一人である。

金山四天王とは、金山企業の最高幹部であり、守り神の存在である。

一人目が処刑人コスモス、二人目が式守伊吹、三人目がジェイル・スカリエイティ、四人目が死神スカルである。

処刑人は零斗が倒したはずですが、実は零斗が倒したのは分身だった。

？？？
「まずは兄様を引き戻し、零斗を倒さねば・・・」

この人は上条沙耶、信哉の双子の妹であり伊吹の部下である。

伊吹
「そうだな、あの零斗を倒すか・・・・」

屋上で双眼鏡で伊吹たちの様子を見るフード付のパーカーを着ている男がいた。その男は処刑人コスモスである。

コスモス
「ふふふふ、あいつらは気付いていないな、俺が生きているという事を・・・死んだと思っているな」

そして校門前に立ち止まる少年と肩に乗っている青い蝙蝠がいた。

???
「ん・・ここが・・・・大変な事が起きている場所・・・・・」

果たして一体誰なのか!?

第二十七話　逃げるな！戦え！（後書き）

次回はサドラー（ついでにロス・イルミナドス教団）とサクヤ・テスタロッサが出ます。

零斗

「サドラー!?そしてサクヤも出るのか?サドラーはともかく、サクヤ
は敵か?味方か?次回が気になるぜぇーーーー！」

第二十八話　覚醒する魔法（前書き）

零斗
「今回はサドラーとサクヤが出るぞ！それと雄真の魔法が覚醒するぞ！」

第二十八話　覚醒する魔法

雄真に説教した後、零斗達は体育館の倉庫へ向かった。

体育館に入り、目の前には式守伊吹と上条沙耶がいた。

三人は驚き、信哉は伊吹達に問い始める。

信哉
「伊吹様、それに沙耶！何で・・・・」

伊吹
「どういう事か？私達は金山企業に属しているからな」

沙耶
「兄さま、私達の元へ来てください！」

零斗
「信哉、行っちゃダメだ！」

サスケ
「これは罠かも知れないんだぞ！」

信哉
「・・・・・・・」

零斗
「貴様ら、スパイだったな・・・・」

サスケ
「お前等の動きがあやしいと思ったよ」

零斗
「もうスパイだって事を知った以上、ここから逃がさないぞ！」

サスケ
「この裏切り者が！覚悟しろ！」

伊吹
「ふ、それはどうかな？」

すると伊吹たちの後ろから黒いローブの集団が現れる。

零斗
「何！？黒いローブ！？・・・ロス・イルミナドス教団か！」

沙耶
「その通りです、ではサドラーさん」

？？？
「ふふふ、お前が北郷零斗か、学生にしてはマイティ真拳の継承者とは・・・」

サスケ
「誰だコイツ？」

零斗
「オズムンド・サドラー、闇魔術真拳の前継承者だ！」

サドラー
「ほほう、私の事を知っているとは流石マイティ真拳の継承者」

サスケ
「じゃあ、あれか!?処刑人の師匠ってヤツか!?」

零斗
「何!?そういやあいつ闇魔術真拳を使っていたな」

サドラー
「その通り、コスモスは私に勝って継承者となったのだ」

零斗
「そうか、マイティ真拳・・・・」

すると信哉が止める。

信哉
「伊吹様、沙耶。悪いが零斗達に加担する」

沙耶
「兄様!」

信哉
「拙者は伊吹様を止める!」

零斗
「信哉・・・・よし!じゃあ行くぞ!」

零斗

「マイティ真拳合体奥義！」

サドラー
「？」

すると信哉とサスケのオーラが放ち、零斗も白いオーラを放つ。

三人
「アルティメットバスタァーーーーーーーーー！」

三人はアルティメットバスターを放ち、サドラーに直撃した。

しかし・・・・・

サドラー
「ははははははは、闇魔術真拳奥義、ブラックシールド！」

ブラックシールドで防いでいたため、直撃はしていなかった。

零斗達は驚く。

零斗
「な、なんだと・・・・・」

サスケ
「俺たちの力が・・・・・」

信哉
「効かないだと！？」

伊吹
「信哉、貴様は未熟だな・・・」

沙耶
「兄様の力ではサドラーさんに勝てません」

サドラー
「さて、君たちは用済みだ、消えろ！」

その時、光弾がサドラーに向かって来るが、サドラーは光弾を打ち消した。

そして雄真と春姫と杏璃が体育館に入ってくる。

杏璃
「体育館の倉庫が使えなかったのはあなた達のせいだったのね」

零斗
「杏璃！それに神坂と雄真！」

雄真
「俺、戦うよ！魔法で守りたい！」

零斗
「雄真・・・分かってくれたんだな！」

雄真
「あぁ！」

サドラー

「ははははは、それなら見せてもらう！」

雄真
「エル・アムダルト・リ・エルス・ディ・ルテ・エル・アダファルス！」

すると五つの魔弾がサドラーに向かって行く。

サドラー
「ふふふ、無駄無駄！」

ブラックシールドで防ぐが、破られる。

サドラー
「な、何ぃ！」

ドゴーン！

サドラー
「グハァ！」

五つの魔弾を食らい、吹き飛ばされる。

サドラー
「流石は小日向雄真！だがこの程度で勝てると思ったか！」

雄真
「俺はずっと、逃げていた、だけど俺は魔法で守りたい物があるから負けないんだ！」

サドラー
「ふ、下らん事を・・・」

沙耶
「では私が、幻想詩・第三楽章・天命の矢！」
すると上から光の矢が零斗に降ってくる。

零斗
「マイティ真拳奥義！メタルウォール！」
地面から鉄の壁が出てきて、光の矢から防ぐ。
そして杏璃は魔法詠唱をする。

杏璃
「オン・エルメサス・ルク・アルサス・エスタリアス・アウク・エルートラス・レオラ！」
数発の光弾が沙耶に向かっていき、直撃した。

沙耶
「キャアーーーーーー！」

伊吹
「沙耶！貴様！よくも！」
沙耶は気絶し、伊吹の地面から魔法陣が浮かび上がる。

伊吹

「ア・ディバ・ダ・ギム・バイド・ル・サージュ！」

高威力の魔法の矢を放ち、雄真に向かっていく。

春姫
「エム・アムスティア・ラル・セイレス・ディ・ラティル・アムレスト」

春姫の防御魔法で魔法の矢から防ぐ。

伊吹
「な、何!?」

サスケ
「今度は俺の番だ！忍法十字手裏剣三日月投げ！！」

十字手裏剣はバナナシュートのように曲がり、伊吹に向かって行く。

そして信哉はマジックワンドの『風神雷神』を構える。

信哉
「行くぞ！雷神の太刀！」

雷神の太刀を十字手裏剣に向けて放つ、すると十字手裏剣に直撃し、電気を纏い、回転が速くなり、

伊吹に向かって行く。

ビリビリビリ！

伊吹
「あぁーーーーーーーーーー！」

十字手裏剣は伊吹に直撃した。それと同時に伊吹はしびれてしまい、倒れた。

零斗
「後はロス・イルミナドス教団、お前等だけだ」

サドラー
「ふ、そうか・・・」

???
「待って・・・・」

体育館の入り口から一人の少年が入ってくる。

零斗
「お前は・・・・・」

サドラー
「何だ、子供か、危ないからあっち行ってなさい、おじさん優しいからここから離れれば何もしないよ」

???
「でも・・・依頼主に頼まれたからお前倒す・・・・・・」

少年は、ポケットからガイアメモリを取り出し、ボタンを押した。

『クルセイド』

？？？
「クル」

すると上からクルという青い蝙蝠が現れる。

少年はクルを掴み、クルセイドのメモリをクルの口にセットした。

そして少年の体を光が包み、光が消えると少年の身長は伸び、胸に赤いＹ字状のエナジーコアを持ち、黒と赤の

部分は筋肉繊維を髣髴とさせ、装甲を被せた様な銀色のボディと赤い瞳の仮面ライダーになった。

その名も仮面ライダークルセイドである。

サドラー
「貴様、何者だ！」

クルセイド
「サクヤ・テスタロッサ・・・・・またの名は仮面ライダークルセイド・・・・・」

サドラー
「クルセイドだが何だか知らないが、私には勝てんよ、皆、やってしまいなさい」

黒いローブの集団
「うわぁーーーーーーーーーーーー！」

黒いローブの集団はクルセイドを襲うが、クルセイドに抜かれる。
すると黒いローブの集団は倒れた。
そう、目には見えないほどの速さで攻撃で抜いた。
サドラー
「な、なんだと?だが私の奥義には勝てるはずが・・・・」
そしてサドラーは二体の仮面ライダーに捉われる。
二体の仮面ライダーはゾルダとシサーズである。
クル
『ウェイクアップ!』
クルセイドがクルに一つのメモリを押すとクルは声を出した。
周りが夜になり、クルセイドは上空にジャンプした。
サドラー
「やめろ、やめろぉーーーーーーーーーーーー!」
クルセイドは満月のように一回転し、サドラーに踵落としを喰らわした。
そしてサドラーは泡を吹きながら気絶する。
サクヤは変身を解いた。

サクヤ
「これで・・・・依頼主・・・・・喜ぶ」

サクヤはクルとともに去っていった。

零斗
（あの子、変身したよな・・・・・）

サスケ
（興味あるな）

その後、サドラーは逮捕され、伊吹と沙耶は一年の執行猶予を与えられる。

理科室では、高峰小雪とサスケが話していた。

高峰
「あら～そうだったんですか～あのサドラーと言う・・・・」

サスケ
「何でも邪教団のリーダーであり、処刑人の師匠だったんだ」

高峰
「それは驚きですね～処刑人コスモスの師匠だなんて」

タマちゃん
「本当や」

こちらは小雪のマジックワンドのタマちゃんである。

関西弁をしゃべる。

サスケ
「まぁ、金山企業のところは何とか調べてくる」

高峰
「いってらっしゃ～い」

翌日

諸葛亮
「皆さ～ん、今日はいいお知らせがあります！」

零斗
「どんなのですか～」

諸葛亮
「それはですね～昨日の体育館の倉庫の事件が解決されました！もう一つは転校生ガ来ます！」

生徒達
「イエーーーーーーーー！」

諸葛亮
「では、入ってきてくださ～い」

そして入ってきたのはサクヤだった。

サクヤ
「サクヤ・テスタロッサです・・・・・・」

零斗
「！」
零斗はサクヤに驚いた。
しかし零斗の内心ではわくわくしていると言う・・・・・

第二十八話　覚醒する魔法（後書き）

零斗
「次回は2年A組のクラスメイト達の体の一部がドライバーに!?
そして全員ネットゲーム!?」

フランケン
「おい、もしかしてそいつらって・・・・・・・」

次回をお楽しみに～

第二十九話　ドライバーで修理ができるＹＯ！（前書き）

零斗
「あのさ～何でサブタイトルの最後に『ＹＯ！』なんだ？」

何となくふざけてみました。

零斗
「ははははは作者は相変わらずおふざけが好きだねぇ」

第二十九話　ドライバーで修理ができるＹＯ！

一刀の家では、リビングで一刀と関羽（真名　愛紗）がソファーにくつろいでニュースを見ている。

そのニュースとは・・・・・

一刀
「おいおい、またＵＦＯかよつまんね～な」

関羽
「ご主人様、またそれですか」

一刀
「俺さ、ＵＦＯなんて全然信じないしな、たとえＵＦＯがいたとしてもロケランで破壊すればいいしさ」

関羽
「それをしてしまったら、私たちの命が危ないですよ」

一刀
「なんだと～そんな風に言う娘はこうだ～！」

ぽよん

関羽
「あぁん」

もみもみもみもみ・・・・

関羽
「ご、ご主人様ぁ～だめです～」
関羽は一刀に胸を揉まれる。
一刀
「ほれほれ～俺のお仕置きはどうだ～」
関羽
「もうやめてください、体が熱くなってしまいます～」
そして一刀は関羽の胸から手を離した。
関羽は不機嫌な顔になる。
一刀
「何だよ～やめたくらいでそんな顔すんなよ～それよりさ宇宙人にさらわれた話知ってるか？」
すると関羽は表情を変える。
一刀
「さらわれた人は改造されたり、何か埋め込まれたり、宇宙人の存在の記憶を消したりとか、まれに覚えているやつもいてな、もし愛紗がさらわれたら、何か埋め込まれているかも知れねーな」
関羽
「もう、ご主人様ったら」

するとテレビの調子が悪くなる。

一刀
「ん?何だ~またかよ~これ改造して良くしたいんだけどな~」

関羽
「ご主人様、こういうときはドライバーですよ、使いますか?」

すると一刀は関羽の人差し指を見る。関羽も見るが・・・・

関羽
「え?な、なんじゃこりゃーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー!」

関羽の人差し指がドライバーになっていた・・・・

一刀
「ははは、いくら出番が少ないからってそれはないよ、腕をサイコガンにしないと~」

関羽
「違います!好きでこんな事を・・・」

一刀
「じゃあ何だ?知らない内にされたのか?」

関羽
「ハッ!」

関羽は昨日の夜を思い出す。それは買い物帰りの事だった・・・

関羽
「今日はご主人様が好きなハンバーグを・・・な、なんだこの光はまぶしい！」

関羽は光に包み込まれたと思ったが・・・見知れぬところで眠っていた。

？？？
「ダメだこれ、サイズがあわねぇ」

？？？
「やっぱ修理に出さないと」

すると関羽は目を開けるが、そこには全身タイツの二人組みの男がいた事に気付く。

関羽
「貴様ら！何者だ！」

？？？
「あ、起きた・・・・」

？？？
「先輩が大きな声を出すから」

先輩
「お前もそうじゃねーか」

後輩
「そうでしたっけ?」

この二人はゲーマー星人であり、一人は先輩でもう一人は後輩である。

すると関羽は自分の人差し指を見るとプラスドライバーになっていた。

関羽
「貴様ら!どうしてくれる!元に戻せ!」

先輩
「いや~PSPを修理のために改造しちゃってごめんね、お前の指元に戻らないから」

関羽
「この関雲長にこんな事をするとはいい度胸だ!ならば覚悟を・・・・」

すると関羽は倒れる。

一刀
「PSPのために改造されたんだ~」

関羽
「そうなんです・・・・」

一刀
「でもさ、修理に使えるぜ」

関羽
「こんな指では生活に支障がありますから！」

一刀
「ちょっとトイレに行って来る」

関羽
「もう、ご主人様ったら・・・」

すると泣いている張飛ガ現れる。

張飛
「うえぇ～ん愛紗ぁ～」

関羽
「おい鈴々どうしたんだ・・・・！？」

関羽は張飛を見て言葉を失う。

張飛
「目が覚めたら鈴々の体がマイナスドライバーになっちゃったのだ～」

関羽
「・・・・ご主人様！鈴々が、鈴々がぁーーーーー！ご主人様？」

トイレから一刀が出てくる。

一刀

「なぁ愛紗・・・・・宇宙人殺しても罪にはならないよね？」

関羽
「まさか・・・・・・」

一刀
「うん！俺のアナログスティックがやられた」

関羽
「ご、ご主人様のチ○コがぁーーーーーーーーーーーーーー！」

一刀は携帯電話を取り出した。

一刀
「・・・・・零斗！今からネット喫茶に集合だ！大至急だ！今すぐだ！」

関羽
「う～ん・・・・・」

そんなところでネット喫茶。

零斗
「そうか、お前もやられたのか」

一刀
「あぁ、俺のアナログスティックをな」

零斗
「俺はこれだぜ？」

零斗は腕を一刀達に見せた。零斗の腕はメカの腕になっていた。

一刀
「おいおい、お前メカの腕って・・・・・」

零斗
「ただのメカの腕じゃないぞトランスフォーム！」
すると零斗の腕がプラスドライバーに変形（トランスフォーム）する。

一刀
「と、トランスフォームって・・・・・」

零斗
「とりあえず、あいつ等が言ってた人気のネットゲーム『モンキーハンター』をやるらしい」

一刀
「モンキーハンター？」

零斗
「モンキーハンターはプレイヤーがハンターとなり、様々な怪物猿を狩るというらしい」

一刀
「なるほど、それで奴等の尻尾を掴むことが出来るってわけか！」

零斗
「その通り、しかもＰＳＰ版のデータを引き継げる事だってできる

ぜモンハンは・・・」

一刀
「そうか、見つけたときには奴等のチ○コを八つ裂きにしてやるぜ！」

関羽
「ご主人様、声が大きいです！／／／／／」

一刀
「俺は奴等にアナログスティックを奪われて憎い気持ちなんだよ、俺のアナログスティックを絶対に取り戻してやる！」

零斗
「そうか、だったらここでやろうぜモンハンを」

一刀
「おうよ！」

そんなわけで零斗達はそれぞれのパソコンへ向かった。

零斗
（一刀のチ○コはボックスドライバーに改造されたか・・・・）

すると零斗はモンキーハンターの自分の分身を作り始める。

零斗
「えっと、名前はアイスレイジと、髪型は・・・・・これにしよう、武器はボウガンだ！」

そして設定は終わり、始めた。

ゲームの世界

ここはハンターも来る村、一人のボウガン使いの男が歩いている。

零斗
「ほほ～ういいところじゃないか～確か集会場前で集合だったよな」

すると黒髪のロングヘアの少女が現れた。

少女
「こんにちは」

零斗
「挨拶か、こんにちわ～」

少女
「よかったら一緒に狩りに行きませんか？」

零斗
「悪いが間に合っている」

少女
「そうですか～でもアイテムを恵んで欲しいんですが・・・」

アイスレイジ
「アイテムか～俺ボウガンの弾しかないからな～」

少女

「大丈夫です最初からみんな持っているものなんで・・・（一刀の声で）き○たまくれ！」

零斗
「やっぱりな、一刀か・・・」

一刀は零斗の股間に攻撃する。

零斗
「やめろ、俺のき○たまはアリスと夕化専用だからあげられねーんだよ」

一刀
「このやろーき○たまよこせ～」

零斗
「おいおい、まだ引きずってんのか？というよりなんで女なんだ？」

一刀
「奴等をおびき寄せるためにはこうでなくちゃいけねーんだよ」

零斗
「そうかそうか～流石俺の従兄弟！」

一刀
「因みに俺はハンクだ」

零斗
「だったら俺はアイスレイジだ」

？？？
「ご主人様に零斗！何をやっているんですか？」
そこに現れたのは黒髪のサイドポニーの少女だった。
一刀
「愛紗だけ変わってないね」
関羽
「ちなみに私は太刀使いなので」
零斗
「ははははは、俺はボウガン使いだぜ」
一刀
「おれは片手剣使いだぜ」
すると零斗は何かに気付く。
零斗
「あのおっさん、ベテランじゃね？」
一刀
「確かに・・・」
関羽
「ならば私が、お尋ねしたいところだが・・・」
？？？
「何なのだ？」

関羽
「お前か！鈴々！」

張飛
「鈴々は強いおっさんになっちゃんたのだ～」

一刀
「何でゲーム始めたばっかなヤツが歴戦の勇者様になってんだよ！」

張飛
「そんなの決まってるのだ！テキトーにやったからなのだ！」

関羽
「適当にやってそうなるってある意味すごいぞ！」

張飛
「因みに鈴々は張飛・タイガーショットなのだ」

一刀
「タイガーショット！？何で！？」

張飛
「かっこよさそうだから付け足したのだ」

？？？
「あの～すみません」

零斗
「パーティは間に合っている」

？？？

「いえ、このゲームの管理をしている者なんですが、そこの路地裏でハンターが襲撃されて身ぐるみはがされたと報告が入っているのですが・・・・」

すると零斗と一刀は二人の警備員にストレートパンチをした。

関羽
「え！？」

そして警備員の装備をはぎとった。

関羽
「はぎとんなぁーーーーーー！」

警備員
「上手に焼けましたぁ～」

零斗と一刀は警備員をこんがり焼いた。

関羽
「焼くなぁーーーーーーーー！お前等このゲームはモンキーをハントするゲームだぞ！ハンターからハントするな！」

零斗
「そうなの？」

関羽
「そうだよ！お前等のやっているのは追い剥ぎだ！」

すると入り口から警備員の大群があらわれる。

関羽

「まずい、奴等に捕まったらゲームオーバーになる！逃げるぞ！」

そして零斗達は警備員から逃げていった。

第二十九話　ドライバーで修理ができるＹＯ！（後書き）

零斗

「次回は祝福のカンパネラのキャラが参戦！？マジで気になるぜ！」

第三十話　仲間が増えるほど強くなる（前書き）

今回はゲーマー星人編の終わりまでのゲストが登場します。

第三十話　仲間が増えるほど強くなる

ゲーム管理者をストレートパンチで倒し、装備品を剥ぎ取り、こんがり肉に料理した零斗と一刀のせいで

ゲーム管理者に追われる羽目になった関羽達、現在は森の中を歩いているのであった。

関羽
「全く、零斗とご主人様のせいで、ゲーム管理者に追われる事になったんですよ！ゲーム管理者に追われるっていう事はいっぺんでもゲームオーバーになったらもうアクセスできないんですよ！？」

零斗
「こんぐらいしなきゃスリルを楽しめないじゃないか」

一刀
「そうでしたね、スリル狂が」

零斗
「あぁん？スリル狂はないだろう」

一刀
「お前がスリルを求めているからスリル狂なんだよ」

零斗
「うるせぇタマなし一刀」

一刀
「（ブチ！）タマなしってどういう意味だコルァァァァァ！（怒）」

そして一刀は零斗の股間に攻撃するが零斗は股間を防ぐ

一刀
「俺は必ず元の体に取り戻してみせるぅぅぅぅ！」

零斗
「やめろ、俺の股間はアリスと夕化が可愛く舐めるところだっつーの」

関羽
「二人ともやめろ！それから零斗、今のは問題発言だぞ！この小説が潰れるぞ！」

零斗
「街に帰れないんだったら前へ進むしかないじゃん、それにこのゲームはモンキーを狩ってスリルを楽しむゲームだぜ？
強い所へ行けば強いハンターに会えるし仲間にも出来る、長時間このゲームを遊んだハンターにも出会えるぜ！」

関羽
「なるほど、零斗にしては良い事を言うな、ならばこれで行こう！」

一刀
「愛紗、後ろ後ろ」

関羽

「へ？」

関羽が後ろを振り向くと、強大なモンキーが立っていた。

関羽
「ギャアーーーーーーーー！」

零斗
「おもしれぇ！あのモンキーと戦いたくなるぜぇ！」

張飛
「そうなのだ！」

零斗はボウガンを持って構えて、張飛はハンマーを持って構えた。

零斗は火炎弾でモンキーの顔面に狙い打つ、そして張飛はモンキーの足をハンマーで叩く。

モンキー
「グオォーーーーー！」

零斗
「畜生！効かねぇのか！？」

張飛
「あいつ全然痛くなさそうなのだ～」

関羽
「とりあえず逃げるぞぉーーーーーーーーーーーーー！」

関羽達はモンキーから逃げ出すが、モンキーが追っかけてくる。

一刀
「そういや、警備員から剥ぎ取ったものの中にこれが・・・」

一刀は紫の水玉模様のバナナを取り出す。

零斗
「それはしびれバナナか！こいつをモンキーに使えば、何とか距離を広げる事が出来るぞ！」

一刀
「よっしゃーーーー！これでもくらえぇーーーーー！」

一刀はしびれバナナをモンキーに投げるが・・・・・

張飛
「うぅ～しびれるのだぁ～」

関羽
「何でお前が食べてんだぁーーーーーーー！」

一刀がモンキーに投げつけたしびれバナナは張飛が掴み、食べていた。

当然このバナナを食べるとしびれます（笑）

張飛
「早く行くのだ・・・・・そして鈴々を置いてゲームクリアをするのだ・・・・」

そして張飛はモンキーに吹っ飛ばされる。

関羽
「鈴々！ぐ、お前の命は無駄にはしないぞ！」

零斗
「さぁーて、落とし穴で落としてやるぜぇーーー！」

零斗と一刀は落とし穴を作り、その真ん中にバナナを置いた。

一刀
「後はあのモンキーを誘い込むだけ！」

零斗
「やーい間抜け猿！」

一刀
「悔しかったらかかってこいよ！このチ○カス猿が！」

関羽
「ご主人様は問題発言しないで下さい！」

そしてモンキーは零斗達に向かうが・・・・・

張飛が落とし穴にはまり、その真ん中でバナナを食べていた。

一刀　関羽
「だから何でお前がいるんだぁーーーーーー！」

関羽
「お前しびれた体でどうやってここまで来たんだ！どんだけバナナに執念持っているんだ！？」

張飛
「ゲームでくらいおなかいっぱい食べたかったのだ」

一刀
「哀しいこと言うなよ！涙が出てくるじゃねーか！ごめんね！お兄ちゃんが悪かったごめんねー！」

関羽
「ご主人様！敵が・・・・」

モンキー
「ぐぉーーーーーーーー！」

全員（零斗を除いて）
「うわぁーーーーーーーー！」

その時、横から気弾らしき物体がモンキーに当たり、更に数発の気団がモンキーに向かい、モンキーは吹っ飛んだ。

すると零斗達が横を見ると、崖から大砲を持った（祝福のカンパネラの）アニエスそっくりの女性ハンターがいた。

零斗
「ほほーう、あのモンキーを倒すなんて、凄いよな。一人で狩りをやってんのか？」

女性ハンター
「友達いないもので（笑）一緒に狩りしませんか（笑）」

関羽
「ならば、共に行こうではないか」

零斗
「俺はアイスレイジだ（笑）」

一刀
「俺はハンクだ（笑）」

関羽
「私は関羽だ（笑）」

張飛
「鈴々は張飛・タイガーショットなのだ（虎）」

一刀
「何その（虎）っていうのは？」

張飛
「これは、タイガーショットって書いたからそうしたのだ」

一刀
「おいおい」

女性ハンター
「すみません（笑）この（笑）は私の癖でして～（笑）」

零斗
「なるほど～笑の上に（笑）とはやるな、そうやって誤解を生まないようにしているんだな」

女性ハンター
「白猫忍者ですよろしくお願いします（アニエス）」

関羽
「おいぃー！正体をバラすなぁーーーーー」

零斗
「てかさ～普段は何をしてるの？」

白猫忍者
「普段ですか？（アニエスの声になって）ドライバーをやっています（＋）」

現実世界のアニエスは、体全体がドライバーになっていた

一刀
「お前もかよ！？」

アニエス
「実はゲーマー星人を追っているんですよ～」

？？？
「何や何や？」

？？？
「白猫忍者ですか～」

アニエス
「あなた達は（怒）」

？？？

「俺は無双侍や！」

？？？

「僕は活人拳G」

アニエス
「どうやら私と戦いたいようだね」

無双侍
「だったら勝負や！」

活人拳G
「いくよ！」

アニエス
「あなた達は普段は何をやっているの？」

無双侍　活人拳G
「俺（僕）達は・・・・（光軍と洋基の声になって）ドライバーをやっています」

現実世界の光軍と洋基は、体全体がドライバーになっていた。

アニエス
「な、無双侍、活人拳G！あなた達も・・・」

洋基
「そういう白猫忍者も！？」

光軍
「てことはそこにいる君達もか！？」

零斗
「まぁな、そんな感じだ、とにかくこのゲームにゲーマー星人がいるかもしんねぇ捕まえたら何とかなるはずだ」

光軍
「このゲームは世界中のゲーマーがプレイしているんだよ！？それに姿も現実世界とは全く違う！」

洋基
「どうやって捜し人を特定するんや！？」

するとアニエスは・・・・

アニエス
「『M』を捜す（燃）」

洋基
「あれは作り話のじゃあ・・・」

アニエス
「作り話だとしても『M』を捜す以外難局を乗り切る道はないよ（燃）」

関羽
「Ｍって何だ？」

アニエス
「コードネームは『Ｍ』この世界の全て知り尽くし、この世界の全てを狩った伝説のハンター・・・」

零斗
「なるほど、おもしれぇな、そのＭって奴を捜そうぜ～」

アニエス
「Ｄ－５１地区で、Ｍらしき人物を見かけたという噂は聞いたんだけど・・・」

洋基
「Ｄ－５１地区！？一流ハンターも逃げ出す神獣達の巣やないか！」

というわけでＤ－５１地区に着きまして、零斗達はＭを捜しています。

零斗
「気味わりぃところだな」

アニエス
「気をつけて、ここに巣を食うモンキーは最強レベル、出会っても戦わないで（恐）」

すると何かの叫び声がした。

零斗

「何だ？」

洋基
「何や？神獣か！？」

一刀
「あれを見ろ！」

崖の近くの木に吊るされている女性の姿が見えた。

アニエス
「大変！早く助けなきゃ！」

そして零斗達はその崖の上まで上った。

洋基
「まさかMか！？」

そして吊るされている女性ハンターを助け出した。

光軍
「大丈夫ですか？一体何が・・・・」

アリス
「もしかしてアイスレイジ様！？私はアリスです！」

するとアリスは起き上がり、零斗に抱きつく。

そして光軍と洋基はハリセンでアニエスを叩く。

洋基
「何が『M』や！違うやないか！おい！今度はこいつ（アニエス）を吊るそうや！」

アリス
「やめてください！やるなら私にしてください！」

洋基
「黙っとけ！零斗の熱愛女！（怒）」

零斗
「アリス、（小声で）この事件が終わった夜に抱いてやるよ」

アリス
「（小声で）もしかして零斗？」

零斗
「（小声で）そうだ、たくさんしてやるから」

アリス
「（小声で）うん、しようね」

洋基
「おい、そこのお二人さん、お取り込み中悪いけど、後ろに神獣がおるで？」

零斗とアリスが振り向くと・・・神獣のモンキーがいた。

全員（零斗を除いて）
「ひえぇーーーーーーーーー！」

その時、神獣のモンキーの後ろから巨大な矢らしきものに刺さる。

洋基
「おいおい、最強クラスのモンキー、神獣パオシャンロンを・・・」

アニエス
「一撃で倒すとは・・・・」

???
「全く、俺の客に手を出すなよ」

一人の男が、巨大な矢らしき武器をパオシャンロンから抜き、片手で持った。

???
「俺がMだ！」

全員
「！」

そして全員驚く。

M
「なるほど、そういう事かお前等も改造されたのか」

零斗
「そんな感じだ」

M

「実は俺もだ」

一刀
「あんたもか？」

M
「突然上空から光を照らされてな、気付いた後には遅かった・・・
（ウェスカーの声になって）全身卒業式の春の失恋に改造された」

洋基
「それ改造やないで！運命や！」

ウェスカー
「ウェスカーという、哀しいグラサンの男に改造されたんだよ」

一刀
「元々だろ！？何勝手に宇宙人のせいにしてんだ！」

洋基
「アホやな～」

関羽
「洋基、なにげに酷くないか？」

零斗
「Mがウェスカー理事長だったなんてな、恋人にフラれてこのゲームに熱中してたんだな」

一刀
「ん？向こうから人影が」

零斗
「奴等だな、つーか現実世界と変わんねーじゃん」

関羽
「全身黄色タイツの男達、間違いなくゲーマー星人です」

そして零斗達はゲーマー星人らしき人物の後をつけた。

ゲーマー星人が着いたのは、神殿前だった。

そして神殿からモンキーハンターのラスボスらしきモンキーが現れた。

ウェスカー
「こうなったら奴等に恩を売るんだ！」

そして全員武器を取り出した。

ラスボスのモンキーに立ち向かうが、ゲーマー星人の先輩が拳銃を取り出し、

モンキーの顔に直撃し、爆発した。それと同時にモンキーは倒れた。

全員
「・・・・・・・」

関羽
「おぉーーーい！どうしてだぁーーーーー！」

先輩
「これで終わったな」

後輩
「そうですね～」

関羽
「奴等が終わろうとしているぞ！ウェス・・あれ？いない！」

洋基
「新しい敵を探すといって消えました～」

一刀
「こうなったら愛紗！」

関羽
「わかりました！」

そしてゲーマー星人達は・・・・

先輩
「さーて・・・ん？」

一刀
「（女の声で）や～んこっち見てる～」

関羽
「何～？」

後輩

「何だお前等？」

一刀
「あの～よかったら～私たちと狩りしませんか～？」

先輩
「悪いけどラスボス倒したんだよね～」

関羽
「実はその神殿の先に隠しボスがいるんです～マスカークとかー」

零斗
「そんな感じだから俺たちと組もうや」

アリス
「もちろん、ご褒美あげますよ～」

後輩
「先輩どうします～？」

先輩
「別に～」

そして零斗達は神殿に入った。

洋基
「あの～この先にマスカークなんていないんやな・・・・」

光軍
「なら僕が！」

一方神殿では・・・・

後輩
「先輩しゃべらないですね～」

先輩
「・・・・・」

とそこへ零斗達の後ろから光軍がやってきた。

光軍
「待ってくれ！僕もまぜ・・・」

どかぁーーーーーーーーん！

光軍は実力が発揮をだせず、零斗のアッパーで天井に突き刺さりました。

アニエス
「活人拳Gィィィィィ（笑）」

洋基
「何で（笑）や！？」

アニエス
「活人拳G、あなたの命は無駄にはしないわ！」

するとまた零斗達の後ろからアニエスがやってきて・・・

アニエス
「ちょっとちょっと！私を置いていかないでよ～」

そしてアリスに膝蹴りで倒される。

張飛はアニエスの装備を剥ぎ取った。

張飛
「これは、猫のカチューシャなのだ！」

先輩
「お前等いい加減にしろよ、さっきからコソコソと、お前等奴等の仲間か？」

一刀
「何言ってんの？」

先輩
「てめーら何者だって聞いてんだよ」

一刀
「人にモノを尋ねる時はまず自分から素性を言え！」

先輩
「俺達はなぁ～」

先輩　後輩
「（サルサとリトスの声になり）ドライバーをやっています」

現実世界のトルティア姉妹は体全体がドライバーになっていた。

第三十話　仲間が増えるほど強くなる（後書き）

次回はゲーマー星人編がクライマックスになります。

第三十一話　頭にドライバー　心にネジを・・・・（前書き）

零斗
「いよいよゲーマー星人編の後編だな」

一刀
「ということで『チ○コ』が多くなりますが、温かい目で見守ってください」

第三十一話　頭にドライバー　心にネジを・・・・

零斗達が『モンキーハンター』をやって三週間たった。

そして現在、モンハンのオフ会をやることになった。

場所は焼肉店・・・・・

店員

「お客様～何にいたしやしょうか？」

零斗と一刀、関羽と張飛、光軍と洋基、トルティア姉妹が店員に・・・

全員

「カルビ焼き十人前」

そして全員、焼肉を食べる。しかし一人だけ機嫌が悪い人がいた。

一刀

「なぁ、モンハンやって何週間経つんだ？」

零斗

「おいおい、そんな事を考えたってメシが不味くなるぞ～」

バン！

一刀

「あのなぁ！こんなくだらないことやって三週間経ってんだぞ！三

週間！（怒）」

洋基
「一刀、落ち着けや、零斗の言うとおりメシが不味くなるで」

一刀
「オフ会といっても光軍と洋基はともかくほとんど俺たちが知ってる奴等ばっかなんだけど・・・」

リトス
「確かにそうですね、あの姿でゲーマー星人をおびき寄せるはずだったんですけど、まさかあなた達が寄って来るとは思いませんでしたから」

洋基
「あんたらの所為で一週分が無駄になったけどな、お前等姉妹は紛らわしい格好をしたからゲーマー星人の手がかりは遠ざかるんや！」

リトス
「ゲストキャラのくせに生意気ですね、トルティアカンパニーの社長の私にこんな口叩いてもよろしいのですか？」

洋基
「何やとこの毒舌女！社長だろうと何だろうと関係あらへんわ！」

光軍
「洋基！社長さんに失礼だろ！リトスさんに謝れ」

リトス

「別に気にしてませんよ、あなた達が全身ドライバーに改造されたことなんて」

サルサ
「少しは気にしてよ！」

一刀
「おい！何俺を抜かして話を進んでんだ！」

リトス
「あら、チ○コを改造された一刀さんですね」

一刀
「お前女の子だろ！それやめろ！」

サルサ
「そうだよリトス、私達女の子だからさ」

リトス
「寝言でレスターさんのチ○コが欲しいとか言った姉さんに言われたくありません」

サルサ
「あれはその・・・・」

洋基
「そんな事言ったんか？ほんとイケナイ姉やなぁ～」

サルサ
「あんたは黙ってて！（怒）」

洋基
「何やとぉ～『鈴鳴の鬼』と呼ばれた俺に喧嘩売るんやな～？」

サルサ
「それはこっちの台詞よ！トルティアカンパニーの副社長に喧嘩を売るなんて１００年早いわよ！」

洋基
「一個下やないか！」

一刀
「お前等いい加減にしろよ！」

するとアニエスがやってきた。

アニエス
「こんばんわ～白猫忍者で～す」

そしてアニエスはリトスの隣に座った。

リトス
「すみませ～ん、この人形使いにしびれ生肉追加～」

店員
「はいよ～」

目の前にあるしびれ肉を食べ、アニエスはしびれだした。

アニエス

「うぅ～まさかトルティア姉妹の罠だったなんて～このアニエス、一生の不覚」

張飛
「アニエスが簡単にはまっちゃったのだ～」

関羽
「え～っと～今後どうするか～皆で話合うんじゃなかったのか？」

零斗
「お前等冷静になって話し合おうぜ、まずゲーマー星人の情報について何か掴んだか？」

サルサ
「いや～何も・・・・」

リトス
「同じく」

洋基
「全然あらへんわ」

光軍
「残念ながら～」

零斗
「だろうな、もちろん俺たちは無い」

全員（零斗以外）
「じゃあ何で聞いたんだよ！？」

零斗
「え～だってさ～あれだぜ。アリスはゲーマー星人の情報を掴むために欠席だし、ウェスカー理事長は現実世界から戻ってこないんだよ～」

張飛
「ウェスカーのおじちゃんは恋人にフラれたからってゲームに熱中するのはおかしいのだ」

関羽
「こら鈴々、この事がウェスカー理事長が聞いたら退学だぞ」

張飛
「事実なのだ」

零斗
「それより、どうするんだ?ゲーマー星人の情報がないんじゃ、どうしようもないぜ?」

光軍
「現実を受け入れて生きるしかないね・・・」

サルサ
「ちょっと何言ってんの!?」

光軍
「ゲーマー星人の情報がないんじゃ、それを受け入れて生きるしかない、でもドライバーとして生きる覚悟が必要だ」

一刀
「諦めんなよ！ゲストキャラだろ！そんなところで諦めてどうする！」

洋基
「光軍の言う通りや、受け入れて生きるしかないんや」

こうしてオフ会が終わった後、それぞれの道に歩んだ。

零斗はクラウザーの居酒屋を手伝う。

クラウザー
「へい、おつまみだぜ」

諸葛亮
「うぅ～今日も一人の男子生徒が豊満の胸の女の子とイチャイチャしてブツブツ・・・・」

零斗
「ビールはどうですか～」

諸葛亮
「ください・・・・・・」

一刀と関羽と張飛は、運搬社で働くことになり。因みに一刀はトラックを運転する。

アニエスは車の整備士になった。

整備員

「おい、ドライバーをくれ」

アニエス
「はい」

整備員
「そのでっかいドライバーじゃないよ、普通のドライバーだ」

光軍と洋基はレスターの元で働いていた。

レスター
「ドライバーあるかな？」

光軍　洋基
「はい」

レスター
「いや～その大きいのじゃなくて普通の・・・・」

トルティア姉妹は自分達の会社を経営する。

これが零斗達の現実だろうか、ドライバーとして生きる事が現実だろうか。

しかし、諦めなかった女がいた。

居酒屋にて・・・

ピリリリリリ

零斗
「何だ?」

アリス
『零斗、よく聞いて、ゲーマー星人の居場所は廃アンブレラ社のビルよ』

零斗
「分かった、一刀にちゃんといっとくわ」

アリス
『お願い』

そしてトラックの車内では・・・・

一刀
「何?ゲーマー星人が?」

零斗
『あぁ、廃アンブレラ社のビルだしかもその前にそいつらのアジトがある』

一刀
「仕事中だ、そういうのは後にしてくれないか?」

零斗
『仕事とゲーマー星人、どっちをとるんだ?それを考えな』

プツッ

関羽
「ご主人様・・・」

一刀
「なぁ、今から奴等のアジトに向かうぞ」

関羽
「それでは・・・」

一刀
「ここからが、本当の狩りだ！」

ブロロロロ！

一刀はアクセル全開でゲーマー星人のアジトへ向かった。

一方、ゲーマー星人のアジトでは、宇宙船を動かし、出発するところだった。

宇宙船の中では、ゲーム機の山が築かれている。

先輩
「この星におもい残すことはねぇな」

後輩
「そうですね」

先輩
「ん？なんだ？一台のハマーがこっちに向かって来るぞ」

零斗
「よっしゃー！ジョッシュさん！もっと飛ばせぇーーーー！」

ジョッシュ
「しっかりつかまってろよ！」

そしてハマーは宇宙船が近くなったところでドリフトし、零斗はそのタイミングで宇宙船に飛びついた。

零斗
「うへへ～覚悟しろよ宇宙人共め」

先輩
「な、何で！？」

後輩
「先輩！一台のトラックがこっちに向かってきます！」

先輩
「えぇ～！ってこの宇宙船全然浮上してない」

後輩
「先輩！第四動力室に侵入者がぁ！」

先輩
「え？」

先輩はその場所のところを確認すると、自身のドライバーを回しているアニエスと光軍と洋基だった。

しかも動力を切り離している。

アニエス
「私は白猫忍者！」

洋基
「俺は無双侍や！」

光軍
「そして僕は活人拳Ｇ！」

三人
「ゲーマー星人の好きにはさせない！」

先輩
「うわぁーーーどうすんだぁーーーーー！」

後輩
「先輩車が来ます～」

先輩
「こうなったら迎撃だ、大砲を出せ」

すると宇宙船から大砲が出てくる。

先輩
「セーフティロック解除、はい発射ぁーーーー！」

しかし大砲はぶっ壊れた。何故ならトルティア姉妹の細工で壊れたからである。

サルサ
「やったねリトス！」

リトス
「そうですね」

トラックがゲーマー星人の宇宙船にぶつかり、張飛は蛇矛を取り出し、関羽は青龍エン月刀をとりだし、

宇宙船に穴を開けた。それと同時に零斗と一刀はその穴に入り、零斗はメリケンサックを取り出し、一刀は

木刀を取り出した。関羽は先輩に寸止めをし、張飛は後輩に寸止めをした。

一刀
「船を止めろ、それとチ〇コを返せ！」

先輩
「どういうことか知らんが、この船は止められないぜ、どれだけ分解しても止められないぞ。あの中央のメインブレインをよく見ろ」

目の前にあるのはメインブレインだった。

先輩
「メインブレインを分解しないとこの船は飛び続ける、お前等のドライバーじゃ無理な話だがなあのネジは特殊なドライバーがないと外すことができない」

メインブレインのネジはボックスドライバー専用である。

一刀
「ふふふ、あははははそうなんだ～だったら俺のドライバーならどうだ～」

そして一刀はズボンのチャックを開け、股間から光り輝くドライバーが出る。

先輩
「き、貴様ぁーーーーそのドライバーはぁーーーーーー！」

関羽
「ご、ご主人様のチ○コが、光輝いています！」

張飛
「ほんとなのだ～お兄ちゃんのチ○チ○が光っているのだ～」

そして一刀はメインブレインに向かって走り出した。

一刀
「チィーーーーーーーー○コ・・・・インーーーーーー！」

ガチャン！

一刀のドライバーが六角形のネジにはまった。それと同時に回りだした。

一刀

「ブルブルブル・・・・・・アァーーーーーーーーーーーーーー！」

そして一刀の叫びと同時に宇宙船は爆発した・・・・・・

地上にいる光軍と洋基とトルティア姉妹は・・・・・・

光軍
「俺たちの身体は・・・・・・？」

全身ドライバーのままだった。

一方、ウェスカー理事長は・・・・・魔王マスカークに挑んでいた。

マスカーク
「よくぞここまで来たな、余がマスカークだ」

ウェスカー
「ならばいくぜぇーーーーーーーー！」

そしてウェスカーはマスカークに向かって走っていった。

ウェスカー
「待ってろ皆ぁーーーーーーー！今行くからなぁーーーーーーーーーー！」

ゲームのやり過ぎには注意しましょう。

第三十一話　頭にドライバー　心にネジを・・・・（後書き）

光軍先生、ありがとうございました。

次回は番外編です。

零斗

「番外編かぁ～楽しみだな～」

リビングタイム1（前書き）

零斗
「いや～たまにはのんびりしようぜ～」

フランケン
「そうだな、今回はこの小説について話し合う会だ」

アリス
「そうだよね☆」

零斗
「では、ご覧下さい！」

リビングタイム1

零斗たちはアックスに誘われ、アックスの部屋でのんびりしている。

因みに零斗は『カミナリコミック』を読んでいる。

『カミナリコミック』とは、電撃コミック系の漫画とコロコロコミック系の漫画の週刊誌である。

もちろんアニメの情報等あり、因みに人気の漫画は『脱獄』である。

零斗

「『脱獄』とは、主人公のアルバート・ウェスカーが麻薬を密輸した罪で逮捕され、死刑判決を下された。
刑務所へ輸送中にテロリストに襲われ、ウェスカーは何とか逃亡した。これを知ったなのはとフェイトとはやてはウェスカーの逮捕とテロリストの鎮圧を目指す、そして一人のダークヒーローと魔導師の戦いが始まる」

フランケン

「おい！これをなのは達に聞いたら殺されるぞ！」

零斗

「おいおい～この漫画はウェスカーが主人公なんだからいいじゃん」

フランケン

「ウェスカーがこの漫画の主人公としたらなのは達が悪役になるぞ！」

零斗
「いいじゃねーかこんくらい、ボーンドラゴン先生の漫画は最高だぜ～」

フランケン
「いやおかしいだろ！脱獄って事態がおかしいよ！」

アックス
「でも、兄さんが主人公ならいいんじゃないかな？」

フランケン
「お前までぇ～！」

零斗
「ん～今日の脱獄は・・・第五話、血の雨」

フランケン
「うわぁ～なんというサブタイトル」

零斗は漫画の内容を音読しはじめる（棒読みで）

零斗
「全く、面倒な奴等だ。今度あったときには引き裂いてやる」

フランケン
「グロいよ・・・・」

零斗
「そこまでや、アルバート・ウェスカー今度こそ逮捕するで、またお前等か、いい加減にしろ」

フランケン
「もうやめろ、これ以上音読したらなのは達に殺される」

すると零斗はカミナリコミックを閉じ、こう呟いた。

零斗
「はやくウェスカーに倒されないかな～なのは達」

フランケン
「お前それなのはに喧嘩売ってるよね？絶対売ってるよね！？」

零斗
「まぁそれはさておき、『ゾンビゲーム』と『ＢＳＡＡ学園！』について話し合おう」

アリス
「そうだね！」

ゴツ突骨
「『ゾンビゲーム』は？」

零斗
「『ゾンビゲーム』のラクーンシティ編は『バイオハザード２』をオマージュしたものなんだ」

フランケン
「そうだったの？でもさ、ウィリアム・バーキンは出ていたんだけどハンクにヘッドショットされたね」

零斗
「だから作者は地下鉄のボスの代わりにアリゲーターを出したってわけだ」

フランケン
「おいおい、でも恋姫無双編では『バイオハザード5』をオマージュしたものだろ？」

アックス
「マジニとか出てたからね、あと主人公の交代があったね」

そういって紅茶を飲む。

零斗
「ははははは、72万アクセスだからな『ゾンビゲーム』は」

そして全員固まる。

全員（零斗以外）
「ウソォーーーーーーーーーーーー！」

アリス
「それはビックリした～」

ゴツ突骨
「あたいも！」

蔡ボウ
「私もです～」

零斗
「つまり、作者の根性でそうなったわけだ」

アリス
「零斗と私の愛の力でもあるんだよね！」

夕化
「いや、あたいと零斗の愛の力で・・・」

蔡ボウ
「いいえ！私とアックス様の愛の力で・・」

フランケン
「お前等少し落ち着けよ！（怒）」

零斗
「普段怒らない奴が怒ると怖いな、次は『ＢＳＡＡ学園』だ、この小説は『ゾンビゲーム』のスピンオフ作品だったんだよ」

フランケン
「そ、そうなの？」

零斗
「だけど作者が色んなアニメキャラとゲームキャラとクロスオーバーさせて学園ものにしたいとのことで生まれたんだ」

アックス
「そうだったんだ～」

零斗

「しかし！サスケとサイレンダーとの登場、クリスにジャスタウェイダンスを躍らせたとの問題が発生し、カオスになっていると指摘されました。しかもバイオキャラのキャラ崩壊をさせてしまってファンの反感を買うんじゃないかと心配されております。さらにクリスが宮藤芳佳の下僕になってしまったとのことで・・・・」

フランケン
「クリスの事はどうでもいいだろう？」

零斗
「ダメだ！このままではクリスの自由がなくなってしまいます、そしてクリスは今でも泣いています」

アックス
「つまり、ストライクウィッチーズとクリス達を和解させるとのことですね」

零斗
「よく言った！」

フランケン
「というわけで言わなきゃならない事が一つだけある」

零斗
「何？最近出番がないから増やしておくれと言いたいのか？」

フランケン
「違う！十話の『誕生マジカル無双戦士』と十一話の『魔法少女には触手あり！？』のところで問題がある！」

一刀
「え?紫苑と祭さんと桔梗のロリ化とか?紫苑は紫のツインテールで、祭さんはポニーテールで、桔梗はショートカットヘアで何か問題があるのか?」

フランケン
「大有りだよ!あの三人の魔法少女になったのはともかく、何で触手プレイなんて出してんだ!」

ゴツ突骨
「魔法少女には触手プレイは欠かせないって作者が言ってて」

フランケン
「作者ぁーーーーーーーーーーーーーーーーーー!」

全くもってその通りです。鳳統（真名　雛里）を魔女っ子教師にしたのは外見で思いついて、更に性格は原作のだと教師を勤まるかどうか心配になってしまい、性格を変えちゃいました、その結果ドSと小悪魔になってしまいました。

そしてステッキを持って魔術真拳を使うという設定にしました。ステッキを持ってなくても魔法は使えます。

更に容姿は原作と同じトンガリ帽子をかぶっており、マントを着けて、マイクロビキニ姿にしてニーソックスと

革靴を履いているという設定にしちゃいました。雛里のファンの皆様、本当にごめんなさい↑土下座

フランケン
「なぁ、鳳統先生の事はわかったよ、でもよ諸葛亮先生とは性格が正反対だと感じているのだが・・・」

アリス
「でもいいんじゃない？」

零斗
「あはははは、そうだな」

さわさわ・・・

アリス
「キャア！またお尻触った～」

零斗
「ははは、ごめんよ」

むにゅ

アリス
「あぁん♪」

フランケン
「何で♪（これ）なんだ！？おかしいだろ！」

モミモミモミモミ・・・・・・

アリス

「あぁ～ん零斗ぉ～エッチだよ～」

零斗
「ほれほれ～どうだ～俺のテクは～」

フランケン
（うわぁ～あの人胸揉まれてうれしそ～だな、これが問題になるのに・・・）

ゴツ突骨
「零斗ぉ～あたいの尻を触ってくれよ～」

零斗
「しょうがないな～」

むにゅ

ゴツ突骨
「あぁん！」

フランケン
「お前等その辺にしとけ！この小説終わるぞ！」

アックス
「どう？朱愛、気持ちいい？」

蔡ボウ
「とっても気持ちいいです」

フランケン

「アックスは何蔡ボウの胸揉んでるんだよぉーーーーーーー！」

零斗
「なんだよ～彼女いないからって怒るなよ～」

一刀
「そうだぞ、彼女がいないらいでムキになるなって」

フランケン
「お前に言われたくねぇよ！（怒）」

こうして豪邸は美少女達の可愛らしい声に響いたとさ。

次回からは『神無月の巫女』編を始めます。

リビングタイム1（後書き）

零斗
「そしてこの小説のイメージOPは『バカサバイバー』EDは『未来回帰線』だ！次回読む人と最初から読む人はイメージして読めよ！零斗からの約束だぞ！」

フランケン
「何『零斗の約束』とか言ってんの！？」

零斗
「次回もお楽しみに～」

フランケン
「無視すんなぁーーーーーーー！」

第三十二話　巫女は巫女でも逆さにして『つ』と『く』を足すと・・・・（前書

零斗
「さぁ神無月の巫女編始まるぞ！」

フランケン
「俺たちの活躍を見てくれよな！」

第三十二話　巫女は巫女でも逆さにして『つ』と『く』を足すと・・・・

零斗達が元の体に戻って一週間後、普通の学園生活を送るようになる。

そして学園内では、こんな噂が流れていた。

2年C組の来栖川姫子と姫宮千歌音が黒いフードの男に狙われているという噂だった。

その黒いフードの男は処刑人コスモスの事である。

夏休み編で倒されたと思っていたが、実際では零斗が倒したのはコスモスの分身である。

噂は学園ではなく国際警察でも響いていた。

クリス
「あの噂は本当かどうか・・・・・」

学園内の噂について調査するクリス・レッドフィールド

それに実行するクリスの部下の『魔法少女リリカルなのは系例　蒼神の軌跡　第一章；別れと出会いと覚醒』の主人公

片峠次真とその作者の絶神；肥後魚である。

次真
「もし本当だったらこれは大変だ」

肥後魚
「そうだね、まず噂が本当だったら何か対策を練らないと」

クリス
「対策かぁ～」

クリス達は噂が確定したら今後の対策について悩んでいた。

そして零斗達は、アックスの家でくつろいでいた。

零斗はソファーで横になって『週刊少年ジャンプ』を読んでいた。

関羽
「何でジャンプを読んでいるんですか？」

張飛
「おかしいのだ！マガジン以外の漫画局内で読んじゃいけないのに零斗だけジャンプなんてずるいのだ！」

関羽
「ちっがーう！それよりあの噂の事について話し合うんじゃないんですか！？」

零斗
「まぁ噂は嘘という事で忘れ去られるから、もし本当ならオロチ衆の奴等と処刑人の使い魔をサイレンダーでぶっ飛ばせば済む話だからさ、ゆっくりしようや」

フランケン

「それが心配なんだよ！オロチ衆はサイレンダーより強いロボットを持ってるし、処刑人の使い魔はかなり手強いという説があるし・・・・」

零斗
「んなメンドクセー事考えんなよ緩めてこうぜ、どうせ噂は嘘という可能性が高いしな」

すると一刀がやってきて、ある事を話す。

一刀
「いいか皆、よく聞け、あの噂は本当だったんだ」

全員（零斗を除いて）
「えぇーーーーーーーーーーーーーー！」

フランケン
「って零斗！何で驚かないの！？」

零斗
「もう確定しちゃったんだもん」

フランケン
「何の確定だよ！？」

零斗
「さっき言ったろ？『もし本当だったらサイレンダーでぶっ飛ばせば済む話だから』って」

フランケン

「うわ～何というめんどくさがり屋な主人公だな～」

零斗
「何～？」

フランケン
「別に」

一刀
「それにサスケによるとオロチ衆と処刑人が手を組んだらしい」

零斗
「ふ～んこれは大変だな、だったらあいつに頼もう」

アックス
「あいつって？」

零斗
「まぁ見てなって」

すると零斗は携帯を取り出し、番号を押して掛けた。

プルルルルル、ガチャッ！

零斗
「あ、スティーブ、お久ぁ～、実は頼みたい事があって、ビクトレーラーをこっちに回して欲しいんだけど・・・・
え・・・メンテ中？いつになる・・・・一週間か。ちょうど良いや、じゃあレンジャービークルこっちに回して・・・・うん分かった『芋長の芋羊羹』十個分ね、はーい」

ピッ！

フランケン
「今、あのマシンの名を出してたような」

零斗
「やったぜ、レンジャービークルを回してくれるんだってよ！」

関羽
「スティーブって、あのスティーブ・バーンサイド！？」

零斗
「あぁ、ビクトレーラーとレンジャービークルを作った張本人だ、芋長の芋羊羹が好きだぞ」

張飛
「鈴々も好きなのだ！芋長の芋羊羹！」

フランケン
「これ以上登場させんのやめろ！更にカオスになる！」

零斗
「安心しろ、あっちがロボットならこっちもロボットだからカオスになんねーよ」

フランケン
「いいわけないだろぉーーーーーーーーー！」

関羽

「なるほど、オロチ衆がロボットならこちらもロボットってことですか、納得しました」

フランケン
「お前ボケんなよ！」

そしてアリスがやってくる。

アリス
「零斗ぉーーーーーーーー！」

アリスは零斗に飛びついてきてすりつける。

零斗
「おいおいアリス～いきなりはないだろぉ～」

アリス
「だってだって零斗がいない世界なんて耐えられないから・・・・」

零斗
「わかったわかった、今日の夜は俺んちでヤリまくるぞ！」

アリス
「やったー☆」

フランケン
「バカップルだなこりゃ」

一方国際警察では・・・・

次真
「クリスさん！噂は本当だったようです！」

クリス
「何！？」

次真
「調べによりますと、黒いフードの男が女子高生二人をストーキングするような行動を取っていました」

肥後魚
「こりゃ対策を練らないとね・・・」

クリス
「そうだな、とにかくこの事を報告しよう！」

そして零斗達は、レンジャービークルが着いたので見上げていた。

零斗
「いや～これさえあればオロチ衆なんてコテンパンにやっつけられるよ」

フランケン
（これきいたら奴等は零斗にボコボコにするんだろうな）

アリス
「すごーい！零斗、これで戦うんだね！」

零斗
「そういうことだ」

すると、向こうにロボットらしきモノがやってくる。

このロボットは武夜御鳴神（タケノヤミカヅチ）であり、空中戦は苦手だが、バランスの取れた機体である。

必殺技は両肘から展開した端末からエネルギー弾で相手の動きを止め、ダッシュと共に放つパンチでトドメを刺す『日輪光烈大撃破』であり、苦戦させるロボットである。

零斗
「へぇ～だったらレンジャービークルでやってやるぜ！」

零斗はレッドビークルに乗り、他のビークルを動かした。

こっちの小説のレンジャービークルはレッドビークルから他のビークルを操る事が出来る。

零斗
「いくぜ！激走合体！」

ブルービークルはグリーンビークルとイエロービークルとピンクビークルと合体して、レッドビークルはブルービークルと合体し、ＲＶロボのビークルモードになった。

零斗
「バトルモード！チェンジアップ！」

零斗の合図でＲＶロボは立ち上がる。

零斗
「エンジン快調！ＲＶロボ！」

そして目の前にいるロボのコックピット内では・・・・・

？？？
「な、あいつはオロチなのか！？」

そしてＲＶロボは先制攻撃をし、武夜御鳴神はその攻撃を防ぎ、カウンターパンチをした。

武夜御鳴神はＲＶロボに攻撃をし、ＲＶロボはよろける。

零斗
「くそぉ～こうなりゃＲＶソードだ！」

ＲＶロボからＲＶソードが出てきて、そのまま握った。

零斗
「いくぜ！」

ＲＶソードを構えて武夜御鳴神に突っ込み、高速回転をした。

零斗
「ＲＶソード！激走斬り！」

スバァーーーー！！！！

？？？
「うわぁーーーーーーーー！」

ドゴォーーーーーーーーーーーン！

そしてＲＶロボの必殺技によって武夜御鳴神は爆発した。

零斗
「よっしゃあーーーーーーーー！」

そしてフランケン達は・・・・・

フランケン
「いや、あのロボットは味方だと思う・・・・・・」

零斗のボケに冷静にツッコむフランケンだった。

？？？
「ソウマ君が・・・・・」

フランケン
「ん？」

一刀
「お前、まさか噂の・・・・・・」

？？？
「２年Ｃ組の来栖川姫子です」

フランケン
「でもソウマって？」

姫子
「さっき倒されたロボットに乗ってた大神ソウマ君です」

フランケン
「大神ソウマって・・・・・」

姫子
「元オロチ衆の七の首です」

フランケン
「てことは・・・・・・」

ＲＶロボを見て汗を流すフランケンであった。

第三十二話　巫女は巫女でも逆さにして『つ』と『く』を足すと・・・・（後書

勘違いはしないようにね・・・・・

零斗
「次回はオロチ衆と戦うぞ！」

フランケン
「大神ソウマさんになんて謝ればいいのか・・・・」

零斗
「あのくらいで死なねーよ、だってこの小説ギャグ小説だから」

フランケン
「そうだね・・・・・しかも下ネタとエロティックが含まれる・・・」

第三十三話　付録にのりしろは欠かせない（前書き）

フランケン
「ちょっと待てぇーーーーーーーー！何なんだこのサブタイトルは！」

零斗
「いいじゃね～かよ～ノリシロン出るから～」

フランケン
「神無月の巫女編にノリシロンが出たら更にカオスになるぞぉーーーーー！」

零斗
「それでは初めま～す」

フランケン
「人の話を聞いてぇ～（泣）」

第三十三話　付録にのりしろは欠かせない

金山企業のビル、そして会長室では、三国伝の武将達のクローンが人体ケースの中に眠っている。

そして玉座らしき椅子に一人の青年が座り、ノートパソコンで誰かと話している。

その相手は処刑人ことコスモスである。

???
「コスモス、オロチ衆と手を組んだか？」

コスモス
『はい、これより二人の巫女を捜索します』

???
「それより例の物はそっちに届いてる？」

コスモス
『確かに届きました』

???
「ふふふ、それは武夜御鳴神の姫宮千歌音バージョンのノリシロンだ」

コスモス
『そのノリシロンは今、オロチ衆の一の首の・ツバサが組み立てています』

？？？
「そうかい？だったら君とオロチ衆の動きに期待してるよ」

コスモス
『期待を裏切らぬよう、行動します』

？？？
「これで、世界は僕の物だ！」

一方国際警察では・・・・

関羽ガンダム
「まさか、噂は本当だったとは・・・・」

関羽ガンダム、国際警察で張飛ガンダムの上司であり、義理の兄である。

張飛ガンダム
「そして何より大変なのはオロチ衆の事と金山企業の事だろ？」

張飛ガンダム、関羽ガンダムの部下であり義理の弟である。

長男である劉備ガンダムがいないのは、ＢＳＡＡ学園の教師だからである。

張飛ガンダム
「おい！作者！ちゃんとしろよ！」

スミマセン・・・・・

関羽ガンダム
「もう会議の時間か・・・・」

張飛ガンダム
「あぁ、あの二人をどう護衛するかだな！」

ＢＳＡＡ学園では・・・・・

フランケン
「本当にごめんなさい！」

大神ソウマに土下座するフランケンだった。

ソウマ
「いいよ、それにいきなり出た俺が悪かったし・・・・」

零斗
「後、お前のロボは『スーパーメカニック』の会社に飛ばしたからな、直るまでＲＶロボを使っていいぞ」

ソウマ
「いいのか？」

零斗
「あぁ、もうすぐビクトレーラーが来る頃だしな」

フランケン
「零斗、お前反省してんのか？」

零斗
「なんだよ～これでも俺は反省してんだぞ！」

フランケン
（コイツ反省しているのか反省してないのかわからねぇ！）

そんなわけでビクトレーラーが来ました。

姫子
「うわぁ～すご～い」

千歌音
「大きいわね・・・・」

そして姫子の隣にいるのは姫宮千歌音、月の巫女である。因みに来栖川姫子は太陽の巫女である。

ビクトレーラーを見上げる姫子と千歌音であった。

そしてビクトレーラーから降りてきたのはスティーブ・バーンサイドである。

スティーブは零斗の幼馴染である。

零斗
「スティーブ、ＶＲＶのメンテが終わったんだな！」

スティーブ
「あぁ！オロチロボと互角に戦えるようにカスタマイズしたからな！」

零斗
「ありがとよ！ほい！報酬だ！」
零斗は芋長の芋羊羹の十個分を取り出し、スティーブに渡した。
スティーブ
「おぉ！確かに十個分だ！」
姫子
「あの～二人は知り合いなんですか？」
と聞く姫子。
零斗
「知り合いというより幼馴染だ」
全員（零斗とスティーブ以外）
「エェーーーーーーーーーーーーーー！」
千歌音
「それは驚いたわ！レンジャービークルとＶＲＶを作った張本人の幼馴染だなんて！」
姫子
「千歌音ちゃん！私もだよ！」
フランケン
「おいおい、ゴツ突骨の次はスティーブかよ！？」

ソウマ
「何という衝撃・・・・・」

零斗
「という事で・・・・」

すると地震らしき現象が起こる。

零斗
「何だぁ？」

その正体は武夜御鳴神の姫宮千歌音バージョンのノリシロンだった。

しかし外見は変わらない・・・・・

零斗
「あぁーーーーーー！あれは武夜御鳴神の赤バージョン！」

千歌音
「私何もしてないわよ！？」

？？？
「ははははは見たか！これはノリシロンVだ！」

全員
「ノリシロンV？」

？？？
「そうにゃーの！」

零斗
「まさかそのノリシロンVの搭乗者はコスモスか?」

コスモス
「ほ〜う何故わかった?」

零斗
「お前の声は覚えているしな」

コスモス
「よく覚えてくれたね、お礼に僕の仲間の一人を紹介してあげるよ」
そして鋳都祓霊神(イズハラノタマズチ)が現れる。

???
「ネココだにゃーの!」

オロチ衆六の首ネココであり、ネコナースの姿をしており、動物やオロチ衆を治す巨大な注射を使う。

天真爛漫でお菓子を食べます。

零斗
「ほ〜う、いくら子供だからって手加減はしねぇぞ!レンジャービークル!発進!」

するとレンジャービークルがやって来て、ソウマはレッドビークルに乗り込んだ。

ソウマ

「激走合体！」

全てのビークルが合体し、立ち上がってＲＶロボになる。

ソウマ
「エンジン快調！ＲＶロボ！」

そして零斗はＶファイヤーに乗り込み、他のＶマシンを操る。

零斗
「必勝合体！」

全てのＶマシンを合体させ、ＶＲＶロボとなる。

零斗
「エンジン絶好調！ＶＲＶロボ！」

コスモス
「いい気になるなよ」

ネココ
「ぶっ壊すにゃーの！」

零斗
「ソウマ、お前はノリシロンＶ叩け、俺はあの幼女を叩く！」

ソウマ
「おい、まさか・・・・」

零斗

「悪い子には調教しなきゃな！」

ソウマ
「・・・・・（汗）」

そしてＶＲＶロボは鋳都祓霊神にストレートパンチを食らわし、右ハイキックをした。

ネココ
「にゃにゃにゃ！生意気にゃ！」

零斗
「それはこっちの台詞だ！」

一方、ＲＶロボは・・・

ノリシロンＶに苦戦していた。

コスモス
「どうしたの？やっぱり自分のロボットじゃないとダメかなぁ？」

ソウマ
「ならば、ＲＶソード！」

ＲＶロボの手からＲＶソードが出てきて、ノリシロンＶに切りかかるが、効かなかった。

そしてノリシロンＶはＲＶロボに膝蹴りをして倒す。

零斗

「あぁ！ソウマ！」

フランケン達は・・・

姫子
「ソウマ君！死んじゃいやぁーーーーーー！」

千歌音
「・・・・・」

フランケン
「汚ぇぞコスモス！」

いや、フランケンの発言はどうかと・・・・

そしてノリシロンＶはＲＶロボに足で踏みつけ、ナイフを取り出した。

零斗
「ソウマ！」

ネココ
「余所見はいけないにゃーの！」

鋳都祓霊神はＶＲＶロボに攻撃し、体当たりをして倒した。

コスモス
「終わりだ・・・・」

そしてノリシロンＶがナイフを振り上げ、そしてＲＶロボにトドメ

を刺すが・・・

ナイフを持っている右手の動きが鈍くなる。

フランケン
「あれ？ノリシロンⅤの様子がおかしいぞ？」

コスモス
「な、何故だ！」

するとノリシロンⅤの右腕が落ちた。

フランケン　アリス　姫子　千歌音
「アァーーーーーーー！腕が取れたぁーーーーーーーーーーーー！」

コスモス
「な、腕が取れただと！？」

八重螺旋並行世界では、コスモス達の動きを見ていた。

そしてソウマの実の兄にしてオロチ衆の一の首のツバサはこう言った。

ツバサ
「腕の所割りピンだったのか～すっかり忘れてたぁ～」

全員（ツバサ以外）
「ダメだろ！！！」

ネココ

「にゃにゃあーーーーーのぉーーーーーーーーーー！大変！」

ガシッ！

零斗
「さて、調教の時間だ！」

ネココ
「にゃあーーーーーーーーーーーーーーーーのぉーーーーーーーーーーーーーーーー！」

零斗
「ビクトリーツイスタァーーーーーーーーーー！」

そしてビクトリーツイスターで鋳都祓霊神は爆発した。

ネココはＶＲＶロボに連れ去られる。

コスモス
「クソ！首を洗って待っていろ！」

ノリシロンＶは左腕で右腕を掴み、空へ飛んだ。

数時間後、ネココは零斗に亀甲縛りをされ、オロチ衆の狙いとコスモスの企みを全て話した。

そしてネココは零斗とアリスにおいしくいただかれました（性的な意味で）

フランケン

「てか、腕が取れて撤収ってどこかで・・・・・」

姫子
「気にしな～い気にしない♪」

千歌音
「それを気にしないのが男よ」

ソウマ
「アハハ・・・・（汗）」

オロチ衆の狙いとコスモスの企みは次回になるだろう。

第三十三話　付録にのりしろは欠かせない（後書き）

ネココ
「零斗様大好きにゃーの♪」

零斗
「おぉ～そうか～おんぶしてやるぞ～」

ネココ
「にゃ～♪」

アリス
「うふふ、まるで私と零斗の子供みた～い」

零斗
「じゃあ、ネココを入れてエッチするか」

アリス
「うん！やろ～」

ネココ
「にゃ～の♪」

第三十四話　処刑人散る（前書き）

零斗
「処刑人が死ぬのかぁ～」

フランケン
「おぉい！俺等まだ高校生だぞ！？」

零斗
「冗談だよ、では、処刑人の結末を見届けてください」

第三十四話　処刑人散る

真昼間から、ＲＶロボとオロチロボの戦いが始まった。

そのオロチロボとは、大宇邊御蟲神（オオウベノセナヅチ）である。

移動時には太陽をモチーフとした形態に変形する。武器は怪光線と溶解液である。

搭乗者はオロチ衆四の首コロナである。何故彼女がＲＶロボと戦っているのかというと

その理由は・・・・・

八重螺旋並行世界では・・・・・

コスモス
「君達、僕の怒りをわかるか？」

ギロチ
「知らねぇよ」

オロチ衆三の首ギロチ。鎖を武器にし、喧嘩は強いが、義姉のミヤコに頭が上がらない。スレンダーの女性好みで

巨乳嫌い。姫子に好意を寄せているためか、ストーカーをしているとか・・・・

因みに、ノリシロンＶを組み立てたのが彼である。

コスモス
「ノリシロンVを君に作らした結果がこれだよ！やっぱり君に任せるんじゃなかった・・・・・」

ギロチ
「それはどういう事だ？」

コスモス
「右腕の割りピンを忘れただろ！あれさえ付いていれば零斗達を倒せる筈だった・・・・」

ギロチ
「だから反省して、今直してんだよ！」

コスモス
「何時直るの！？」

ギロチ
「まぁ、最低二日・・・・・」

コスモス
「ならば・・・・僕の代わりが必要だ」

ギロチ
「だったらコロナにしろよ」

コスモス
「はぁ！？昨日の戦いでネココは零斗によって奪われたのに今度はコロナを・・・・」

ギロチ
「あいつのロボは溶解液を武器にしてんだぜ？ＲＶロボなんて簡単に倒せる」

コロナ
「ちょっと待ちなさいよ！何であたしが？」

コスモス
「君のロボはノリシロンＶに似ているし、僕の影武者となる、ＲＶロボを倒すまで帰ってくるなよ」

という感じである。

コロナ
（あいつを倒して、早くアフレコしないとな）

因みに彼女は芸能界でアイドルをしており、声優をしている。

零斗
「ははははは、いくぜ！」

ＲＶロボはＲＶソードを取り出し、大宇邊御蟲神に攻撃をする、そして大宇邊御蟲神は溶解液を飛ばすが、ＲＶロボにかわされる。

怪光線で攻撃するが、これもかわされる。

ＲＶロボは反撃し、大宇邊御蟲神にダメージを与える。

コロナ

「何すんのよ！（怒）」

零斗
「とどめだ！」

ＲＶロボは大宇邊御蟲神に突進する。

零斗
「ＲＶソード！激走斬り！」

ズバッ！

コロナ
「そ、そんな・・・・・」

ドカァーーーーーーーーーーーーーーン！

大宇邊御蟲神は爆発したものの、零斗のマイティ真拳でコロナは救出された。

そして亀甲縛りをされ、零斗とアリスとゴツ突骨（真名　夕化）とネココに捕食されました（性的な意味で）。

翌日・・・・・

ソウマ達は、零斗を見て驚く、それは、アリスが零斗の右腕にしがみつき、ゴツ突骨は零斗の左腕にしがみつき、

ネココは零斗の背中に抱きついたり、コロナは零斗に抱きついたりしていた。

アリス
「♪～」

ゴツ突骨
「にへへ～♪」

ネココ
「にゃ～♪」

コロナ
「零斗ぉ～♪」

ソウマ
「あの～これは一体・・・・」

零斗
「いやぁ～コロナは道端に捨てられてさ、拾ったんだ。良いだろ～」

姫子
「いやいやいやいや、もうハーレムになってるよ！？」

千歌音
「この小説、カオスになったわね」

ソウマ
「そうだね～」

零斗
「関係ねぇよ。とにかく楽しめ」

ソウマ　姫子　千歌音
「楽しめるかぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

零斗
「仕方ねぇだろ？作者がハーレムにしたいって言った結果がこれだよ」

ソウマ
（そんな事考えてたの！？）

姫子
（っていうか龍の骨さんってどんな人なの！？）

千歌音
（この小説終わってるわね、色んな意味で）

すると、何らかの地震が起きた。

その地震の正体は、オロチロボとノリシロンVだった。

一機目のオロチロボは嶽鑓御太刀神（タケノヤスクナズチ）である。

武夜御鳴神と似ているが、背部にビームウィングが付いており、武装やパワーも武夜御鳴神より強力である。

武器は剣と腕から怪光線・胸から熱線を放つ。

搭乗者はオロチ衆首領格で一の首ツバサである。

二機目は八雄炬御鎚神（ヤツノオノコシズチ）、オールラウンドで戦えるが、零距離戦が苦手。

武器は触手状のドリルと放電。隠し腕がある。

搭乗者はオロチ衆副首領の格、二の首ミヤコである。

彼女はギロチの義姉であり、ツバサ強い忠誠を誓っているシスターである。

三機目は飛埜御鳴神（ヒノアシナズチ）である。何故か右手が以上に大きく、そこに自分の体を入れて体当たりするのが

最大の武器。左手から鎖を出し、相手を行動不能にさせる。

搭乗者はオロチ衆三の首ギロチ。

四機目は火殊羅御雹神（ホノシュライズチ）である。土偶型のロボで、裏表に顔があり、その顔から炎と吹雪を出して攻撃する。

人型にも変形出来る。

搭乗者はオロチ衆五の首レーコである。

彼女は売れっ子学生漫画家であるが、漫画を自分の好きなように書けなくなったというジレンマを抱いている。

そして五機目はノリシロンⅤである。

零斗

「へぇ～ネココとコロナを取り返しに来たのか。残念ながら俺の女になっちまったからな！ビクトレーラー発進！」

するとビクトレーラーが現れ、全てのＶマシンを発進させた。零斗はＶファイヤーに乗り、他のＶマシンを操る。

零斗
「必勝合体！」

全てのＶマシンを合体させ、ＶＲＶロボになった。

零斗
「エンジン絶好調！ＶＲＶロボ！」

ツバサ
「これが噂のＶＲＶロボか」

ミヤコ
「だけどオロチロボに勝てるわけがない」

ギロチ
「何だか知らねぇが、俺の『メガトンパンチ』でぶっ壊してやるぜ！」

レーコ
「早く倒して原稿を仕上げなくちゃ・・・・」

コスモス
「無駄口を叩いている暇はない、やっつけるぞ！」

？？？
「そうはさせない！」
すると武夜御鳴神が現れる。
零斗
「その声はソウマか！武夜御鳴神はもう直ったんだな！」
ソウマ
「あぁ、そんな事よりオロチ衆とノリシロンＶをやっつけるぞ！」
そして二機のロボはオロチ衆とノリシロンＶに立ち向かう。
零斗は飛埜御鳴神とノリシロンＶを相手にし、ソウマは嶽鑓御鳴太刀神と八雄炬鎚神と火殊羅雹神を相手にする事になる。
飛埜御鳴神はメガトンパンチでＶＲＶロボに攻撃するが、防がれる。
左手の鎖を出し、ＶＲＶロボの動きを止めるが、鎖は
簡単に切れてしまう。そしてＶＲＶロボはストレートパンチで飛埜御鳴神を吹き飛ばす。
ノリシロンＶはナイフを取り出し、ＶＲＶロボに攻撃する。ＶＲＶロボはよろけてしまうが、体勢を立て直した。
一方ソウマは三機のオロチロボと互角に戦っている。実は武夜御鳴神を修理したスーパーメカニック社は、修理するとき
嶽鑓御太刀神と同じレベルにカスタマイズしたのだった。

ソウマ
「すごい、兄さんのオロチロボと互角に戦えてる・・・」

ツバサ
「ソウマ！」

レーコ
「どうやって強くなったの？」

そして嶽鑓御太刀神は剣を取り出し、武夜御鳴神に攻撃する。それに続き、火殊羅御雹神は火炎攻撃をした。

更に八雄炬御鎚神は触手状のドリルで武夜御鳴神を縛り付ける。

ソウマ
「うわぁ！だけど諦めない！愛する人を守る為に！」

そして触手状のドリルを破り、八雄炬御鎚神にストレートパンチをした。

武夜御鳴神の両肘からエネルギー弾が発射し、嶽鑓御太刀神に直撃し、動きが止まる。

そして武夜御鳴神は嶽鑓御太刀神に突進する。

ソウマ
「いくぞぉーーーーー！日輪光烈大撃破！」

ドゴォーーーーーーーーーン！

ツバサ
「出番が少ないよＹＯ－－－

ギロチ
「ウワァーーー

「ザ・ミラクルビクトリーアタァーーーーーーック！！！！」

そしてＶＲＶロボと武夜御鳴神はノリシロンＶと火殊羅御雹神に突進する。

ドゴォーーーーーーーーーン！

コスモス
「ウワァーーーーーーーーー

鬼川
「ふふふ、あのコスモスを倒すなんて、面白いなぁ～四天王三人目のジェイル・スカリエイティに勝てるかな？」

鬼川の笑い声が、金山企業に響いた。

第三十四話　処刑人散る（後書き）

本当にカオス過ぎてごめんなさい、反省しています。

次回からリビングタイム２です。

この小説がカオス過ぎると読者に言われたので反省しています。

ですので温かい目で見守って欲しいです。お願いします。

リビングタイム2（前書き）

今回は零斗が重大な発表をします。

そしてゲストキャラが来ます。

零斗

「今回は男だけの会議だぞ」

リビングタイム2

アックスの豪邸のリビングにて・・・・・

零斗はユーノとシャッハがエッチするビデオの『ツンデレシスターと学者フェレット』を鑑賞をしている。

もちろん、アックスと蔡ボウに許可を取っている。

零斗
「いや～いいね～ユーノ、後ろから攻めるとは、こりゃシャッハは色んな意味で堕ちるよ」

すると、ドアが開き、あるゲストキャラが現れる。

『ディケイドｉｎクロスワールド』の十六夜朔夜と『真・恋姫無双～新たなる外史～』の劫火紅炎と月鋭蒼刃である。

そしてアックスが来て、ソファーにくつろぎ、零斗はテレビのリモコンでテレビの電源を消した。

朔夜
「で、俺たちを呼んだのは？」

零斗
「お前達を呼んだのは他でもない・・・・・・・それは・・・・・」

アックス　朔夜　紅炎　蒼刃
「それは？」

零斗
「次のリビングタイムで質問コーナーを開きたいと思う！」

アックス
「それってどういう・・・・」

零斗
「烈火竜さんの質問があったとき、レスで答えてしまったからだ。これはいけません」

紅炎
「だから？」

零斗
「レスで答えてもつまらないので次のリビングタイムで質問コーナーを開きたいと思います」

蒼刃
「へぇ～つまりこの小説の作者が他の小説を読んで質問コーナーがあったりしたので、ゾンビゲーム　バイオハザードクロニクルズとＢＳＡＡ学園に質問コーナーを開こうと思ったと言いたいのか？」

零斗
「何故それを・・・・」

蒼刃
「コロナから聞いた」

零斗

「コロナめ～帰ったらお仕置きだ、全裸にさせてその後亀甲縛りをしてやる」

紅炎
「ブーーーーーーーッ！」

紅炎は鼻血を噴出して倒れた。

零斗
「おーい、お前が倒れてどうする～？」

蒼刃
「使い物にならないね、色んな意味で」

朔夜
「おいおい、零斗の話が始まってから一分だぞ？」

現在、アックスが紅炎を介抱しているのでしばらくお待ちください。

零斗
「という訳で、質問コーナーの話は終わりだ、次に今後のＢＳＡＡ学園についてだ」

アックス
「そうだね、これからのＢＳＡＡ学園を考えないと」

零斗
「この小説、カオスになり過ぎて大変な事になっています」

朔夜

「そうだな」

零斗
「なので、これからカオスにならないように我武者羅に好きなアニメキャラとゲームを取り入れないようにすると作者は言っています」

朔夜
「まぁそうだよな」

零斗
「だってニックおじさんにノリシロンは出て、ＲＶロボがソウマが操縦をしているとかスティーブがビクトレーラーの製作者等はカオスだからと言って、作者はようやくその事に目を覚まして反省をしているようだ。『ＢＳＡＡ学園！』が終わったとき、その二期の『ＢＳＡＡ学園！三学年だよッ！』を作るときにその反省を生かして書くそうだ」

蒼刃
「でもさ、それ『ＢＳＡＡ学園！』が終わったら製作する予定あるの？」

アックス
「作者によるとあるそうです。ただ、金山四天王を倒して、金山企業に潜入して潰して最終回にする予定だ」

零斗
「おい！ネタバレすんな」

紅炎
「けど、この小説エロティックがあるぞ」

零斗
「それは作者がエロティックを入れれば学園物らしくなる。あまりバトル要素を入れすぎると学園物では無くなってしまうと言ってました」

蒼刃
「じゃあだったらさ、ボーイズラブ要素を入れれば?」

零斗
「例えば?」

蒼刃ビジョン開始

レスターとアバディーンが半裸になっている。そしてアバディーンがレスターに迫る。

レスター
「アバディーン、君はミネットのコアが狙いなんじゃ・・・・」

アバディーン
「ミネットのコア等、どうだっていい、俺の狙いはお前だ・・・」

するとアバディーンがレスターを押し倒す。

レスター
「やめろ、ミネットに見られる!それにミリアムに見られるんだぞ!」

アバディーン

「大丈夫だ、真夜中にミネット達が起きる筈がない、さぁ俺と・・・・」

レスター
「アバディーン・・・」

蒼刃ビジョン終了。

紅炎
「何考えてんだ！」

蒼刃
「何が？」

紅炎
「この小説にボーイズラブ要素を入れたら完全に終わる！それにそれを嫌う男性陣の方々に冷たい目で見られるだろうが！」

蒼刃
「そうなの？」

零斗
「え～ボーイズラブ要素を入れてしまった事に深くお詫び申し上げます。これから俺（と作者）が切腹するのでそれで許してもらいたい。では、切腹を・・・・」

アックス
「辞めろぉーーー

そしてアックスは叫んだ。

零斗
「俺が死んだらこの小説が終わります。ボーイズラブ要素を入れてしまったお詫びに、ナース姿のミネットのポスターを差し上げます」

アックス
「てかあるのかい？」

零斗
「あと、チャイナ服のカリーナとメイド服のチェルシーとセーラー服のアニエスとバニーガールのトルティア姉妹とそれから・・・・」

紅炎
「長いからやめろ！」

零斗
「本当にグダグダですみません。という訳でＢＳＡＡ学園とゾンビゲーム　バイオハザードクロニクルズの感想欄に質問をどしどし書いてくれ。もちろん自分の小説のキャラの感想＆質問もＯＫ。もし自分の小説がない場合は好きなアニメキャラとマンがキャラとゲームキャラの感想＆質問もＯＫだ。締め切りは次のリビングタイムだ」

朔夜
「読者の質問、待ってるぞ」

アックス
「これからの『ＢＳＡＡ学園！』と『ゾンビゲーム　バイオハザードクロニクルズ』をお願いします！」

こうして零斗と朔夜と紅炎と蒼刃は帰っていった。

リビングタイム2（後書き）

【やせいじん】先生、【睦月冬夜（門矢光）】先生、ありがとうございました。

あと、感想欄に悪口等はやめてください。

第三十五話　みっちゃんとサクヤ（前書き）

零斗
「遂にサクヤの彼女が・・・・」

クリス
「はいはい、本編スタート～」←やる気なさそう。

第三十五話　みっちゃんとサクヤ

公園の噴水の近くで、サイダーを飲むクリスと零斗の姿があった。
二人は何を話しているかというと、ストライクウィッチーズの事だった。

零斗
「クリス～ストライクウィッチーズに喧嘩売るなよ？」

クリス
「まぁ気を付けるよ」

零斗
「あと、クラウザーのおやっさんがペリーヌと対決したり、ビリーがリネットのおっぱいの為にリネットを追いかけるわ、クリスとレオンとバリーのおっさんがストライクウィッチーズによって北極に飛ばされたりで、アックスが学校を欠席してまでクリスとレオンとバリーのおっさんを助けたんだからな」

クリス
「すまない・・・・」

零斗
「あと、ストライクウィッチーズとバイオキャラとの協定を無理や・・・うまく結んだからな」

クリス
「今無理矢理って言いそうになったろ？で、あとオロチ衆のネココ

とコロナは零斗の愛人とか言ってたけど、実際ではどうなんだ？」

零斗
「いやぁ～俺さぁ～オロチ衆のネココとコロナを調教したらさ、俺にくっついて来たんだ」

クリス
「お前、二年生なのにハーレムを築いたなぁ～」

零斗
「いやいや～俺はこれから可愛い子ちゃんを悪から引き戻して調教するつもりだよ～」

クリス
「おいおいそんなに増やすと、収拾がつかなくなるぞ。そして体がもたなくなるぞ」

零斗
「俺は不良少女とか調教して自分の物にして、そして俺によって調教された女の子に囲まれた～い」

クリス
「はいはい、それは頑張れ～（棒読み）」

零斗
「何だよクリス～羨ましいか？」

クリス
「別に・・・・・」

その時ストライクウィッチーズの一人、宮藤芳佳が零斗達の方へ向かって来る。

クリスは冷や汗を流すが、芳佳は元気がなさそうだ。

零斗
「あれ？宮藤が元気なさそうだぞ？」

零斗は芳佳の方へ行き、話しかける。

零斗
「よう！久しぶりだな」

宮藤
「あ、お久しぶりです、北郷さん」

零斗
「おっと、俺を北郷と呼ぶのは止してくれ。あいつと被るから」

宮藤
「あいつ？」

零斗
「俺を零斗と呼ぶように、以上！」

宮藤
「あははは（苦笑い）」

零斗
「ところで、どうしたんだ？元気ないぞ？」

宮藤
「それが、昨日見ちゃったんです」

零斗　クリス
「昨日？」

宮藤
「それは、とあるビルの屋上で、みっちゃんと」

零斗
「ちょっと待った。みっちゃんって誰だ？」

宮藤
「みっちゃんは、山川美千子のあだ名です」

クリス
「あぁ、いつも宮藤と登校をしている子か」

零斗
「俺が教えたの覚えたな～」

宮藤
「そのみっちゃんが、とあるビルの屋上でみっちゃんと八歳ぐらいの男の子とキスしちゃったんです」

すると雰囲気が固まる。

クリス
「ウソォーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

零斗
「おいおい～見たんだろ？エッチしちゃったのか？山川美千子とその年下の子と」

クリス
「おい！流石にそれはないだろ！」

宮藤
「エッチしてました」

クリス
「えぇーーーーーーーーーーー！！！！！」

クリスは更に驚く。

零斗
「マジで！あの二人から何か聞えなかったか！？」

宮藤
「はい、確かみっちゃんは『サクヤ君、あの夜の事、覚えてる？』と言ってました」

零斗
「サクヤ？まさかあの蝙蝠がサクヤに変な事を教えたのか！？」

宮藤
「？」

クリス

「？」

零斗
「悪ぃ、用事思い出した」

零斗はサクヤとクルの元へ走っていった。宮藤とクリスは唖然とする。

そんなわけでサクヤの家に着きました。

サクヤが出迎えてくれて、リビングまで案内された。

クル
「やあ～零斗さ～ん今日は何か・・・・」

すると零斗はクルを掴む。

零斗
「クル、サクヤに何教えた？」

クル
「何も教えてません！」

零斗
「おいおい～嘘はダメだぜ？ちゃんと正直に言わないと、芳佳から聞いたぞ？サクヤが山川美千子と付き合っているんだってな」

クル
「知らなかったんです！まさかサクヤ様が山川美千子という女の子と付き合っているとは・・・・」

サクヤ
「零斗お兄ちゃん、やめて。僕自身で美千子に告白して恋人同士になったの・・・・」

零斗
「庇わなくていいぞ～」

サクヤ
「本当の事を言っただけ、でも美千子には秘密があったの」

零斗
「？」

サクヤ
「あのコスモスに呪いの魔法をかけられたの、毎日エッチしないと寿命が縮んじゃうの」

零斗
「・・・・・こいつは驚いた」

サクヤ
「美千子が呪われる前に、僕は美千子を見ていると胸が熱くなったの・・・そんなある日、コスモスが美千子を襲おうとしているのを見て、変身して助けたの・・・・でも美千子の右の太ももの内側には呪いの刻印があったの。でもその刻印、エッチしないと寿命が縮むようになってるの」

零斗
「あの野郎が死んでも刻印は消えないって訳か」

事情を知った零斗は、サクヤの家を出た。

そして零斗は、池袋の街中を歩いていた。

次の日・・・・・

公園の噴水の近くでは、ストライクウィッチーズとクリスの姿が見えた。

零斗はクリス達の方へ走っていった。

零斗
「おぉーーーーーい、クリスーーーーーーーー」

クリス
「零斗！」

零斗
「どうしたんだ？あれ？ストライクウィッチーズの皆さんじゃないですか～お久しぶりです！」

ミーナ
「お久しぶりね、零斗君」

坂本
「ははははは、久しいな！零斗！」

零斗
「ところでどうしたんですか？こんなに集まって」

シャーリー
「宮藤から聞いたぞ、あの山川美千子という子、年下の男の子と付き合っているんだってな」

バルクホルン
「しかも毎日性行為しているんだってな」

零斗
「あれぇ～？ご存知だったんですか～しかし真実があるんですよぉ～」

ストライクウィッチーズ　クリス
「真実？」

零斗
「実は～」

零斗がストライクウィチーズに山川美千子が呪われている事を話した。

これを聞いたストライクウィッチーズは驚く。

ミーナ
「コスモスに呪われて・・・・」

零斗
「あぁ、何でもエッチしないと寿命が縮むらしい」

坂川

「あいつが死んでも呪いはかけられっぱなしという事なのか」

リネット
「そんな・・・・・」

零斗
「でもあの二人はうまくいっている、だから邪魔はするな」

サーニャ
「確かに人の恋路の邪魔は良くないですね」

エイラ
「サーニャの言う通りだ。人の恋路の邪魔をする奴は最低だ」

零斗
「まぁ、これで解決だな」

クリス
（あれ？いつの間にルッキーニとエーリカとペリーヌがいないぞ？）

そして夕方になり、クリスはアックスに豪邸に招待されたため、ハマーで向かう。

アックスの豪邸へ着き、豪邸の門が開いた。

クリスが豪邸の扉を開くと、そこにはコスプレしたミネットとルッキーニとエーリカとペリーヌだった。

因みにミネットは『ストライクウィッチーズ』のサーニャ・Ｖ・リトヴャクのコスプレで、ルッキーニは『リリカルなのはＳｔｒｉｋ

ｅｓ』のスバル・ナカジマのコスプレで、エーリカは『びんちょうたん』クヌギたんのコスプレで、ペリーヌは『ローゼンメイデン』の真紅のコスプレである。

どれも中の人繋がりである。

クリス
「あの～一体どういう集まりなんですか？」

ミネット
「理事長は文化祭ではコスプレで来てＯＫと言われたので」

ルッキーニ
「だからあたし達がコスプレしてみたの～」

エーリカ
「あれぇ～もしかして興味あったのかな～？」

ペリーヌ
「まったく、私はやらないと言ったのですが、ミネットに負けましたわ」

これを見て唖然するクリスであった。

その後、アックスと蔡ボウが出てきて、付き合わされたとさ。

次の日・・・・・

２年Ａ組の朝のホームルームでは、文化祭の事についてだった。

諸葛亮
「みなさ～ん、コスプレの準備は出来ましたか～？理事長がコスプレして来てもいいとの事なので～」

ミネット
「はい、準備が出来ました～」

諸葛亮
「ミネットさ～ん、どんなコスプレですか～？」

ミネット
「それは文化祭でのお楽しみです～」

零斗
「俺も準備出来たぜ、それは文化祭でのお楽しみって奴だ」

こうして、２年Ａ組の朝のホームルームは、文化祭の話とコスプレの話で盛り上がったという。

第三十五話　みっちゃんとサクヤ（後書き）

零斗
「次回から文化祭編になる！ここで作者と俺からのお願いだ、次回から文化祭なので～ゲスト出演依頼を募集を開始したいと思う、なので自分の小説のキャラを出演させたいときには感想欄に書いてくれ。次回も読んでくれよな！あと、ストライクウィッチーズも参戦するぞ！」

フランケン
「遂に待ちにまった文化祭が・・・・」

キャラ設定2（前書き）

今回はキャラ設定2です。文化祭編を期待していた皆さん、申し訳ありません。

キャラ設定2

川崎純一

イメージＣＶ　梶裕貴

特徴　緑髪のロングヘア　顔立ちはリリカルなのはのクロノに似ている。

修学旅行編から登場、２年Ｂ組の生徒である。百花繚乱真拳奥義の継承者だが、過去にいじめられたという事があった。その為金山企業に入ったが、三国ガールズと零斗の攻撃によって敗北し、金山企業から離れた。その後零斗の仲間になり、金山企業についての情報収集とＢＳＡＡ学園の生徒や教員の情報収集の役をやっている。そして敵の攻略法をすぐに出したりする。現在では金山企業についての情報収集の為、休学中である。

サスケ

イメージＣＶ　斎賀みつき

特徴　青髪のポニーテール。普段はＢＳＡＡ学園の学生服を着ているが、情報収集や戦闘時には忍者服を着ている。

中盤から登場、２年Ａ組の生徒であり、竜王党の元頭領である。（現在の頭領はキャロである）

竜王党とは、戦国時代で作られた忍者集団である。現世では滅んだと思われるが、実際ではサスケによって密かに復興させた。金山企業の忍者が現れたとの気配を感じ、零斗の前に現れたが、零斗はこ

れを『不法侵入』と見なされ、勝負をするが、クリスとレオンと零斗によって敗北した。その後ＢＳＡＡ学園に帰国子女として転校してきた。川崎と同様、情報収集の役をやる。武器は小太刀と十字手裏剣である。
現在では川崎と共に情報収集の為、休学している。

ポイズン・カルロ

イメージＣＶ　緑川光

特徴　髪型と顔は恋姫の左慈に似ている。

三話から登場、零斗と同じマイティ真拳使いである。暴走族集団ブラッド・スコーピオンのリーダーである。初代マイティ真拳の継承者を殺害したり、生徒失踪事件を起こした張本人である。しかし実際では金山企業によって命じられた事であり、本人はそのつもりはなかったが、囚われている妹の為にやった事である。一度は零斗に勝つものの、二度目で敗北し絶望をしていた。零斗と和解したのだが、殴り飛ばされる。その後妹を助ける為にバイクに乗って零斗と連絡する形で去っていき、消息不明となるが、コスモスに捕らえられ、処刑されるところだったが、零斗と川崎によって助けられた。

鳳統（真名　雛里）

ＣＶ　後藤邑子

特徴　ツインテールで、原作の帽子をかぶっているが、青いマントをつけており、マイクロビキニを着ている。まれに原作の衣装を着る事がある。星型のステッキを持っている。

性格　原作とは異なり、艶事に関しては積極的。

ＢＳＡＡ学園の教師、理科を担当をしている。魔術真拳奥義の継承者。零斗に次ぐボケ役である。たまに『あわわ』と言うこと（例えば惚れ薬を作るときに爆発した時と、怪しげなアイテムを完成した時等）がある。水鏡大学を諸葛亮（真名　朱里）と共に飛び級で入学した。その時は『あわわ』と言う事が多かった。しかし、金山企業に追われる所を魔術真拳の継承者に助けられ、弟子になった。時が経つことに魔術真拳の継承者となった。そのせいで艶事に関しては積極的となり、『あわわ』と言うのは少なくなった。
ＢＳＡＡ学園では一刀を自慢のボディで落としている。（だが一刀は愛紗と朱里に制裁を受ける事になった）零斗と組んでいたずらするのが楽しみである。（桂花を落とし穴で落としたり、パイを思春の顔に
ぶつける等）

三国ガールズ
葡萄紫苑と赤川祭と銀河桔梗が零斗と鳳統先生によって結成された魔法少女であり、星型のペンダント『マジカルペンダント』で三国ガールズになる。変身するとき、三国ペンダントをかざし『リリカルマジカル無双戦士マジカルチェンジ』と唱える。そしてパープルプリンセスが『愛と平和を守る』と言い、レッドプリンセスが『ちょっとお茶目な女の子トリオ』と言い、シルバープリンセスが『マジカル無双戦士』と言い、三人同時に『三国ガールズ見参！』と言う。そして必殺技はなのはのスターライトブレイカーを上回る『トライアングルバスター』を放つ。

葡萄紫苑

イメージＣＶ　田村ゆかり

特徴　紫色のツインテール、顔は璃々にそっくり

性格　明るい上に無邪気

修学旅行編に登場した少女。しかし正体は零斗によって幼女化された黄忠である。

鳳統先生の魔法で三国ガールズのパープルプリンセスになる。一人称は『ボク』

姿は多分幼少期の黄忠と思われる。好きな物は葡萄ジュース。パープルプリンセスになった時、

『紫の色は葡萄色、パープルプリンセス』と名乗る。武器は薙刀のマジカルランス。

一刀を『お兄ちゃん』と呼ぶ。

赤川祭

イメージＣＶ　能登麻美子

特徴　赤色のポニーテール　顔は小蓮にそっくり

性格　活発的で明るい

紫苑と同じく登場した少女。正体は紫苑と同じく幼女化された黄蓋である。レッドプリンセスに変身する。姿は幼少期の黄蓋だと思われる。

レッドプリンセスになった時『赤の色はイチゴ色　レッドプリンセス』と名乗る。

好きな物はイチゴショートケーキ。武器は弓矢のマジカルアローである。一刀を『にぃ』と呼ぶ。

銀河桔梗

イメージＣＶ　今井麻美

特徴　銀色のショートヘア　顔は蒲公英にそっくり

性格　大人しい上に少し暗い。

紫苑と同じく登場した少女。正体は紫苑と同じく幼女化された厳顔である。シルバープリンセスに変身する。姿は幼少期の厳顔だと思われる。
シルバープリンセスになった時『銀の色は銀河の色　シルバープリンセス』と名乗る。
好きな物は肉まん。武器は刀のマジカルブレードである。一刀を『兄様』と呼ぶ。

金山企業

コスモス・グランド

イメージＣＶ　岡本信彦

特徴　黒いフード付のパーカーを着ており、ジーパンと黒いスニーカーを履いている。

性格　冷酷

夏休み編に登場したキャラであり、金山四天王の一人目。闇魔術真拳の使い手。師匠はオズムンド・サドラー。カルロを捕らえ、処刑しようとしたが、零斗とメガレンジャーによって失敗に終わる。更にネウロイを使って日本を金山企業の物にしようとしたが、クリスとレオンと零斗とストライクウィッチーズによって失敗に終わり、零斗に倒されると思ったが、実は幻術を使って逃げ出した。そしてオロチ衆と組み、ノリシロンを使って来栖川姫子と姫宮千歌音を捕らえようと企むが、零斗とソウマによって失敗し、ノリシロンが大破される。脱出はしたが、仮面ライダークルセイド（サクヤ）によってトドメを刺され、砂となって死亡。その時に山川美千子に呪いを掛けた。幼少期にいじめられた事があり、その時にサドラーに助けられ、弟子になった。数年経ち、闇魔術真拳の継承者となった。

キャラ設定2（後書き）

次回は文化祭編になります。ご期待ください。

第三十六話　文化祭だぜ！（前書き）

今回は文化祭編です！

零斗

「ゲストが出るぞぉ～」

第三十六話　文化祭だぜ！

ＢＳＡＡ学園の文化祭、それはＢＳＡＡ学園のメインイベントである。

アニメキャラとゲームキャラと特撮キャラ等がやって来る事がある。

お化け屋敷やメイド喫茶等あったりする。

そして零斗とその愛人達はＢＳＡＡ学園の文化祭を楽しんでいる最中だった。

コロナ
「ねぇ～零斗ぉ～」

ネココ
「零斗様～」

ゴツ突骨
「あぁ～ん零斗ぉ～お尻さわってぇ～」

アリス
「もぉ～零斗ぉ～今日は私と一緒じゃないの！？」

コロナ
「ちょっと！零斗は私と一緒にいるという約束をしてるの」

ネココ
「違うにゃーの！零斗様はにゃーと一緒と言ったにゃーの！」

ゴツ突骨
「何言ってんだ！今日一日あたいと一緒だぞ！」

そして四人の口喧嘩が始まる。

これを見た零斗は・・・・・

アリスにキスをして胸を触ったり、ゴツ突骨の尻に触ったり、コロナに後ろからスカートめくったり、ネココにディープキスをした。

そして四人はしっとりしてしまう。

零斗
「喧嘩したらお仕置きだぞ？それと今日は文化祭だからお前等四人は俺と一緒だからな。そして夜はエッチしてやるから」

アリス　ゴツ突骨　コロナ　ネココ
「やったぁーーーーーー！！！」

そして四人は零斗の発言により、喜んだ。

一方、諸葛亮先生は・・・・

諸葛亮
（うぅ～今日はカップルばかりですぅ～）

進鵺
「ハスナ～」

ハスナ
「進鵺さ～ん♪」

爆発王の看板の子供達の天王寺進鵺とハスナ＝ソウ＝エディカシアである。現在はいちゃついている。

諸葛亮は当然嫉妬するが、嫌な予感しかしないので二人から離れた。

そしてフランケンは・・・・・

フランケン
（まったく、この日の文化祭はカップルが多すぎる・・・・諸葛亮の先生の気持ちは大体解るような気がした。何て考えても仕方がないか、そういやライアン達にお好み焼きとたこ焼きとイカ焼きを頼まれたっけな、さっさと行かないと）

洋基
「お、いらっしゃい！お好み焼きとたこ焼きとイカ焼きはどうや？おいしいやで？」

『白夜叉と鈴鳴の鬼』の洋基がお好み焼きとたこ焼きとイカ焼きを売っている。

フランケン
「はぁ～」

洋基
「ん？どうした？そこのお客さん？ってフランケンやないか、久しぶりや～どうしたん？」

フランケン
「洋基か久しぶりだな、この日の文化祭、カップルが多いと思わないか？」

洋基
「え？多い？俺は少ないと思ってたで？」

フランケン
「それが多いんだよ！蔡ボウとアックスはいちゃいちゃしてるし、キャロとエリオのいちゃいちゃしてるし、ユーノとシャッハはいちゃいちゃしてるし！零斗は四人の女の子といちゃいちゃしてるし！」

洋基
「（ゼットーの所、カップルって言うんか？）まぁヤバくなったらお前がツッコめばいい話や、もし問題になりそうなタイミングやで？」

フランケン
「はぁ、ありがとよ。あ、そうだ、ライアン達に頼まれたんだった」

そしてフランケンはライアン達の分と自分の分のたこ焼きとお好み焼きとイカ焼きを買った。

体育館では・・・・

三成
「家康はどこだ！この私から逃げたというのか！？」

『異世界合戦記録リリカルＢＡＳＡＲＡＳｔｒｉｋｅＳ～天下分け目の魔法戦記～』の石田三成である。

家康を憎んでいるため、捜しているようだ。てか右手にフランクフルト、左手にわたあめを持って家康を捜すのはどうかと思う。

朔夜
「そこのあんた、どうしたんだ?」

『ディケイドinクロスワールド』の十六夜朔夜が通りかかった所を家康を捜している三成に声を掛けた。

三成
「貴様は・・・・」

朔夜
「十六夜朔夜だ、あんたどうしたんだ?」

三成
「実は私は家康を討とうとこの学園にやって来たのだが・・・・」

朔夜
「ていうかフランクフルトとわたあめ持って家康を討とうと捜すなんて説得力がないぞ」

三成
「これは家康を倒すために腹ごしらえをしてるのだ!」

朔夜
(無茶苦茶だな、この人)

朔夜は三成に家康の居場所を教え、三成はその場所へ向かった。

朔夜
（あの人、どこかで見たような・・・・）

一方、ライアンは・・・・・

ライアン
「ん？あれはストライクウィッチーズ！？でもコスプレしてるぞ・・・？」

そう、ＢＳＡＡ学園の文化祭はコスプレして来てもＯＫだという。

ミーナは『ハヤテのごとく！』のマリアのコスプレ、バルクホルンは『ぷよぷよフィーバー』のアルルのコスプレ、ハルトマンは『びんちょうたん』のクヌギたんのコスプレ、そして坂本は『撲殺天使ドクロちゃん』の三塚井ドクロのコスプレ、シャーリー（シャーロット・Ｅ・イェーガー）は『コードギアス　反逆のルルーシュ』の紅月カレンのコスプレ、エイラは『咲ーＳＡＫＩ－』の沢村智紀のコスプレ、芳佳は『ＢＬＡＣＫ　ＣＡＴ』のイヴのコスプレ、リネットは『交響詩篇エウレカセブン』のエウレカのコスプレ、サーニャは『祝福のカンパネラ』のミネットのコスプレ、ペリーヌは『ローゼンメイデン』の真紅のコスプレ、ルッキーニは『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ』のスバルのコスプレをしている。

ライアン
「おいおい！中の人繋がりじゃねぇかぁーーーーーーー！！！！！」

いいじゃないかライアン君、こういうの好きだからさ・・・

ライアン
「おいぃーーーーーーー！！！！更にカオスになるぞ！」

ミーナ
「あらあら、文化祭は楽しまなくちゃ損よ」

芳佳
「そうですね」

ライアン
「っておい！芳佳！イヴは金髪だぞ！？」

芳佳
「細かい事は気にしないで下さい」

ライアン
「せめて金髪のロングヘアの桂を被ろうよ！それにルッキーニはスバルのコスプレだよな！？リボルバーナックルとマッハキャリバーはどうしたの！？」

ルッキーニ
「え～面倒くさいから付けない」

ライアン
（あーあ、スバル泣くだろうな・・・・・）

そう思いながらフランケンを待つライアンであった。

お化け屋敷の前では・・・・

父（魔王）
「いや～これがＢＳＡＡ学園のお化け屋敷か～」

ピッケル
「何だか、怖くなさそうだね」

『父が魔王で息子が勇者で！？』の父（魔王）とピッケルが立っていた。

因みにピッケルは勇者である。

父（魔王）
「見た目で判断しちゃダメだ、行ってみなよ」

ピッケル
「うん・・・」

ピッケルはお化け屋敷に入った。

数分後・・・・・・

ピッケル
「ウワァーーーーーーーーーーーー！！！！！」

お化け屋敷からピッケルの悲鳴が響いた。お化け屋敷の中はご想像にお任せします。

そしてお化け屋敷の出口からピッケルが出てきた。しかも涙目をして、どうやら怖かったようだ。

ピッケル
「こ、怖かったよぉ～（泣）」

父（魔王）
「情けないぞ、もう一回だ」

ピッケル
「無理ぃーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

とそこへ呂布トールギスが通りかかる。

父（魔王）
「お父さんの拳は痛いぞパァ～ンチ！」

どごぉーーーーーーーーーーーーーー！！！！！

呂布トールギス
「うわぁーーーーーーーーー！！！！！」

父（魔王）の必殺技で呂布トールギスは一直線に吹っ飛んだ。

ピッケル
「お父さん！その人先生だから！」

父（魔王）
「先生と言って実は不審者だったらどうするんだ！」

ピッケル
「絶対に先生だから！ネームプレートを見れば解るでしょ！？」

するとそこへ零斗と鳳統先生が現れた。

零斗
「いい腕をしているな、俺達と組まないか？」

鳳統
「今なら私の裸姿を披露するわよ～」

父（魔王）
「断る・・・・・」

零斗
「何？」

父（魔王）
「それで俺が乗ると思ったら大間違いだぞ」

ピッケル
（父さん・・・・）

父（魔王）
「芋長の芋羊羹くれたら仲間になってあげる！」

そしてピッケルはずっこける。

零斗
「そう思って用意したぜ」

零斗は芋長の芋羊羹の十個分を取り出し、父（魔王）に渡した。

零斗
「よーし、真田幸村と伊達政宗と徳川家康と対決する準備が整った」

鳳統
「これで私達は戦えるわね」

父（魔王）
「あのさ～、ピッケルを加えてみないか？」

ピッケル
「何言ってるの！？僕は参加は・・・・」

零斗
「よーしけってぇ～い！皆でグランドに行きましょ～」

鳳統　父（魔王）
「おぉ～♪」

ピッケル
「絶対に嫌だぁーーー

孫権ガンダムは扉の隙間から覗くとエリオとキャロがエッチしていた。

これを見て唖然する孫権ガンダム。

孫権ガンダム
（これは、見なかったことにしよう）

そして孫権ガンダムは保健室から立ち去った。

一方グランドでは、『異世界合戦記録リリカルＢＡＳＡＲＡＳｔｒｉｋｅｒＳ～天下分け目の魔法戦記～』の伊達政宗と真田幸村と徳川家康が零斗達の前に立っていた。

政宗
「お前等、俺達とｂａｔｔｌｅしたいと言ってたよな」

零斗
「まぁそんな感じ」

幸村
「ならば勝負でござる！」

零斗
「待った、その前に対戦相手を決める、俺は政宗で、鳳統先生は幸村、父（魔王）は家康だ」

家康
（ワシは魔王と戦うのか・・・・嫌な予感しかしないが・・・・）

零斗
「準備はいいか～い？」

政宗
「ＯＫだ！」

幸村
「いつでもいけるでござる！」

家康
「ワシもだ！」

零斗
「よ～し、くらえ政宗！マイティ真拳奥義！コピートークン召喚！」

コピートークンは、相手の姿と能力をコピーし、相手の姿になるトークンである。

コピートークンは黒い伊達政宗になった。

政宗
「おいおい！そりゃねえだろ！」

零斗
「コピー政宗はしゃべらないからな！いけ！コピー政宗！」

そしてコピー政宗は政宗に襲い掛かろうとするが、あっさり斬られた。

政宗

「お前、弱いのしかだせねぇのか？」

零斗
「はっはっはっはっはっはっはぁ～お前はコピー政宗を甘く見たなぁ～、見ろ！」

政宗は斬られたコピー政宗を見ると、コピー政宗は自己再生していた。

これに驚く政宗。

政宗
「おいおい、ヤバいぜ、ならばＤＥＡＴＨＢＩＴＥ！」

しかしコピー政宗もＤＥＡＴＨＢＩＴＥを発動した。

零斗
「ははははどうだ？」

政宗はコピー政宗に苦戦する。

一方幸村と鳳統先生は・・・・・

幸村
「なんという事だ・・・・・」

幸村は鳳統先生に苦戦していた。

鳳統
「あらあら～じゃあ本気出さないとね～」

すると鳳統先生は服を脱ぎ、マイクロビキニ姿になった。これを見た幸村は・・・・・

幸村
「は、破廉恥でござるよぉーーー

「大技かよ！ＣＲＡＺＹＳＴＲ・・・・」

ドゴォーーーーーーーーン！

コピー政宗は政宗に直撃し、爆発した・・・・そして政宗は黒焦げになった。

零斗
「あぁ～楽しかったぁ～」

鳳統
「そうね～」

父（魔王）
「いや～実に楽しめたよ」

ピッケル
（僕は全然楽しめてないよ・・・・・）

家康
「うぅ～ワシの扱いはこんなに酷いのか・・・・・」

家康さん、ごめんなさい・・・・・

そして零斗達は体育館へ行き、張三姉妹のコンサートを見ている。

その頃の政宗達は保健室で休んでいる。

三成はどうしているかというと・・・・

三成
「俺の刀が真っ赤に燃えるぅーーーーーー！！！！家康を倒せと轟き叫ぶぅーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

と言ってグランドの中心で刀を持って一人で叫んでいた。

おまけ

呂布トールギス
「零斗！今日は貴様と勝負・・・・・」

すると零斗はＲＰＧのロケランを取り出し、呂布トールギスに撃った。

ドゴォーーーーーーーーーン！！！

呂布トールギス
「ギャアァーーーーーーーーーーーー！！！！！魂ぃーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

と叫びながら空のかなたまで飛んでいった。

第三十六話　文化祭だぜ！（後書き）

光軍さん、門矢光さん、ｃｈａｒｌｅｙさん、ｓｉｂｕｇａｋｉさん、爆発王さん、ありがとうございました。

零斗

「次回はクリスの恋騒動編だ！」

質問募集中です。

第三十七話　かっこ悪いキャラをかっこよくする（前書き）

今回はあるユーザーからのリクエストです。

第三十七話　かっこ悪いキャラをかっこよくする

新宿の映画館『ビッグムービーシアター』、その映画館から少女が出た。

サーニャ

「『バイオハザード？　アフターライフ』のクリスさん、かっこよかったな～何だかクリスさんの事が、好きになって・・・・」

映画館から出てきたのはサーニャであり、『バイオハザード？　アフターライフ』を見終え所である。

しかもクリスに恋心を抱き、そしてサーニャは『ＢＳＡＡ学園！』のクリスについて考えていた。

サーニャ

「でも、この小説のクリスさんは・・・・・」

サーニャビジョン開始

屋上でのサスケ戦では、零斗がジャスタウェイダンスをしている隣では、クリスもしていた。

そして夏休み編のコスモス戦では、クリスが零斗に召喚されるという。

サーニャビジョン終了

サーニャ

「もうこの小説では、クリスさんはかっこ悪いままでしょうか・・・・でもそんなの嫌です・・・・」

そしてサーニャはクリスについて相談しに、零斗の家へ向かった。

その頃、零斗の部屋では・・・・・

曹操ガンダムと零斗は、男女交際について話していた。何故ならアリスとエッチしすぎについて話していた。

曹操ガンダム
「零斗、アリスの恋人になるのはよいが、エッチのしすぎはやめたほうがいい、アリスが妊娠したら責任をとれるのか？」

零斗
「まぁ、何とかしますよ、マイティ真拳の継承者ですから」

曹操ガンダム
「いや、そういう問題ではない、それにお前はハーレムを築いたのではないか？」

零斗
「いいじゃねえか、マイティ真拳の継承者だし、それに俺は悪の組織に入っているかわい娘ちゃんを調教するのが趣味なの！」

曹操ガンダム
「お前・・・・そんな趣味だったのか・・・・・（泣）」

と滝のように涙を流す。

クラウザー
「おーい零斗ぉ～お前の客が来てるぞ～」
下の階からクラウザーが零斗を呼ぶ。
零斗
「お～うおっちゃ～ん、今行くぞぉ～」
曹操ガンダム
「あ、コラ！余の話はどうする！」
しかし零斗は無視して下の階へ行った。
曹操ガンダム
「・・・・・（泣）」
そして曹操ガンダムは再び滝のように涙を流す。
玄関前では・・・・
零斗
「おぉ～芳佳とサーニャじゃねーか！どうした？」
宮藤
「サーニャちゃんが零斗さんに相談があって来ました」
サーニャ
「失礼します」
零斗

「まぁ、話は俺の部屋だ」

宮藤
「そうですね」

零斗達はそのまま零斗の部屋へ行った。

曹操ガンダム
「零斗！余を無視するとはどういう事・・・・」

ドゴォーーーーン！

零斗は曹操ガンダムを床にスパーキングをし、これを見た芳佳とサーニャは驚く。

宮藤
「あの・・・・」

零斗
「気にすんなってスパーキングをしたぐらいで死なないから、コイツ（曹操ガンダム）は」

宮藤
「いや、下の階に響きますよ！？」

零斗
「大丈夫だ、クラウザーのおっちゃんはそれくらいで怒りはしない」

宮藤
「そうなんですか・・・・」

零斗
「で、相談ってのは？」

サーニャ
「実は・・・・・」

サーニャは映画館で『バイオハザード？　アフターライフ』を観て、クリスの活躍がかっこよく惚れてしまったが、ＢＳＡＡ学園！のクリスは原作ゲームのようにかっこよくない事について話した。

零斗
「成るほどねぇ～クリスをクールでワイルドのようなキャラに変えてくれと」

宮藤
「でも、何でクリス君をかっこよくしなきゃダメなんですか？私達をバカにしたんですよ？」

零斗
「あのな～こういうのは全部作者（龍の骨）の所為にしとけばいいんだよ」

宮藤
（本当に作者の所為にしとけばいい話でしょうか？）

と心配する宮藤だった。

零斗
「そうだな～だったら『クリスのキャライメージアップ大作戦』を

開く！」

宮藤　サーニャ
「クリスのキャライメージアップ大作戦？」

零斗
「まぁ、クリスのキャライメージを変えるという作戦だ！」

サーニャ
「そうなんですか」

零斗
「よっしゃ！早速立てるぞ！」

こうして零斗はクリスのキャライメージアップについて考える、そして宮藤はクリスに気になり始める。

宮藤
（どうしてだろう、クリス君は私にとって敵なのに・・・でも本当はクールでワイルドな人なのかな・・・・・）

しかし零斗達は気付いてなかった、スパーキングされた曹操ガンダムが消えたという事を・・・・

スパーキングされた曹操ガンダムはどこへ行ったかというと・・・・・

ウェスカーの家だった、しかもリビングではエイラとクレアとウェスカーがくつろいでいた。

そして曹操ガンダムは、サーニャがクリスに好意を抱いている事と零斗達がクリスのキャライメージアップ大作戦でクリスのキャラを変える画策している事を・・・・

エイラ
「そ、そんな・・・・サーニャァーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

クレア
「兄さんにですって・・・・・・（怒）」

ウェスカー
「これは万死に値する！クリィーーーーーーーーーース！！！！！！」

と、キャラを崩壊させて怒り狂う。

曹操ガンダム
「余も許さんと思っていた、ならばその作戦を妨害しようではないか」

ウェスカー
「流石は曹操ガンダム先生、いい事を言ってくれる」

クレア
「ならば兄さんをもう一度ジャスタウェイダンスを躍らせてやるわ」

エイラ
「サーニャのためならクリスを汚してやる！！！」

という感じでエイラとクレアとウェスカー、ついでに曹操ガンダムは仲間を集めて零斗達の作戦を妨害しようとしていた。

その頃、零斗達は・・・・

零斗
「よ～し、クリスとサーニャはいい感じで～す」

宮藤
「どうなるんでしょうか」

サーニャとクリスのデートを陰で見守っていた。

サーニャ
「クリスさんって国際警察に所属しているんですよね」

クリス
「あぁ、その通りだ」

一方、零斗は・・・・・

零斗
「よ～し、クリーチャー出現させようかな?」

その時!零斗達の背後から、あのクリーチャーが!!!!!

???

「あら～あの男(クリス)いい男ね」

零斗

「ようホモカリム、頼みがある」

零斗の背後から現れたクリーチャー、ホモカリムである。外見と能力はポポカリムだが、いい男しか狙わない。（例　イケメン　ワイルドな男等）口調がオカマである。

完全に作者オリジナルクリーチャーである。

ホモカリム
「頼みってなにかしら～ん零斗ちゃ～ん」

これを観てドン引きする宮藤、そして零斗は・・・・・

零斗
「頼みというのはな～サーニャを襲うと見せかけてクリスを狙ってくんね～かなぁ～」

ホモカリム
「あたしは女は狙わない主義だけどやってみるわ」

と言って空に飛んでいった。

宮藤
「だ、大丈夫なんでしょうかね～あの蝙蝠」

零斗
「ま、祈るしかないぜ」

その頃、クリスとサーニャは・・・・

クリス
「そうか～俺が・・・・」

サーニャ
「はい、『バイオハザード？　アフターライフ』を観てクリスさんの活躍がかっこよくて・・・」

喫茶店で仲良く会話をしていた。

サーニャとクリスとの会話が始まって一時間後、喫茶店から出た。

だが、クリスは危険を察知するかのように動きを止めた。

サーニャ
「どうしたんですか？」

クリス
「危ない！」

サーニャ
「キャア！」

ヒューーーン！！！

突然、蝙蝠らしき物体がクリスに襲い掛かろうとする。

クリスはサーニャと蝙蝠らしき物から伏せた。

蝙蝠らしき物体の正体はホモカリムであった（笑）

ホモカリム
「グアァーーーーーーーーーー！！！！！」

そしてホモカリムがサーニャを襲う！しかしクリスはフックで弱点である尻尾の裏側にフックし、

顎にアッパーする。

ホモカリムは吹っ飛ばされそうになるが、体勢を立て直してサーニャに襲い掛かる。

その時！クリスはホモカリムに強烈な一撃を与える！！！

ドカァーーーーーーーーーー！！！！！

ホモカリム
「いやぁーーーーーーん！！！酷いわぁーーーーーーーーーー！！！！！」

とアッパーされ、叫びながら星になった。最後がキモかった。

陰で見ている零斗達は・・・・

零斗
「ヒャーハハハハハハハハ！！！おもしれぇ～特にホモカリムが」

宮藤
（ホモカリムさん、きっとどこかで泣いているんだろうな）

サーニャはクリスの活躍で顔が少し赤くなる。

サーニャ
（クリスさん、私を守ってくれた・・・・・・）
だが零斗達は気付いていなかった。
？？？
「零斗の作戦を潰す・・・・」
？？？
「そしてサーニャを取り戻す！」
？？？
「兄さん、私に振り向かせてやる！」
あの三人が、零斗の作戦を妨害しようとする事を・・・・・
一方、ウェスカーの家では・・・・
アックス
「全く、兄さんは、今日は僕の友達を連れてきたのに勝手にいなくなるなんて。帰ってきたら『お話』だね、そう思わないかい？」
ライアン
（おめぇなのは以上にこえぇよ。てかそのネタはちょっとやめた方が・・・・）
するとフランケンはリビングのテーブルに何かに気付く。
フランケン

「なぁ、これ置手紙だよな？」

フランケンが見つけたのは置手紙である。その置手紙を読むアックス。

読み終わった後、置手紙を破り、フランケンとライアンは慌てる。

ライアン
「おいおい！何で破るんだよ！？」

フランケン
「お前の兄さんが書いたんだぞ！」

アックスは黒いオーラを発しながら無言でウェスカーの家から出て行き、フランケン達はそのあとについていく。

置手紙になんて書いてあるのかはご想像にお任せします。

第三十七話　かっこ悪いキャラをかっこよくする（後書き）

サーニャとクリスとのデートは順調であり、クリスのキャライメージアップ大作戦の成功の第一歩である。

しかしその背後から忍び寄る影が現れる。果たしてクリスのキャライメージアップ大作戦は無事成功するのか！？

第三十八話　作戦の為に犠牲になった人達は悲しむ（前書き）

零斗
「クリス恋騒動編中編だぞぉ～」

宮藤
「あはは・・・（汗）」

第三十八話　作戦の為に犠牲になった人達は悲しむ

ホモカリムを吹き飛ばしたクリス、これを見たサーニャは顔を赤くするが、忍び寄る影に気付いていなかった。

新宿の地下の某所では・・・・・

ウェスカー
「これより作戦会議を始める」

クレア
「零斗の作戦を妨害し」

エイラ
「大切な人を助け出す！」

曹操ガンダム
「零斗を指導してやる！」

零斗の作戦を妨害する会議を始めていた。

ウェスカー
「まずはどうしたら零斗の作戦を妨害するかだ」

クレア
「そうね、兄さんからサーニャを引き離すというのは？」

エイラ
「それじゃあ逆効果だ」

曹操ガンダム
「ん～」

すると曹操ガンダムは考え込む。

ウェスカー
「ならば・・・こうしよう」

クレア
「？」

エイラ
「？」

そしてウェスカーは、とんでもない事を言い出す・・・・・

ウェスカー
「袁術ズザと袁紹バウが、クリスとかっこ悪くさせる、まぁクリスを馬糞にぶち込ませたりとか、ジャスタウェイダンスを躍らせたり、クリスの股のところに水をかけたりとか」

曹操ガンダム
「おぉ～流石ウェスカー理事長、その袁紹バウ達の事は余に任せて欲しいものだ」

ウェスカー
「ならばその役を曹操ガンダムにしよう、問題はないな？」

クレア

「問題なし」

エイラ
「採用だな」

こうして、四人の作戦会議が終わった。

その頃、アックス達は・・・・・

アックス
「・・・・・（怒）」

アックスは黒いオーラを出しまくりながら歩いている、しかも周りの人は引いている。

ライアン
「なぁアックス、そんな黒いオーラ出しまくって歩いていると怖がるぞ？」

アックス
「・・・・（怒）」

フランケン
「だ、ダメみたいだな・・・・・・」

アックスを見てため息をつく二人であった。

その頃、クリス達は・・・・・・・

クリス

「全く、サーニャに襲い掛かるとはな・・・・・」

サーニャに襲い掛かってきた孫権ガンダムを銃で倒した所だった。

しかも孫権ガンダムは黒こげである。

サーニャ

「ありがとうございます」

クリス

「これでも銃の腕は落ちていないぞ」

クリスとサーニャは孫権ガンダムから去った。

孫権ガンダム

（な、何で俺がクリスの犠牲にならなくちゃいけないんだ?不幸だぁーーーーーーーー!!!!）

と心の中で某主人公が不幸アニメの台詞を叫んだ。

その陰では・・・

零斗

「よっしゃ!これで作戦は成功するぞぉ～」

宮藤

（孫権ガンダムさん、ごめんなさい）

ところがクリス達の前に・・・・・・

曹操ガンダム
「クリスよ、余が相手になるぞ」

袁術ズザ
「そちらのお嬢さんは可愛いですねぇ～」

袁紹バウ
「ならば、力づくで奪おうじゃないか」

曹操ガンダムと袁紹バウと袁術ズザが登場した。

零斗
「おいおい、こいつらに頼んだ覚えはないぞ？」

宮藤
「どうなってるんでしょうか？」

向こうの陰では・・・・

ウェスカー
「あいつらの力はクリスより高い」

クレア
「流石の兄さんでも勝てないわ」

エイラ
「サーニャ、私の元へ戻ってくれ！」

仕組んだのは三バカ達だった。クリスに勝てると信じていたが・・・
・

ドゴォーーーーーーン！！！

曹操ガンダム　袁紹バウ　袁術ズザ
「オヴェーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

クリスのＲＰＧロケランとサーニャのフリーガーハマーで倒された。

曹操ガンダム達は気持ち悪い叫びをしながら倒れた。

三バカ
「何ぃーーーーーーーーーーーーーーチートだろぉーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

と叫ぶ三バカ。

クリス
「全く、今日は変な奴等が出てくるよな」

サーニャ
（クリスさんがますますかっこよくなってます～）

クリス
「行くぞ」

そう言ってサーニャを連れて曹操ガンダム達から去った。

孫尚香ガーベラ
「全く、兄さんはどこへ行ったのかしら～」

そこへ孫尚香ガーベラが兄、孫権ガンダムを探していた。

孫尚香ガーベラ
「え・・・・・えぇーーーーーーーーーー！！！！」

彼女が見たものは・・・・黒こげになった孫権ガンダムと曹操ガンダム達だった。

孫尚香ガーベラ
「兄さんなにがあったの！？」

孫権ガンダム
「うぅ～く、クリスに・・・・やられ・・・・・・た・・・・・・」

そして孫権ガンダムは意識を失った。

孫尚香ガーベラ
「兄さぁーーーーーーーーーーーーん！！！！！」

と叫び、ついに・・・・・

孫尚香ガーベラ
「おのれぇ～クリスめぇ～兄さんの仇ぃ～兄さんを殺した罪、償わせてやる、クリィーーーーーーーーース！！！！！」

彼女は決意した、クリスを孫権ガンダムの仇を討つと・・・・・・

孫権ガンダム
「いや、まだ死んでねーし・・・・・・」

だが・・・・・

ドゴォーーーーーーン！！！！！

孫尚香ガーベラ
「キャアーーーーーーーーーー！！！！！」

レオンのロケランで阻止された。

レオン
「やべぇ～間違えちゃったかな？まあいいか、零斗が言っていた娘を阻止したし」

どうやら零斗に頼まれたらしい。

孫尚香ガーベラは、黒こげになった（笑）

ルイス
「上手に焼けました～」

クリスとサーニャはどうしてるかというと・・・・

クリス
「海はいいな・・・・・・」

サーニャ
「そうですね・・・・・・・」

船に乗って海の景色を見ていた。因みに零斗と宮藤はその船の後ろに乗っている。

零斗
「いい感じです！このまま成功かぁ～？」

宮藤
「だんだんクリス君がかっこよく・・・・いいなぁ～サーニャちゃん・・・・・」

零斗
「どうした～？」

宮藤
「何でもないですよ！？」

その時！！！

呂蒙ディジェ
「ははははは！クリス！サーニャを渡しな！」

呂蒙ディジェが水上バイクに乗ってクリスに挑発する。

しかし・・・・・・

ダダダダダダダダダダダ！！！！！！ドゴォーーーーーーーーーーン！！！！！！！

呂蒙ディジェ
「うわぁーーーーーーーーーー！！！！！」

クリスの機関銃で吹っ飛ばされ・・・・・・

クリス
「これはおまけだ！」

ダァン！ドゴォーーーーーーーーーン！！！！

呂蒙ディジェ
「ギャアーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

ロケランで吹っ飛ばされた。

宮藤
（いやいやいくらなんでも無茶ぶりですよ！？）

零斗
「いい眺めだなぁ～レーザーだったら面白いのになぁ～」

宮藤
（零斗さん、ドSです！）

サーニャ
「クリスさん、ありがとうございます！」

クリス
「この辺の海は気取り屋ばかりだからな、気をつけろよ」

サーニャ
（何だかかっこいいです～）

管理室からその様子を見たウェスカー達は・・・・・

ウェスカー
「あの役立たず（呂蒙ディジェ）めが！頼んだ我々が馬鹿だった！」

エイラ
「そうだそうだ！役立たずが！」

クレア
（兄さんの犠牲になった曹操ガンダム達が可哀相に見えるのは私だけかな？）

ウェスカー
「ならば・・・・例のアレを・・・・・・」

エイラ
「例のアレ？」

ウェスカー
「ククク、いずれわかる、（クリス、貴様をかっこ悪くさせてやる・・・・）」

？？？
「兄さん？こんな所で油を売ってたんですか？」

後ろにいたのは・・・・・

ウェスカー
「あ、アックス！？」

アックスとライアンとフランケンだった。

ウェスカー
「今日はどうしたんだ?蔡ボウとデートじゃなかったのか?」

アックス
「珍しいですね兄さん、僕と朱愛のデートを許すなんて、何かあったんですか?」

エイラ
「なんていうか、気取り屋の呂蒙ディジェをクリスがやっつけてくれて・・・・・」

アックス
「ほ~う、そう言い切れるのですか?この手紙を残して!」

アックスが手に持っていたのは、半分に破れたウェスカーの置手紙だった。

ウェスカー
「うぅ、バレたか・・・・・逃げるぞ!」

ウェスカー達は、アックスから逃げた。しかしアックスは・・・・・

アックス
「誰も僕からは逃げられませんよ?兄さん・・・・・」

と、黒い笑みを浮かべるのであった。

第三十八話　作戦の為に犠牲になった人達は悲しむ（後書き）

零斗
「次々と俺達の邪魔をしてくる曹操ガンダム達、しかしクリスとサーニャの活躍によって作戦は壊されなかった。だがウェスカーが言っていた例のアレというのは・・・・次回！『ズルズルボール』」

劉備ガンダム
「タイトル違うよ！」

零斗
「絶対に読んでくれよな！」

劉備ガンダム
「無視ですか！？」

第三十九話　犬と猫の喧嘩は激しい（前書き）

零斗
「クリス恋騒動の後編～」

サーニャ
「遂にクリスさんと・・・・」

第三十九話　犬と猫の喧嘩は激しい

ウェスカー達はアックスから逃げ、遂に・・・・アレを出す時が・・・・

三璃紗にて・・・・・・

チョウ蝉キュベレイ
「私に協力しろと？」

ウェスカー
「そうだ、君はじつに素晴らしい、これならば、クリスも倒せる」

チョウ蝉キュベレイ
「くだらない、そんな理由でここに来たのか？」

するとウェスカーは・・・・・

ウェスカー
「だってぇ～アックスに見つかったらまずいしぃ～てかぶっちゃけお前強いしぃ～アックスと互角に戦えそうだしぃ～頼むからアックスの相手してぇ～それとクリスをかっこ悪くしてぇ～？」

チョウ蝉キュベレイ
（何だこの男、キモいぞ。それに気付いてないだろうな、後ろに邪悪なる気を出している奴を・・・・）

ウェスカー
「あ、後ろに何かヤバそうな奴が来た、あとよろしくぅ～」

そう言ってウェスカー達は走り去って行った。

チョウ蝉キュベレイの前に現れたのは・・・・・

アックス
「何をやってるんだい？キュベレさん」

チョウ蝉キュベレイ
「私はキュベレではないぞ！」

アックス
「兄さん、どこに逃げたか教えて？」

チョウ蝉キュベレイ
「教えてほしければ私を倒せ・・・・」

アックス
「ならば遠慮なく！」

チョウ蝉キュベレイは胡蝶乱舞を出そうとするが・・・・

チョウ蝉キュベレイ
「胡蝶乱・・・・・」

ドカ！グシャ！バキ！

チョウ蝉キュベレイ
「ぐあぁ・・・・・・」

あっさりやられた。

アックス
「朱愛にお仕置きをした事があるからね」

アックスが蔡ボウ（朱愛）にお仕置きした事とは・・・・

蔡ボウ（朱愛）はアックスにパンツを脱がされ、四つんばいになるように命じられた。

スカートをめくりあげ、そして・・・・

パァン！

朱愛
「あぁう！」

パァン！

朱愛
「いやぁ！」

ペチン！

朱愛
「アックスさまぁダメェ！」

アックス
「僕のお仕置き、ダメかな？」

朱愛
「そんな事はありません、もっとお願いします」

パァン！

朱愛
「あぁん！」

ペチン！

朱愛
「ヒャン！」

アックスは朱愛に尻を叩く事だった。

チョウ蝉キュベレイ
「いや、関係ないぞ・・・・・」

アックス
「さて、教えてもらおうかな？」

チョウ蝉キュベレイ
「うぅ、教えてやる、ウェスカー達は・・・・・」

その頃、零斗達は・・・・

零斗
「さて、ラストと言えば夕日と屋上だ！このスポットでカップルが出来たという噂が流れている」

芳佳
（サーニャちゃんとクリス君が結ばれる・・・・・）
零斗は屋上の陰でクリスとサーニャを見守っていた。
一方、劉備ガンダムの家では・・・・・
アナウンサー
『今日の午後で、新宿のB地区で爆発事件が起こったらしく、死傷者は五人です。警察の調べによりますと、S尚香ガーベラの胸には、ロケランらしき物で撃たれた跡があるという事が分かりました。その他の被害者達には、銃で撃たれた跡や、サバイバルナイフで斬られた跡があるとの事・・・・』
劉備ガンダム
「おっかない事件だな～」
おにぎりを食べながらニュースを見ている劉備ガンダムがいた。
ピリリリリリ
劉備ガンダム
「あ、電話だ」
劉備ガンダムはケータイを取り出す。
ピッ！
劉備ガンダム
「はい」

諸葛亮
『劉備ガンダム先生！（怒）』

諸葛亮先生からの電話であり、なにやら怒っているようだ。

劉備ガンダム
「何ですか！？」

諸葛亮
『零斗さんの指導はどうなったんですか！？』

劉備ガンダム
「いや、曹操ガンダム先生が『零斗の指導は余がやる、劉備ガンダム先生は家でおにぎりでも食べていろ』と言われて～」

諸葛亮
『そんな言い訳！通じません！』

劉備ガンダム
「いや、そんな事を言われても～」

諸葛亮
『孫権ガンダム先生は出張でいなくなるし、ウェスカー理事長は弟に追われていると言って出で行っちゃったし！零斗さんの指導をするのはあなただけですよ！』

劉備ガンダム
「えぇ～！？」

諸葛亮
『と・に・か・く！零斗さんの指導をお願いします！（怒）』

ブツッ！

電話が切れてしまう。

劉備ガンダム
「指導しろと言われてもねぇ～（汗）」

そう悩む劉備ガンダムであった。

劉備ガンダム
「諸葛亮先生が怒っているのはちびっ子で関羽は一刀君とエッチしているから欲求不満だから怒っているのかぁ～」

その頃、零斗達は・・・・

クリス
「サーニャ、俺に言いたい事って？」

サーニャ
「はい、実は私・・・・」

零斗
「こ、これはもしかして・・・・・・！？」

宮藤
（クリス君！）

零斗がいるビルの屋上から離れたビルの屋上では・・・・・・

ウェスカー
（クリスよ、コイツでお前をかっこ悪くしてやる！）

エイラ
（サーニャをクリスから離れさせる！）

クレア
（兄さん！目を覚まして！）

双眼鏡でクリスとサーニャの様子を見ていた。

ウェスカー
（馬元義ザクＧＯ！）

クリスとサーニャがいる屋上の扉から馬元義ザクが現れる。

馬元義ザク
「俺は馬元義ザク！クリス！貴様をかっこ悪く・・・・・・」

しかし・・・・・

ズバァーーー！！

馬元義ザク
「ウエェーーーーーーーー！！！！！！！」

クリスのサバイバルナイフでやられ、気持ち悪い叫びをする。

サーニャ
「クリスさん酷いです！せめてロケランで殺してあげてください！」

宮藤
（サーニャちゃんの方が酷いよぉーーーーーーーー！！！！）

零斗
「ロケランはダメだろ？ショットガンだろやっぱり」

宮藤
（零斗さん、ボケてます！）

馬元義ザク
「この俺をサバイバルナイフで倒すとは・・・・だがお前達に本当のハッピーエンドは来ない！」

クリス
「どういう事だ！」

馬元義ザク
「ビルから降りて港まで行け！それがお前等のハッピーエンドだ！」

そう言って馬元義ザクは倒れた。

零斗
（港ぉ！？本当のハッピーエンドって？）

そんな訳でビルを降りて港に行きました。

クリス

「港にハッピーエンドがあるというのか？」

サーニャ
「何もないですね」

陰で見守る零斗達は・・・・・

零斗
（ハッピーエンドって・・・・・）

宮藤
（何だか気になります）

その時！

ズン！ズン！

クリス達は謎の足音に気付き、振り向くと・・・・・

処刑マジニ
「グオォーーーーー！！！！」

処刑マジニだった。

クリス
「こいつは処刑マジニ！」

サーニャ
「プレイヤーが苦戦したクリーチャーですね！」

クリスはベレッダを取り出した。

ダン！ダン！ダン！

クリス
「効かない！？」

銃弾は処刑マジニには効かなかった。

一方、ウェスカー達は・・・・

ウェスカー
（ははははははみたか！これが処刑マジニの力だ！）

陰でクリス達を見ていた。

すると・・・・

？？？
「見つけましたよ兄さん？」

ウェスカーは振り向くと・・・・・・

アックス
「チョウ蝉キュベレイさんが全て話してくれたので良かったです」

アックスだった・・・・・

ウェスカー
「アックス！どうして！」

アックス
「僕は蔡ボウの為ならSになりますよ、こんなくだらない事を止めて巣に戻るか、それともそれに逆らって僕と戦うか・・・・」

ウェスカー
「くぅ・・・こうなりゃ引き上げだ！」

ウェスカー達は逃げようとするが・・・・

関羽ガンダム
「ここから先は通しません」

張飛ガンダム
「おっと！逃げるなら相手になるぜ！」

関羽ガンダムと張飛ガンダムが道をふさぐ。

ウェスカー
「貴様等！どうして！」

アックス
「人の恋路を邪魔する奴に」

関羽ガンダム
「俺達が」

張飛
「悪しき者に天罰を下す！」

ウェスカー
「やべてぇーーーーーーーー（泣）」

ドゴーーーーーーーーーーーン！！！！

ウェスカー
「アッーーーーーーーーーーー

クリス
「なんて奴だ！攻撃も効かないとは・・・・」

処刑マジニは大斧でクリスを吹き飛ばす。

クリス
「うわぁーーーーー！！！」

サーニャ
「クリスさん！」

そして処刑マジニは大斧を振り上げる。

その時！

ズバ！ズバ！

処刑マジニの大斧が斬れる。

宮藤
「私に出来る事、それはクリス君達と一緒に戦う事です！」

烈風丸を持った宮藤が現れる。

クリス
「宮藤、どうして！」

サーニャ
「とにかく戦おう！」

クリスはＲＰＧロケランを取り出し、サーニャはフリーガーハマーを取り出す。

ドォン！ドォン！

処刑マジニ
「うおぉーーー！！！」

処刑マジニはクリスとサーニャの攻撃によって苦しむ。

そして・・・・・

宮藤
「真・烈風斬！」

ズバァーーーーーーーーーー！！！！！

処刑マジニ
「グアァーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

宮藤の真・烈風斬によって真っ二つに斬られた。

零斗
「ふ、これで完了だな・・・・」

零斗はクリス達から立ち去った。

クリス
「サーニャ、俺に言いたい事って？」

サーニャ
「私、クリスさんの事が・・・好きなんです！」

クリス
「！？」

宮藤
「クリス君、私も好きです・・・・」

クリス
「俺の事を！？／／／／／／」

サーニャはクリスの腕に抱きつく。

サーニャ
「クリスさんはかっこよくて、優しかったです」

宮藤もクリスの腕に抱きつく。

宮藤
「やっぱりクリス君はかっこよくないと！それに私はかっこいいクリス君が好きです！」

サーニャ
「芳佳ちゃん！クリスさんは私の物です！」

宮藤
「いいえ！私の物です！」

クリスを巡って争奪戦が始まった。これが犬と猫の喧嘩というのか・

・・・

その頃、ウェスカー達は・・・・・・

ウェスカー
「アックス～開けてくれよ～もう十分反省したし～」

ウェスカーの家の扉の前にいた。

そしてアックスは・・・

蔡ボウ
「あぁ～んアックス様ぁ～」

アックス
「朱愛～可愛いよぉ～」

ベッドで蔡ボウとエッチしていた。

クレア
「うぅ～体中傷だらけだし～（泣）」

エイラ
「腹減ったな・・・・（泣）」

アックスに中々入れてもらえない可哀相な三人組であった。

翌日・・・・・

ＢＳＡＡ学園では、傷だらけの曹操ガンダムと孫権ガンダムとウェ

スカー理事長の姿が見えたという。

そして生徒指導室では・・・・

諸葛亮
「零斗さん?昨日はどうして曹操ガンダム先生が傷だらけなのか、教えてほしいけどなぁ～（黒笑）」

零斗
「教えたら諸葛亮先生、ウェスカー理事長のようになってしまいますよ?」

諸葛亮
「そんなの関係ありません!」

零斗
「今日のパンツは縞パンですよね」

諸葛亮
「はわわっ!どうしてそれを／／／／／」

零斗
「広めますよ?」

諸葛亮
「はわわぁ～!!それはやめて下さい!」

零斗
「何なら退学は勘弁するように言ってくださいよ、ウェスカー理事長に」

その後、諸葛亮先生はウェスカー理事長に説得をし、零斗の退学は逃れました。

この後諸葛亮先生は一刀君に屋上に誘われました。

諸葛亮
「あの～一刀君？」

一刀
「朱里先生、俺・・・・我慢出来ないんです」

そして一刀は諸葛亮先生の服を脱がし、パンツだけ残した。

諸葛亮
「はわわー！！！学校でエッチなんて・・・・」

一刀
「さぁ先生、僕と一つになりましょう」

諸葛亮
「はわわーーー

第三十九話　犬と猫の喧嘩は激しい（後書き）

零斗
「楽しかった?ウェスカーが三璃紗に行けたのは、玉璽のおかげです。そしてハッピーエンドと言うのはクリス恋騒動編の事です」

アックス
「次回は他の小説とのコラボだ！」

リビングタイム3（前書き）

烈火竜さんのキャラの登場は次回になります。

零斗
「本当にすまない」

今回は世紀末雑魚さんのキャラが登場です。

リビングタイム3

ここは、アックスの豪邸のリビング、そこにはソファーに座って同人誌を読んでいる男がいた。

零斗
「ほぉ～後ろからぁ～いいねぇ～」

その隣に座っているのは・・・・

フランケン
「零斗、今日はゲストが来るから同人誌はしまったほうが・・・・」

アックス
「あはは・・・・（汗）」

零斗
「質問が二つしかないんだぞ、もっと質問が来ないかなぁ～って俺は思うぞ」

フランケン
「だからって同人誌はないだろう」

アックス
「でも今日のゲストは忍者だって聞いたけど・・・・」

零斗
「その通り！！！今回は・・・・・風魔小太郎さんですどうぞ～！！！！」

向こうの扉から『恋姫†ＢＡＳＡＲＡ学園物語』の風魔小太郎があらわれる。

これを見た零斗達は・・・・

零斗
「おぉーーーーーーーーー風魔小太郎だぁーーーーーーー！！！」

風魔
『初めまして』

零斗
「いや～初めまして！」

フランケン
「風魔小太郎だ！」

アックス
「本物だぁ～・・・・・（汗）」

零斗
「えぇ～風魔小太郎さんはですね、無口であるため、プラカードを使ってコミュニケーションしてるんですよ～」

フランケン
「そうなのかぁ～」

風魔
『そうじゃないと会話が出来ない』

零斗
「ですよね～」

フランケン
「今日の零斗、テンションが上がってるね」

アックス
「でもそこがいいんだよ」

零斗を見守る二人。

零斗
「そうだ！今日は質問に答えるんだったよな！え～ペンネーム世紀末雑魚さんの所の連華さんの質問です！」

フランケン
「早速来たね！」

アックス
「何だかワクワクして来たよ！」

『蓮華です。今回は少し聞きたい事があります。【ドS女王亜シェ様】ではどんな事をすればよいのでしょうか？』

零斗
「あぁ～俺が蓮華達に『ドS女王亜シェ様』の漫画の一巻を送ったんだったな」

フランケン

「お前が説明不足だからこういう質問が来るんだよ！」

零斗
「わーったよ。『ドS女王亜シェ様』とは、ＢＳＡＡ学園の生徒達にはオススメな漫画です。主人公、亜シェこと呂蒙は、普段恥ずかしがり屋だが、チンピラ共に絡まれて自分の中のドSが目覚め、チンピラ共を下僕にしてしまいました。それ以降は人類を自分の下僕にするという目標にＢＳＡＡ学園に潜入するというギャグコメディーな漫画です」

これを聞いて、雰囲気が変わった。

風魔
「・・・・・（汗）」

風魔は冷や汗をかく。

すると・・・・

風魔
『これ、本人に見せたら泣くね』

とプラカードで零斗に見せる。

零斗
「まぁそうだろうな。因みに現在の下僕は孫策サイサリスと周喩ヒャクシキと甘寧ケンプファーと陸遜ゼータプラスです」

フランケン
「うわぁ～やべぇ、どうしてそうなった？」

零斗
「作者がヤンデレＣＤを見て、呂蒙をＤＳに変えたんだろうな」

アックス
「作者、呂蒙のファンに喧嘩売ってるよ・・・・（泣）」

零斗
「それとその漫画は呂蒙のボンテージ姿が見れたり、エロティックな物が見れたりします」

フランケン
「それ不味いよ！？」

零斗
「という訳で世紀末雑魚さんと蓮華さんは、亜シェさんと『ＤＳ女王亜シェ様』を読んでください」

風魔
『続いてはｃｈａｒｌｅｙさんからの質問・・・・』

『その１　零斗がＢＳＡＡ学園！ゾンビゲームシリーズの中で一番ヘタレだと思う奴はだれですか？
その２　ＢＳＡＡ学園！ゾンビゲームシリーズの女性キャラで調教しがいのある人は誰ですか？』

読み上げたあと、風魔は再び冷や汗をかく。

風魔
『これ、ＳＭ系の質問だ・・・・・』

零斗
「では答えましょう、ヘタレはフランケンです」

フランケン
「えぇーーーーーーー!?」

零斗
「無印のゾンビゲームでは描かれてませんが、女性に対してヘタレです。それだけではなく、自分より強い奴に対してもヘタレです」

フランケン
「俺の秘密をしゃべんなよ!?」

零斗
「女性キャラはですね、ラフレシアです」

風魔
『ラフレシア・・・・ゾンビゲームバイオハザードクロニクルズに出た新キャラだ』

零斗
「その通り、小蓮のクローンでミステリアスな所がありますが、実はドMです」

フランケン
「そうなの!?」

零斗
「という訳でクリスを宮藤とサーニャに取られ、女王化したクレア

さんを連れてきました」

そして向こうの扉から女王化したクレアが現れ、しかもロウソクと鞭を持っており、フランケンとアックスと風魔は震える。

クレア
「ふふふ、フランケン君？さぁラフレシアちゃんとお仕置きされてね～」

と言ってフランケンを掴む。

フランケン
「あ、助けて！風魔ぁーーーーーーーー」

風魔
『逆らったら怖いので・・・・（汗）』

フランケン
「アァーーーーーーー

『同感』

零斗
「はい！質問はここまでぇーーーーーという事でこれからのＢＳＡＡ学園！について話し合おう」

アックス
「そ、そうだね・・・・・・」

風魔
「・・・・・・・（汗）」

零斗
「えぇ～嬉しい事に、月光閃火さんからオリキャラを提供してくれました」

アックス
「うそぉーーーー！！！」

零斗
「という訳で次回に登場させたいと思います。以上！」

風魔
『は、早い・・・・』

零斗
「今日のゲストは風魔小太郎さんでした～どうもありがとうございました～」

風魔

『ありがとう』

零斗
「風魔さん、これを呂蒙に渡してください」

風魔が受け取ったのは『ドS女王亜シェ様』の漫画の一巻だった。

そして風魔は風のように消えた。

零斗
「次回も楽しみにしてろよ。という訳で次のリビングタイムまで質問を募集しておりま～す。感想欄に書いてくださ～い。ではまたな～」

その後のフランケンとラフレシアはどうなったかはご想像にお任せします。

リビングタイム3（後書き）

世紀末雑魚さん、ありがとうございました。

第四十話　テコ入れ万歳！（前書き）

今回は烈火竜さんのキャラのコラボです。

第四十話　テコ入れ万歳！

クリスのキャラが戻ってから二日後・・・・・

ドゴォーーーーーン！！！！！

ＢＳＡＡ学園の通学路で凄い物音がした。

？？？

「こ、このジェイルマンを倒すなんて・・・・何という男だ・・・・」

零斗

「元々弱いだろ？」

紫の髪の男はジェイルマンこと、金山四天王の三人目ジェイル・スカリエッティである。

どうやら零斗が登校中にジェイルマンから勝負を挑んできて、ジェイルマンは零斗のマイティ真拳にボロ負けしたらしい。

零斗

「これで三人目、あと一人だな」

ジェイルマン

「ぐ、いつか君を超えてみせる・・・・・」

そう言ってジェイルマンは意識を失う。

零斗
「あ～あ、気絶しちゃった。まぁいいか」
とＢＳＡＡ学園へ向かうのであった。
ＢＳＡＡ学園、２年Ａ組では・・・・・・
零斗
「あれぇ～諸葛亮先生が来ないぞぉ～」
フランケン
「本当だ、来ないな」
授業開始な筈だが、諸葛亮先生が来ない。
教室の扉から・・・・・・
零斗
「諸葛亮先生か！？」
ではなく、『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組銀八先生』の坂田銀八であり、後ろの扉から現れたのは同じくレジアス校長だった。
因みに二人はウェスカー理事長にこの学園の事について知って欲しいとの理由で呼ばれている。
銀八
「今日から諸葛亮先生の代わりに坂田銀八が」
すると零斗は・・・・

零斗
「せんせ～い、何で孔明先生の代わりなんですかぁ～」

銀八
「何か風邪で休むとか言ってたのでウェスカー理事長に頼まれたんだ」

零斗
「何と言うかさ、俺の声を聞いて親近感とかないの？」

銀八
「お前、あのマヨラーに似てるな」

零斗
「あぁ、あいつか・・・そんな事はさておき、ウェスカー理事長に何かの取引をしてんだろ？」

銀八
「！？な、何の事だ？（汗）」

零斗
「確か～『弟のアックスとそのメイドの蔡ボウの仲を引き裂いたら報酬の百万円』というんだっけな」

銀八
「な、何で解るんだよ！」

零斗
「俺を甘く見ないでくださいよぉ～先生、マイティ真拳奥義『カメ

レオンアウト』で覗かせてもらったぜ」

レジアス
（か、カメレオンアウト！？）

これに驚くレジアス。

零斗
「この技は、自分が透明になると同時に気配を消す事が出来る。だがその分体力を使う」

零斗に覗かれた事を気付かなかった銀八は冷や汗を流す。

零斗
「あとレジアス校長は銀八先生のストッパー役（？）として来てるんだよな？」

レジアス
「・・・・・（汗）」

零斗
「なるほど、大体解った。では俺が代わりに教師をやるぞ！」

全員
「えぇーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

零斗の発言により、驚く生徒達。

銀八
「おぉい！勝手に決めんなよ！（怒）」

零斗
「ではこれより、皆大好きなテコ入れの授業をしたいと思いま～す」
零斗を見て銀八とレジアスは・・・・・・
銀八
「本当だったんだんだな・・・・零斗は好き勝手が多いというのは・・・・（汗）」
レジアス
「下手に手を出さない方がいいな・・・・」
と青ざめる二人であった。
零斗
「それでは、転校生が来ます。どうぞぉ～！！！！！！」
扉から現れたのは、生まれつきの銀髪のざんばらヘッドに漆黒のクールな瞳、１７８ｃｍ程よく引き締まった体格で顔立ちはややワイルド美男子、制服の着崩しの青年だった。
零斗
「紹介しましょう！異種格闘技大会での親友関係である王原皇呀（きみはらオーガ）君です！」
皇呀
「よろしくな」
生徒全員は驚き、皇呀はジルの隣の席に座る。

零斗
「という訳で今日はテコ入れの授業をしたいと思います！」

銀八
「おい！お前等の作者に許可無くそんな事をするんじゃねぇ！」

零斗
「うるせぇ、文句言うんじゃねぇ・・・・」

と銀八とレジアスに睨み、銀八とレジアスは後ろに下がる。

零斗
「それでは、十分間自分のテコ入れを考えなさい」

そして生徒全員はテコ入れを考える。

十分後・・・・・・

零斗
「はい、十分経ちました～では、誰からかな？」

すると・・・・

アリス
「はい、私のテコ入れからいきます！」

零斗
「ではアリスのテコ入れからいこう」

銀八
「もうダメだ、止められない・・・・・・」

レジアス
「この小説はまともなキャラがいないのか・・・・（泣）」

アリスのテコ入れビジョン開始！

桜の花びらに包まれた春の事、一人の女子高生が走っている姿が見れた。

アリス
「いっけな～い転校初日に寝過ごすなんて最悪～」

右の角から・・・・

ドン！

アリス
「キャア！」

誰かにぶつかり、尻餅をつく。

アリス
「あいた～」

？？？
「大丈夫か？」

アリスが見上げると、それは北郷一刀の髪の色を銀髪にした青年だ

った。

アリス
「（何て綺麗な人なんだろう・・・・）あ、あの、ごめんなさい！」

？？？
「そんなの気にすんなよ、お前、名前は？」

青年はアリスに話しかける。

アリス
「アリス・チェンバースです。聖フランチェスカ学園に転校するんです」

零斗
「アリスって言うのか～俺は北郷零斗、聖フランチェスカ学園の３年だ」

アリス
「そ、そうなんですか！」

零斗
「あぁ、聖フランチェスカ学園まで一緒に行こうぜ」

こうしてアリスは零斗と一緒に聖フランチェスカ学園へ行った。

教室にて・・・・・

諸葛亮
「みなさ～ん、今日は転校生がきます」

転校生が来ると聞いて喜ぶ生徒達。

そして扉からアリスが出てくる。

アリス

「今日から転校してきたアリス・チェンバースです

するとアリスは零斗を見た。

アリス

「零斗さん！」

零斗

「よう、今朝会ったな」

アリスは目を輝かせる。

こうしてアリスの恋が始まった。

街中のデートに、海でバカンス。

夕化

「零斗はあたいのモノだ！」

アリス

「違うもん！私のだもん！」

恋のライバル登場！

そして・・・・・・

アリス
「零斗、私ね、あなたの事が・・・・」

零斗はアリスを抱き寄せる。

零斗
「俺も同じだ、アリス、お前の事が・・・・・」

二人は顔を見つめ合う。

『恋するアリスちゃん』

アリスのテコ入れビジョン終了。

零斗
「中々いいじゃねーか」

皇呀
「これなら、間違いなくいけるんじゃね？」

アリス
「でしょでしょ！恋する女の子が運命の人に・・・・・キャー♪」

銀八
「っていうか、運命の人ってお前（零斗）かよ・・・・・」

零斗
「文句があるなら『３年Ｓｔｒｉｋｅｒｓ組銀八先生』で言え」

銀八
「うるせぇ！お前がゲスト出演したときに銃を乱射しやがって！」

零斗
「そのネタはやめてくれ、気にしてんだから」

レジアス
（何か、気にしてない顔をしてるぞ・・・・・・）

レジアスはため息をつく、その時・・・・・

ガララ・・・・

鳳統
「あらあら～テコ入れ～私も混ぜてよぉ～」

銀八とレジアスは鳳統先生の方へ向くと、鼻血を噴出す。

何故なら鳳統先生は、マイクロビキニ姿だからだ。

鳳統
「恋する女の子もいいのよ？けど、付け足しとしては、友情と戦いよ！」

アリス
「え！？そうなんですか！？」

と驚くアリス。

鳳統
「では、私のテコ入れを・・・・見てごらんなさい！」

零斗
「いよ！待ってました！」

鳳統先生のテコ入れビジョン開始。

東京の新宿にて・・・・・・

セーラー服を着た鳳統がＢＳＡＡ学園の通学路を走っている。

鳳統
「いっけな～い」

その別の道では・・・・

諸葛亮
「遅刻遅刻ぅ～」

セーラー服を着た諸葛亮が走っている。

鳳統は道の右の角に行くと・・・・

ドーン！！！

鳳統
「きゃー！」

諸葛亮

「はわわー！」

鳳統は諸葛亮にぶつかった。

鳳統
「あいたたた、やだ～しゅりっちじゃな～い」

諸葛亮
「ひなりんも遅刻～？」

二人は仲良しのごく普通の学生だった。

しかしそんな二人には秘密があった。

ＢＳＡＡ学園の屋上にて・・・・

鳳統と諸葛亮は屋上で弁当を食べている。

その時・・・・・

孔明リ・ガズィ
「大変だ！新宿の公園で董卓ザクが幼女達をさらっているよ！」

鳳統ヤクト・ドーガ
「奴の物になる前に・・・・」

手乗りサイズの孔明リ・ガズィと鳳統ヤクトドーガが現れた。

諸葛亮
「ひなりん！」

鳳統
「しゅりっち！」

孔明リ・ガズィと鳳統ヤクト・ドーガはコンパクトに変身した。

そして鳳統と諸葛亮は・・・・・・

鳳統　諸葛亮
「「リリカルマジカルキュアキュアチェーーンジ！」」

するとコンパクトが光だし、鳳統と諸葛亮が光に包まれた。

変身シーンはご想像にお任せください。

光が晴れ、鳳統は黒いトンガリ帽子に黒いマイクロビキニと黒いマントを身につけている。

諸葛亮は白いトンガリ帽子に白いマイクロビキニと白いマントを身につけている。

そうこの二人は地球の平和を守る『魔女キュア』だった。

新宿の公園では・・・・・

董卓ザク
「ぐへへへへへ～さぁワシのコレクションになる気になったか魔女キュア」

董卓ザクと戦ってボロボロ状態だった。

鳳統
「諦めない！絶対に！」

諸葛亮
「みんなの笑顔を汚させない！」

そして二人は手をそ空にかざし、すると手の平から光が現れる。

光を董卓ザクに向ける。

鳳統
「喰らいなさい！私達の愛と友情を！」

鳳統　諸葛亮
「「スーパーマジカルシューーーート！！！！！」」

二人の手から放たれビームが董卓ザクに直撃し・・・・・

ドゴォーーーーーーーン！！！！

董卓ザク
「グァァーーーーーーーーおのれ魔女キュアめぇ～！！！！」

そして董卓ザクは光となって消えた。

鳳統
「私達の友情パワーで世界を救う！」

『ふたりは魔女キュア！』

鳳統先生のテコ入れビジョン終了。

零斗
「おぉ～友情と戦いが伝わりますねぇ～」

皇呀
「成る程、確かに鳳統先生の言うとおりだな」

銀八
「っておい！色んな意味でまずいじゃねーか！」

レジアス
「何で董卓ザク！？」

鳳統
「こういう感じで子供達に夢を与えるのよ～？」

銀八
「夢を与えるより、エロさを与えているようだが！？」

アックス
「同感ですね・・・・しかし、鳳統先生にも一理ありますね」

銀八達が振り向くと、アックスと蔡ボウがラブラブ状態になっていた。

銀八
「お前、ヅラと同じ声してるくせに何で隣の席のメイドといちゃいちゃしてんだよ」

アックス
「僕と朱愛はベッドで愛し合った恋人ですから」

アックスの大胆発言でレジアスと銀八は唖然とする。

そして銀八は・・・・

銀八
「おいぃーーーーーー高校生なのに何エッチしてんだよ!?」

アックス
「あなたには解りません、僕と朱愛の愛が!」

銀八
「解るわけねぇよ!」

零斗
「そんくらいにしといてくださいよ、銀八先生、じゃあアックス、テコ入れお願い」

アックスのテコ入れビジョン

アフリカのキジュジュ自治区、村の中心では、マジニ達の死体の山が築かれている。

その上に乗っているのは・・・・・

刀を持ったアックスであった。

ウェスカーが行方不明になって以来、キジュジュ自治区の村でマジニの虐殺に明け暮れていた。

その所為か、破壊と殺戮だけしか考えない危険な生物兵器的な存在になった。

しかし、一人の少女によって、アックスの運命が変わる。

蔡ボウ
「私は蔡ボウ、字は徳珪　真名は朱愛です」

アックス
「僕はアレックス・ウェスカー、愛称はアックスだ」

蔡ボウと過ごす内に変わって行き、刀を捨て、自分の夢に気付いていった。

そんなある日・・・・・

ピリリリリリリ・・・・

アックスの携帯電話が鳴り響く。

ピッ

アックス
「はい、クリスか?・・・・・何だって!?蔡ボウが!?」

急いで病院へ行き、蔡ボウの病室に駆けつける。

だが・・・・・

アックス
「どうして・・・・・・・」

蔡ボウの顔に布が被さっていた。

クリス
「交通事故に遭って、入院した時には既に・・・・・・」

アックス
「そんな、朱愛・・・・・うわぁーーーーーーーーーーーー!!!!!」

蔡ボウの死に嘆き悲しむ。

アックスの部屋では・・・・・

アックス
（僕は・・・どうして生きているんだろう、やはり破壊と殺戮でしかない生物兵器の存在だからかな・・・・）

と悩むアックス。

アックスは蔡ボウの言葉を思い出す。

蔡ボウ
『アックス様は、生物兵器じゃありません、アックス様には夢という物があります。その夢を実現した時、アックス様は誰よりも輝きます！』

アックス
「夢を実現した時か・・・・・解ったよ、今からでは遅くは無い、その夢を実現してみせるよ！」

こうしてアックスは、夢を実現させるために旅に出た。

『アックスの夢』

アックスのテコ入れビジョン終了！

アックス
「これならどうですか？」

すると生徒達は沈黙する。

銀八
「『どうですか？』じゃねぇだろ、大体お前の夢は何なんだよ」

アックス
「・・・・・秘密だ！」

レジアス
「気になるよ！あと恋人を死なせちゃダメだろ！？何で死なすの！？」

蔡ボウ
「アックス様のテコ入れに文句言う人はアックス様を侮辱しているのと同じですよ！」

銀八
「知らねぇよ！」

零斗
「次はぁ～？」

キャロ
「私のテコ入れは、くノ一を題材としたテコ入れです！」

零斗
「ではキャロさん、お願いします」

キャロのテコ入れビジョン開始。

ここは、ミッドチルダから離れた森では、時空管理局に味方する忍者集団『白天党』

その管理局に敵対する『龍王党』が争っていた。

夜、龍王党の一人の少女が管理局に潜り込んでいる。その少女はキャロ・ル・ルシエであり

龍王党のくノ一である。

しかも背はティアナと同じであり、胸は李典（真桜）と同じである。

彼女の任務は『高町なのはの暗殺』である。

なのは達の部屋に忍び込み、息を殺して小太刀を取り出す。

だが・・・・・

？？？

「そこまでよ」

キャロ

「！？」

後ろにいるのは、バルティッシュを持ったフェイトである。

フェイト

「なのはを殺そうとしてたでしょう」

するとキャロは小太刀でフェイトに斬り付け、その隙に部屋から出た。

フェイト

「ま、待ちなさい！」

窓を突き破り、グライダーで逃げた。

フェイト

「あれは、『龍王党』のくノ一の・・・・キャロ」

龍王党では・・・・・

エリオ

「そうか、暗殺に失敗したか」

そしてエリオは龍王党の頭領である。彼は今は亡きエリオ・モンデ

ィアルのクローンである。
施設を抜け出して龍王党に入り、管理局に激しい憎しみを抱いている。

キャロ
「ごめん」

エリオ
「だが、金髪の魔導師は侮れないな」

そしてライバル登場！

『白天党』のくノ一、ルーデシア・アルピーノである。
背はスバルと同じであり、胸は黄忠（紫苑）と同じである。

キャロとルーデシアは、刀でぶつかり合っている。

ルーデシア
「あなたは管理局を理解していない」

キャロ
「管理局は、元凶に過ぎない！」

禁断の触手プ○イ（笑）

キャロ
「えぇ？地面から触手がキャア！」

触手はキャロとルーデシアを持ち上げ、ルーデシアを逆さにして脚に巻きつき、胸を巻きつける。

一方キャロは脚と胸を巻きつけられた。

キャロ
「あぁん！な、なにこれぇ！脚が開いちゃう！」

ルーデシア
「あうん！む、胸が・・・・くすぐったい！」

キャロ　ルーデシア
「「ら、らめぇーーーーーーーー！！！」」

エリオとキャロの熱い夜。

キャロ
「え、エリオ君／／／／／」

エリオ
「キャロは俺の物だ、誰にも渡さない」

こうして二人は唇を重ね合わせ、舌を絡ませる。

黒幕登場！

スカリエッティ
「ふはははははは、私の邪魔をするなら、削除してやる！」

スカリエッティのクナイが降り注ぎ、エリオとキャロ、そしてルー

デシアは刀で弾く。

スカリエッティ
「何故そこまで管理局を潰したがる？」

キャロ
「管理局は、平和を奪う存在だからよ！それを止めるのが私達忍者なんだから！」

エロティックとアクションが混ざった忍者アクション！

『くノ一キャロ』

キャロのテコ入れビジョン終了。

零斗
「おぉ！触手プ○イとはいいねぇ～」

銀八
「あの～フェイトが泣くぞ・・・・（汗）」

レジアス
「しかも高町なのはの暗殺って・・・・（汗）」

キャロ
「あ、触手はフェイトさんが禁断の術に触れて発動させたという設定ですので」

銀八
「そんな設定にしたらフェイトに殺されるぞ！」

キャロ
「だって私はくノ一だも～ん、それとこの小説では龍王党の頭領だも～ん」

隣では、エリオが顔を赤くしている。

エリオ
「あ、あのなぁ～なんというか触手はさすがに・・・・・」

零斗
「あと、テコ入れを始めたのは、俺の暇つぶしでもあり、みんなの暇つぶしだからな」

銀八
「お前の暇つぶしでこの小説が更にカオスになるんだよ！」

零斗
「はいはい、銀八先生の意見は聞きませんのでこれにてテコ入れの授業は終了します」

銀八
「おい！まだあるだろ！？」

零斗
「なーんてな、実は今日は特別にゲストを呼んでおります」

銀八
「俺達以外のゲストがいるのか！？」

ドドドドドドドドド

廊下で走る音が2年A組に近付いている。

そして・・・・・・

ドゴォーーーーーーン!!!!!

何者かが扉を吹き飛ばした。

ダイチ
「俺の事か!?」

『気力少年ダイチ!俺と四人の探偵と気力修行』のリュウ・ダイチである。

零斗
「リュウ・ダイチ君で～す」

銀八
「おい!扉を吹き飛ばしちゃダメだろ!吹き飛ばされた扉がレジアス校長に当たって気絶してるんだよ!」

銀八の隣には、扉が後頭部に当たって気絶しているレジアス校長の姿だった。

零斗
「レジアス校長の事は無視してダイチ君のテコ入れを聞きましょう」

銀八

「いや無視しちゃダメだろ！？」

ダイチ
「俺のテコ入れはこれだ！」

ダイチのテコ入れビジョン開始。

雪が積もった山では・・・・・

土方と近藤と沖田と山崎とミルキィホームズが雪合戦をしている。

シャロ
「あうぅ、あたっちゃったです～」

ネロ
「何やってんだよシャロぉ～」

エリー
（こんな時、ダイチ君が来てくれれば・・・・）

コーデリア
「とにかく！今は頑張りましょう！」

沖田
「無駄ですぜぃ～」

その時・・・・・

？？？

『超力タウラスサンダー！』

どこからか雷が近藤に直撃する。

土方
「近藤さん！」

そこに現れたのは・・・・・

ダイチ
「よう！遅れてすまねぇ」

ミルキィホームズ
「「「「ダイチ君！」」」」

オーレンジャーロボに乗ったダイチだった。

そしてバズーカーを持った沖田はオーレンジャーロボに向ける。

ダイチ
「させるか！ホーンヘッドアウト！」

オーレンジャーロボのホーンヘッドが外れる。

ダイチ
「ウィングヘッドチェンジ！」

ウィングヘッドがオーレンジャーロボの頭部に装着する。

オーレンジャーロボは巨大な雪球を持ち上げ、

山崎
「うわぁぁ・・（汗）」

ダイチ
「クラウンファイナルスノー！！！！！」

雪球を土方達に投げる。

土方達
「あぁーーーーーーーーーー！！！！！」

ボゴーーーーーン！！

そして土方達は雪に埋もれる。

ダイチ
「やったぜぇーーーーー！！！！！」

雪合戦バトル！

『雪合戦オーレ！！』

ダイチのテコ入れビジョン終了。

銀八
「どこが『オーレ』なんだよ！？」

ダイチ
「オーレンジャーロボ出したからいいだろ？」

銀八
「それ出して『オーレ』というのか！？」
とダイチにツッコむ銀八。

零斗
「これで、テコ入れの授業は終了します。皆さん、最後にテコ入れ万歳！」

生徒達
『テコ入れ万歳！』

零斗
「テコ入れ万歳！」

生徒たち
『テコ入れ万歳！』

テコ入れ万歳は、放課後まで続いた・・・・・・

銀八とレジアスは、零斗達のボケについてこれなくなったため、帰った。

第四十話　テコ入れ万歳！（後書き）

烈火竜さん、ありがとうございました。

次回は東方のあのキャラが登場します。

第四十一話　零斗の過去・・・・それは・・・・・（前書き）

零斗
「今回はあの二人が登場！」

第四十一話　零斗の過去・・・・それは・・・・

ＢＳＡＡ学園２年Ａ組にて・・・・・・

零斗
「あ～あ、暇だなぁ～」

一刀
「暇そうだな」

アックス
「でも三人目を倒したからここの学園が平和になったから良いんじゃない？」

フランケン
「アックスの言う通りだぞ」

零斗
「けどよぉ～刺客が来なくなってすげ～暇だもん」

その通り、金山四天王の三人目を倒してから刺客も来なり、ＢＳＡＡ学園に平和が訪れた。

それよりも大事な事を忘れていた。それは・・・・・

零斗
「冬休み」

である、それまでには退屈を過ごさなきゃならない。

愛紗
「全く、刺客が来なくなって、勉強がスムーズに出来るのは良い事ではありませんか」

零斗
「俺は勉強より戦うのが好きなの。刺客倒すとか、次の刺客が送り込まれんのワクワクするからすげぇ楽しみなんだよ」

そう言いながら数学の予習復習をしていた。

愛紗
「その様子だと、説得力が無いんだが・・・・・（汗）」

ムニュ

愛紗
「キャア！」

一刀
「ほれほれ～気持ちいいかぁ～」

一刀は後ろから愛紗の胸を揉んでいる。

モミモミモミ・・・・・

愛紗
「あ、あぁ～んだめぇ～」

パァン！

一刀
「痛〜い（棒読み）」

横からフランケンがハリセンで一刀の頭を叩いた。

零斗
「あぁ〜すげぇ〜暇だなぁ〜。金山企業も暇そうにしてんだろうなぁ〜」

金山企業にて・・・・・

鬼川
「くしゅん！誰か僕に噂をしているのかなぁ〜」

？？？
「そうかもしれません、鬼川会長」

鬼川の隣にいるのは金山四天王の四人目、死神スカル、髑髏の仮面を着けており、黒いローブを身にまとっている。

しかも死神の鎌を持っている。

死神スカル
「それよりも、あの零斗とか言う男を捕らえるのは難しいようですね。マイティ真拳の伝承者なんですから」

鬼川
「その通り、だけど僕の『ダークネスネガティブ真拳』で簡単に捕らえる事が出来るけど、金山企業（ここ）を離れるわけにはいかないしね」

死神スカル
「そうですか、だったら最強の刺客を送ればいいんじゃないですか？」

鬼川
「最強の刺客か・・・・・でも、少し待とうよ。もうすぐＢＳＡＡ学園は冬休みだしね」

ＢＳＡＡ学園２年Ａ組にて・・・・・・

アリス
「零斗ぉ～」

夕化
「にゅふふ～」

ネココ
「にゃ～にゃ～」

コロナ
「ふにゃ～」

アリスと夕化とネココとコロナは零斗に猫のように甘えている。

これを見た諸葛亮（朱里）と鳳統（雛里）は・・・・・

朱里
「・・・・・・（怒）」

雛里
「・・・・・・（ほわわ～ん）」

朱里は嫉妬しており、雛里は和んでいる。

そして前の扉が開き、劉備ガンダムが現れた。

劉備ガンダム
「え～授業始めますので、他のクラスの生徒は元の教室に戻って、2年A組の生徒は席に着いてください（笑）」

フランケン
「何で（笑）！？」

零斗
「あぁ～劉備ガンダム先生という事は世界史かぁ～今日俺日直じゃん。起立、きょうつけ、礼」

零斗の掛け声により、劉備ガンダムの授業が始まった。

一刀
（ん？）

劉備ガンダムの頬に、ご飯粒がついていた。

一刀
（おいおい、気付いてないのか？それより誰かが気付いたら面倒くさい事になるぞ）

こうして一刀は声をかけずに授業が終わった。

零斗
「何だ？」

グランド側の窓を覗いてみると、魔女らしき者と巫女らしき者がいた。

零斗はすぐさまグランドへ向かう。

フランケン
「おい！待てよ！」

皇呀
「ったく何なんだよ」

フランケンと皇牙は零斗についていく。

グランドに着き、零斗達の前にいるのは『東方シリーズ』の博麗霊夢と霧雨魔理沙である。

フランケン
「な・・・・魔女に巫女！？」

零斗
「ほぉ～お前等刺客か？」

魔理沙
「違うね、それに私と霊夢はお前の噂を聞いてここに着たのさ」

霊夢

「その実力、本当かどうか・・・・試しに・・・・」

零斗
「はいはい、解りました、じゃ早速やりますか」

魔理沙
（理解するの早っ！）

皇呀
「じゃあそこの魔女は俺が相手になる」

零斗
「俺は巫女さんか」

霊夢
「私は博麗霊夢」

魔理沙
「あたしは霧雨魔理沙だ」

零斗
「霊夢か、俺は北郷零斗！」

皇呀
「そして俺は王原皇牙だ！」

それぞれ自分の名を名乗る。

零斗
「よぉ～し先手は俺達からやらせてもらうぜ！マイティ真拳奥義！」

皇呀
「御都合真拳奥義！」

零斗の白いオーラと皇牙の赤いオーラに警戒する霊夢と魔理沙。

零斗　皇呀
「「ジャスタウェイダンス！」」

久しぶりのこの技・・・・女性がこれを見たら引いてしまう技、
『ジャスタウェイダンス』である。

フランケン
「おいぃーーーーーーーーーーーー何やってんだぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

これを見た霊夢と魔理沙は引いてしまう。

霊夢
「な、何あれ・・・・・（青ざめ）」

魔理沙
「き、気持ち悪い・・・・・・」

零斗と皇牙は止まり・・・・・・

零斗
「・・・・・・準備体操終わり！」

皇呀

「終わりーーーー！！！」

霊夢　魔理沙
「「あれが準備体操！？」」

零斗
「さてと、どうしよっかな？」

皇呀
「迷うぜ」

フランケン
「迷わなくて良いから（泣）」

魔理沙
「スペルカード！マスタースパァーーーーク！！！」

魔理沙から超極太レーザーが発射され、そのレーザーは零斗達に向かって来る。

零斗
「うわわわわわ（泣）」

皇呀
「どうしよぉ～（泣）」

ドゴォーーーーーーーーーーーン！！！！

フランケン
「零斗ぉーーーーーーーーーーー皇呀ぁーーーーーーーーーーーーーーーー

ー！！！！」

マススパークが零斗と皇呀に直撃した・・・・と思いきや・・・・

零斗
「ふぅ～危なかったぜぇ～」

劉備ガンダムを盾にしてマススパークから防いだ。

現在劉備ガンダムは黒焦げである。

フランケン
「おいぃーーーーーーーーーー何やってるのぉーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

黒焦げになった劉備ガンダムを横に落とした。

零斗
「よっしゃ！やってやるぜ！マイティ真拳奥義！」

劉備ガンダムを掴み・・・・・・

零斗
「劉備ガンダム・ザ・ロケットランチャー！！！！！」

ドゴォーーーーーーーーーー！！！！！

劉備ガンダム
「アァーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

零斗は劉備ガンダムを蹴り飛ばし、劉備ガンダムは霊夢と魔理沙の方へ向かっている。

バァーーーーン

劉備ガンダム
「グフゥーーーーー！！！」

魔理沙と霊夢は劉備ガンダムを避けてしまい、劉備ガンダムは校門に激突した。

激突した劉備ガンダムは、気絶した。

魔理沙
「何て物を飛ばすんだ！」

霊夢
「危ないでしょ！」

フランケン
「いやいや劉備ガンダム先生を気にしようよ！ってか劉備ガンダム先生が頭から血を流してるから！」

フランケンの言う通り、劉備ガンダムの頭から血を流している。

零斗
「関係ねぇ！マイティ真拳奥義！復活の劉備ガンダム！」

零斗の手から光の魂が現れ、その魂を劉備ガンダムに投げる。

劉備ガンダム
「ふぅ～助かったぁ～」

フランケン
「復活しちゃった！？」

劉備ガンダム
「零斗！俺も加勢するぞ！」

龍帝剣と爪龍刀を取り出す。

零斗
「劉備ガンダム先生！頑張ってぇ～」

劉備ガンダム
「はぁーーーーーーーー！！！！！」

二つの剣を持って霊夢に突進する。

霊夢
「スペルカード！無双封印！」

霊夢から複数の光弾が発射され、劉備ガンダムに向かっていく。

ドドドドドド・・・・・・

劉備ガンダム
「アァーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

全ての光弾を喰らい、黒焦げになって気絶した。

零斗
「劉備ガンダムぅーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！よくも・・・・よくも劉備ガンダム先生を～怒りの奥義を食らいやがれぇーーー！！！！！」

皇呀
「俺も同じだ！」

零斗と皇呀から、怒りのオーラが出ている。

零斗
「マイティ真拳奥義ぃーーーーーー！！！！！」

皇呀
「破天荒真拳奥義ぃーーーーーーーー！！！！！！」

零斗は高く飛び上がり、飛び蹴りの体勢に入り、皇呀は走りながら殴る体勢に入る。

零斗
「パトリオットキックゥーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

零斗の飛び蹴りが、霊夢に向かっていく。

ドカァーーーーーーーン！！！

霊夢

「いやぁーーーーーーーーーー！！！！」

零斗のパトリオットキックによって吹き飛ばされる。

皇呀
「豪火飛昇拳！！！」

すると皇呀の右手から炎が出てきて、魔理沙にアッパーする。

魔理沙は魔法陣のシールドを張る。

ドゴォーーーーーーーーーーン！！！！！

魔理沙
「ギャアーーーーーーーーー！！！！」

皇呀の豪火飛昇拳によって吹き飛ばされる。

零斗
「・・・・・・やっちゃったね♪」

皇呀
「そうだなぁ～」

すると霊夢と魔理沙は立ち上がる。

零斗
「あれ？お前等あの攻撃喰らって生き延びたなぁ～」

霊夢

「つ、強い・・・・」

魔理沙
「どうしてそんなに強いんだ!?」

零斗
「知りたいか、じゃあ教えてやる!俺の過去を!零斗劇場一話!開始!」

零斗劇場第一話『タコタコたこ焼き』

魔理沙
『タコタコたこ焼き!?』

サブタイトルにツッコむ魔理沙。

零斗がマイティ真拳の伝承者に会う前の事・・・・・・

いつものように元気よく零斗が家に帰ってくる。

零斗（幼少）
「ただいま～お父ちゃん」

???
「あぁ帰ってきたか、おやつはテーブルの上に置いてあるぞぉ～」

零斗の父親はＯＶＡ『真・恋姫†無双』の島の守り神のタコだった。

フランケン

『何で島の守り神のタコ！？』

※回想シーンの時は、他のキャラのツッコミの台詞は『』になります。

いつも零斗のおやつはタコが作ったたこ焼きである。

零斗（幼少）
「わぁ～父ちゃんありがとぉ～」

と言ってたこ焼きを食べる。

その時・・・・・

ガララッ！

黒いスーツの男
「金山企業の者だ」

零斗（幼少）
「え？」

突然、黒いスーツの男は家に入り、タコを掴んだ。

タコ
「な、何をする気だ！」

黒いスーツの男
「会長のおやつになってもらおう」

タコ
「嫌だ！おやつにされたくなぁ～い！！！！」

タコが黒いスーツの男に連れ去られる所をじっと見ていた。

タコ
「零斗よぉ～地球の未来は、お前に託したぞぉーーーーーー！！！！」

こうして、零斗がマイティ真拳の伝承者を探すきっかけになった。

零斗劇場一話終了。

零斗
「あの時、救えなかった自分が許せなかった！」

隣では・・・・・

劉備ガンダム
「うぅ～零斗ぉ～そんな過去があるなんて知らなかったよ！（泣）」

皇呀
「クッ！泣けるぜ（泣）」

フランケン
「いやいやいやいや！涙流さないのはおかしいから！無関心に見えるから！」

霊夢

「・・・・（汗）」

魔理沙
「あぁ・・・・零斗の回想って訳わからねぇ・・・（汗）」

零斗
「では、零斗劇場二話！開始！」

魔理沙
「二話もあんのかよ！？」

零斗劇場第二話『マイティ真拳ドキドキ修行！』

魔理沙
『ドキドキ修行って何だよ！？』

父親が金山企業に連れ去られて一ヶ月後、零斗は寂しく学校に向かった。

その時・・・・・・

黒いスーツの男
「お前か、あのタコの子供と言うのは・・・・・」

突然、零斗の前に黒いスーツの男が現れた。

零斗（幼少）
「え？え？」

黒いスーツの男
「大人しくこ・・・・グハァ！」

黒いスーツの男は、何者かにやられた。

それは・・・・・

???

「お前、一人ぼっちなのか？」

零斗の前にいるのはフードの男であった。

フードの男
「私がお前を鍛え上げよう。誰にも負けない力を、いや『マイティ真拳』を伝承させよう」

このフードの男はマイティ真拳の伝承者である。

こうして、零斗のマイティ真拳の修行が始まった。

出来立てのラーメンを十秒間で食べる修行、アニメ・特撮を全て鑑賞する修行、全てのゲームを完全クリアをする修業。

そして、全裸でバンジージャンプをする修行。

どんな過酷な修行を耐え抜いた。

十年後、零斗はマイティ真拳の伝承者となり、異種格闘技大会で出て、決勝戦で皇牙と戦い、勝った後、親友になった。

その後、ＢＳＡＡ学園に転校する。

零斗劇場第二話終わり。

零斗
「どうだ！これが俺の過去だ！」

フランケン
「あのさ・・・・いいかな？」

零斗
「言ってみろ！」

フランケン
「出来立てのラーメンはともかく！何で全裸でバンジージャンプなんだ！」

霊夢と魔理沙は顔を赤くする。

霊夢
「全裸のバンジージャンプって・・・・」

皇呀
「そういう修行を耐え切るこそが、真の伝承者となるのだ！」

フランケン
「耐え切れねーよ！」

キーンコーンカーンコーン

零斗
「あ、それそろ授業だ、行くぞぉ～」
と言って2年A組に向かう零斗と皇呀。

フランケン
「おい待てよぉ～」

後からフランケンと劉備ガンダムがついて来る。

霊夢と魔理沙は・・・・・

魔理沙
「何か、零斗と相手するの疲れる・・・・・」

霊夢
「そうね・・・・・」

その後二人は、幻想郷へ帰って行きましたとさ。

第四十一話　零斗の過去・・・・それは・・・・・（後書き）

次回は冬休み編です。

零斗

「楽しみだなぁ～冬休み！冬休み！・・・・・・」

第四十二話　まさかの期末テスト！？（前書き）

前回は冬休み編と言ってましたが、今回は冬休み編の前に期末テストという話ですのでご了承ください。

零斗

「ここで零斗から良いお知らせだ、ユーザーじゃない人でも感想を書けるようにしたからな、だけど荒らしと誹謗中傷はやめてくれ。リビングタイムまで質問は募集している。皆、ドシドシ質問を書いてくれ！質問と感想を待ってるぞぉ～」

第四十二話　まさかの期末テスト！？

ＢＳＡＡ学園の２年Ａ組では・・・・・

冬休みが近付く事に盛り上がっており、特にクリスマス等である。

アリス
「零斗ぉ～クリスマスの日とか暇？」

零斗
「おっちゃんが暇ならな。それにクリスマスが近付くから張り切ってるらしいからな。毎年クリスマスの日の居酒屋は客が大勢来るんだよ」

アリス
「そうなんだ・・・・・」

零斗
「でも大丈夫だ、おっちゃんに何とか言ってやるから。ホワイトクリスマスにしようぜ」

アリス
「零斗ぉ～」

するとナツルは・・・・

ナツル
「零斗のホワイトクリスマスは白くてドロドロの・・・・」

ゴスッ！

ナツル
「グォハァ！」

フランケンはナツルに膝蹴りをした。

フランケン
「馬鹿野郎！何下ネタ言ってんだ！消去されるぞ！」

全くもってその通りである。

フランケンはライアンに話しかける。

フランケン
「ライアン、クリスマスは俺達彼女いない組でカラオケを楽しもうぜ」

ライアン
「すまねぇ、今年のクリスマスは姉と一緒に過ごす事になった」

フランケン
「えぇ！？嘘ぉ！巨乳アギトと巨乳リインとぉ！？」

ライアン
「あぁ、何というか、姉に逆らえないからな。」

因みにライアンの姉はアギトとリインである。

アギトは、背がシグナムと同じであり胸は雪蓮と同じである。

リインは、背がなのはと同じであり胸は真桜と同じである。

フランケン
「お前そんな姉を持ってるなんて、羨ましいよ（泣）こうなったら！一人でクリスマスを過ごしてやるぅーーーーーーー！！！！！」

羨ましさに滝のように涙を流すライアンであった。

雄真達は・・・・・

春姫
「ねぇ雄真、クリスマスどうする？」

雄真
「そうだなぁ～」

杏璃
「だったらカラオケにしない？」

小雪
「それもいいんじゃないかしら」

八輔
「ここは思い切って・・・・」

ガァン！

アックスの肘が八輔に当たり、八輔は気絶した。

雄真達はアックスの方へ向く。

アックス
「ごめん高溝君。空手の型のおさらいをしていた所なんだ」

どうやらアックスは空手で兄と組み手をするという約束をしているため、その為の型のおさらいをしているらしい。

杏璃
「空手の型のおさらいをやるなら自分の家でやりなさいよ！危ないから（怒）」

と杏璃はアックスにツッコむ。

アックス
「ごめんね～兄と体育館でやるという約束だからそこは許してくれないかな？」

杏璃
「いやいやいや何で体育館なの！？」

信哉
「型のおさらいは武術の鍛錬になるでござる！」

信哉は木刀を持って素振りをしている。

杏璃
「あんた達鍛錬したいなら体育館でしなさいよ！（怒）」

この状況で苦笑いする雄真達であった。

一刀達は・・・・・

紫苑
「ねぇねぇ～お兄ちゃん。クリスマスは一緒に寝ようよぉ～」

祭
「あたしは兄ぃと一緒にクリスマスを過ごした～い」

桔梗
「わ、私はお兄様と一緒なら構いません」

と一刀に甘える紫苑達。だが鈴々は・・・・・

鈴々
「むぅ～お兄ちゃんとクリスマスを過ごすのは鈴々なのだぁー！！！紫苑達は鈴々より年下だからここは鈴々に譲るのだぁーーーー！！！！！」

どうやら鈴々は一刀と一緒に過ごしたいらしい。

愛紗
「鈴々、それは逆だぞ。年上のお前が年下の紫苑達に譲るんだぞ？」

鈴々
「お兄ちゃんを独り占めしている愛紗には言われたくないのだ！」

愛紗
「それはどういう事だ？（黒笑）」

鈴々
「いつもお兄ちゃんとエッチしているのだ！それにドアの隙間から愛紗が鳴いているのが漏れてるのだ！」

愛紗
「うぅ・・・（青ざめ）」

鈴々の言う通りである。黒笑する意味無いじゃん。

一刀
「よぉ～し、だったら皆で俺と過ごすのはどうだぁ～？」

愛紗　鈴々　紫苑達
「えぇーーーーーー！？やったぁーーーーーーーー！！！！」

こうして、一刀の周りの女の子は、一刀の発言で喜んでいた。

レスター達は・・・・

レスター
「クリスマスはどうしようか～」

ミネット
「冬休みと言えばクリスマスです～」

カリーナ
「そうですわね～（レスターと二人っきりで過ごすチャンスですの！）」

チェルシー

「あと少ししたら冬休みですね」

アニエス
「あはは～もうすぐ冬休みだね～（笑）」

冬休みの事で話していた。

なのは達は・・・・・

なのは
「じゃあクリスマスイブの日に私の家でパーティっていうのはどうかな？」

フェイト
「それ、良いよね」

はやて
「ええで、じゃあユーノ君達はどうや？」

ユーノ
「シャッハさんを呼んでいいかな？」

ユーノはシャッハと恋人同士であり、シャッハに溺愛されている。

クロノはエイミィの恋人だが、振り回される苦労人である。

クロノ
「俺はエイミィを呼ばないと疲れる・・・・（汗）」

なのは

「いいよ?」

その時・・・・・

ガララララ・・・・

前の扉が開く音がして、全員席に着いた。

入ってきたのはご機嫌な朱里だった。

朱里

「皆さ～ん。良いお知らせがありま～す」

そして零斗達は・・・・

零斗

「良いお知らせって言ってもどうせテストだろうな（小声）」

フランケン

「そ、そうとは限らないぞ?（小声）」

アリス

「でも諸葛亮先生はテストの事になると機嫌が良くなるよ?機嫌が良いという事は、テストのお知らせだと思う」

フランケン

「う～ん（汗）」

と小声で話しており、朱里はそれに気付かず話し出す。

朱里
「二週間後の月曜日は、期末テストの日で～す」

全員（零斗とアリス以外）
「えぇーーー

フランケン
「関心してる場合じゃないぞ！」

一刀
「冬休み返上という事は、冬休みの期間は学校で追試じゃないか！
しかもお正月も関係なく！」

全くもってその通りである。

零斗
「う～ん、これはまずいな」

フランケン
「だから俺達は勉強をするんだよ！」

零斗
「そうだな、皆よく聞いてくれ。冬休みを返上したくないか？」

全員
「したくな～い！」

零斗
「では、諸葛亮先生をギャフンと言わせたいか？」

全員
「言わせたい！」

零斗
「よし！言える事はただ一つ！勉強しまくって冬休みを死守するぞ

ぉーーーー！！！！！」

全員
「おぉーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

放課後・・・・・・

フランケン
「あんな事言っちゃって大丈夫か？」

零斗
「まぁ冬休みの為だ、あれくらい言わないと皆やる気が出ないからな」

アリス
「そうだよね～冬休みを死守したら～クリスマスも過ごせるし～」

フランケン
「そうだな・・・・・（汗）」

零斗
「よぉ～っし！俺達三人は俺の家で勉強だ！行くぞぉ～！！！！」

こうして零斗達は、クラウザーの居酒屋で勉強をする事になった。

零斗の部屋では・・・・・

フランケン
「うわぁ～アニメとゲームが一杯だなぁ～（汗）」

零斗の棚には、アニメのＤＶＤとゲームソフトが沢山置いてある。

アリス
「零斗ぉ～？エロビデオがあるんだけど～」

零斗
「おっと、そのアニメのＤＶＤとゲームソフトは、マイティ真拳の鍛錬に使う奴だから」

フランケン
「え！？そうなの！？」

アリス
「でもエロビデオとエロ本は？」

零斗
「それはアリスを一杯抱くための鍛錬だ」

アリス
「零斗ぉ～」

アリスは零斗に抱きつく、これを見たフランケンは・・・・・

フランケン
（何か見ているとイラッとする。諸葛亮先生の気持ちが解ってきたよ）

零斗達は早速勉強をし始めた。

一時間後・・・・・

零斗
「うぅ～こりゃ大変だ・・・・・」

なんと、零斗がへばってしまい、寝転がる。

フランケン
「全く、言い出しっぺはお前じゃないか、言い出した本人がへばってどうする」

零斗
「マイティ真拳の鍛錬よりマシだぜぇ～」

フランケン
「お前がこうだと冬休みを返上する事になるぞ！」

零斗
「いいんじゃな～い？どうせ赤点になるし」

フランケン
「おいぃーーーーーーーーーそんな気持ちでどうすんだ！」

怠ける零斗にツッコむフランケンであった。こんなんで大丈夫か（汗）

朱里の家にて・・・・・

朱里は一刀にしか解けない問題を作っていた。

朱里

「これで一刀君だけを合格にさせて、二人っきりでクリスマスを過ごす・・・うふふふふ」

だが朱里は気付いてなかった。机の裏に盗聴器を付けられている事を！

で、一刀君の家はどうしているかというと・・・・・・

真面目に勉強しており、しかも集中している。

しかし一人だけ・・・・・

鈴々

「むぅ～この問題解らないのだぁ～（汗）」

一刀

「いいかい鈴々、この問題は・・・・」

鈴々は一刀に教えてもらいながら勉強をしているようだ。

愛紗

（鈴々、何か羨ましいな・・・・・）

教わっている鈴々が羨ましがっている愛紗であった。

零斗の家では・・・・・

零斗

「いや～勉強って為になるよね～」

5時間掛けてスラスラ解けるようになった零斗であった。
それに疲れたフランケンがいた。

フランケン
「はぁ～5時間掛けてスラスラ解けるように教えたのに疲れたよ・・・・」

零斗
「っていうかさ、なんだか期末テストが楽しみになってくる気持ちが浮かび上がってくるんだ」

フランケン
「零斗・・・・・・」

こうして、零斗達は、テスト勉強を続けるのであった。

それから二週間後・・・・・・

期末テストの日である。

零斗
「さぁ、冬休みを死守するために頑張るぞ！」

全員
「おぉーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

2年A組では、気合を入れていた。

気合を入れた後、それぞれ自分の席に座る生徒達、先生が来てテス

ト用紙を配られる。

こうして、テストは開始した。

放課後・・・・・・・

零斗

「いやぁ～期末テストの後はスッキリするよねぇ～」

フランケン

「結果は解らないぞ。赤点かどうか」

アリス

「でも、テストがやれて良かったと思ってるよぉ～」

職員室では・・・・・・

朱里

「・・・・・・（絶句）」

2年A組の回答用紙を見て絶句する朱里。

その回答用紙を見る劉備ガンダム

劉備ガンダム

「これは赤点じゃないな。黒点だ」

曹操ガンダム

「余もそう思っていた所だ」

こうして朱里は、涙を流した。

翌日・・・・・

朱里
「皆さん、良いお知らせがあります・・・・・全員、合格です」

元気の無い声で合格と言う朱里であった。

零斗
「という事は?冬休みは死守したって事かぁ!?」

朱里
「そういう事になります・・・・」

全員
「やったぁーーー

雛里
「うふふ、どうやら朱里ちゃんの計画は水の泡ね。問題用紙を摩り替えておいて正解だったわ」

アックス
「そうですね、朱里先生には悪いけど冬休みは渡しませんよ」

朱里の計画が失敗したのは、この二人が妨害したからだ。

2年A組の生徒達は、冬休みを過ごす事になった。

第四十二話　まさかの期末テスト！？（後書き）

零斗
「朱里先生、冬休み中は嘆いているだろうなぁ～」

アリス
「冬休みを死守出来ただけで嬉しいじゃない」

零斗
「だよな、次回は冬休み編だからな！楽しみにな！」

第四十三話　皇呀の素敵な一日！？　（前書き）

龍の骨
「今回は皇呀が主役です」

零斗
「皇呀が主役か、遂に皇呀は・・・・」

龍の骨
「ネタバレ禁止！本編開始！」

今回は成人向けな表現がありますので苦手な人は注意してください。

第四十三話　皇呀の素敵な一日！？

期末テストが終わり、冬休みを迎えた一日目。

皇呀は早朝に家から出て『新宿公園』へ行く。

何故『新宿公園』なのか、それは皇呀がいつも早朝に奥義の修行をするからだ。

金山企業が悪事を知り、しかもアニメキャラでも歯が立たない程の力を持っている事を知っている。

零斗と共に金山企業を潰す為である。

修行を終え、自宅に戻って朝食の準備をする皇呀。

朝食の準備を終えたあと、テレビのリモコンのスイッチを押す。

テレビにニュース番組が写る。

アナウンサー

『新宿の西地区で、誘拐事件が発生しました。警察の捜査によると、この日で百人誘拐されているようです。さらに・・・・』

皇呀

「こんな物騒な事件が起きているとはな。新宿は犯罪がやや多いな。金山企業の仕業だな」

そう呟いて朝食を食べる皇呀であった。

朝食を終え、再び外に出て街を出歩く。
すると携帯電話が鳴り、皇呀は携帯電話に出る。

零斗
『よう、皇呀』

零斗からの電話だった。

皇呀
「零斗、何の用だ?」

零斗
『彼女は出来たか?お前は少し鈍な所があるから彼女無しだから心配なんだぜ?』

皇呀
「うるせぇ、余計なお世話だ。それに俺はお前ほどの女たらしになるつもりは無い」

零斗
『おいおい、女たらしって言うのは訂正してくれ。俺は女にモテる男だぜ?』

皇呀
「どっちも変わらねぇよ。俺は彼女を作るつもりは無い」

零斗
『つまんねぇ男だなぁ。お前が嫌でも、女はお前の匂いにつられて

来るぜ？』

皇呀
「果たしてそうかな？じゃあな」

皇呀は電話を切った。

皇呀
「はぁ、零斗は女好きな癖は相変わらずだな」

そう呟きながら歩く皇呀であった。

公園に行き、ベンチを座ろうとすると・・・・

向こうのベンチで、落ち込んでいるエイラがいた。

皇呀
（あれは零斗が言ってたエイラか？落ち込んでいるのは何でだ？）

そう思いながらエイラがいるベンチに向かい、隣に座る。

エイラ
「サーニャ・・・・」

エイラは小さな声でサーニャの名を言う。

皇呀
（なるほど、相当ダメージが大きいな、下手に何か言うと面倒になる）

そう思い、エイラから離れようとする。

だが・・・・

エイラ
「お前、私の隣に座ってたのか？」

突然、エイラは皇呀に聞く。

皇呀
「何だ？悪いのか？」

エイラ
「別に、悪いとかそういう・・・・」

皇呀
「お前が落ち込んでいるから隣に座ってやったんだよ」

するとエイラは・・・・

エイラ
「そういうお前は落ち込む事はあるのか？」

皇呀
「はぁ？ねぇよ！」

エイラ
「だったら帰れよ」

皇呀

「あんだと！（怒）」

エイラ
「そもそも、彼女がいない奴には、女の気持ちが解らないってことか」

皇呀
「なっ！テメェ！」

こうして、エイラと皇呀の喧嘩は二時間も続いたという。

口喧嘩が終わった後、皇呀は零斗の家へ向かった。

零斗の部屋にて・・・・

皇呀
「全く、あのエイラって言う女、ムカつくぜ」

皇呀は零斗にエイラに対しての愚痴を話していた。

零斗
「まぁエイラはあの騒動でクリスにサーニャを奪われたんだからさ」

皇呀
「あの騒動？」

解らなければ三十六話から三十九話まで読もう。

皇呀
「おいおい（汗）」

零斗
「あんまり深追いすると、痛い目に合うぜ？」

皇呀
「ふん！あんな女の事なんざ知りたくもねぇ」

零斗
「でもさぁ、口喧嘩を二時間したんだろ？お前とエイラは結構合うんじゃねぇか？」

皇呀
「なっ！バカ言うんじゃねぇよ！誰があんな女の事を・・・・」

思わず顔を赤くする皇呀であった。

零斗
「ははははは、やっぱり好きじゃねぇか！」

皇呀
「テメェ殺すぞ！」

零斗
「ほれほれ～殺してみなさ～い」

皇呀
「この野郎！」

こうして零斗は、皇呀をいじくりました。

その後、皇呀は零斗の家から出た。

皇呀は街中を歩いていると・・・・

道路の真ん中で、大勢の人達が集まっている事に気づき、向かう。

皇呀はどうなっているかを気になって見てみると・・・・

『ストリートファイターシリーズ』のリュウが倒れていた。

しかも傷だらけである。

皇呀
「いったい誰にやられたんだ?」

皇呀はリュウが受けた傷痕を見て何かに気付く。

皇呀
(この傷痕、あの鬼川って奴の仕業だな)

皇呀ビジョン開始

リュウは真の格闘家を目指すため、公園で修行をしていると・・・・

目の前に鬼川が現れた。

鬼川
「やぁ、君がリュウだね?」

リュウ

「そうだが・・・・」

鬼川
「真の格闘家になりたいんだろう?だったら僕の会社に入りなよ。一年で真の格闘家になれるよ」

だがリュウは・・・・

リュウ
「残念ながら、俺は俺のやり方で真の格闘家になる」

鬼川
「そう、だったら・・・・」

すると鬼川は目にも止まらぬ速さのパンチを繰り出し、リュウにダメージを与え、最後にアッパーで吹き飛ばす。

リュウが飛ばされた場所は、新宿の道路の真ん中である。

鬼川
「はっはっはっはっは、僕の言うことを聞かなかったからこうなるんだよ」

そう言って公園から去った。

皇呀ビジョン終了。

皇呀
(あの野郎、どこまで闇に飲まれるんだ・・・・)

その後リュウは、病院へ運ばれた。

皇呀
「あの加富根総合病院に運ばれるのか。あの病院はヤバいぜ（ある意味で）」

皇呀は再び街中を歩く。

すると・・・・

劉備ガンダム
「うわぁーーーーーーー！」

劉備ガンダムが皇呀の方へ向かってきた。

皇呀
「何だ？」

劉備ガンダムは皇呀を通り過ぎ、向こうから霊夢と魔理沙とアリス・マーガトロイドが向かって来る。

すると皇呀は・・・・

皇呀
「おい！お前ら何やってんだ？」

三人は皇呀の前に止まる。

霊夢
「あ、皇呀」

皇呀
「霊夢と魔理沙、そしてあんた誰？」

アリス
「私はアリス・マーガトロイドよ」

皇呀
「どうしたんだお前ら？あの劉備ガンダムを追ってるように見えたんだが？」

霊夢
「そうよ、さっき逃げていった奴が、お賽銭箱を盗んだんじゃないかってね」

皇呀
「賽銭箱ねぇ（汗）それで何で魔理沙とアリスが霊夢と一緒に追ってるんだ？」

魔理沙
「それは触れないでくれ」

アリス
「あまり触れると嫌われるわよ」

皇呀
「おいおい、いうわゆる大人の事情ってやつか？」

魔理沙
「まぁそんな感じだ。あたしはしばらくこの世界にいるぜ。あと皇

呀、エイラって言う女がＢＳＡＡ学園の屋上で待っているってさ」

皇呀
「はぁ？」

こうして皇呀は、ＢＳＡＡ学園へ向かった。

着いたあと、屋上へ行く。

ＢＳＡＡ学園の屋上にて・・・・

皇呀
「ここに呼び出しとおいて、何の用だ？」

エイラ
「あのさ皇呀、私は・・・・」

皇呀
「言いたい事があったらさっさと言っちまえ。その方がいいぞ？」

エイラ
「実は私、皇呀の事、好きなんだ」

エイラの爆弾発言に驚く皇呀。

皇呀
「な、何で！？」

エイラ
「霊夢と魔理沙と戦っている時、お前を見ると胸が熱くなったんだ。

私は皇呀の恋人になりたいって思ったんだ」

皇呀
「でもお前、あれだろ？サーニャの事が好きなんだろ？」

エイラ
「確かに私はサーニャが好きだ。でも今は皇呀の事が好きだ。お前と話して好きな気持ちが膨れ上がったんだ」

そう言って皇呀に抱きつき、皇呀は顔を赤くする。

その時・・・・

朱里
「エイラさん？」

屋上の扉からガトリングマジニが持っていたガトリングを持った朱里が現れる。

エイラ
「朱里先生！？」

朱里
「居酒屋で私たちと飲みましたよね？そして私たちから裏切ろうとするんですか？」

すると皇呀は・・・・

皇呀
「エイラが何やろうと勝手だろ？」

朱里
「それそうですけど、でも・・・・恋人関係を作ることだけは許しません！」

そして朱里は、皇呀とエイラにガトリングを向ける。

朱里
「うふふふふ・・・・覚悟してください」

その時！

皇呀は目にも止まらぬ速さで朱里を通り越す。

そして・・・・

ガトリングが四つに切れ、服と下着が断方な散り落ちる。

朱里は全裸になってしまったのだった。

朱里
「いやぁーーーーーーーーー！！！」

あまりの恥ずかしさに体育座りをしてしまう。

皇呀はエイラの下へ戻る。

エイラ
「皇呀、朱里先生に何をしたんだ？」

皇呀
「御都合真拳奥義、神速のかまいたち。この技は、目にも止まらぬ速さで相手を通り越す。通り越された相手は服と下着が断方なく散り落ちる。まぁ戦闘能力が高い女性には効果があるぜ」

エイラ
「へぇ～」

すると二人は・・・・

皇呀
「さて、お仕置きだな」

エイラ
「そうだな、私たちの邪魔をしたしな」

二人は怪しい笑みを浮かべる。

朱里
「お仕置きだけは・・・・・いやぁーーーーーーーー！」

その後、朱里はどうなったかはご想像にお任せします。

皇呀とエイラは、顔を合わせ、唇を重ねる。

エイラは服を全部脱ぎ、皇呀を脱がせる。

皇呀はエイラを優しく押し倒す。

こうして二人は、熱く愛し合った。

第四十三話　皇呀の素敵な一日！？　（後書き）

皇呀
「次回は再びテコ入れだぜ」

零斗
「さぁ！次回は第二次テコ入れ大戦だぜ！？」

龍の骨
「第二次テコ入れ大戦って何！？」

零斗
「前回のテコ入れで第一次テコ入れ大戦があってな、次回が第二次テコ入れ大戦何だよ！」

龍の骨
「勝手に決めんなよ！（怒）」

零斗
「次回は本当に開始するぞぉ～」

龍の骨
「おい！」

第四十四話　第二次テコ入れ大戦！（前書き）

ここで注意があります。途中でエロがありますので苦手な人は注意してください。

第四十四話　第二次テコ入れ大戦！

アックスの豪邸のリビングでは・・・・

零斗がソファーにくつろいで『ドS女王亞シェ様』を見ていた。

そしてアリスは零斗の腕にしがみついていた。

バチン！

白蓮
『あぁん！』

亞シェ
『うふふ、いいわ。この鳴き声、実にいいわ。もっと鳴きなさい！』

バチン！ベチン！

白蓮
『あぁん！お姉さま気持ち良いです！もっと鞭で叩いてください！』

現在、白蓮が亞シェに鞭で打たれているシーンである。

これを見たフランケンは・・・・

フランケン
「あのぉ零斗君とアリスさ～ん。もうそろそろ・・・・」

零斗
「何だ?フランケン」

フランケン
「そろそろ俺達に話す事あるだろ?」

零斗
「あ、そうだった」

と行ってＴＶの電源をリモコンで消す。

零斗
「お前ら良く聞け、今回は・・・・」

フランケン
（ゴクリ・・・・）

零斗
「今回はテコ入れ大戦だ。皆喜べ!」

零斗の発言で、周りが沈黙になった。

フランケン　アリス
「「えぇーーーーーー!」」

二人は驚く。

零斗
「何だよ、驚く事はないだろ?」

フランケン
「そりゃ驚くよ！何で大戦！？」

零斗
「前回のテコ入れがイマイチだったんだよ。もっと多くのテコ入れを増やせという読者の意見があったりするんだよ」

フランケン
「成る程、だからかぁ」

零斗の言葉に納得するフランケン。

零斗
「という事で早速テコ入れ大戦を始めましょ～う」

フランケン
「いきなり！？」

アリス
「はいはーい、私からいきま～す。ごく普通の女子高生が、正義の剣士になる物語だよー」

アリスのテコ入れビジョン開始

『ＢＳＡＡ学園！』を超える超大作！

主人公はアリス！

聖フランチェスカ学園の教室では・・・・

そこには、席に座って天井を見上げるアリスの姿が見えた。

アリス
（私は理数系とか優秀だけど、体育系とかそういうの苦手だなぁ。
将来どうしようかな）

と悩んでいた。

キーンコーンカーンコーン

放課後になり、アリスは寮に戻ろうとした。

その時・・・・

アリス
「あれ？これなんだろう」

道に落ちていた龍帝剣を拾う。

すると・・・・

董卓ザク
「とうとう見つけたぞ。龍帝剣」

アリスの目の前に、董卓ザクが現れた。

アリス
「あなたは！」

董卓ザク

「わしの名は董卓、そして龍帝剣を手に入れに来た！」

アリス
「龍帝剣って、これ？」

と言って手に持っている龍帝剣を見せる。

董卓ザク
「その通り、その剣には凄まじい力が秘めている。それを手に入れ、この世界を支配するのさ！」

アリス
「世界を・・・・この剣が・・・・・」

アリスは慌ててしまう。

董卓ザク
「その剣を渡せ！」

アリス
「嫌です！この剣は渡しません！例えその力があったとしても、誰にも渡しません！」

すると龍帝剣がアリスの正義に反応したのか、光だした。

董卓ザク
「こ、これは！」

アリス
「えぇ？何！？」

その光は、アリスを包む。

そして光が晴れ、セーラー服風の衣装姿のアリスの姿が・・・・

しかも右手には、龍帝剣を持っている。

董卓ザク
「その姿は・・・・・」

董卓ザクは、セーラー服風の衣装姿のアリスに驚く。

アリス
「何だか知らないけど、変身しちゃった！」

自分が変身した事に喜ぶアリスであった。

董卓ザク
「おのれ～」

そして董卓ザクは剣を取りだし、アリスに攻撃を仕掛けるが、アリスは龍帝剣で防ぐ。

アリスは隙を突くように董卓ザクに攻撃する。

董卓ザクは弱まる。

アリス
「いくよ！秘技！ピンクソードドラゴン！」

アリスは高く跳び、一回転し、董卓ザクを縦に斬る。

董卓ザク
「うわぁーーーーーーーー！」

どごぉーーーーーーーん！

董卓ザクはアリスの必殺技で爆発した。

アリス
「やったぁ！」

董卓ザクを倒した事に喜ぶ。

ドキドキあり！

アリス
「れ、零斗！？」

零斗
「おいおい、無茶すんなよ」

零斗にお姫様抱っこされて顔を赤くするアリス。

ライバル戦士登場！

夕化
「零斗はあたいの物だぁーーーーーーー！」

アリス

「違うもん！私のだもん！」

片手剣『ハンターカリンガー』を持ったゴスロリ風の衣装姿の夕化（兀突骨）が、零斗を巡ってアリスと戦っている。

結ばれた絆と友情！

夕化
「うぅ、これまでか・・・・」

華琳
「ふふふ、大したことは無かったわね」

七星剣を持った華琳の攻撃によって負傷した夕化。

華琳
「さて、トドメよ」

そして華琳は七星剣で斬ろうとするが・・・・

アリスは龍帝剣で七星剣の斬撃を受けとめ、華琳は少し驚くような顔をする。

アリス
「夕化ちゃんを殺させない！」

夕化
「アリス・・・・」

そして・・・・

アリス
「夕化ちゃん、私は零斗の事が好きだよ。でも同時に夕化ちゃんの事が好きだよ」

夕化
「アリス・・・・あたいもアリスが好きだ」

華琳との戦いで衣装がボロボロになった二人は、顔を合わせる。

そして二人は唇を重ねる。

劉備ガンダムも驚くファンタスティックアクション！

『龍帝戦士アリスちゃん！』

おまけに、パンチラあり！？

アリス
「きゃー！」

風でスカートが捲れ、水色のパンティが見えてしまう。アリスは顔を赤くしながらはスカートを抑える。

アリス
「絶対に見てね☆」

とウィンクする。

アリスのテコ入れビジョン終了。

フランケン
「って待て！何で龍帝剣！？」

アリス
「だって、龍帝剣が落ちたってことは、劉備ガンダムは董卓ザクにやられたって事になってるから」

フランケン
「それと！夕化とキスしたよな！あれは友情じゃなくて百合だぞ！」

アリス
「え～良いじゃん」

フランケン
「夕化に怒られるぞ！」

零斗
「友情と百合があったのは良いな、けどアリスは夕化とは百合関係になったのか？」

アリス
「それは違うよ～零斗と夕化ちゃんが好きだから！百合関係にはなってないよ」

零斗
「つまり両性愛に目覚めたって事か？」

アリス
「そういう事～」

すると向こうから・・・・

皇呀
「よう、零斗」

零斗
「皇呀！お前エイラとデートじゃ・・・・・」

エイラ
「私もいるぞ」

零斗
「そうか、お前もしかして・・・・」

皇呀
「テコ入れと聞いてここに来た」

零斗
「あぁ、それでお前らのテコ入れは？」

皇呀
「ねぇよ」

これを聞いた零斗は、少し驚く。

エイラ
「朱里先生のテコ入れを聞いて欲しいとの事だ」

零斗

「へぇ、どんなの？」

エイラ

「じゃあ、良く聞け」

朱里のテコ入れ開始。

とある街の路地、背に持たれて死んでいるアックスがいた。

しかも血を流している。

そして向こうからナイフを持った朱里が歩いてくる。

学校の体育館倉庫には、首を切られ、仰向けになって死んでいる朱愛とコロナ。

駅の男子トイレの個室では、叫びながらトイレに流される劉備ガンダムが・・・・

劉備ガンダム

「いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！流されるぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！！！」

そして愛紗の青龍偃月刀に刺さってうつ伏せになって死んでいるアリス。

鉄パイプで殴り殺されたウェスカーとフランケン。

ガトリングガンに撃たれて死んだクリスと芳佳とサーニャ。

ギロチンで首を切られた皇呀とエイラ。

チェーンソーで体をバラバラにされた愛紗と鈴々と紫苑と桔梗と祭。

毒入りのケーキを食べ、吐血して死んだ夕化とネココ。

ナイフを持った朱里は・・・・何かを喜ぶかのように笑顔になる。

世界の誰もが震えるサスペンションバイオレンスホラー。

『孔明の罠・・・・』

零斗は振り向くと・・・・

零斗
「アァーーーーーーーーーーーーーーーー!!」

絶対に一人で観ないで下さい。

朱里のテコ入れ終了。

フランケン
「うわぁーーーーーーーーーーー恐いぃぃぃぃぃぃ!!!」

朱里のテコ入れに怯えるフランケン。

零斗
「この世で史上最悪なテコ入れだな」

不快を感じるように寝転がる零斗。

アリス
「・・・・（絶句）」

零斗
「しかもさぁ、劉備ガンダム先生関係なくね？あとフランケンとウェスカー理事長も」

フランケン
「俺関係ないの！？」

皇呀
「そもそもさぁ、彼女出来た俺とアックス達とハーレム状態の零斗を殺そうとするテコ入れなのにさぁ、もしかして作者（龍の骨）ふざけてんじゃなのか？」

アリス
「私もそう見える。だって本当は私達で、関係ないフランケンと劉備ガンダム先生とウェスカー理事長さんとか入っちゃってるよ？」

フランケン
「あぁそうかぁ。作者！ふざけないで下さい！朱里先生だって真剣にテコ入れとか考えているんですから！」

すみません、おふざけが過ぎました。

おや？アックスと朱愛さんが降りてきましたよ。

アックス
「零斗君、もしかしてテコ入れかい？」

零斗
「そうだよ。お前らが来たって事はもしかして・・・・」

朱愛
「そうです！私達もエコ入れを考えてきました！」

アックス
「それを言うならテコ入れだよ」

朱愛
「えへへ～」

零斗
「どんなのだ？聞かせてくれ」

アックス
「それはね・・・・」

アックスと朱愛ビジョン開始。

とあるビルの屋上・・・・

日本刀を構えるアックスとサムライエッジを構えるウェスカーがいた。

アックス
「兄さん、何故世界を絶望の渦に沈めようするんですか！」

するとウェスカーは・・・・

ウェスカー
「それは、蔡瑁をいや・・・・朱愛を私に渡さなかったからだ」

向こうでアックスを見守る朱愛。

朱愛
（あぁ、アックス様は、私のために・・・・）

アックス
「朱愛は・・・・朱愛は渡さない！兄さんは解らない！僕と朱愛の愛を！」

ウェスカー
「貴様と朱愛の愛か、面白い」

そう言ってサムライエッジを捨てるウェスカー、アックスは日本刀を捨てる。

ウェスカー
「ならばその愛と言うものを教えてもらおうか！」

アックス
「あぁ！行くぞぉーーーーーー！」

そして二人は走り、互いに拳をぶつけ合う。

ラブ要素を含んだサバイバルホラーアクション。

ＵＺＩのマシンピストルでゾンビを倒す零斗。

自身のサングラスを思春に投げるウェスカー。

蓮華はＲＰＧのロケランでクレアを倒す。

ゾンビに襲われそうになった華琳を庇い、首を噛まれる春蘭。

アリスは二本の刀でウェスカーによって操られている恋と愛紗と戦う。

アジュレの餌にされている桂花。（つまり集団で食べられているということ）

ヘリポートでキスをするアックスと朱愛。

朱里
『私は朱里、アンブレラの人工知能』

アンブレラの人工知能になった朱里。

鈴々
「アンブレラに逆らう奴は消えちゃえぇーーなのだぁーーーーーー！」

アンブレラに忠誠心がある鈴々。

『ゾンビゲーム４　アフターライフ』

アックスと朱愛の朱愛ビジョン終了。

アックス

「どうだい？」

アックスのテコ入れで周囲は沈黙する。

フランケン
「・・・・いや、なんというか『孔明の罠』よりマシかもしれない」

零斗
「いいんじゃねーか？それに俺出てたし」

皇呀
「ただ、桂花が犬(アジュレ)の餌になってた所が斬新感があった」

フランケン
「うわぁ・・・・怒られるぞ」

その時・・・・

夕化
「零斗ぉーーーーーー！」

夕化が現れ、零斗に飛び付く。

零斗
「おぉー夕化、どうした？」

夕化
「零斗の事考えてたら会いたくなっちゃって～」

零斗

「そうかそうか～じゃあ夜抱いてやるぞぉー」

夕化
「やったぁー！」

アリスは零斗に・・・・

アリス
「ねぇ零斗ぉー私を忘れてない？」

零斗
「そんな事ねぇよ。じゃあコロナとネココを入れてまとめて相手するぜ」

アリス　夕化
「「零斗ぉ～」」

そして零斗は夕化の尻をさすり、アリスの胸を揉む。

夕化
「あぁん、気持ちいい」

アリス
「あ、あぁん。私のおっぱい好き？」

こうして三十分触った。。

夕化とアリスは・・・・

気持ち良さそうにソファーで寝ている。

零斗
「どうよ、これが零斗様のテクニックよ！！！」

これを見たフランケン達は顔を赤くする。

フランケン
「す、凄い！」

皇呀
「な、中々やるなぁ」

アックス
「これ、参考になるね」

エイラ
「うわぁ・・・・」

朱愛
「私がアックスに・・・・」

すると向こうからコロナとネココがやってくる。

コロナ
「やっほー零斗ぉー」

ネココ
「今日も抱っこしてほしいにゃーの」

零斗

「よぉーコロナとネココ、今日も可愛がってやるぞぉ」

フランケン
「零斗、テコ入れはどうすんの？」

零斗
「あぁそうだった、コロナとネココ、お前らのテコ入れは？」

コロナ
「私のテコ入れはねぇ、一人の少女が悪の魔王から王子様をたすけるため、魔王の城まで旅に出るという物語！では、聞いてね！」

コロナのテコ入れビジョン開始。

とある国では・・・・

王子が悪の魔王にさらわれ、国民は大騒ぎになっている。

そんな王子を助けるため、一人の少女、コロナが立ち上がった！

コロナは国から離れ、森にさまよっていた。

コロナ
「うーん、魔王の城までには、この森から出て、その次に砂漠を歩いて氷山を越えなきゃいけないのよねー」

その時・・・・

闇のオーラを出している華琳と桃香が現れた。

華琳
「魔王の命令により、お前を殺す」

桃香
「覚悟してね」

コロナは剣を取りだし、華琳と桃香は一斉にコロナにかかるが・・・
・

華琳はコロナの剣に斬られ、桃香はコロナの跳び膝蹴りでやられる。

コロナ
「やったぁ！」

その後、桃香達を倒し、何とか森から出れた。

だが、砂漠の向こうには、フェイトとヴィータとシグナムが待ち構えていた。

コロナ
「どうやら魔王の手下ね！行くわよぉーーーーーー！」

フェイトはバルティッシュを持ってコロナにかかる。

フェイト
「はぁーーーー！」

コロナ
「ソニックブーム！」

フェイト
「キャアーーーーーー！」

フェイトはコロナのソニックブームで吹き飛ばされる。

そしてヴィータはグラフィークアイゼンを持ってでコロナに突っ込む。

ヴィータ
「うおぉーーーーーーー！」

コロナ
「スターライトブレイカァーーーーーーー！！！」

ヴィータ
「ギャアーーーーーーーーー！！！」

スターライトブレイカーでヴィータは黒こげになる。

コロナ
「サマーソルトエクスプローション！」

シグナム
「あぁーーーーーーーーーーーー！！！」

サマーソルトエクスプローションでシグナムは星になった。

笑いと感動ありのファンタジー。

『コロナクエスト！』

コロナのテコ入れビジョン終了。

フランケン
「おいぃーーーーーーーーー！！！それはまずいだろぉーーーーーーー！！！」

コロナ
「何で？」

フランケン
「ソニックブームとかサマーソルトエクスプローションは不味いってぇーーーー！！！」

零斗
「中々いいじゃねぇか。ところで聞きたいんだけどパンツは何穿いてるんだ？」

フランケン
「お前はどこのスケベ親父だ！つーかそれ関係ねぇから！！！」

コロナはこう答える。

コロナ
「え？紐パンだけど」

零斗
「じゃあ、見せろ」

コロナ

「もぉ、エッチなんだから」

そしてスカートをたくし上げ、パンツを見せる。

零斗はじっくりコロナのパンツを見る。

コロナ

「ねぇ、そんなに見られたら私、変になっちゃう」

零斗

「へへへ、いいじゃねぇか。さて、脱がす・・・・」

ドゴォーーーーーーン！

フランケンは１００トンハンマーで零斗に叩く。

コロナ

「零斗！ちょっとフランケン！零斗に何すんのよ！！！」

フランケン

「危ないだろ！このままコロナのパンツを下げて行き過ぎたらノクターン行きになっちまうだろうが！！！」

ネココ

「じゃあネココのパンツ零斗に見せるにゃーの」

そう言ってスカートをたくし上げ、零斗に見せる。

フランケン

「見せなくて良いから！！！」

アックス
「それよりネココ君のテコ入れはなんだい？」

ネココ
「ネココのテコ入れは、ネココが道端で捨てられて零斗様に拾われて過ごす内に恋が芽生えるにゃーの」

ネココのテコ入れビジョン開始。

住宅街の道端で、『拾ってください』という紙が貼ってある段ボールに、ネココが入っている。

しかし、誰もネココに気付かず、ネココは悲しそうな顔になる。

そんな時、零斗が通りかかり、ネココに気付く。

零斗
「おぉ、可愛い子猫だ。こんなに可愛いのに捨てる奴がいるなんてひでぇ奴だ」

そう言ってネココを抱き抱えて家へ帰った。

零斗の家にて・・・・

ネココ
「にゃー、どうしてネココを拾うにゃーの？」

零斗
「何でって？そりゃ可愛いからさ、それに、捨てられた女の子を見

てると、放っておけないからさ」

ネココは、頬を赤くする。

零斗
「だからさ、俺はお前を飼ってやるぜ」

そしてネココを自分の膝に乗せ、ネココは顔を赤くする。

こうしてネココは、零斗の猫になった。

そして零斗と過ごす内に、恋心を抱くネココ。

数年後、ネココは背が伸び、胸も大きくなっておしとやかになった。

そしてネココは零斗と見つめ合う。

ネココ
「零斗さん、私はあなたの事を・・・・」

零斗
「分かっている、俺の事を感謝してんだろ?」

ネココ
「はい、あの・・・私の事をどう思っているのですか?」

零斗
「決まってるだろ?この世で俺が一番愛している子猫だからさ」

ネココ

「零斗さん・・・・・」

零斗
「ネココ・・・・・」

二人は唇を重ねる。

感動を呼ぶラブストーリー。

『子猫のネココ』

ネココのテコ入れビジョン終了。

ネココ
「どうにゃ？」

フランケン
「何だろう、なんだか涙が・・・・」

フランケンの頬に涙が流れる。

アックス
「そうだね、これを聞いてると、感動したよ」

零斗
「泣けるじゃねぇか。俺は死んだ呂布トールギス先生を思い出してきたよ」

フランケン
「いや、先生はまだ生きてるって」

こうして周りは、感動の涙に包まれた。

夕化
「ちょっと待てぇーーーーーーー！！！あたいのテコ入れがまだあるだろぉーーーーーーーーー！！！」

夕化が目を覚まし、自分のテコ入れを言おうとする。

零斗
「夕化、じゃあテコ入れをお願いします」

夕化
「あたいのテコ入れは、女子プロレスラーが一人の男子に恋するラブコメだぜ！」

夕化のテコ入れビジョン開始。

とあるプロレスジム。そこに、夕化がトレーニングをしている。

前回の大会で焔耶に負けたため、その無念を晴らすため、今日も休む事なくトレーニングしている。

ジム帰り、夕化はいつものように家へ向かう。

その時・・・零斗にぶつかる。

夕化
「あぁすまねぇ」

零斗
「気にすんな。それより、なんか元気がねぇぞ？」

夕化
「な、そんな事ねぇよ。それにあたいは・・・・」

零斗
「まぁ、とりあえず話してくれないか？」

夕化
「お、おう」

夕化は零斗を自分の家に入れ、ジムでトレーニングをする理由をすべて話した。

零斗
「そうか、前回の大会の決勝戦で負けて休む事なくトレーニングか」

夕化
「そうなんだ、でもなんだか強くなったって感じじゃない」

夕化は暗い顔になる。

すると零斗は・・・・

零斗
「だったらさ、俺も付き合うぜ」

夕化
「え？」

零斗
「ただし、休みありだからな」

夕化
「お、おう」

こうして、大会まで零斗とトレーニングをする。そして夕化は、零斗に好意を持つようになった。

大会当日・・・・

夕化は零斗の特訓を思い出し、勝ち残っていく。

そして決勝戦、相手は焔耶だった。

開始のゴングが鳴り、焔耶は攻撃を仕掛けるが、夕化はかわしてエルボーを繰り出す。

焔耶
「こ、こいつ！」

夕化
「魏延、あんた知らない、あたいが強くなっている事を！」

そして夕化はドロップキックをし、ブレンバスターを決める。

焔耶は立ち上がり、ニーキックをし、更にロープへ投げる。

夕化はロープの反動で焔耶へ向かい、そして焔耶はラリアットで倒

す。

夕化は焔耶の攻撃で苦しむが、それでも立ち上がった。

焔耶は追加攻撃をしようとするが、かわされてフランケンシュタイナーを決められる。

そして最後にアキレス腱固めで決める。

レフェリー
「ワン！ツー！スリー！」

レフェリーのスリーカウント後、試合終了のゴングがなる。

そして夕化は優勝した。

零斗は、大会が開かれているスタジアムから去ろうとする。

夕化
「零斗ぉーーーーーー！」

夕化は去ろうとする零斗に飛び付く。

零斗
「夕化、お前・・・・」

夕化
「あたい、あの魏延に勝った！勝ったよ！」

すると零斗は・・・・

夕化を抱く。

零斗
「おめでとう、これでお前は強くなったんだ」

夕化
「零斗・・・・」

二人は顔を合わせ、唇を重ねる。

ハッスルありのラブコメ！

『夕化ハッスル！』

夕化のテコ入れビジョン終了。

夕化
「どうだ！」

するとアリスは・・・・

アリス
「あのね夕化ちゃん、あなたのテコ入れは、尻が青いヒヨッコよ！」

夕化
「あんだとぉーーーーー！」

アリスと夕化は、にらみ合う。

アックス
「だったら僕達のテコ入れは！？」

朱愛
「私達のテコ入れをバカにするならば許しません！」

コロナ
「あたしのテコ入れはどうなのよ！？」

ネココ
「ネココのテコ入れを忘れちゃダメにゃーの！！！」

フランケン
「待てよ！だったら俺のテコ入れを・・・・」

アリス
「ツッコミしか似合わないくせに」

フランケン
「うわっ！それ気にしてんのに（泣）」

こうして自分達のテコ入れでもめるアリス達。

皇呀
「あーあ、こりゃ大変だな」

エイラ
「そうだな、どうすんだ零斗」

零斗の隣では、他人事のように呟く皇呀とエイラ。

アリス達を見てため息をつく零斗。

そして静めるように手を叩き、アリス達は静まる。

零斗
「はいはい、静かに。まだ俺のテコ入れが残ってるだろ？」

アリス達
「零斗のテコ入れ？」

零斗
「俺のテコ入れが良かったらアックスの奢りで焼き肉だ」

アックス
「えぇ！？」

零斗の発言で驚くアックス。

零斗
「じゃあ、これが俺のテコ入れだ！！！」

零斗のテコ入れビジョン開始。

ＢＳＡＡ学園の外伝が・・・・誕生した！！！

舞台は、加富根総合病院！

ある日、国際警察のクリスが過労で倒れ、芳佳とサーニャとＳＷのかかりつけの病院『加富根総合病院』に入院する。

その同室には、地元暴走族集団『ＢＬＵＥＤＲＡＧＯＮ』女筆頭の伊達政胸、そして放浪中格闘家のリュウ。

そして法外な値段を要求する代わりに受けた依頼を必ず成功させる傭兵ダンテや、賽銭泥棒を探すために度々に病院を襲う博霊霊夢等集まってクリスは心休む暇がない・・・・

ＢＳＡＡ学園の裏側のギャグストーリー！

『ＢＳＡＡ学園！外伝　Ｈｅａｌｉｎｇ　ｌｏｓｔ　Ｈｏｓｐｉｔａｌ　加富根総合病院物語』

零斗のテコ入れビジョン終了。

そして零斗のテコ入れでフランケン達は沈黙する・・・・

零斗
「どうだ？」

フランケン
「いや、何て言うか告知だよね？」

零斗
「まぁいいじゃねぇか。という訳で、アックスの奢りで焼き肉でーす」

こうして、零斗達は焼肉屋へ行きましたとさ。

テコ入れ大戦は、これにて終了。

第四十四話　第二次テコ入れ大戦！（後書き）

ｃｈａｒｌｅｙさん、ＢＳＡＡ学園！の外伝頑張って下さい。

次回は零斗ヒロインズの話です。

第四十五話　三国ガールズの時間（前書き）

アリス
「どうして!?私達零斗ヒロインズの時間じゃなかったの!?」

いや、紫苑達の出番が少ないからと思って・・・・・・

アリス
「それいつやるの!?」

それまた次回で・・・・・

第四十五話　三国ガールズの時間

新宿の喫茶店『成都屋』その喫茶店で、紫苑と祭と桔梗がくつろいでた。

読者の皆さんはこの三人の娘達は覚えているだろう。

零斗のマイティ真拳によってロリ化にされ、雛里の魔術真拳によって魔法少女にされた紫苑達である。

紫苑はアップルパイを食べている。

紫苑
「にゃはは～このアップルパイおいしいよ～」

祭
「もう紫苑、いくらなのはさんと同じ声でもそれ真似をしなくても・・・」

紫苑
「むぅ、祭ちゃんだってあのお市と同じ声なのに」

祭
「わ、私はお市さんと同じ声でも、同じ性格にはならないからね！」

桔梗
「あの～それじゃあ私があの稟さんと同じ声で、同じく鼻血を噴出すようになりますよ？」

紫苑
「そ、そうだよねじゃあ私は・・・・」

紫苑ビジョン開始

三璃紗の荒野にて・・・・

曹操ガンダムとパープルプリンセスは、一対一の勝負をしていた。

しかしパープルプリンセスは吹き飛ばされてしまう。

曹操ガンダム
「さぁ、これで最後だ！」

手に持っている星凰剣に炎を纏わせる。

曹操ガンダム
「大紅蓮斬！」

大紅蓮斬でパープルプリンセスは、斬られたと思ったが・・・・。

パープルプリンセス
「あれぇ？おかしいな・・・・君の理想ってこんな程度？」

パープルプリンセスは星凰剣を二本の指で受け止めていた。

曹操ガンダム
「余の、理想がこんな程度だと！？」

哀れみな顔で曹操ガンダムを見る。

パープルプリンセス
「だけどね？こんな程度じゃ、三璃紗は統一出来ないんだよ？少し、頭冷やそうか・・・・」

そして左手の人差し指を曹操ガンダムに向け、指先から高い魔力が集中する。

そして魔力はビームとなり、曹操ガンダムを貫き、曹操ガンダムは倒れる。

パープルプリンセスは変身を解く。

紫苑
「じゃあね、哀れな鳥さん」

こうして紫苑は、三璃紗から去って行った。

紫苑ビジョン終了

祭　桔梗
「「それは不味いって！」」

紫苑
「何で？」

祭
「それは曹操ガンダム先生に喧嘩を売っているよ！」

桔梗

「それと、大変な事になりますよ？」

紫苑
「大丈夫だよ～僕の言うことが解らない先生なんか、みーんな僕の魔砲でぶっ飛ばすから」

祭
「紫苑ちゃん、それ恐ろしいよ！？というか、魔砲じゃなくて魔法だよ！」

桔梗
「ぶっ飛ばしちゃダメですよ？」

紫苑
「だってだってぇ～劉備ガンダム先生に『おばさん』とか『年増』とか言うんだよ？どうせなら調教して『紫苑ちゃん』って呼ばせるもん！」

祭
「こ、怖いよ紫苑ちゃん、そんなことしたら作者さんが困っちゃうよ？」

桔梗
「そうですよ、それに私達は、悪い人を懲らしめる魔法少女ですよ」

紫苑
「あう～」

紫苑は桔梗の一言によって少し凹む。

紫苑
「そうだ、僕と祭は果物だよね?名乗りが」

祭
「そう言えば、でも桔梗は・・・・」

紫苑と祭は、桔梗に向く。

そして桔梗は、自分だけ果物じゃないと気付いた。

桔梗
「私だけ果物じゃなぁ～い（泣）」

桔梗は泣き出した。

紫苑
「あぁ泣かないで～桔梗は凄いよ～」

祭
「そうだよ、銀河っていうだけですごいから」

慌てて桔梗を慰める紫苑と祭。

桔梗
「どうせなら私、レモンが良かったぁ～（泣）」

紫苑　祭
「「う～ん（汗）」」

紫苑達は喫茶店を出た後、新宿の街を出歩く。

紫苑
「ねぇねぇ、これからアクセサリーを買いに行こうよ」

祭
「そうだね～」

桔梗
「アクセサリーが欲しくなりましたからね」

その時、紫苑の携帯が鳴る。

紫苑
「にゃ？ケータイだ」

そして紫苑はケータイに出る。

紫苑
「もしもし～？あ、お兄ちゃん！」

一刀からの電話だった。

一刀
『紫苑、零斗が紫苑達を呼んでと頼まれたんだ』

紫苑
「え？僕達は今、新宿の街なんだけど～まさかお兄ちゃん・・・・」

一刀
『いやいやいやいや、俺はそんな事考えてないよ』

紫苑
「にゃっはは～あんまりエッチな企みをしてたら攻められちゃうぞ～」

一刀
『そ、そうか（汗）それより、金山企業には逢わなかったか？』

紫苑
「逢わなかったよ～」

一刀
『そうか、なら楽しんでくれ』

そして一刀の電話が切れる。

紫苑
（お兄ちゃん、あの金山企業に警戒してるんだ～）

紫苑はそう思いながら、祭と桔梗と共にアクセサリー屋へ行く。

アクセサリー屋で買い物を終えた後、一刀の家へ向かった。

因みに紫苑が買ったのはブレスレットで、祭はペンダント、桔梗はイヤリングである。

紫苑
「いや～楽しかったね～」

祭

「あぁ～また行きたいです～」

桔梗
「私も同じです」

それぞれ新宿に行ったことを満足する紫苑達。

すると向こう側に一台のリムジンが停まり、黒スーツの男がドアを開ける。

そこに降りたのは、鬼川であった。

紫苑
「あれ？金山企業の会長さん？」

祭
「鬼川仁、貿易会社『金山企業』の会長なんだって」

紫苑
「へぇ～それにしても高校生ぐらいだね」

祭
「しかも、１６歳で会長になったんだって！」

紫苑
「すごーい！」

紫苑達が話している内に、鬼川はリムジンに乗り、黒スーツの男がドアを閉める。

そして運転席に戻って走らせる。

その時、桔梗は何かに感じた！

紫苑
「どうしたの桔梗？」

桔梗
「あのリムジンを追わないと・・・・・」

紫苑
「ほえ？」

桔梗
「早く追いかけないと取り返しのつかない事になります！」

とある廃工場では・・・・

鬼川
「約束の金だ、さぁ例の物を渡してもらおう」

鬼川達は、マフィアと闇取引をしていたようだ。

そして黒スーツのサングラスの男は、持っているアタッシュケースをボスのボディーガードに渡した。

ボディーガードは例の物が入っているアタッシュケースを黒スーツのサングラスの男に渡す。

鬼川
「ありがとう、行くぞ」

「そこまでだよ！」

鬼川
「ん？」

鬼川達はどこから声がしたのかを、辺りを見渡す。

後ろを見ると・・・・・

紫苑
「そのアタッシュケース、渡してもらうよ！」

紫苑達がいた。

鬼川
「へぇ～、どうしてここが解ったの？」

桔梗
「この廃工場の近くには、私達の通学路だからです！」

鬼川
「だからかぁ～でも遅いよ？だってもう例の物は手に入れた」

鬼川が合図をすると、黒スーツの男達は紫苑達を囲む。

鬼川
「後はよろしくねぇ～」

そして鬼川と側にいた黒スーツのはリムジンに乗り、廃工場から出て行った。

因みにマフィア達は逃げていった。

紫苑
「みんな、いくよ！」

紫苑達は、ペンダントをかざす。

紫苑　祭　桔梗
「「「リリカルマジカル無双戦士！マジカルチェーーーーンジ！」」」

ペンダントが光り出し、三人を包んだ。

そして紫苑達は、マジカル無双戦士になった。

パープルプリンセス
「愛と平和を守る」

レッドプリンセス
「ちょっとお茶目な女の子トリオ！」

シルバープリンセス
「マジカル無双戦士・・・・」

三人共
「「「三国ガールズ見参！」」」

そして周囲は、沈黙の空気になる。

パープルプリンセス
「紫の色は葡萄の色、パープルプリンセス！」

レッドプリンセス
「赤の色はイチゴの色！レッドプリンセス！」

シルバープリンセス
「銀の色は銀河の色、シルバープリンセス！」

黒スーツの男
「ふざけんな！やっちまえ！」

黒スーツの男達は、いっせいに三国ガールズ達を襲い掛かるが、三国ガールズ達は消える。

消えたことに驚き、捜す。

パープルプリンセス
「ここだよ！」

パープルプリンセスは、一人の黒スーツの男の上から攻撃しようとしていた。

マジカルランスの峰部分で気絶させ、次々と攻撃していく。

その時、黒スーツの男達はパープルプリンセスを囲む。

だがパープルプリンセスはマジカルランスを上に向け、その上に黒

スーツが囲んでいる数の青い閃光があらわれた。
青い閃光は、パープルプリンセスを囲む黒スーツの男達を吹き飛ばす。

一方、レッドプリンセスは、向かって来る黒スーツの男達をマジカルアローで光の矢を放って吹き飛ばしている。

レッドプリンセス
「もぉ～数が多すぎだよぉ～こうなったら増やそうっと☆」

そしてレッドプリンセスが放った光の矢はが増え、黒スーツの男達を吹き飛ばす。

シルバープリンセスは、警棒を持った黒スーツの男達をマジカルブレードで、気絶させている。

シルバープリンセス
「峰打ちだから安心して」

そしてマジカルブレードで風を起こし、黒スーツの男達を吹き飛ばす。

こうして、黒スーツの男達は、三国ガールズによって全滅した。

三国ガールズは変身を解いた。

紫苑
「ふにゅ～疲れたよぉ～」

祭
「それより追いかけなくちゃ！」

桔梗
「いや、兄様が深追いはするなと言ってましたよ？」

祭
「そうだね」

紫苑
「それより、深追いはするなって、逃げていった車の事かなぁ～」

その時、紫苑達の後ろに何者かの影が・・・・・

そして紫苑達は、後ろを振り向き、唖然する。

その正体は・・・・・・

劉備ガンダム
「ヒロインは私よぉ～」

何故か女装した劉備ガンダムだった。

劉備ガンダム
「あの忌々しい小娘（アリス）さえいなくなれば、私はこの小説のヒロインになれるわ！」

紫苑　祭　桔梗
「「「いや、それはない」」」

劉備ガンダム
「何よ！何がいけないのよ！私は、零斗君とあんなことやこんなことをしたいのにぃ～！！！！」

紫苑
「いやだからね？それは無理だってば！先生は男でしょ！」

劉備ガンダム
「私は女の子よ！劉子よ！覚えておきなさい！年増！」

紫苑達は、怒り出し、劉備ガンダムもとい、劉子を踏む。

紫苑
「少し頭冷やしたら！？」

祭
「最低です！変態です！」

桔梗
「永久に眠って下さい！」

その後、紫苑達に踏み続けられ、魔法による攻撃によって加冨根総合病院へ運ばれたのは、無理もない。

第四十五話　三国ガールズの時間（後書き）

次回は～次回は～ん～～～～～～～コラボだぞぉーーーーーーーーーー！！！！！！！

調子に乗ってすみませんでした・・・・・（慌）

第四十六話　ゲスト登場！零斗と一緒に修行しよ！？（前書き）

今回はＢＳＡＡ学園の外伝からの逆輸入したキャラと、あの作者の作品のキャラが登場します。

零斗
「どんな奴だ？」

それは本編を見てからのお楽しみ。

零斗
「うおぉ！ワクワクが止まらねぇ！」

第四十六話　ゲスト登場！零斗と一緒に修行しよ！？

冬休みが終わって二ヶ月、ＢＳＡＡ学園では何も事件が起こらずにいた。

しかしとある教師が・・・・・・

朱里
「・・・・・（怒）」

冬休みは一刀と過ごせなくなったため、要求不満？のオーラを出しまくっている。

そんな朱里を見てニヤニヤする雛里。

雛里
「あらあら～もしかして要求不満？」

朱里
「別に、そういう訳じゃない・・・・」

シェバ
（明らかに要求不満なオーラを出しまくってますよ）

そう心で言うシェバであった。

朱里
「では、これから朝の会がありますので・・・・・」

そして朱里は職員室から出た。

シェバ
「はぁ～朱里先生には困ったものです」

雛里
「一刀君と過ごせなくて嫉妬と要求不満のオーラが詰まってますよ～」

シェバ
「そういえば、朱里先生が言ってた期末テストの事ですが・・・・・」

雛里
「あぁ～この前の～」

シェバ
「あれ、雛里先生とウェスカー理事長で阻止しましたよね？」

雛里
「ウェスカー理事長は零斗に脅されてカップル達には嫉妬しないと約束してますからね～」

シェバ
（脅しで！？バイオ５のラスボスのキャラなのに弱っ！）

雛里
「それにシェバ先生、あなたが国際警察の時代に、朱里先生に助けてもらったわよね？」

シェバ
「えぇ、それは・・・・・」

回想

アフリカのキシュジュ村、ここは既に村人がプラーガに寄生されており、暴動が多くなった。

シェバはその村に調査の為にやってきた。

シェバ
（随分荒れてるわね）

そう思いながら歩いていると・・・・・

後ろからマジニが現れ、シェバを襲う。

だがシェバはマジニの攻撃をかわし、サマーソルトで倒す。

するとマジニ達は増え、シェバはその場から逃げるが、マジニ達は追いかける。

近くの小屋に入り、鍵を閉める。

そしてマジニ達がドアを叩く音が鳴り響く。

シェバ
（これじゃあ、外には出られそうにないわね・・・・・）

そう心に呟く。

その時・・・・・

？？？

「すみません、あなたも村人に・・・・・」

シェバは少女の声がした所に振り向くと・・・・・・

朱里がいた。

朱里

「どうやらあの村人に狙われてますね」

シェバ

「あなたもなの！？」

朱里

「そうです、しかし心配はいりません！この小屋には、隠しの出口がありますから」

朱里が立っている地面には、隠しの出口があった。

そしてシェバは隠し出口を開き、朱里と共に下に下り、地下通路を歩く。

シェバ

「こんな所に地下通路があるなんてね」

朱里

「この小屋から、肉屋の所に繋がってますからね」

そして二人は、地下通路から出た。

しかし・・・・・・

シェバ
「そんな・・・・・・」

マジニ達は、シェバ達に向かって走っている。

シェバは銃を取り出し、構えるが・・・・

朱里
「待ってください！私に策があります」

シェバ
「策？」

朱里
「銃をしまって早く逃げましょう！」

シェバは銃をしまい、朱里と共に逃げる。

そして近くに梯子があり、それを使って民家の屋根に上る。

マジニ達は上ろうとするが、朱里は梯子を倒し、一人のマジニが倒れてしまう。

朱里
「どうやら、追い込まれたようですね」

シェバ
「いい策があるって言ったでしょ！？」

朱里
「しかし心配はいりません！私についてきてください！」

こうしてシェバは、朱里の後についていき、マジニ達から離れた場所へ着いた。

するとシェバの後ろには、三つのタルが乗っているリヤカーがあった。

その隣には、火薬入りの袋があった。

朱里
「これは何かに使えます！」

シェバ
（え！？あれが！？）

と心の中で叫ぶシェバ。

朱里
「これをあの村人に使うんですよ！作戦は・・・・」

朱里の作戦は、まずシェバが多数のマジニの囮になり、三つの火薬入りのタルを乗せたリヤカーまでおびきよせる。

最後に朱里がマッチに火をつけ、導火線に火をつける。

これが朱里の『マジニ燃焼の計』である。

さっそくシェバは三つのタルに火薬を入れ、リヤカーに乗せ、導火線を出したまま入れる。

シェバは多数のマジニ達に向かった。

するとマジニ達はシェバを追っていく。

そしてシェバはリヤカーを飛び越し、朱里は導火線に火をつけ、その場から離れる。

導火線の火はどんどんタルに近付き、マジニ達もどんどん近付いていく。

タルが爆発し、多数のマジニ達は炎に包まれる。

それだけではなく、辺りの民家も炎に包まれていく。

これを見たシェバは・・・・・

シェバ
（なんという事なの?不可能だった作戦が可能に・・・・・）

朱里
「これで私達は助かりましたね」

するとシェバは・・・・・・・

シェバ
「あなた、名前は?」

朱里
「諸葛孔明です。そして真名は朱里です」

シェバ
「真名って、大切な名前じゃないの!?いいの?簡単に教えて」

朱里
「あなたと出会ってからすぐに親しみましたしね」

シェバ
「あはは・・・・・」

その後、二人は無事日本に戻る事が出来、シェバは朱里の兵法が興味を持ってしまった為、国際警察を辞めて朱里の弟子?としてＢＳＡＡ学園の教師となる。

現実

シェバ
「という訳なの」

雛里
「朱里ちゃんが兵法であなたを助けたのねぇ～」

シェバ
「そろそろ時間ですので、私は2年Ａ組に・・・・」

そう言ってシェバは職員室から出た。

2年A組は・・・・・

零斗
「今日は地球環境について授業するぞぉ～」

零斗はまたもや朱里を差し置いて勝手に授業をしている。

零斗
「今の地球環境は、悪いな。地球温暖化により北極の氷が溶けたり、自然が壊されたり等が発生する。このままだと人類は滅亡しますね」

フランケン
（零斗、また勝手に・・・・・）

零斗
「そこで！ちょっと皆さんに、地球環境について、考え・・・・・」

すると扉が開き、ＵＺＩのマシンピストルを持った朱里が現れ、朱里はマシンピストルを乱射し、生徒達は伏せる。

朱里
「何をやってるんですか？」

朱里は笑顔であるが、目は笑っていない。

シェバ
「朱里先生、そういうのは慎むようにって、何度も言ってるじゃないですか」

朱里
「シェバ先生?零斗君は私を差し置いて授業をしてたんですよ?今日の一時間目は私の授業ですからね～」

シェバ
（目が笑って無い！）

と恐怖を感じるシェバであった。

零斗
「わかりやしたよせんせぇ～席に着きますから」

そう言って、零斗は自分の席に座る。

朱里
「では～授業を始めましょう！」

アリス
「起立、気をつけ、礼」

こうして、朱里の恐怖の一時間目を過ごしていくのであった。

恐怖の授業についてはご想像にお任せします。

そして放課後・・・・・・

零斗
「朱里先生の恐怖の授業っていうのは怖いよなぁ～」

ライアン
「すげぇ怖いよ。っていうか、ヤベェな」

一刀
「そうだよなぁ～何がいけないんだろ？」

零斗
「それはお前が朱里先生の相手をしてなかったからだ」

一刀
「そうでしたっけ？」

零斗とライアンと一刀は、会話しながら下校するのであった。

翌日・・・・・

零斗とフランケンとライアンと一刀は、ＢＳＡＡ学園のグランドにいた。

零斗
「今日は皆で修行でぇ～す」

フランケン
「修行？」

零斗
「はい、俺達は金山企業に目を付けられしまい、このままでは不味いとの事です」

一刀

「そうだな、俺の我流マイティ真拳奥義も強くしないとな」

ライアン
「俺のムエタイもな」

零斗
「そこでだ！俺達だけでは足りないので、助っ人を呼びました。あちらの階段をご覧下さい」

フランケン達は、グランドの階段に向く。

降りてきたのは、『ＢＳＡＡ学園！外伝　Ｈａｌｉｎｇ　ｌｏｓｔ　Ｈｏｓｐｉｔａｌ加冨根総合病院物語』のラルク・レッドフィールドと『シスターズ・ストーリー　～　姉妹物語　～（アニメ＆ゲームキャラ大集合！３ｒｄ）』の木之下雪美である。

零斗
「えぇ～この二人は、金山企業に向けての修行の為に、わざわざやってまいりました！」

ラルク
「ラルクだ、よろしくな」

雪美
「木之下雪美です」

零斗
「よぉ～し、では説明しましょう！ラルク・レッドフィールド君は、クリスの弟であり、士官学校の生徒でしたが、とある事情で中退し

てしまいました！銃の腕はかなり強いよ」

フランケン
「へぇ～そうなのかぁ～」

一刀
「すごいなぁ、でもクリスの弟って事は～」

零斗
「あと、ブービートラップも使うよ！次は木之下雪美さん。魔法と剣、拳銃の腕前はトップクラスだぜ」

ラルク
「つー事は俺と同じか！？銃の腕前は！？」

零斗
「ラルクく～ん、静かに～」

ラルク
「・・・・・（汗）」

零斗
「という事で、早速組み手を始めたいと思う。チームの編成は俺が行うからな」

そして零斗が編成したチームは、フランケンと一刀とライアンの三人組のチーム。

零斗とラルクと雪美の三人組みのチームになった。

零斗
「では皆さ～ん。準備は良いですかぁ～」

一刀
「勿論だ」

ライアン
「いつでも」

フランケン
「俺もだ！」

と準備万端なフランケン達。

零斗
「良いですねぇ～では・・・・・開始ぃーーーー！！！！」

こうして、零斗達の組み手が始まった。

零斗の相手は・・・・・・

零斗
「一刀！今日こそ決着をつけようぜ！」

一刀
「あぁ！ガキの頃に約束、今果たしてやるぜ！」

一刀だった。

零斗

「いくぜ！マイティ真拳奥義！」

零斗は高く飛び上がり、飛び蹴りをする体勢を取る。

零斗
「パトリオットキック！」

そのまま一刀に向かうが・・・・・

一刀
「本来の我流マイティ真拳が解らないようだな。我流マイティ真拳奥義！」

一刀は日本刀を取り出し、強く振る。

すると風が起こり、零斗は吹き飛ばされる。

一刀
「風の太刀！」

そして零斗は、うまく着地する。

零斗
「へぇ～凄いねぇ～」

一刀
「俺の本来の戦い方は刀を使った戦いだ。剣道の技でマイティ真拳をアレンジした我流マイティ真拳だ！」

零斗

「だったら、本物のマイティ真拳を見せてやるよぉ！」

そしてラルクは・・・・・

ライアンだった。

そしてライアンは、ストレートをラルクに放つが、ラルクはうまくかわす。

ラルクはライアンの回し蹴りをかわし、水面キックもかわした。

しかし首を掴まれ、膝蹴りを喰らう。

ラルクはなんとか振りほどき、前蹴りをする。

ラルク
「お前やるじゃん」

ライアン
「まぁね、僕はバリー兄さんの従弟だけど、一緒だと思ったらお間違いだよ！」

そしてライアンは、肘回し打ちをし、ラルクはそれをかわす。

ラルク
「勝負はこれからだぜ！」

そして雪美は・・・・・・

フランケンの相手をしていた。

雪美はフランケンの剣を氷雪之刀ーーーフリーズで防いでいた。

因みにフランケンの剣はレイピアであり、この前雪の素材でレイピアを改造したらしい。

その名も『絶対零度（サブ・ゼロ）』である。

フランケン
「このサブ・ゼロと互角とは・・・・凄いな！」

雪美
「フランケン君の武器も、中々やるわね」

フランケン
「ならば・・・・・はぁーーーーーー！！！！」

そして二人の剣が打ち合う。

その頃、零斗と一刀は・・・・・・

零斗
「中々やるな」

一刀
「そっちこそ」

両者引けをとらない。

一刀

「ならば・・・・本気でいかせてもらう！我流マイティ真拳奥義！鬼牙百烈撃！」

零斗
「ふ、甘いな！マイティ真拳奥義！高速回避（スピードフェイク）！」

一刀の凄まじい突きに対して零斗は素早くかわす。

そして一刀は止める。

零斗
「この技ってたしか、一秒間に百回突くんだよな？そんなの、俺には通じないよ」

一刀
「これならどうだ！我流マイティ真拳奥義！」

すると雲が雨雲になり、雷が一刀の刀に纏う。

一刀
「爆裂大雷蛇！」

そして一刀は、電気を纏った刀で零斗に斬るが・・・・

零斗
「ふっふっふっふ、甘いな」

零斗は、曹操ガンダムを盾にして守っていた。

しかも曹操ガンダムは、黒焦げになっている。

一刀
「何っ！？」

零斗
「ごめんね～」

そして一刀は、すぐさま距離をとる。

零斗
「バーカ、俺の方がリーチだ。マイティ真拳奥義！曹操ガンダムグレネード！」

零斗は一刀に向けて曹操ガンダムを殴り飛ばす！

曹操ガンダム
「ギャアーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

だが一刀は日本刀で曹操ガンダムを空へ吹き飛ばす。

曹操ガンダム
「余のカレェーーーーーパンンンンンンンンン！！！！！！！！！！！！！！」

と叫びながら飛んでいく曹操ガンダムであった。

一刀
「零斗、俺はお前と同じ手を使わせてもらうぜ！」

そして何故か桂花を掴んでいた。

桂花
「ちょっと！離しなさいよ！」

一刀
「我流マイティ真拳奥義・・・・・」

そして一刀は振りかぶって・・・・・・

桂花
「ヒッ！あんた私をあの男に・・・・・」

一刀
「ドＭＲＰＧロケットランチャーーーーー！！！！！」

零斗に向けて投げる！

桂花
「イヤァーーーー

零斗
「甘えるなぁーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！
と言ってアッパーで吹き飛ばす零斗。
桂花
「アァーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」
そして桂花は、星になった。
一刀
「テメェ！よくも・・・・・」
桂花が零斗に吹き飛ばされた事により、一刀の怒りが達してしまう。
果たして勝負はいかに・・・・・

第四十六話　ゲスト登場！零斗と一緒に修行しよ！？（後書き）

フランケン
「っておい！続くのかよ！」

ラルク
「そうみたいだぜ」

第四十七話　修行終了！そして新たなる事件！？（前書き）

地震、怖かった（泣）

零斗
「作者は地震とか怖がりだからな。でも避難はするんだろ？」

そうですね、避難はしますよ。

零斗
「だと思ったぜ」

第四十七話　修行終了！そして新たなる事件！？

第５０１統合戦闘航空団の基地にて・・・・・

そこには、青年に首を掴まれている美緒がいた。

青年
「ふ～ん、君の能力は遠くから見える能力があったんだ」

美緒
「貴様、私達の能力を奪って、何を企んでいる！」

青年
「マイティ真拳を手に入れる条件はこれしかないんだ。後は儀式かな？」

そして青年は美緒を離し、どこかへ行ってしまった。

その頃、グランドでは・・・・

零斗
「はぁーーーーーーーーーー！！！！！」

一刀
「うおぉーーーーーーーーーー！！！！！」

金山企業に向けて修行をしている零斗達であった。

そしてフランケンと雪美は剣を打ち合っている。

ライアン
「はぁ！」

ラルク
「とりゃ！」

ライアンとラルクは格闘で戦っていた。

零斗
「さて、最大出力を上げようかな？」

一刀
「ならばこちらも上げさせてもらう」

零斗は白いオーラを出し、一刀は赤いオーラを出す。

零斗
「マイティ真拳・・・・」

曹操ガンダム
「ちょっと待ったぁーーーーーーーー！！！！！」

すると突然曹操ガンダムがやって来る。

孫権ガンダム
「融合（フュージョン）を忘れてないかい？」

零斗
「うぅ～ん、そうだなぁ～」

一刀
「融合（フュージョン）も修行の内だからなぁ～」

零斗
「そうだな、やろう！」

曹操ガンダム　孫権ガンダム
「やったぁーーーーーーー！！！！！」

こうして曹操ガンダムは零斗の位置につき、孫権ガンダムは一刀の位置につく。

零斗
「マイティ真拳奥義！聖自在融合（レイトフュージョン）！！」

零斗と曹操ガンダムは光に包まれ、一つになった。

一刀
「我流マイティ真拳奥義！我流自在融合（カズトフュージョン）！」

一刀と孫権ガンダムは光に包まれ、一つになった。

光が晴れ、零斗は曹操ガンレイに変わった。曹操ガンレイを知れたければ『第二十二話　嫉妬ウェスカー』をご覧下さい。

一刀は猛虎装の鎧を着たような物だった。

その名も孫権ガントである。

孫権ガント
「いくぜ！エル・フォルテェーーーーーダイナマイト！」

孫権ガントはエル・フォルテダイナマイトで曹操ガンレイにダメージを与える。

しかしそれでも曹操ガンレイは立ち上がり、孫権ガントを後ろから掴み、バックドロップをする。

孫権ガント
「やるね！でも俺には大技があるよ！」

そして孫権ガントは後ろから掴み、スープレックスをやり、マッスルバスターのように掴み、高く飛ぶ。

孫権ガント
「タイガァーーーーーギガバスタァーーーーーーーー！！！！！」

だが曹操ガンレイはすぐに解き、パイルドライバーのように掴む。

曹操ガンレイ
「甘いぜ！」

そしてそのまま落ちていく。

曹操ガンレイ
「喰らえ！大紅蓮ギガドライバァーーーーーーーーーー！！！」

地面に強く叩きつけ、孫権ガントは気絶する。

曹操ガンレイ
「どうだ?お前の我流マイティ、強くなってるか?」

融合が解き、元の零斗と曹操ガンダムに戻る。

因みに一刀と孫権ガンダムもだ。

一刀
「いててぇ～まだ弱い所があったな。最終奥義を出せるように努力するよ」

零斗
「あぁ、その意気だ」

孫権ガンダム
(いたた～でも修行に参加して良かった)

一方、フランケンと雪美は・・・・・

フランケン
「はぁーーーーーーー!!!!」

フランケンの攻撃を上手くはじく雪美。

雪美
「まだまだ甘いわね」

フランケン
「ならば!」

フランケンは無数の突きを繰り出すが、雪美はそれをかわす。

雪美
「今度は私よ」

雪美の強い斬撃を防ぐフランケン。

フランケン
「ぐ、強い！」

そしてフランケンの剣が弾かれ、雪美は剣を喉の所で寸止めをする。

フランケン
「ま、参りました・・・・・」

雪美
「あなたはフェンシングを中心の剣術が強いけど、それが隙になってやられる所があるわ」

フランケン
「はい・・・・」

こうして、フランケンの修行は終わった。

ライアンとラルクは・・・・・

ライアン
「うおぉーーーーー！！！！」

ラルクはライアンの攻撃をかわし、ライアンはラルクの隙を探す。

ラルク
「おいおい、冷静さが少し無くしてるぞ。それだと敵にやられるぞ」

そしてラルクはカウンターを狙い、ライアンにストレートを放つが・・・・

ライアンはラルクの腕を掴む。

ラルク
「何っ！？」

ライアンは前転式腕ひしぎ十字固めをする。

ラルク
「お前、これを狙って・・・・・」

ライアン
「僕はムエタイのほかに、ラウェイを会得してたんだよ」

ラウェイとは、ムエタイに頭突きや関節技、絞め技を追加した格闘技である。

ラルク
「だけど甘いぜ！」

ラルクはライアンの十字固めを解き、アキレス腱固めを繰り出す。

ライアン
「うわぁ！！！！」

ラルク
「ここで一つ教えておくぜ、詰めが甘すぎると返り討ちに合うぜ」

ライアン
「うぅ、解ったぜ」

こうして、三人の修行は終えた。

零斗
「という事で修行は終わりました！これで金山企業に向けて・・・・」

？？？
「おぉーーーい零斗く～ん」

向こうから現れたのは、アックスと朱愛と皇呀だった。

零斗
「よう！」

アックス
「金山企業に向けて修行をしてるんだって？」

零斗
「何故それを！？」

アックス
「そりゃ、向こうで見てたんだから・・・・」

するとラルクはアックスを見て表情を変える。

ラルク
「アックス、俺を覚えているか！？」

アックスはラルクの方へ向く。

アックス
「君はラルク！」

二人はコンバットナイフを取り出し、打ち合う。

アックス
「君は士官学校へ行ったんじゃないのか！？」

ラルク
「とある事情でやめたんだよ！」

アックス
「なるほど！」

二人は話しながら打ち合っている。

フランケン
「なぁ、どうする？」

零斗
「あぁなっちまった以上、これは止められないな」

と呑気でいる零斗であった。

零斗
「ラルクとアックスは、かつてのライバルであって、出会う事に戦ってるんだよ」

フランケン
「という事は・・・・・」

零斗
「まぁ、親友でもあるな」

こうして二人の打ち合いは朱愛によって止められた。

朱愛
「アックス様～」

そして朱愛は猫のようにアックスに甘える。

ラルク
「なぁアックス、お前にしがみついている女は何だ？」

アックス
「あぁ、蔡ボウだよ。僕のメイドであって恋人なんだ」

ラルク
「・・・・・」

アックス
「どうしたんだい？」

ラルク
「おめでとう！」

そう行ってラルクは後ろに向く。

アックス
「どうしたんだろう・・・・・」

実はラルクは、涙を流していた。

ラルク
（羨ましいがここは譲るぜ！）

零斗
「それより王牙、俺達に用があるんじゃないのか？」

皇呀
「そうだった、それが第５０１統合戦闘航空団の基地が壊滅状態に・・・・」

これを聞いた零斗達は驚く。

零斗
「あのストライクウィッチーズが・・・・・」

皇呀
「大丈夫なのは芳佳とサーニャとエイラだけだ。他は・・・・・」

ラルク
「それじゃあまさか・・・・・」

アックス
「死んではいない、加富根総合病院に入院した。ただ、ウィッチの固有魔法が奪われたんだ」

零斗
「奪われた!?」

アックス
「だけど、ストライカーユニットで飛ぶ事自体は奪われてない」

零斗
「誰だよ、そんなひでぇ事をする奴は・・・・・」

アックス
「解らないけど、その犯人らしき人物が何をやったのかは解っている」

そう言って、ＤＶＤのディスクを取り出す。

零斗
「これは・・・・・」

アックス
「防犯カメラでとった映像だよ。家で確かめてみて」

零斗
「あぁ、そうする」

夕方になり、雪美は時空管理局に帰還し、ラルクは加富根総合病院に戻った。

零斗
「芳佳とサーニャとエイラが心配だぜ」

一刀
「・・・・そうか・・・・固有魔法が」

零斗
「その通りだ。そいつに奪われるととんでもない事になる」

ライアン
「俺もそう予感がした」

フランケン
「だったら、守ればいいじゃないか！」

零斗
「そうだな・・・・・・」

そして零斗達は、それぞれ家へ帰っていった。

金山企業では・・・・・・

鬼川
「ふふふ、これであと三つ。それさえそろえれば僕の夢が叶う」

不適に笑う鬼川であった。

第四十七話　修行終了！そして新たなる事件！？（後書き）

青いタヌキさん、ｃｈａｒｌｅｙさん、ありがとうございました。

アリス

「次回は零斗ヒロインズの時間だよ！」

第四十八話　零斗の愛人タイム！零斗争奪戦開始！？（前書き）

え～っと、ソウマのファンの皆様は注意してください。

第四十八話　零斗の愛人タイム！零斗争奪戦開始！？

アリスの部屋にて・・・・・

そこには、アリスと夕化とコロナとネココが何か話し合っていた。

アリス
「零斗って、すごくかっこよくない？」

夕化
「すごくカッコいいぜ」

コロナ
「私達、零斗のかっこよさに惚れちゃったかも！？」

ネココ
「ネココは零斗に惚れちゃったにゃーの」

零斗の話をしていた。

アリス
「私ね、零斗に助けられちゃったの」

夕化
「へぇ～」

と棒読みになる夕化。

アリス

「何その反応!?よく聞いてね!それは私が中学生の時・・・・・」

回想

アリスが中学生の時、路地裏でヤクザ達に絡まれていた。

アリス
「あの、私用事があるので・・・・」

ヤクザ1
「いいじゃねぇか。俺の服を汚したんだし遊ぼうぜ?」

ヤクザ2
「デカイ胸しやがって」

そして一人のヤクザはアリスの胸を触る。

アリス
「やめて下さい!」

ヤクザ3
「天国へ連れてってやるぜぇ〜」

もう一人のヤクザはアリスのスカートをめくる。

アリス
「いやぁーーーーーーーーーー!!!!!」

その時、ヌンチャクがスカートをめくるヤクザに飛んできて当たる。

ヤクザ３
「グアァ！」

そして倒れた。

？？？
「一人の女の子にお前等は何してんだ？」

ヤクザ達は少年の方へ向く。

その少年は・・・・・零斗だった。

零斗
「悪いけどお前等、痛い目に遭って貰うぜ」

そう言って構える零斗。

ヤクザ１
「上等だ！お前等、やっちまえ！」

そしてヤクザ達はナイフを取り出して零斗を襲うが・・・・・・

零斗
「はぁ～これだから素人は・・・・・」

零斗はフックをして五人のヤクザを吹き飛ばす。

零斗
「とぉ～！！！！！」

ヤクザ達
「うわぁーーーーーーーーー！！！！」

更に『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の伊達政宗の技、『ＰＨＡＮＴＯＭ　ＤＩＶＥ』で十人のヤクザを倒す。

零斗
「おりゃ～」

ヤクザ達
「ギャアーーーーーーーーー！！！！」

そして三人のヤクザに『ＪＥＴ－Ｘ』で吹き飛ばす。

ヤクザ達
「アァーーーーーーーーー！！！！」

零斗
「鍋は大鍋！！竜は竜鍋～」

零斗の後ろには、倒された多数のヤクザ達がいる。

零斗
「大丈夫か？ここら辺はヤクザがウロチョロする所だからな」

アリス
「あ、ありがとうございます」

零斗
「で、お前の家はどこだ？一緒にいてやる」

アリス
「えぇ！？いいですよ！」

零斗
「ダメだ。世の中物騒だし、それにこんな可愛い女の子が一人で歩いてると大変だからな」

そしてアリスはそれを断れず、零斗と一緒に自宅まで一緒にいた。

零斗
「じゃあな、もう狙われるなよ」

アリス
「あの、お名前は・・・・・」

零斗
「いずれ会えるぜ、その時に教えてやる」

そう言って零斗は去った。

この時アリスは零斗に惚れてしまったのだった。

現実

アリス
「っていう感じなの！」

コロナ
「ってかあんたレ〇プされそうになったでしょ？」

夕化
「あたいは零斗の幼馴染だ！よく聞け！」

回想

それは夕化が小さい頃の事だった。

野原の所で夕化が泣いていた。

それは、転んで右足に傷がついたからだ。

そんな時、零斗が現れ・・・・

零斗
「夕化～どうして泣いているの？」

零斗は夕化の右足を見る。

するとポケットから絆創膏を取り出して夕化の右足に傷が出来たところに貼る。

夕化
「ふえ？」

零斗
「大丈夫か？」

そして夕化は頬を赤くする。

零斗
「おぶってやるよ」

夕化
「ふぇ！？」

零斗は夕化をおぶり、歩く。

夕化
（零斗、あたいの傷を治してくれた・・・・）

零斗
「なぁ夕化～俺は将来、悪い奴をやっつける正義のヒーローになるんだ」

夕化
「へぇ～そうなんだ～」

零斗
「だから俺、マイティ真拳という拳法を習ってるんだ」

夕化
「頑張れ、零斗・・・・」

こうして夕化は、零斗に恋心を抱くようになった。

現実

ネココ
「にゃ～零斗がそんな事を言ってたにゃーの？」

夕化
「本当だよ。今でも、心にしみている・・・・」

アリス
「ふぅ～ん、アニメ『真・恋姫†無双～乙女大乱～』で魏延を殺そうとしたのに～？」

夕化
「その話はするなよ！気にしてるんだから！」

アリスの発言に焦りを見せる夕化であった。

夕化
「大体、アリスは零斗の抱き枕とかで妄想してんだろ？」

これを聞いたアリスは顔を赤くする。

アリス
「夕化ちゃんだって！零斗のハンカチを嗅いでオ○ニーしてたんじゃないの！？」

夕化
「あたいはそんな変態じゃねぇ！」

夕化とアリスは睨み合う。

コロナ
「あんた達、ここは部屋よ。喧嘩するなら外で・・・・・」

アリス　夕化
「「零斗に誘われた人はだまってて（ろ）！」」

コロナ
「はぁ！？あたしは零斗のかっこよさに惚れて好きになったの！」

ネココ
「ネココも同じにゃーの！！！！！」

そして四人で睨み合う。

アリス
「こうなったら勝負よ！場所はＢＳＡＡ学園のグランド！」

夕化
「望む所だ！」

コロナ
「負けてられないね！」

ネココ
「にゃー！」

という事で・・・・・・・・

ＢＳＡＡ学園のグランドにて・・・・・・

アリスは二つの日本刀、夕化は片手剣、コロナは大剣、ネココはハンマーを持って構える。

アリス
「はぁーーーーーーーー！！！！！」

夕化
「ウオォーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

夕化はアリスに攻撃し、アリスは夕化の攻撃を防ぐ。

そして夕化は、強い攻撃を繰り出し、アリスは防ぐ。

夕化
「オラオラどうした！反撃してこいよ！」

アリス
「今しようとするところだよ！」

アリスは夕化の攻撃を防ぎ、もう片方の剣で攻撃するが、気付かれてしまい、蹴られる。

夕化
「お前の攻撃パターンは読めてるんだよ！」

アリス
「ならばこれはどうかな！？」

自身を回転させて攻撃し、夕化はそれをかわす。

夕化は反撃し、アリスはそれをかわし続ける。

一方、ネココとコロナは・・・・・・

ネココはハンマーで攻撃し、コロナは大剣で防ぐ。

コロナ
「小さいからっていい気になるんじゃないわよぉーーーーーーーー！！！！！！！」

ネココ
「小さいって言うなにゃーのぉーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

大型武器を使っての戦いが繰り広げられる。

ネココ
「コロナは魔導師になって部隊長をやってれば良いにゃーの！」

コロナ
「あんたこそ、魔法少女になって自爆しなさいよ！」

ネココ
「言ったなにゃーの」

コロナ
「それはこっちの台詞よぉーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

そして二人のキャラがどんどん崩壊していく。

その頃、零斗は・・・・・・

零斗
「なぁフランケン、俺すごく胸騒ぎがするんだけど」

フランケン
「珍しいな、お前が胸騒ぎがするって」

零斗
「そうかなぁ～？」

フランケンと共に第５０１統合戦闘航空団の調査をしていた。

零斗
「しっかしなぁ～、どれも手がかりになる物がねぇなぁ～」

フランケン
「そうだね、誰がやったか、解らないし」

零斗
「まぁとにかく、頑張ってさがそうぜ」

フランケン
「そうだな」

零斗
「とその前に昼飯を買いに行こう」

そしてフランケンはずっこける。

場所を戻し、ＢＳＡＡ学園のグランドにて・・・・・

アリス
「はぁーーーーーーーーーーー！！！！！」

夕化
「うおぉーーーーーーーーーーー！！！！！」

ネココ
「てりゃーーーーーーーーーー！！！！！」

コロナ
「おぉーーーーーーーりゃあーーーーーーーーーーー！！！！！」

まだ凄まじい戦いが続いていた。

アリス
「いい加減倒れなさいよぉーーーーーーーーーー！！！！！」

夕化
「それはこっちの台詞だぁーーーーーーーーーーー！！！！！」

アリスと夕化は引けを取らない戦いを繰り広げ・・・・・

コロナ
「あぁもう！いい加減降参したら！？」

ネココ

「その言葉、そっくりそのまま返すにゃーーーーーーーのぉーーーーーー！！！！！」

こちらも引けを取らない戦いを繰り広げていた。

しかしグランドがボロボロになりそうでも気にしていない。

グランド付近で見ている人達は・・・・・・

ソウマ
「うわぁ・・・・・凄いなぁ・・・・・・（汗）」

姫子
「これって、修理代がかかるんだよね？」

千歌音
「そうね・・・・・・」

ソウマ達だった。

姫子
「ねぇ、止めた方が良いんじゃない？」

ソウマ
「そうだな、止めないと」

そしてソウマはアリス達に呼びかける。

ソウマ
「おぉ～い。そろそろ止めた方が良いんじゃないか？」

するとアリス達はソウマの方に向き・・・・・

アリス
「うっさい！」

夕化
「勝負の最中だ！」

コロナ
「残念男は黙れ！」

ネココ
「そうにゃーの！」

これを聞いたソウマは心にひびが入る。

ソウマ
「うぅ、気にしてるんだぞ！」

千歌音
「そうね、残念な男ね。最終話で姫子に振られて・・・・・・」

そしてさらにソウマの心にひびが入る。

姫子
「ダメだよ千歌音ちゃん」

ソウマ
（姫子・・・・・）

この時ソウマは姫子に庇ってもらっていると思ったが・・・・・

姫子
「ソウマ君が残念な男でも、主要キャラだよ」

ソウマの心は更に更にひびが入る。

そしてソウマは・・・・・

ソウマ
（もうやだこの小説・・・・・）

と心で呟いた。

その時の気持ちは・・・・・

アオアシラ
「お前みたいな残念な男に何が出来る！」

とアオアシラに言われた気持ちだった。

ソウマ
「うわぁーーーーーーーーーー！！！！！」

ソウマは泣き出してクラウザーの居酒屋へ行ったのであった。

姫子
「あはは・・・・（汗）」

こうしてアリス達の戦いは、夜まで続いたそうだ。

翌日・・・・・・

零斗の部屋にて・・・・・・

零斗
「おいお～い、どうしたんだ？」

アリス達のボロボロさに心配する零斗であった。

アリス
「いや～これには訳があって・・・・・・」

すると零斗はアリス達にキスをし、アリス達は赤くなる。

零斗
「あのな～、修行でこんなにボロボロになるのはいいぜ。だけどお前等は俺の女だ、少し自重というものを覚えて欲しいな」

これを聞いたアリス達は表情が少し暗くなる。

零斗
「大丈夫だ。お前等はずっと一緒だ。いつでも、どこでも、死ぬ時もだ。金山企業に殴り込みに行くときもな」

そしてアリス達は表情を明るくし・・・・・・

アリス　夕化　コロナ　ネココ
「「「「零斗！！！！」」」」

零斗に抱きつく。

こうしてアリス達は、零斗と一緒に幸せな一日を過ごしましたとさ。

第四十八話　零斗の愛人タイム！零斗争奪戦開始！？（後書き）

次回はライアンと姫子が・・・・・

零斗
「どうなるの？」

融合しちゃうかも！？

千歌音
「そんな訳ないでしょ（怒）！」

いてて！矢を放たないで！ギャアーーーーーーーーーー！！！！！

零斗
「大変お見苦しい物になってしまった事を深くお詫び申し上げます。
次回もお楽しみに！」

第四十九話　さよなら千歌音ちゃん、姫子新たなる愛に！（前書き）

姫子と千歌音のファンの皆様、まず謝っておきます。

ごめんなさい！

衝撃のラストにご注意ください。

第四十九話　さよなら千歌音ちゃん、姫子新たなる愛に！

第５０１統合戦闘航空団基地にて・・・・・

零斗達はまだ手がかりを見つける為に調査をしていた。

フランケン
「これだけ探しても見つからないし、諦めようよ」

零斗
「いや！まだだ！百回探せば何かが見つかるって父さんが言ってたんだ」

フランケン
（お前の父親タコのくせに？まぁいいけど・・・・）

一方、ライアンは・・・・・

ライアン
「ハァ！おりゃ！てりゃ！」

新宿の公園でトンファーを使った修行をしていた。

それを遠くから見ているのは・・・・

姫子
「あの人すごいな～」

千歌音

「確かライアンね、ムエタイと柔術を使うみたいね」

姫子
「知ってたの？」

千歌音
「彼は金山企業の刺客をムエタイと柔術で倒した所を見たわ」

姫子
「そ、そうなんだ（汗）」

姫子と千歌音はどこかへ行ってしまう。

金山企業の会長室にて・・・・・・・

鬼川
「これで零斗君を捕まえる邪魔をする奴はいなくなるだろう」

鬼川は『後藤組』に電話をし終えた所だった。

？？？
「鬼川様、いちいちストライクウィッチーズを殺しに行かせなくてもいいのでは？」

隣にいる女性は若きプレシア・テスタロッサ・・・・ではなく真倉ロゼである。

鬼川に雇われたエージェントであり、普段はクールなのだが・・・・

・

鬼川
「いや、あのストライクウィッチーズを潰さなくては取り返しのつかない事になる。例え固有魔法を奪ってもだ」

ロゼ
「しかし、固有魔法を奪われたストライクウィッチーズは、我々の邪魔は出来ないでしょう」

鬼川
「それでもダメだ、彼女達は魔力が残っている。潰すなら今のうちだ。ロゼ、君に命ずる、ＢＳＡＡ学園の教師として潜入しろ」

ロゼ
「しかし何故私を・・・・・」

鬼川
「君の好きな人が、その学園にいる」

ロゼはこれを聞いて少し驚く。

ロゼ
「了解しました」

そしてロゼは会長室から出る。

ロゼ
（やっと会えるのね。あの人に会える・・・・ふふふ、楽しみだわ）

そう心で呟くロゼであった。

零斗の家にて・・・・・・

一刀達は零斗を待っていた。

そして部屋のドアが開き、現れたのは零斗とフランケンである。

皇牙
「零斗、手がかり見つかったか？」

零斗
「いや、見つからなかった」

一刀
「み、見つからなかったって・・・・・（汗）」

零斗
「ただ、別の事だが、真倉ロゼっていう人物が、金山企業と関係しているらしい」

これを聞いた皇牙は青ざめる。

零斗達は皇牙の方へ向く。

零斗
「どした？」

皇牙
「あ、あいつか？」

零斗

「そうなんだが・・」

皇牙
「あいつだけは・・・・・・二度と戦いたくねぇ・・・・」

零斗
「何があったんだ?」

皇牙
「そ、それはな・・・・・・」

皇牙ビジョン開始。

皇牙が転校する前の事、荒野で皇牙とロザが対峙していた。

そして二人は走り出し、格闘をする。

皇牙
「行くぜ!破天荒真拳奥義!豪火飛昇拳!!!」

右手に炎を纏い、ロザにアッパーする。

ロザは喰らいながらもうまく着地する。

しかし、顔は下げている。

皇牙
「ん?どうした?」

ロザは顔を上げると・・・・・・

ロザ
「ハァ、ハァ、もっと・・・・」

気持ちよさそうな顔をしており、皇牙はそれに引く。

皇牙
「な、何だ（汗）だったらこれでもくらえ！破天荒真拳奥義！雷光拳！！！！！」

左手に電気を纏い、ロザにボディブローをするが・・・・・

ロザ
「あぁん！」

皇牙
（うわぁ・・・何だよ・・・・・）

ロザは皇牙に攻撃されて喜んでいる顔をしている。

皇牙はこう思った。

皇牙
（何だこの女、俺の攻撃に喜んでやがる。っていうかまさかドM！？）

と・・・・

皇牙
「ならば俺の全力全快を見せてやる！はぁーーーーーー！！！！！」

皇牙は右手を上げ、桜色の閃光が集まる。

ロザ
「あら?何かしら?」

皇牙
「破天荒真拳奥義ぃーーーーーーーー!!!!!星光拳!!!!!」

桜色の光を纏った右ストレートをロザを吹き飛ばし、ロザは壁に叩きつけられる。

だが・・・・・・

皇牙
「・・・・・・・・(汗)」

ロザ
「ハァ、ハァ、いいわぁ~」

それでも喜んでいる顔をしているロザであった。

皇牙
「何なんだよ、何なんだよお前は!?」

ロザ
「うふふ、私はマゾティック真拳の使い手よ~。そして私が使ったのはマゾティック真拳、ドMチャージ。この技は強い攻撃を受けるほど私は強くなれるわ」

これを聞いた皇牙は、冷や汗をかく。

ロザ
「今度は私の番よ」

ロザは皇牙に攻撃をしかけ、皇牙は防ぐが、ロザの攻撃には防ぎきれなかった。

皇牙ビジョン終了。

零斗
「成る程な、すごく嫌な過去だったな」

皇牙
「まぁな・・・・・（汗）」

一刀
「あはは・・・・・（苦笑）」

一刀は苦笑いをするしかなかった。

その頃、ライアンは・・・・・・

ムエタイの強化の為にジョギングをしている。

？？？
「キャアーーーーーー！！！！」

ライアンは悲鳴がしたところに向くと・・・・・・

ヤクザ1
「おい！こいつがどうなってもいいのか？」

姫子
「た、助けて～」

千歌音
「姫子！」

後藤組のヤクザ達が姫子を人質にし、千歌音を捕らえている光景だった。

ヤクザ
「大人しく俺達の言う事を聞け！さもないと・・・・・」

ヤクザは姫子にナイフを向ける。

姫子
「ひぃ！」

千歌音
「姫子をどうするつもり！？」

ヤクザ2
「大人しくいう事を聞けば離してやるよ。でも逆らったらこの娘を切り刻んでやるって訳よ」

ライアン
「それ、僕もやられたいな～」

ヤクザ達と姫子と千歌音はライアンの声がしたところに向く。

ライアン
「僕は丁度強さを試したくてね～その相手になってくんねぇか？」

ヤクザ３
「てめぇ！ふざけてんのか！？」

ヤクザ４
「どうやら喧嘩を売っているようだな」

ライアン
「やる気だね？だったら僕もそうさせてもらう」

そう言って構える。

ヤクザ３
「ナメやがって、やっちまえ！」

ヤクザ達
「おぉーーーーーーー！！！！！」

ヤクザ達は千歌音を離してライアンにかかり、ライアンはヤクザの顔に蹴りを入れて倒し

ナイフで襲い掛かるヤクザの持っている手首を掴んでリストロックをし、横から膝蹴りをして倒す。

更に五人のヤクザを体当たりで倒し、後ろから襲い掛かるヤクザを肘回しで倒す。

肘が口のところに当たり、歯が五本も折れた。

ヤクザ１
「動くな！こいつの命がないぞ！」

姫子
「キャア！」

一人のヤクザは姫子を人質に取るが、足が震えている。

ライアンはそれに気付き、ゆっくりと近付く。

ライアン
「どうやら僕を恐れているようだね。今知ってる事を離してくれたら見逃してあげるよ。それとその娘も忘れないでね」

ヤクザ１
「だ、誰がそんな事を！」

そしてヤクザはナイフをライアンに向ける。

ライアン
「・・・どうやら拷問しないといけないみたいだね」

ヤクザはライアンが言っていた『拷問』に冷や汗をかく。

ライアンはヤクザのナイフを持っている手首を掴み、姫子を離す。

そしてライアンはヤクザの手首を強く握り、前蹴りをし、フックを

して首を掴む。

ライアン
「言え！金山四天王の最後の一人はどこだ！それと第５０１統合戦闘航空団基地の襲撃は誰がやったんだ！」

ヤクザ１
「知らない！知らない！」

ライアン
「だったら全部吐くまで逃がさないぞ！」

そして右手で抱え込んで膝蹴りをし、顔面に肘を当て、フックをして手甲で殴る。

その繰り返しをしてヤクザをボコボコにしたのであった。

ライアンの拷問は容赦が無い（汗）

ライアン
「言え！四天王の最後の一人は何処にいる！？そして第５０１戦闘航空団基地の襲撃は誰が！？」

ヤクザ１
「最後の一人は、京都にいる！だがその基地の襲撃はわからない！」

ライアン
「ハァ！？基地の襲撃が分からない！？」

そしてライアンは、ヤクザに前蹴りをし、顔面を肘に当てて倒した。

ライアン
「ふぅ、これで零斗君に知らせる事が出来るよ」

すると姫子は頬を赤くさせてライアンを見る。

姫子
（すごい、ライアン君ってこんなに強いんだ・・・・・私、胸が熱くなって・・・・）

ライアン
「何見てんだ？」

姫子
「ら、ライアン君。ありがとう」

そしてライアンは手を差し伸べる。

ライアン
「別に、お前の為じゃない。後藤組の奴等が気に入らないだけだ」

姫子
「それでもありがと」

そして姫子はライアンの腕にしがみつく。

ライアン
「ちょ、ちょっと！？」

千歌音

「姫子！？」

姫子
「私、ライアン君の事、好きになっちゃった」

これを聞いた千歌音の心にひびが入る。

ライアン
「いいのか？俺で・・・それにお前は千歌音がいるだろ？」

姫子
「ふふふ、私の親友だよ～それに私は、ライアン君の事、千歌音よりももっと好きになっちゃったんだもん」

千歌音
（そんな、行かないで・・・・・・）

ライアン
「僕が姫子ちゃんの彼女になるから覚悟してね！」

姫子
「分かりましたぁ～」

そしてライアンと姫子は、千歌音を置いてどこかへ行ってしまった。

千歌音は・・・・・

千歌音
「ひ、姫子ぉーーーーーーーーーーーーーー戻って来てぇーーーーーーーーーーーーーー！！！！（泣）」

ライアン
「今、すげぇ叫び声がしたんだけど・・・・・・」

姫子
「気のせいだよ～」

勿論、千歌音の叫び声がしても気にしない。

その頃、零斗達は・・・・・・

零斗
「ん？メールか？」

零斗のケータイから『あたしれじぇんど』が流れる。

そして零斗はケータイを開き、メールを見る。

零斗
「・・・・・成る程な」

そして零斗はケータイを閉じる。

フランケン
「誰からだ？」

零斗
「皆よく聞け、ライアンからのメールで四天王の最後の一人の場所が分かったそうだ！その場所とは・・・・・京都だ！」

これを聞いた一刀達は真剣な顔する。

零斗

「明日からはウェスカー理事長に頼んで京都へ行くぞ！」

こうして、金山四天王の四人目がいる京都へ、行くのであった。

おまけ（笑）

とある公園で、泣きながらベンチに座っている千歌音がいた。

千歌音

「どうして、どうしてなの！？私と一緒に・・・・うぅ・・・・（泣）」

姫子に捨てられ、嘆き悲しむ千歌音であった。

第四十九話　さよなら千歌音ちゃん、姫子新たなる愛に！（後書き）

次回は京都へ！

零斗
「京都！京都！京都！京都！」

はしゃぐなよ、次回行けるからさ～

零斗
「だって俺楽しみだもん！」

そうか、次回まで待て。

零斗
「分かったよ」

第五十話　京都へ行こう！ハマーリムジンで（笑）（前書き）

千歌音がキャラ崩壊します。注意してください。

そしてエロがあります。

第五十話　京都へ行こう！ハマーリムジンで（笑）

加冨根総合病院の『４２９』のとなりの『４２８』にて・・・・・

千歌音
「うわぁーーーーーーー姫子ぉーーーーーーー！！！姫子ぉーーーーーーー！！！！！（泣）」

前回のショックが大きい所為で公園の前に倒れてしまい、この病院に入院させられ、ベッドで泣きついている千歌音だった。

千歌音
「どうしてあんな男とぉーーーーーーー！！！？（泣）」

しかも周りの患者は引いている。

エル・フォルテ
「なぁ、あの子大丈夫か？」

エル・フォルテは、謎の青年に襲撃され、全治二ヶ月の怪我で入院をしている。

キャミィ
「相当重傷ね、何かあったのかしら？」

キャミィも同じく入院をしている。

千歌音
「私はどうしたら、私はどうしたらいいのぉーーーーーーー！！

！！！？（泣）」

こうして、千歌音の泣き声は、隣にも響き、三時間まで続いた。

その頃、ＢＳＡＡ学園では・・・・・

零斗
「理事長！俺達も連れてってください！」

ウェスカー
「・・・・・（汗）」

今日はウェスカーが京都に出張と聞いて零斗達は理事長室でウェスカーに連れて行ってと頼んでいる。

ウェスカー
「いや、だからね？君達は生徒であって、理事長であるこの俺がお前達を連れて行けないって何度も・・・」

零斗
「こっちは大変なんですよ？四天王の四人目が京都にいるって聞いたんですから、その四人目を倒さなきゃいけないんですよ～」

ウェスカー
「いやだから・・・・」

零斗
「あぁそうですか～だったら俺にも考えがありますよ」

そう言って、懐から何かの写真と何かのディスクを取り出す。

零斗
「これ、何だか分かります？」

ウェスカーは写真を見ると汗を流す。

ウェスカー
「その写真は・・・・（汗）」

零斗
「知ってるんですよ？理事長が弟のアックスに負けずとローズをラブホに連れて、それから・・・・」

ウェスカー
「やめてくれぇ！俺のファンの皆に怒られるぅーーーーーーー！！！！！」

零斗
「冷酷非道のダークヒーローがここまでするとは・・・ある意味のダークヒーローですねぇ～？」

ウェスカー
「その写真をどうするんだ！？」

零斗は怪しい笑みをウェスカーに向け・・・・

零斗
「俺の要求に応えなければ、この写真をばら撒きますよ？」

ウェスカー

「うわぁーーー分かった分かった！連れて行く！連れて行くからそれだけは！！！！」

零斗
「よぉ～し、このディスクは加冨根総合病院のクリスに届けよう」

ウェスカー
「そのディスクはどうだっていい！写真は渡すな！」

零斗
「分かりました！では、駐車場で待ってますので・・・・・」

そう言って、理事長室からたけしは出て行った。

ウェスカーはこう思った。

ウェスカー
（俺なんかよりも、零斗の方がダークヒーローにふさわしいかも・・・）

と・・・・

駐車場にて・・・・・・

フランケン達は零斗を待っていた。

玄関から零斗がやって来て、そこに向いた。

零斗
「おぉ～い皆～」

フランケン
「零斗～」

零斗
「わりぃ、遅れた」

一刀
「どうだった？」

零斗
「ＯＫだそうです」

これを聞いたフランケン達は喜ぶ。

フランケン
「でも、どうやって？」

零斗
「それはご想像にお任せします」

これを聞いたフランケンは苦笑いをし、こう思った。

フランケン
（何か弱みを掴んだな・・・・）

と・・・・

アックス
「僕でもダメだったのにさ～」

朱愛
「私でもダメでした」

零斗
「二人はどう説得しようとした？」

アックス
「それは・・・・・」

アックスビジョン開始。

ウェスカーの豪邸にて・・・・

アックス
「どうして！？金山企業は、ヤクザを雇ったり麻薬に関わっているんですよ！？それにシャドルーにだって！」

アックスは必死にウェスカーに説得をするが、それを傾けないウェスカー。

ウェスカー
「残念だが、それは出来ない」

アックス
「どうして！？」

ウェスカー
「金山企業とＢＳＡＡ学園は、和平条約を作ったんだ。手を出せば学園がやられる」

朱愛
「私からも、お願いします！」

しかし・・・・・

ウェスカー
「残念ながら、幾らアックスのメイドでもそれは出来ない、明日は忙しい」

そう言って、ウェスカーは自分の部屋に戻るのであった。

アックスビジョン終了。

零斗
「成る程ねぇ～」

すると校門からハマーリムジンがやって来た。

零斗
「おぉ！これがお前が言ってたリムジンかぁ～」

アックス
「そうだよ、兄さんが使っているけどね」

そして玄関から劉備ガンダムと曹操ガンダムが出てくる。

零斗達は劉備ガンダムと曹操ガンダムに向く。

フランケン

「あれ？どうしたんですか？」

劉備ガンダム
「俺達も連れてってくれ！」

曹操ガンダム
「余も行くぞ！」

一刀
「っつったってよぉ～先生達は授業あるんだろ？」

劉備ガンダム
「俺達はあの金山企業が許せなく、動かずにはいられないんだ！」

曹操ガンダム
「そうだ！あの金山企業に余のカレーパンを食わす！」

零斗
「・・・・（カレーパンねぇ・・・・・）」

零斗は腕を組みながら考える。

ライアン
「だけど、金山企業との戦いに、先生達を巻き込めないよ」

姫子
「その通りだよ」

愛紗
「先生達は授業に・・・・」

零斗
「よし！連れてこう！」

全員
『えぇーーー

曹操ガンダム
「座席？」

特別な座席に疑問に思う劉備ガンダム達であった。

ウェスカーが来た事で、劉備ガンダムと曹操ガンダムを除いて全員ハマーリムジンに乗った。

リムジンハマーは出発し、国道を走る。

劉備ガンダムと曹操ガンダムは・・・・・・

劉備ガンダム　曹操ガンダム
（あ、ありがとぉーーーーーーーーーー！！！！！）

劉備ガンダム達は涙を流し、心の中で叫んでいた。

ハマーリムジンの中では・・・・・

零斗
「さぁて、何して遊ぶ？野球拳なら負けないぞ」

フランケン
「零斗、ここでは野球拳は出来ないぞ」

零斗のボケに冷静にツッコむフランケン。

一刀
「何ならさ～王様ゲームっていうのはどうだ？」

そう言って、一刀は割ってある十一本の割り箸を用意した。

零斗
「おぉ！用意がいいねぇ～一刀」

一刀
「こういうのはやっぱ王様ゲームでしょ？」

零斗と一刀は互いに笑い合う。

零斗
「さぁ、それぞれ割り箸を持ってくださぁ～い、下に番号が書いてあり、一本は赤い印があるぞ？」

全員一本ずつ割り箸を持つ。

全員
『王様だ～れだ！』

掛け声にあわせ、割り箸を引く。

零斗
「さぁ～誰が王様かなぁ～？」

ネココ
「にゃ～ネココにゃ～の！」

ネココは、赤いしるしがある割り箸を上げながら言った。

ネココ

「九番が、二番の胸を触るにゃ～の」

フランケン
「ちょっと待て！それはまずいんじゃないか！？」

ネココの命令にフランケンは焦ってツッコむ。

零斗
「良いんだよ。王様ゲームは何でもありだから」

フランケン
「王様ゲームだからって限度があんだろ限度が！」

フランケンは零斗に激しくツッコむ。

ライアン
「九番？僕だ」

姫子
「二番は私だよ～」

ライアン
「ん？む、胸を！？」

ライアンは姫子の胸を見て顔を赤くする。

姫子
「良いよ、初めてだから優しくね？」

そして更にライアンは赤くなる。

ライアン
「じゃあ、いくぞ！」

姫子
「良いよ・・・来て・・・・・」

この光景を見た女性陣は顔を赤くし、フランケンは・・・・

フランケン
（姫子の台詞を聞いてアレ（１８禁）な意味に聞えるのは気のせいだろうか・・・）

そう思いながら、ジト目で見るのであった。

ライアンはゆっくり手を姫子の胸に近づける。

零斗
「おぉ～っと？こりゃ面白くなって来たぞ～」

零斗は、ライアンと姫子の光景を見てにやける。

ライアン
（さ、触る？何故だ、何故こんなにもドキドキするんだ？）

そう思いながら人差し指を近付け、そして・・・・・

姫子
「あぁん！」

ライアンの人差し指が姫子の乳首に当たってしまい、姫子は思わず声を出してしまう。

その頃、加冨根総合病院では・・・・・

千歌音
「うあぁーーーーーーーー誰かが姫子の胸に触ったぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

千歌音は、誰かが姫子の胸に触った事が分かったのか、黒いオーラを出し、患者は引いていた。

ナッシュ
「なぁ、あの子何か不味いぞ！」

と千歌音に少し恐怖を感じるナッシュであった。

ナッシュは、何者かによって右足を骨折し、入院をしている。

千歌音
「ウアァーーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

完全に自我を失い、そのまま千歌音は『４２９』へ行った。

これを見たナッシュは・・・・・

ナッシュ
（完全に自我を失った彼女は、世界を闇に包みそうだ・・・・）

そう思いながら何かを念じるナッシュであった。

零斗達はどうしているかというと・・・・・・

現在、ハマーリムジンは高速道路を走っている。

そしてライアンは・・・・・・

ライアン
「・・・・・」←燃え尽きている

姫子の胸を触った事により、燃え尽きているライアン。

姫子
「ライアン君！ライアン君！しっかりして！」

姫子は、燃え尽きたライアンに揺らしている。

零斗
「ありゃ～これは再起不能だねぇ～」

と呑気に言っている零斗。

一刀
「ライアンは思春期にアギトとリィンに滅茶苦茶にされてこういう調子なんだよな」

フランケン
「だったら止めるべきじゃないのか！？」

呑気にしている二人にツッコむフランケン。

アックス
「しょうがないよ、僕はそういう命令をしたらすぐに実行するよ」

そう言ってアックスは朱愛の胸を触り、揉んだりした。

朱愛
「だ、ダメですよ～皆が見ています～」

朱愛はそう言っているが、抵抗する様子がない。

アックス
「とか言って、抵抗する様子はないよ？」

アックスは朱愛にささやき、朱愛は頬を赤くする。

朱愛
「あ、アックス様・・・・・」

アックス
「朱愛・・・・」

二人は顔を合わせ、唇を重ねる。

アックス
「ん／／／／／／」

朱愛
「ん／／／／／／」

この光景を見た零斗と一刀以外の全員は顔を赤くする。

愛紗
「何て破廉恥な・・・・」

姫子
「いいなぁ～私もいつかライアン君と・・・・」

アリス
「うわぁ～」

夕化
「見せ付けるなよ！」

ネココ
「にゃにゃにゃ～大人の世界にゃ～」

コロナ
「零斗、今度の休み、空いてる？」

とそれぞれ反応を見せる女性陣達。

零斗
「へっへ～このビデオをラルクにおくろう～」

そしてビデオカメラを構えた零斗の姿があり、アックスと朱愛のラブシーンを撮っていた。

フランケン
「お前はどこのエロ親父だ！っつーか撮る暇あんなら止めろよ！」

ビデオカメラで撮っている零斗に激しくツッコむフランケンであった。

ウェスカーは・・・・・・

助手席に座っていた。

ウェスカー

（俺も混ぜてくれよ、寂しいじゃねぇか・・・・）

と思いながら涙を流すウェスカーであった。

その時、ハマーリムジンの右側と左側と前に、黒いベンツが現れる。

そして黒いベンツの窓が開き、サブマシンガンがハマーリムジンに向ける。

前のベンツには、窓からサブマシンガンを持った男が出てきてハマーリムジンに向ける。

零斗はこれに気付き、白いオーラを出す。

零斗

「皆伏せろ！それとウェスカー理事長も！」

サブマシンガンが発砲され、零斗達は伏せる。

ハマーリムジンの窓が砕け、ボディに弾丸の穴が空く。

零斗
「金山企業からの新たな刺客か！？」

そして零斗は、窓から出てハマーリムジンの屋根に登る。

高速道路であるため、少しフラつくが、零斗はそれを気にしていない。

そしてサブマシンガンは零斗に向ける。

零斗
「マイティ真拳奥義！割り箸封じ！」

そして零斗は割ってある割り箸を投げ、全てのサブマシンガンの銃口に入った。

零斗
「そしてぇ！」

ポケットから巻きびしを取り出し、右側と左側のベンツの前に投げる。

すると二つのベンツがすべり、そのままスピンして大型トラックに踏み潰される。

零斗
「後は前のベンツか」

そして零斗は構え、白いオーラを出す。

零斗
「マイティ真拳奥義ぃ～」

そして零斗は懐からバズーカーを取り出し、巻きびしをベンツの前に投げる。

するとベンツは滑り出し、スピンをする。

零斗
「トドメだ！」

そしてバズーカーでベンツに撃ち、バズーカーの弾に直撃して爆発した。

零斗はハマーリムジンに入り、席に座った。

アリス
「大丈夫零斗！？」

零斗
「大丈夫だ。問題ない！」

フランケン
「さっきのは何だったんだ？」

すると零斗は・・・・

零斗
「多分、後藤組か金山企業の刺客かもしれねぇ」

これを聞いたフランケン達は、驚く。

零斗
「それより続きだ。さぁ、やろうぜ？」

こうして王様ゲームは、京都が着くまで続いたらしい。

おまけ

孫権ガンダム
「零斗君達いっちゃいましたね・・・・（汗）」

呂布トールギス
「あぁ・・・・」

京都に連れてってもらえなかった孫権ガンダムと呂布トールギスの居残り組は、授業が終わった後、職員室でのんびりしていた。

孫権ガンダム
「大丈夫なんでしょうかね～零斗君達は・・・・」

呂布トールギス
「・・・・・・」

突然、呂布トールギスは沈黙してしまった。

孫権ガンダム

「あの～」

呂布トールギス
「行きたかったぞぉーーー

第五十話　京都へ行こう！ハマーリムジンで（笑）（後書き）

次回は零斗達が京都で大暴れ！？

零斗

「次回も絶対に読んでくれ！」

第五十一話　京都で大暴れ！？じゃなくてゆっくり行こう！（前書き）

今回は戦闘はありません。

零斗
「無いのかよ」

たまにはこういうのは良いだろ？

零斗
「そうだな」

後、今回はエロがありますので苦手な人は注意してください。

第五十一話　京都で大暴れ！？じゃなくてゆっくり行こう！

ＢＳＡＡ学園の２年Ａ組にて・・・・・

そこでは、涙を流す朱里と慰めるシェバがいた。

朱里は一緒に京都に行けなくて流しているそうだ。

朱里
「私も行きたかったです～」

シェバ
「まぁ、零斗君も一緒でしたからね・・・・・」

理科室では・・・・・・

カーテンが閉まっており、そこには水晶玉を見つめる雛里がいた。

雛里
「あらあら～刺客を振り払って京都へ行けたなんて、流石零斗君ねぇ～」

水晶玉に移っているのは、零斗達の様子だった。

雛里
「それにしても物騒な世の中ねぇ～。早く四天王の四人目を倒さないと、後が大変な事になるわよ～」

その頃、グランドでは・・・・・

全校生徒で、除草作業が行われた。

ミネット
「零斗さん達、京都へ行っちゃたです～」

レスター
「まぁ、あれじゃないかな?何か事情があって行ったんじゃないかな?」

カリーナ
「京都・・・・・」

カリーナは頬を赤くして何かを妄想する。

ミネット
「パパ、零斗さんからマイティ真拳の技を教わりました」

これを聞いたレスターは驚き、カリーナは妄想から帰ってくる。

しかしカリーナは冷や汗をかいている。

ミネット
「では、マイティ真拳奥義～」

そしてミネットは、阿修羅閃空で移動する、その先には・・・・・

孫権ガンダム
「ん?」

レスター　カリーナ
（（まさか！？））

ミネットは孫権ガンダムを掴み・・・・・

ミネット
「一瞬千撃です」

孫権ガンダムは、ミネットの凄まじい打撃を喰らう。

孫権ガンダム
「ギャアアアアアアアアア！！！！！！！」

そして、背景に天という字が浮かぶ。

ミネット
「これがマイティ真拳奥義、真・瞬獄殺です」

レスター
（えぇーーーーーー！？最悪な技を教えたのぉーーーーーーー！！！！？）

カリーナ
（もはやミネットちゃんは、オートマタを超えてしまいますわ！）

アニエス
「あぁーーーー孫権ガンダム先生が！」

チェルシー
「急いで保健室に運びましょう！」

こうして孫権ガンダムは、保健室に運ばれた。

その頃、零斗達は・・・・

零斗
「あぁ～やべーやべー」

ウェスカーと分かれて行動をしていた。

姫子はライアンにくっついている。

フランケン
（うわぁ・・・・完全にカップルみたいになってるよ・・・・・）

ライアンと姫子を見て青ざめるフランケンであった。

アリス
「それより～清水寺までもう少しだよ～」

零斗
「あ、そういえばそうだな」

アックス
「それより兄さんはどうしているんだろう？」

零斗
「どうせ他の学園に研修してんだろうな」

アックス

「そうだね～」

朱愛はアックスとくっついている。

朱愛
「アックス様～」

アックス
「朱愛～」

そしていちゃつく。

零斗
「いちゃいちゃしてんなぁ～。ま、それがアックスと朱愛なんだな～」

と呑気に言っている零斗であった。

それから数分して清水寺に着いた。

零斗達は、そこで観光を楽しむ。

零斗
「いや～いい眺めだなぁ～」

アリス
「ほんとだね～」

ネココ
「すごい眺めにゃーの！」

コロナ
（これ景色を零斗と一緒に見て・・・・・・）

コロナビジョン開始。

清水寺の夕日、零斗とコロナで二人っきりになっている。

コロナ
「零斗、あたしの事、どう思ってる？」

零斗
「そうだなぁ～可愛くて、小悪魔な所がある」

コロナ
「え？」

そして零斗は、コロナを引き寄せる。

コロナ
「ちょ、ちょっと」

コロナと零斗は、顔を見つめ合う。

零斗
「俺は好きだぜ。そういう所」

コロナ
「零斗・・・・・・」

二人は唇を重ね合い、舌を絡ませる。

零斗
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／／／」

コロナ
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／／／」

零斗はコロナに服を脱がし、コロナは壁に手をつく。

こうして二人は、愛し合った。

コロナビジョン終了。

コロナ
（キャーーーーーーどうしよう！）

そう思いながら顔を赤くする。

ネココ
「？」

ライアンは、姫子がしがみつかれているせいか、顔を赤くしている。

姫子
（むぅ、ライアン君ったら、いくらお姉さんに滅茶苦茶にされたからって私を避けようとするなんて。よ～し）

姫子はライアンの手首を掴み、自分の尻に触れさせる。

姫子
「キャア！」

零斗
「ん？どうした？」

零斗達は声を上げた姫子の方へ向く。

一刀
「何だ何だ？」

すると姫子はこう言った。

姫子
「あのね、ライアン君にお尻触られたの」

零斗
「え！？」

愛紗
「何て破廉恥な！」

夕化
「嘘っ！？」

アックス
「本当に触ったのかい？」

ライアンは顔を赤くして黙っている。

姫子
「でも、ライアン君なら、良いよ」

ライアン
「あうぅ！」

ライアンは恥ずかしさが頂点に達したのか、そのまま倒れた。

姫子
「ライアン君！しっかりして！」

姫子はライアンを揺らすが、自分の胸がライアンの顔に当たっている。

零斗
「あ～あ、これは先が思いやられるな。姫子も」

フランケン
「そうだな・・・・・」

その頃、加冨根総合病院の４２８号室では・・・・・

千音歌
「う、うぅぅ・・・・・」

姫子が自分から離れた事のショックで更に症状が悪化し、ゾンビみたいになった。

千歌音
「姫子ぉ～姫子ぉ～・・・・・」

そしてゾンビのように歩き、病室から出た。

千歌音
「姫子ぉ～姫子ぉ～・・・・」

当然周りは気にしていない。

場所を戻して清水寺にて・・・・・

零斗
「ったくよぉ～どうしたらライアンの癖が直るのかなぁ～」

とライアンの女性に弱い癖に呆れる零斗。

一刀
「仕方ねぇよ。ライアンはライアンだし」

アックス
「ああいう女性に弱い癖を克服するのは姫子君にしか出来ないよ」

零斗
「そうだよなぁ～、じゃあ次行ってみよう！」

零斗達は、清水寺の境内にある地主神社と清水寺の塔へ行く。

その時・・・・

姫子
「あの、皆は先に行ってて」

零斗
「え？」

姫子
「ライアン君と二人っきりで話したいから」

零斗
「そうか、じゃあ追いつけよ」

こうして零斗達は、姫子とライアンを後にして行った。

ライアン
「ちょっと待て、何故」

姫子
「来て」

そして姫子は、ライアンの手を掴み、林のほうへ連れて行く。

ライアン
「な、何だ？」

姫子
「ライアン君、聞きたい事があるの」

ライアン
「え？」

姫子は頬を赤くし、こう聞いた。

姫子
「私の事、好き？」

これを聞いた瞬間、ライアンは顔を赤くする。

ライアン
「ま、まぁな」

姫子
「じゃあ・・・・・・」

ライアンの手首を掴み、スカートの中に入れ、当てる。

ライアン
「な、何するんだよ！？」

姫子はライアンの手首を離し、顔に近付く。

ライアン
「あ、あぁ・・・・・・」

姫子
「ライアン君・・・・・・」

そしてライアンにキスをし、舌を絡ませる。

姫子
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／」

ライアン
「ん、ちゅくちゅくレロレロ／／／／／」

姫子はパンツを脱ぎ、ライアンのズボンを脱がす。

こうして二人は、初体験をした。

その頃、零斗達は・・・・・・

零斗
「ん～この塔はすごいなぁ～」

清水塔を鑑賞していた。

因みに零斗は、みたらし団子を食べている。

フランケン
「ほんとだね。ってかみたらし団子買ったのかよ!?」

零斗
「うめぇぞ～」

フランケン
「ってか俺達旅行気分になってるんだけど!」

零斗のボケにツッコむフランケンであった。

フランケン
「それより、どうするんだ?四天王の四人目は捜さないのか?」

零斗
「うん？明日捜しに行こう」

フランケン
「えぇ！？何で！？」

すると零斗は、太陽に向く。

フランケン
「え？もう日が暮れちゃった！？」

そしてフランケンは手と膝を地面につく。

零斗
「さて、旅館に行きますか」

アックス
「そうだね」

一刀
「日が暮れる前に行かないと大変だぞ～」

零斗は振り向くと、向こうから劉備ガンダムと曹操ガンダムがやって来た。

しかも劉備ガンダムは涙を流しながら零斗に向かって走っている。

零斗
「先生ぇ～～～～」

劉備ガンダム
「零斗ぉ～～～～～」

劉備ガンダムは零斗に飛び、零斗は劉備ガンダムをキャッチする。

零斗
「心配しましたよ！どこ行ってたんですか！？」

フランケン
（そういえば、零斗が連れてくと言いながら置いてけぼりにされたんだよな、先生は・・・・）

心の中で呟くフランケンであった。

劉備ガンダム
「京都まで歩いて来た・・・・・」

零斗
「そうだったんですか！それは大変でしょう・・・・」

そして零斗は劉備ガンダムに頭突きをし、膝蹴りをして離した。

フランケン
「おいぃーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

零斗
「次は誰だい？」

そう言って、曹操ガンダムに向いた。

曹操ガンダム
「零斗・・・・余のカレーパンはどうだった～♪」

そして曹操ガンダムはキャラを崩壊させて零斗に飛ぶ。

零斗
「はい！美味しかったで～す！」

零斗は曹操ガンダムに殴り、その時曹操ガンダムは「ごはぁ！」と言って飛んで行った。

零斗
「よぉ～し！旅館へＧＯ！」

朱愛
「あれ？ライアンさんと来栖川さんがまだ来てません！」

これを聞いた零斗達は、周りを見渡す。

その時・・・・・

ライアン
「姫子～」

姫子
「ライアンく～ん」

ライアンと姫子が、ラブラブになりながらやって来た。

零斗

「ありゃ～来ましたねぇ～」

コロナ
「しかもラブラブじゃない」

ネココ
「ラブラブにゃーの！」

零斗
「どうした？ん？前より仲が良いじゃん」

するとライアンは赤くなる。

ライアン
「ま、まぁな！」

姫子
「ライアン君とやって気持ち良かったよ～特に・・・・」

ライアン
「うわぁ！言うなよ！」

そしてライアンは姫子の口を手で塞ぐ。

零斗
「あぁ！って事はもしかして・・・・」

夕化
「エッチしちゃったのか！」

愛紗
「時と場所を弁えろ！」

ライアン
「お前等ぁーーーーーーー！！！」

そしてライアンは、逃げる零斗達を追いかけた。

曹操ガンダムは・・・・・・

曹操ガンダム
「いやあーーーーーーーーー！！！！」

アフリカのキシュジュ村まで飛ばされ、マジニ達に追われている。

台５０１統合戦闘航空団の基地にて・・・・・・

そこには、ユーノがいた。

するとユーノの目の前に、鬼川が現れた。

ユーノ
「久しぶりだね、鬼川君」

鬼川
「君も久しぶりだね、ユーノ」

ユーノは基地の周りを見渡す。

ユーノ

「凄いねぇ・・・・こういう所に僕を呼ぶなんて・・・・・・」

鬼川
「まぁね、ここなら人が来ないしね」

ユーノ
「所で聞きたい事があるんだけどさぁ・・・・・・」

鬼川
「なんだい？」

ユーノ
「これやったの・・・・・君だよね？」

そしてユーノは、鬼川に怪しい笑みをし、鬼川は黒いオーラを出す。

第五十一話　京都で大暴れ！？じゃなくてゆっくり行こう！（後書き）

零斗
「ユーノと鬼川はどんな関係だ？」

それはネタバレになるので教えません。

因みにこっちのユーノはベガの弟子で、サイコパワーを使った戦闘が得意。

シャッハの恋人です。

零斗
「おいおい、ヤベェんじゃないの？」

スーパー零斗とアイテム紹介（前書き）

今回はスーパー零斗とあのアイテムを紹介します。

スーパー零斗とアイテム紹介

スーパー零斗

特徴　髪型、顔は変わらないが、学生服の上にマイティコートを着ている。

第十九話にて、美琴の超電磁砲（レールガン）を喰らった際に、パワーアップした零斗の姿。
マイティコートを着ているが、いつでもどこでもずっと脱がない（一応洗濯はしている）
パワーアップした事により、ハジケ度が更に増えたという。

主な必殺技

電撃聖自在波（でんげきマイティ）
右足を前に出し、腰を低くし、両手首を合わせて電撃を集中させ、相手に放つ。
これは『戦国ＢＡＳＡＲＡ』伊達政宗の『ＨＥＬＬＤＲＡＧＯＮ』を真似た必殺技である。

最終変形（ファイナルフォームライド）

キャラを武器に変えてしまう必殺技。これは『仮面ライダーディケイド』ファイナルフォームライドから。

聖自在昇竜（マイティアッパーカット）

相手の攻撃をかわし、アッパーで攻撃して飛ぶ。これは『ストリー

トファイターシリーズ』リュウの昇竜拳から。

マイティコート

特徴

黒いコートで、背中に赤字で『自在』と書いており、両肩の側面に白い字で『魂』と書いてある。

第十九話から登場したアイテム。零斗がこれを着ていると『スーパー零斗』になる。マイティ真拳を免許皆伝、または真の伝承者にしか着れないコートである。

スーパー零斗とアイテム紹介（後書き）

次回は本編に入ります。

第五十二話　旅館へ突入！？そして四人目登場！（前書き）

エリオとティアナのファンの皆様は注意してください。

零斗

「エロがあるかもしれないから注意してください」

第五十二話　旅館へ突入！？そして四人目登場！

京都のとある旅館では・・・・・

零斗
「旅館！旅館！」

劉備ガンダム
「温泉！温泉！」

曹操ガンダム
「あと、料理とか～」

零斗と劉備ガンダムと曹操ガンダムは、テンションが高くなっている。

その後ろでは、アックス達は普通だが、フランケンは三人のテンションに呆れている。

フランケン
「どうしたらこんなテンションになるのかなぁ～」

一刀
「まぁいいんじゃない？」

アックス
「こういうのも、悪くないね」

朱愛

「あぁ、あぁんダメぇ」

そう言って、朱愛の乳首を弄っていた。

フランケン
「おいぃーーーーーーーー!!!何やってんだよお前はぁーーーーーー!!!!!!!」

アックスの行動に叫んだ。

フランケン
「場所を考えろよ!場所を!」

アックス
「大丈夫だバレット君、誰も見てなければ」

フランケン
「俺達が見てるんだよ!」

アックスのクールボケにフランケンはツッコむ。

零斗達は、ウェスカーが予約した客室へ入り、ゆったりする。

零斗
「ふぅ〜やっぱこうでなくちゃなぁ〜」

と言いつつ、零斗は大の字になって寝転がっている。

フランケン
（お前、のんびりし過ぎだぞ）

フランケンは心の中で零斗をツッコむ。

一刀
「フランケ～ン、お前ものんびりしろよぉ～」

隣を見ると、一刀も大の字になって寝転がっていた。

フランケン
「一刀・・・・お前・・・・・・」

アックス
「それに、男女別々の部屋だしさ～」

その後ろには、アックスも大の字になって寝転がっていた。

フランケン
「お前等目的を忘れるんじゃねぇぞぉーーーーーーーーー！！！！」

三人のだらけさに、叫ぶフランケン。

ライアン
「五月蝿いぞ、少しは静かにしろ」

ライアンも大の字になって寝転がっている。

フランケン
（ライアン、お前だけはまともだと思ってたのに・・・・・）

涙を流しながら心の中で呟くフランケンであった。

劉備ガンダム
「うわぁーーーーーーーー」

曹操ガンダム
「あぁーーーーーーーーーー！！！！！」

その隣では、叫びながらジャスタウェイダンスをする劉備ガンダムと曹操ガンダムがいた。

フランケン
「先生ぇーーーーーーーーーー！！！！！！」

この光景を見て叫ぶフランケンであった。

アリス達は、零斗達の隣の部屋にいる。

アリス
「え～そうだったの～」

姫子
「ライアン君に助けてもらった時、胸が熱くなったの～」

ネココ
「ネココは零斗と戦った時に胸が熱くなったにゃーの」

楽しく恋人の話をしていた。

夕化
「あたいは小さい頃、零斗の優しさに、惚れたんだ」

朱愛
「私はアックス様の優しさに惚れ、ずっとお仕えすると誓いました！」

愛紗
「そうか～朱愛も主君にずっとお仕えすると誓ったのか～」

コロナ
「優しさねぇ～」

コロナはいやらしそうににやける。

夕化
「何だよコロナ」

コロナ
「あたしは零斗に負けて、セッ○スされた事で惚れちゃったの～」

これを聞いたアリス達は顔を赤くする。

コロナ
「何よ！あんた達だってするじゃない！」

アリス
「まぁ、それはそうだけどさぁ～」

夕化
「場所を考えて言えよ」

コロナ
「あんた達子供!?こういう歳で言うのは当たり前でしょ!」

愛紗
「時と場所を弁えろと言ってるのだ!」

こうしてアリス達の部屋に、笑い声が響いた。

その頃、皇牙達は・・・・・

皇牙
「これで何とか片付いたな」

エリオ
「あぁ、だが何故、ＢＳＡＡ学園に刺客が来るんだ?」

キャロ
「それより、早く零斗君達に伝えないとね」

ＢＳＡＡ学園に来た金山企業の刺客を倒した後だった。

皇牙
「それより、そんなにヤバいのか?四人目は」

エリオ
「あぁ、金山四天王の四人目、死神スカル。奴は死神鎌を使った戦いが得意、その上人の魂を取る事が出来る」

皇牙
「それってヤバいんじゃねぇか!?」

これを聞いた皇牙は、驚愕するような顔をする。

エリオ
「恐らくな、だが零斗はラルクを呼ぶ。だがそれでは、全員やられるのがオチだ」

皇牙
「つまり、俺達が加われば、奴に勝てるって言うのか？」

エリオ
「可能性は低いが、それしかない」

皇牙は携帯を取り出し、ラルクに掛ける。

皇牙
「ラルクか？今すぐヘリで来い！ＢＳＡＡ学園で待っている！」

そしてすぐに切り、ポケットに入れる。

エリオ
「ならば・・・・・イカロス真拳奥義！水の癒し！」

グランドの真ん中に、水玉が浮かぶ。

水玉はそのまま落ち、グランドの地面を濡らした。

エリオ
「これでヘリが着地する際に、砂埃が舞う事はないだろう」

皇牙達は、ラルクが来るのを待つ。

旅館の女湯にて・・・・・・

夕化
「なぁ、アリス・・・・・」

アリス
「なぁに?夕化ちゃん」

すると夕化は、アリスの胸を見る。

アリス
「な、何かな?」

夕化
「このけしからん娘め~!」

後ろからいきなりアリスの胸を触る。

アリス
「きゃ~夕化ちゃん何するの~!?」

夕化
「お前のそのおっぱい!さてはこれで零斗を誘惑してるんだな~!!」

そう言って、アリスの胸を揉む。

アリス

「そんな事してないよ～」

揉まれているアリスは、顔を赤くしながら悶える。

夕化
「その胸よこせぇ～よこせぇ～！！！！」

アリス
「あぁ～んらめぇ～伸びちゃうよぉ～」

コロナと愛紗は・・・・・

コロナ
「むぅ・・・・・・」

愛紗
「？」

コロナはずっと愛紗の胸を見ていた。

愛紗
「な、何だ？」

流石の愛紗も困惑していた。

姫子と朱愛とネココは・・・・・

ネココ
「にゃ？朱愛おっぱい大きいにゃーの」

朱愛
「元々、こういう胸をしてましたから～」

姫子
「いいなぁ～」

羨ましそうに朱愛の胸を見る姫子。

ネココ
「ネココも大きくなったら朱愛みたいな胸になるにゃーの？」

朱愛
「大きくなると信じれば、胸も大きくなるんじゃないですか？」

これを聞いて嬉しそうに笑うネココだった。

一方、男湯では・・・

ライアン
「・・・・・」

ライアンは、女湯に入っている女性の声を聞いていた。

零斗
「おいおいライアン。いつからそんなスケベになったんだ？」

ライアンは顔を赤くし、直ぐに湯に入る。

ライアン
「いや～何と言うかその～・・・・眠くなったんだ！ほら、僕は温

かいお湯に入ると眠くなっちゃうんだよ！」

必死に誤魔化そうとするが、零斗はにやける。

零斗
「ったく。エリオを見習えよ～キャロがお風呂入っている所を覗いたんだぜ？」

一刀
「キャロ本人は気にしてなかったけどな」

その頃、ヘリでは・・・・・

エリオ
「くしゅん！」

エリオは、誰かが噂をしているのか、くしゃみをした。

キャロ
「どうしたの？風邪？」

エリオ
「いや、誰か俺の噂をしている奴がいるな」

場所を戻して男湯では・・・・

ライアン
「え！？そうなの！？」

零斗

「バリーの従弟とはいえ、これ本人が聞いたり見たりしたらショック受けるだろうな」

一刀
「バリーってバリー・バートンの事か？」

一刀の隣には、黄色いひよこのような着ぐるみを着た劉備ガンダムと曹操ガンダムが浮いていた。

零斗
「これ、加冨根総合病院の『４２９』という病室の皆が聞いたら、どうなるかなぁ～」

一刀
「あぁそうだなぁ、丁度俺、S心に火がついたところなんだよねぇ～」

ライアンを見て怪しい笑みをする。

ライアン
「な、何だよ！そんな顔しないでくれ！」

一刀
「だってお前、姫子とヤっちまったんだろ？」

ライアン
「うっ！」

これを聞いたライアンは、ビクッとする。

零斗
「それに気付かない俺達だと思ったのか？」

ライアン
「う、うぅ・・・・」

ライアンは涙目になる。

フランケン
「やめろよ！ライアンが可哀相だろ！」

アックス
「そうだよ！確かにライアン君はスケベだけど、それもいい所なんだよ！」

フランケン
「お前がまともだと俺がバカだったよ！」

アックスのボケにツッコむフランケンだった。

一刀
「それに、小さい頃に幼馴染のティアナを全裸にさせた事があるからな」

フランケン
「お前スケベを超えてるよ！」

一刀ビジョン開始。

それは一刀が小さい頃のことだった。

ティアナの家にて・・・・・

ティアナ
「やぁん！かず君のエッチぃ～」

一刀
「ティアちゃんのパンツみ～えた」

一刀はティアナのスカートをめくっていた。

ティアナ
「も～う。かず君ったら」

そう言って、ティアナは服を脱ぎだす。

一刀はティアナの全裸姿に驚いて腰を抜かす。

ティアナ
「ティアナの裸を見たんだから責任とりなさいよね」

こうしてティアナは一刀を押し倒し、キスしてしまった。

一刀ビジョン終了。

一刀
「あれはいい思い出だった」

そして一刀は鼻血を出す。

フランケン
「お前が脱がせたんじゃなくて、ティアナ自ら脱いだんでしょ！？
つーかお前鼻血出てるよ！」

一刀にツッコむフランケン。

一刀
「・・・・どっちでもいいだろ」

フランケン
「良くない！」

フランケンは、一刀の隣にいる劉備ガンダムと曹操ガンダムに目を向ける。

何と、頭以外はアヒルになっていた。

フランケン
「うわぁーーーーーーーーーー！！！！！」

二人の姿を見て叫ぶフランケン。

劉備ガンダム
「あぁーーーーーーーーーー！！！！！」

曹操ガンダム
「ギャアーーーーー見られたぁーーーーーーーーーー！！！！！」

すると零斗に頭を掴まれ、「どうしたんだぁーーーーー」と言って蹴り飛ばされ、「うわぁーーーーー」と叫んだのは、無理も無い。

零斗
「全く、俺達の邪魔するからいけないんだよ」

フランケン
「いや先生達は関わってなかったよぉ!?」

零斗
「そうなのか?」

フランケンは呆れながら額に手を当てる。

ウェスカーはどうしてるかというと・・・・・・・

ウェスカー
「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・」

謎の集団に追いかけられていた。

ウェスカー
「くそぉ~金山企業の刺客の次は変な集団かよ!あの集団には嫉妬とは決別したと何度も言ってるのに!」

森に隠れ、謎の集団が帰るのを待つ。

ウェスカー
(全く、世の中物騒になったもんだ。本当に、ん?)

ウェスカーの目の前には、金髪で髑髏の髪飾りをつけた死神鎌を持ったツインテールの少女が立っていた。

これを見たウェスカーは青ざめる。

ウェスカー
「ギャアーーーーーーーーーーー！！！！！！！」

その頃、零斗達は・・・・・・

零斗
「ん？」

フランケン
「どうした？零斗」

零斗
「何か、悲鳴が聞えたようだが・・・・・」

一刀
「気のせいだ、さっさと寝るぞ」

零斗
「そうだな」

零斗達は布団に入り、電気を消す。

こうして、京都の旅行？は一日を終えた。

翌日・・・・・

零斗

「さて、皆。出発するぞ」

零斗達は、旅館から出ると・・・・・・

零斗
「ん?ウェスカー理事長!?」

目の前に倒れているウェスカー理事長に駆けつける零斗達。

零斗
「・・・・こりゃひでぇな。丸刈りにされている!」

丸刈りをされているウェスカー理事長を見て笑いを堪える劉備ガンダムと曹操ガンダム。

零斗
「誰がやったんだ?」

???
「私よ」

零斗達の前に、黒いローブと髑髏の仮面を着け、死神鎌を持った少女である。

零斗
「てめぇ、何者だ」

???
「物を尋ねる時はまず自分からでしょう?」

零斗
「生憎だが、お前に教える名前は無い」
？？？
「そう、私は金山四天王の最後の一人、死神スカル。そしてまたの名は・・・・・」
少女は仮面とローブを取る。
その時、零斗達は少女の姿に、驚愕する。

第五十二話　旅館へ突入！？そして四人目登場！（後書き）

さて、問題です。死神スカルの正体は？

劉備ガンダム
「はい、忌々しいアリス！」

不正解です。

劉備ガンダムは、龍帝剣を持ったアリスの『天翔真龍斬』を喰らう。

劉備ガンダム
「ギャアーーーーーーーーー！！！！」

曹操ガンダム
「はい！クレア・レッドフィールド！」

不正解です。

曹操ガンダムは、七星剣を持ったクレアの『大紅蓮斬』を喰らう。

曹操ガンダム
「うわぁーーーーーーーーー！！！！！！！」

零斗
「正体は・・・・・・次回を待て！」

不正解ですが、まぁまぁですね。

第五十三話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（前編）（前書き）

零斗

「前編か？まぁ、次回に続くって感じで面白そうだな」

第五十三話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（前編）

零斗達は、死神スカルと名乗った少女が仮面とローブを取った瞬間、驚愕した。

零斗
「お前、華琳か？」

華琳
「そうよ、私が金山四天王の最後の一人、華琳よ」

そして華琳は、紫のオーラを出し、零斗は白いオーラを出す。

華琳
「そういえばあなた、零斗ね？」

零斗
「その通り、マイティ真拳の伝承者だ！」

華琳
「ふふふふ、会長が言った通りだったわ」

すると一刀が零斗の隣に移動する。

一刀
「華琳！」

華琳
「あら一刀、久しぶりね」

一刀
「どうしてウェスカー理事長を！」

華琳
「何でって？それはあなたたちに対する布告よ？」

これを聞いたフランケン達は、怒りを露にする。

零斗
「宣戦布告か、なるほどね。だが覚えておけ。こんな風に布告をすれば、返ってそれが仇となるぞ」

華琳
「ふぅ～ん、そうなの？けど、そういう寝言は寝て言いなさい」

零斗と華琳は、互いにオーラを出す。

フランケン
「零斗、あの華琳っていう人、知ってるの？」

零斗
「俺と同じマイティ真拳を習っていたが、マイティ真拳を悪に利用したため、破門になった」

これを聞いたフランケン達は、驚愕する。

アリス
「零斗と同じマイティ真拳・・・・・・」

夕化
「しかもそれを悪に利用して破門・・・・」

零斗
「俺は覚えてるぜ、お前の言葉を。『正義も悪も関係ない。ただ勝てば良い』ってな」

華琳
「あら？そこまで覚えてたの？意外ね」

華琳は死神鎌を零斗に突きつける。

華琳
「あなたのマイティ真拳とは違うわ」

零斗
「俺のマイティ真拳とは違うという事は、裏マイティ真拳か」

華琳
「知りたかったら、私の戦艦『神火鳳凰』に来なさい」

そう言うと、黒い霧に包まれ、消えていった。

フランケンは零斗の隣に移動する。

フランケン
「裏マイティ真拳って・・・・・」

零斗
「裏マイティ真拳、俺のマイティ真拳とは異なり、暗殺、幻惑、殺

人術を中心としたマイティ真拳だ」

一刀
「それを中心としたマイティ真拳！？」

裏マイティ真拳の事について聞いたフランケン達は驚愕する。

零斗
「さっさと行くぞ。あの神火鳳凰へな」

そう言って、零斗は森へ向かった。

フランケン
「おぉい！待てよ！」

後にフランケン達は零斗についていく。

零斗
（裏マイティ真拳・・・無くなっていたと思ったらまさかあったとはな。使いたくないが、最終奥義を使わざるえないか・・・・・）

そう考えながら神火鳳凰を探すのであった。

森に着いた零斗は、止まる。

フランケン
「零斗？」

零斗
「ここから先は、五人で行く」

これを聞いたフランケン達は、「えぇーーーーーーー!!!?」と驚く。

フランケン
「五人って、まさか零斗・・・・・」

零斗
「その通りだ、相手はあの華琳。こういう人数で行くのは、流石に犠牲者が出る」

アリス
「零斗!私はどこまでもついて行くよ!」

夕化
「だからあたい達を連れてってくれ!」

コロナ
「あたしも同じよ!」

ネココ
「ネココもにゃーの!」

こうして、アリス達の零斗の後について行きたいとの声が上がる。

零斗
「よぉし!連れて行くメンバーを決めたぞ!」

零斗は懐から一枚の紙を取り出す。

書かれてあったのは・・・・・

『アリス　一刀　劉備ガンダム　曹操ガンダム　フランケン　ラルク』だった。

フランケン
「ちょっと待てぇ！！！！六人になってるぞ！しかもラルクいないから！」

零斗
「ラルクは俺達にとって欠かせないメンバーだ。来ると信じている」

フランケン
「だからってそれはダメだろぉーーーーー！！！！！」

フランケンのツッコみを無視して先に行く零斗達。

フランケン
「おいちょっと！待てよ！」

後からついていくフランケンであった。

因みに残ったメンバーは、見張り役となった。

その頃、神火鳳凰では・・・・・

華琳
「ふふふ、まさか五人とはね」

怪しい笑みをしながら零斗達をモニターで見る華琳。

華琳
「でも、この戦艦を見事見つけられるかしらね、うふふふ」
そう呟きながらワインを飲むのであった。
その頃、零斗達は・・・・・・
フランケン
「零斗、裏マイティ真拳って、どうして生まれたんだい？」
裏マイティ真拳がどうして生まれたのか、零斗に問う。
すると零斗は・・・・・・
零斗
「裏マイティ真拳は、初代マイティ真拳の伝承者の弟子が、嫉妬、憎しみを持ち始め、遂には悪の力にしてしまい、永久追放になった」
これを聞いたフランケン達は、表情を変える。
零斗
「そして会得しているマイティ真拳の技を幻惑、暗殺、殺人術を付け加えてしまった」
フランケン
「その、裏マイティ真拳の伝承者は一体・・・・・・・」
零斗
「・・・・・伝承者は華琳だ」

零斗の発言で、フランケン達は驚く。

一刀
「じゃあかなりヤバいって事じゃねぇか？」

アリス
「何だか、怖くなってきた」

一刀の隣には、桃香にコスプレをしたアリスの姿があった。

フランケン
「アリスぅーーーーー！！！ふざけないでぇーーーー！！！」

アリスのボケにツッコむフランケン。

零斗
「かなりヤバいぞ」

零斗も桃香のコスプレをしていた。

フランケン
「うぉいーーーーーー！！！！！」

劉備ガンダム
「裏マイティ真拳・・・・・許せないな！」

劉備ガンダムも桃香のコスプレをしていた。

フランケン

「あんたもかいぃーーーーー！！！一刀と曹操ガンダム先生！何とか言ってください！」

フランケンの隣には、曹操ガンダムと一刀が桃香のコスプレをしていた。

フランケン
「真面目にやれお前等ぁーーーーーーーーーー！！！！！！」

零斗達のふざけに、思わず叫ぶフランケンであった。

フランケン
「はぁ・・・・・いつもツッコミばかり・・・・疲れるよ」

ツッコミ役に疲労を感じるフランケンだった。

フランケン
「それより、早く行かないと・・・・・ってあれ！？零斗がいない！？」

フランケンは、零斗がいない事に早く気付く。

フランケン
「零斗はどうしたんだ！？」

劉備ガンダム
「・・・・・・さぁ？」

フランケンは後ろを振り向く。

そこには、天玉鎧『蒼龍』に乗っている零斗がいた。

フランケン
「えぇーーーーーー！！！！」

思わず叫ぶフランケン。

劉備ガンダム
「おい！それは俺のだ！」

と零斗に叫ぶ劉備ガンダムだが、零斗のバズーカーを喰らい、吹っ飛んだ。

そのまま蒼龍は、どこか行ってしまった。

フランケン
「・・・・・・・」

一刀
「・・・・・・・」

アリス
「・・・・・・・」

劉備ガンダム
「・・・・・・・」

曹操ガンダム
「・・・・・・・」

こうして、フランケン達は、沈黙した。

その頃、零斗は・・・・・

零斗
「あ～らくちんらくち～ん」

寝転がって、ポテチを食べながら漫画本を読んでいた。

因みに読んでいる漫画は『気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！』の一巻である。

零斗
「まさか玉璽を拾ったら天玉鎧が出てくるなんて～」

正しくは『マイティ真拳奥義　天玉鎧出てこ～い』で出てきたのである。

零斗
「どっちでも良いだろ？それよりこのまま天火鳳凰まで行っちゃうんじゃない？」

そう言ってあくびをして寝た。

しかし零斗は気付いていなかった・・・・・・

神火鳳凰はもう直ぐ目の前という事を・・・・・

その頃、フランケン達は・・・・

フランケン
「何だろ?この小屋は・・・・・・」
妙に怪しい小屋の前にいた。
恐る恐る扉を開ける。
その小屋の中は・・・・・・・
フランケン
「・・・・・・・」
銅像になった典韋アッシーマがいた。
そして扉を閉める。
この時フランケンはこう思った。
フランケン
(何だったんだろう?)
と・・・・・・
小屋から立ち去り、神火鳳凰を探す。
目の前には、曹操ガンダムの遺影を持った一刀と、涙を流すアリスがいた。
一刀
「曹操ガンダムがお亡くなられになりました」

フランケン
「えぇーーーーーーーーーーーー！？」

これを聞いたフランケンは、叫ぶ。

劉備ガンダム
「曹操ぅーーーーーーーーーー！！！！！何でだ！何でなんだぁーーーーーーー！！！！！」

曹操ガンダムが入った棺桶の前で悲しむ劉備ガンダム。

しかし曹操ガンダムの隣には、『うっそぴょ～ん』と書いてあるプラカードがあった。

フランケン
（もうバレバレなんですけどぉーーーーーーーーーー！！！！！）

と心の中で叫ぶ。

もちろん劉備ガンダムは嘘泣きをしており、フランケンの反応をうかがってた。

フランケン
（うわぁ、俺の反応をうかがってるよ。よし・・・・・）

そしてフランケンは・・・・・

フランケン
「そ、そうか・・・そりゃ悲しいな・・・・」

これを聞いた曹操ガンダムは、プラカードを持って起き上がる。

劉備ガンダム　曹操ガンダム

「「ははははは！馬鹿め！引っかかったなぁ！！！！」」

と馬鹿らしく言う。

劉備ガンダム

「と見せかけてぇーーーーーーーー！！！！！」

棺桶の蓋を閉じ、曹操ガンダムを閉じ込める。

劉備ガンダム

「全部現実なんだよぉーーーーーーーー！！！！！」

と叫ぶ劉備ガンダム。

フランケン達は、曹操ガンダムを後にした。

その頃、零斗は・・・・・

零斗

「いっててぇ～ここどこだ？」

神火鳳凰の中に、蒼龍を使って？潜入成功したらしい。

零斗

「それより、ここは神火鳳凰なのか？」

？？？
「その通りです」

零斗は声がした方向に振り向く。

そして零斗は、驚愕する顔になる。

零斗
「お前は、琉琉！」

琉琉という少女は、腰に付いているホルスターに納めているコルト・ガバメントを抜き、片手で構える。

零斗
「お前は確か、ＢＳＡＡ学園の生徒じゃないのか？」

琉琉
「あなたについてのデータを取るために、潜入捜査してましたから。それに潜入しているのは私だけじゃありませんよ」

零斗
「何ぃ？」

白いオーラを出しながら、琉琉を睨む零斗であった。

第五十三話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（前編）（後書き）

次回はＢＳＡＡ学園外伝の、あのキャラが！！！！！！

リビングタイムファイナル（前書き）

リビングタイムが、今回で最終回です。

リビングタイムファイナル

アックスの豪邸のリビングにて・・・・

零斗とアックスはP○3で『スーパーストリートファイター4』をやっていた。

零斗
「なぁアックス」

アックス
「なんだい零斗君」

零斗
「今回はなんだか分かるか？」

アックス
「分かっている」

するとそこへフランケンがやってくる。

フランケン
「おい零斗、今回も質問来てるんだからちゃんと・・・・」

零斗とアックスは、フランケンに向く。

そして零斗はフランケンに近づく。

零斗

「フランケン！今回は何だか知ってるか！？」

フランケン
「今回は何って？」

零斗の口から、衝撃の一言が・・・・

零斗
「今回は・・・・リビングタイムは最終回だ！」

フランケン
「え？えぇーーーーーーーーーーーー！？」

零斗の一言でフランケンは驚く。

フランケン
「ど、どうして！？」

零斗
「物語は既に終盤に近づいている。今回でリビングタイムは最終回だ」

フランケン
「で、でも！これじゃあ・・・・・」

零斗
「仕方ねぇだろ。そういうもんだからさ」

フランケン
「だからって・・・・」

？？？
「アックス！」
零斗達は声がした方向に向く。
そこにいたのはラルク・・・・のコスプレをしている劉備ガンダムだった。
劉備ガンダム
「俺と勝負しろ」
零斗
「何やってんだテメェーーーーー！！！！」
踵落としで劉備ガンダムの脳天にダメージを与えて、「グハァ！」と劉備ガンダムが倒れて気絶したのは、言うまでもない。
零斗
「さて、バカは片付けたし、早速質問を・・・・」
フランケン
「ちょっと待てぇ！劉備ガンダム先生にバカはないだろぉーーーー！アニメの最終回で翔烈帝になって曹操ガンダム先生と戦ったんだよ！！！！」
すると零斗は涙目になる。
零斗
「だってだって、羨ましかったんだもん！ＢＳＡＡ学園では翔烈帝

になって一人の活躍で人気取るかもしれないもん！そんなの嫌だもん！！！！」

フランケン
「零斗、気持ちは分かるよ。でも劉備ガンダム先生は好きで翔烈帝になったんじゃないんだよ。三璃沙の明日の為になったんだよ」

劉備ガンダム
「そうだぞ零斗。先生は三璃沙の明日の為になったんだぞ」

零斗
「オメェは自慢気に言うんじゃねぇーーーーーー！！！」

そして回し蹴りで劉備ガンダムを外へ飛ばし、劉備ガンダムは「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！」と叫んだ。

零斗は質問のハガキを手に取る。

零斗
「では矢部野　和麻呂さんから質問だ『ＢＳＡＡ学園の人達って今の所何歳ですか？』だそうだ」

フランケン
「そうだなぁ１６か１７くらいかな？教師は１０代と２０代と３０代４０代だそうだ」

零斗
「矢部野　和麻呂さん、質問ありがとうございました」

するとそこに、ゴスロリ姿で犬耳を生やした凪がやって来た。

零斗
「あれ？お前は・・・・」

凪
「雛里様の使い魔、凪と申します。雛里様からの贈り物です」

凪が手に持っているのは一枚のディスクと一枚の手紙だった。

零斗
「これは？」

凪
「手紙を読めば分かります」

手紙の内容は・・・・

『零斗く～ん、ヒナリンはトライセル社に潜入していま～す。トライセル社はキシュジュの村人に寄生しているプラーガに関連してるし～そのプラーガを薬の材料にするのよ～。後、資料室に朱里ちゃんのテコ入れ映像があったのよぉ～それの処分をお願い。凄く恐ろしいからね～一刀ちゃんにヒナリンが帰って来たら一緒に艶事しよ～って。魔女っ子ヒナリンより』

そして零斗はディスクをＤＶＤプレイヤーに挿入する。

キシュジュにて・・・・

そこには、惨殺されているマジニ達がいた。

そして向こうから少女らしき人物が歩いている。

首をチェーンソーではね飛ばされる処刑マジニ。

日本刀で真っ二つに切られたチェーンソーマジニ。

鉈で首を切られる巨漢マジニ。

手足を切られた、ナイフに首が刺さっているガトリングマジニ、もとい龍の骨。

血が付いたチェーンソーを持ち歩いている少女、朱里はにやけ、チェーンソーのエンジンをかける。

『チェーンソーマジニ朱里』

クリスが後ろを振り向くと・・・・

クリス
「アァーーーーーーーーーーーーーーーー!!!!」

零斗
「・・・・」

零斗はディスクを取りだし、どこかへ送った。

フランケンは吐きそうなので口をおさえている。

アックスは冷や汗を流す。

零斗
「ごめん、間違えて烈火竜さん所の義勇軍の皆さんのところへ贈っちゃった」

フランケン
「お前バカだろぉーーーーーーーーーーーーーー！！！！」

フランケンは叫ぶ。

零斗
「という事で、映像流した時は凪はどっかへ行きましたが、これにてリビングタイムは今回で終わりです」

そして零斗は、コーラを飲む。

その後、朱里が謎の集団に襲われたのは、言うまでもない。

リビングタイムファイナル（後書き）

零斗
「てかさぁ、なんで朱里先生がカップルとかよく嫉妬するようになったんだ？」

乙女大乱の二話で朱里が鈴々によって自分の硯を壊されて黒いオーラを出しながら怒った事でそうなったんだ。

零斗
「そうなんだ。次回は前回の後半だぞぉ！！！！」

第五十四話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（後編）（前書き）

今回はＢＳＡＡ学園！外伝のあのキャラが登場！

第五十四話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（後編）

コルト・ガバメントを構える琉琉に睨む零斗。

零斗
「お前誰だ？」

琉琉
「私は琉琉。G社に作られたアンドロイド、しかし今は華琳様のアンドロイド」

零斗
「そういやお前、欠陥品でスクラップにされたと思ったが、まさか拾われるとはな」

琉琉
「華琳様に改良されてますから」

零斗
「なるほどねぇ～じゃあ勝負だ！」

そして零斗は背中を向けて走り、琉琉は後から追う。

琉琉
「バカですね、私から簡単に逃げられるとお思いですか？」

琉琉は速度を上げ、零斗との距離を縮める。

零斗

「くそぉ～こうなったら！マイティ真拳奥義！オオカミダッシュ！」

零斗も速度を上げ、琉琉との距離を伸ばす。

零斗
（これくらい距離を伸ばせば、奴は追いついてこないだろう）

一方、フランケン達は・・・・・・

フランケン
「全く、零斗は一体どこに、それに神火鳳凰を探さないと・・・・・・」

零斗と神火鳳凰を探していた。

すると目の前に・・・・・・

フランケン
「え！？」

『神火鳳凰』と書いてある紙が張ってある玩具の船があった。

フランケン
「玩具じゃねぇかーーーーー！！！！！」

フランケンは思わず叫ぶ。

劉備ガンダム
「そいつは偽物だ」

フランケン
「え？」

声がした方向に向くと、自動販売機の隣に劉備ガンダムがいた。

劉備ガンダム
「本物は・・・・・・」

自動販売機の三段目の右端を見ると、『神火鳳凰』と書いてある缶があった。

劉備ガンダム
「さっき飲んでみたんだが、イチゴと林檎が混じった味がしたぞ」

フランケン
「見つかったと思ったのに・・・・・・」

少し凹むフランケンだった。

劉備ガンダム
「そういや上になんか浮いているぞ～」

上を見ると、鉄甲戦艦『神火鳳凰』が浮いていた。

フランケン
「これは・・・・・間違いない！」

後から一刀達がやってくる。

一刀

「フランケン！上に浮いてるの、あれは何なんだ！？」

劉備ガンダム
「神火鳳凰だってさ」

そして一刀達は上を見る。

一刀
「ん？」

神火鳳凰の左側に蒼龍が刺さった所に気付く。

一刀
「あれは零斗が乗ってた蒼龍！」

フランケン
「でも、どうやったら・・・・・・」

劉備ガンダム
「飛ぶんだよ・・・・・・」

アリス
「え？」

劉備ガンダムの目は輝いていた。

劉備ガンダム
「だって僕らには・・・・翼があるのだから」

後ろでは、曹操ガンダムが涙を流している。

曹操ガンダム
「劉備ガンダム様、僕は翼がありません・・・・・・」
劉備ガンダムは泣いている曹操ガンダムに手を伸ばす。
劉備ガンダム
「あるさ、僕らの、心の中に～」
そして昇ってくる太陽に指す。
劉備ガンダム
「さぁ行こう！無限の大空へ！」
目を輝かせてフランケン達を見た。
フランケン
「目を覚ませ！！！！」
そしてフランケンは劉備ガンダムを殴る。
フランケン
「全く！真面目にやってくれよ！」
その頃、零斗は・・・・
琉琉
「ダメージレベル６、機能停止」
零斗

「はぁ、何とか沈めたぜ」

零斗は琉琉と戦い、機能停止させた。

零斗
「それにしても、流石はG社だ。ジャックシリーズしか開発しないのに」

そう呟きながら通路を歩く零斗であった。

すると向こうから青年らしき人物が現れる。

零斗
「ん？」

青年を見て、見覚えがあるかのような顔をする。

零斗
「まさかラルクか！？」

青年
「そういうお前は零斗か？」

青年、ラルクは零斗に近づく。

零斗
「いやぁ来ると信じてたぜ」

ラルク
「そうか？」

零斗
「どうやって来た？」

ラルク
「それはな・・・・」

ラルクビジョン開始

ヘリの扉を開き、降りる準備をするラルク。

皇呀
「気を付けろラルク！神火鳳凰の甲板の警備がかなり激しいぞ！」

危険を告ぐように伝える皇呀。

ラルク
「大丈夫だ！必ず生きて帰ってくるぜ！後、兄貴（クリス）には
鉄甲戦艦『神火鳳凰』に潜入をしたって伝えておいてくれ！」

皇呀
「分かった！エリオとキャロは、地上でスカルの兵士達を蹴散らしている」

ラルク
「そうか！」

ラルクは飛び降り、ＸＫ．５０対物狙撃銃を構える。

すると弓兵達が現れ弓矢を構える。

ラルクは弓兵達に撃ち、全滅させた後、パラシュートを開き、うまく着地する。

そして神火鳳凰の中に入ったという。

ラルクビジョン終了。

ラルク
「という訳だ」

零斗
「そうか・・・・」

そして零斗とラルクは、そのまま通路を歩く。

その頃、フランケン達は・・・・

フランケン
「何とか入れたね」

一刀
「いや、油断は出来ないぞ」

アリス
「それより、零斗と早く合流しよ」

一刀達は通路を歩く。

一刀

「ん？隠れろ！」

一刀は何かに反応してフランケンとアリスを物陰に隠れさせ、自分も隠れる。

一刀
「くっ！警備兵が多くては、進めないぜ」

物陰から見ると、警備兵が多数いた。

フランケン
「やっぱり、油断は出来ないね」

アリス
「何かで引き付けないと・・・・」

すると、黒タイツを着た劉備ガンダムと曹操ガンダムが通路を歩いていた。

しかも黒タイツに『スパイ』と書いてあった。

警備兵達はそんな劉備ガンダム達を見ている。

劉備ガンダム
「へっ！余裕だったな」

曹操ガンダム
「でも見られてるような気がしますが・・・・」

劉備ガンダム

「気のせいだよ」

曹操ガンダム
「もし見つかったら・・・・」

劉備ガンダム
「その時はその時だ。自分、酸っぱいですから～って言えば大丈夫だよ」

警備兵達は劉備ガンダム達を捕まえる。

そして劉備ガンダム達は抵抗する。

劉備ガンダム
「クソ！どうすれば・・・・そうだ！」

そして酢と梅干しを取り出す。

劉備ガンダム
「自分！酸っぱいですから～！」

曹操ガンダム
「あなたは酸っぱくな～い」

劉備ガンダム
「酸っぱいですから！酸っぱいですから！」

曹操ガンダム
「酸っぱく～い」

劉備ガンダム
「酸っぱいですから！酸っぱいですから！」

曹操ガンダム
「酸っぱくな～い」

警備兵が劉備ガンダム達に気をとられている内に一刀達は走った。

その後、劉備ガンダムと曹操ガンダムと警備兵のグダグダな出来事は、一時間続いていた。

その頃、華琳は・・・・

華琳
「ふぅん、やるじゃない」

？？？
「華琳様、良いのでしょうか？」

隣にいる眼鏡を掛けた女性、凛が問う。

華琳
「こうでないと、面白くないでしょ？それに、曹魏五人衆がいるじゃない」

すると黒いローブに仮面を着けた六人の女性が現れる。

華琳
「さぁ、私の可愛い五人衆、零斗達を・・・・ん？」

華琳は六人の女性を見て、何かを疑うような目で見る。

華琳
「一、二、三、四、五、六・・・・」

そして沈黙な空気になる。

華琳
「六人いるぅーーーーーーーーーーー！！！！」

五人衆なのに六人いる事に思わず叫び、赤いボタンを押す。

すると地面に穴が開き、六人の女性は落ちる。

華琳
「ふぅ、これで良いわ」

凛
「何してるんですか！？」

華琳
「だってだって！五人衆なのに六人いたんだもん！！！！」

涙目で凛に言う華琳。

凛
「早く連れ戻さないと零斗達来ちゃいますよ！？」

華琳
「えっと、えっと、えっと」

華琳は汗を流しながらオロオロし、赤いボタンを押す。

地面に穴が開き、華琳は落ちる。

華琳
「あ～れぇ～」

凜
「華琳様ぁーーーーーーーーーーーー！！！！！」

落ちていく華琳に叫ぶ凜であった。

一方、一刀達は・・・・

一刀
「何か騒がしかったんだが、何なんだ？」

騒がしい事に気づいた一刀、フランケンは窓から空を見ていた。

すると・・・・

華琳達
『パータパタ、パータパタ』

華琳と曹魏五人衆＋一人が手を翼のようにして飛んでいた。

これを見たフランケンは青ざめる。

一刀

「さっさと行くぞ」

フランケン
「待ってよ！」

そして赤い扉の前に止まり、フランケンとアリスも止まる。

一刀
「この部屋、怪しいな」

一刀は赤い扉に手を伸ばし、開く。

その先には・・・・

零斗
「おいおい、そこは体術だろぉ」

ラルク
「武器で倒す方が良いんだよ」

零斗とラルクが『バイオハザード５』で二人プレイをしていた。

フランケン
「何やってんだお前らはぁーーーーーーーーーーー！！！！」

零斗
「お、来たか」

フランケン
「来たかじゃない！何でこんな所に・・・・」

華琳
『よく来たわね』

華琳のアナウンスが流れ、零斗達は反応する。

華琳
『ようこそ、闘士の部屋へ』

零斗
「華琳！テメェ何考えてんだ！」

華琳
『右側をご覧なさい』

零斗達は右側を見ると、６つの扉があった。

華琳
『この扉の先には、曹魏五人衆が待ち構えてるわ。楽しんでいってね』

そしてアナウンスが止まる。

ラルク
「まずは俺から行くぜ」

零斗
「おい、行くのか？」

ラルク

「お前は戦う力をとっておけ」

そう言って、左端の扉に向かう。

ラルク

「もし俺が死んだら、シャーリーに伝えてくれ、『俺が死んでも、お前の心のなかで生きている』ってな」

零斗

「あぁ、分かった」

ラルクは扉を開き、部屋に入ると同時に扉がしまる。

零斗

（ラルク、死ぬなよ）

ラルクが死なない事を願う零斗であった。

フランケン

「ねぇ、ツッコんで良いかな？五人衆なのに六人いたよ！？しかも扉が六つあるし！！！！」

フランケンのツッコミを無視してラルクを祈る零斗だった。

ラルクが入った部屋では・・・・

ラルク

「ったく、誰もいないのか？」

？？？

「相手は私よ」

ラルクの目の前には、巫女服姿と弓矢を持った少女、姫宮千歌音だった。

千歌音
「曹魏五人衆が一人、姫宮千歌音」

ラルク
「お前入院してたんじゃなかったのか！？」

千歌音
「そんなの、憎しみで退院したわ」

そして千歌音は弓を構える。

ラルク
「ったく、こうなりゃ早く終らせ・・・・」

狙撃銃を構えようとするが、矢が早く狙撃銃に刺さり、砕ける。

ラルク
「お、俺の・・・・」

千歌音
「あなたの切り札、使い物にはならなくなったわね」

ラルク
「へっ！無くたって俺は戦えるんだよ！！！！」

ラルクはH&KUSP自動拳銃を取りだす。

千歌音は矢を獲物を狙うように飛ばし、ラルクはそれを走って回避する。

ラルクは拳銃で千歌音に撃ち、弾は弓に当たり、壊れる。

ラルク
「どうだ？お前の切り札が無くなったぞ？」

すると千歌音は側にある薙刀を手に取り、構える。

千歌音
「弓矢だと思ったらおお間違いよ」

ラルク
「へぇ、そうかいそうかい」

そう言って、拳銃をしまい、側にある刀を取り、構える。

ラルク
（剣道はアックスに教えて貰ったからなぁ、早速試してみるか）

そして千歌音は走りだし、ラルクに攻撃を仕掛ける。

ラルクはそれを防ぎ、押し返す。

ラルク
「お前、やるじゃねぇか」

千歌音
「あなたもね！」

千歌音は薙刀を振り、ラルクはそれをかわし、刀を振る。

ラルクは千歌音の斬撃に押される。

ラルク
「なぁ、聞きたい事があるけどよぉ、お前どうして入ったんだ？」

千歌音の斬撃を防ぎながらも問うラルク。

千歌音
「そんなの決まってるでしょう！！！！姫子を取り戻す為よ！」

ラルク
「姫子！？」

千歌音
「私と姫子は良い関係だった！あの男が来るまでは！」

ラルク
「あの男！？」

千歌音
「ある日の出来事で、ライアンという男に奪われた！姫子は、私の所に戻らなかった・・・・」

千歌音の目から、涙が浮く。

千歌音
「入院中の私に、華琳という人に誘われ、姫子を取り戻す為に入ったのよ！！！！」

ラルク
「成る程ねぇ、けどなぁ、それで悪になろうなんて、バカみたいだぜ！！！！」

千歌音
「あなたに何が分かるのよ！！！！」

ラルク
「姫子がライアンとくっついただけで何だよ！？姫子が幸せならそれで良いじゃねぇか！お前はそれを奪おうとしている！！！！」

これを聞いた千歌音は攻撃を止める。

ラルクは後ろに下がり、距離を取る。

そして千歌音は薙刀を構える。

ラルクと千歌音は互いに一撃を入れる。

ラルク
「・・・・・」

千歌音
「・・・・・」

すると千歌音の服の胸の部分が破れる。

千歌音は顔を赤くし、胸を抑え、ラルクに振り向く。

ラルク
「これで分かったろ?足を洗って・・・・!?」

ラルクは千歌音を見て頬を赤くする。

ラルク
(な、何だ!?何で俺、こんなにドキドキしてんだ?)

そう思いながら千歌音を見る。

千歌音
「ありがとう。やっと目が覚めたわ。あなた、名前は?」

ラルク
「俺はラルク・レッドフィールドだ」

千歌音
「ラルク・・・・」

そして千歌音はラルクに指を指す。

千歌音
「私をあなたの嫁にしなさい!」

ラルク
「え?」

これを聞いたラルクは冷や汗を流すのであった。

一回戦、ラルクＶＳ千歌音。

ラルクの勝利。

第五十四話　潜入！鉄甲戦艦　スッパイ大作戦！（後編）（後書き）

零斗

「ラルク、フラグたったぞ。こりゃｃｈａｒｌｅｙさん何て言うか・・・」

ｃｈａｒｌｅｙさん、ごめんなさい！！！

第五十五話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（前編）（前書き）

零斗
「龍の骨はシャーリーが放ったミニガンの巻きぞいにあって倒れているそうだ」

フランケン
「それ、まずくない？」

第五十五話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（前編）

闘士の部屋にて・・・・

左端のドアが開くと、冷や汗を流しているラルクと腕にしがみついている千歌音が出てきた。

これを見た零斗達は真顔になっている。

ラルク
「あ、あのぉ皆さん？どうしたんですか？」

零斗
「ラルク、お前フラグを立たせたようだな」

ラルク
「は？」

零斗
「モニターで全て見せてもらった」

ラルクは後ろを振り向くと、扉の上に大型モニターが設置されていた。

零斗
「いい戦いだと思ったらフラグを立てるとはな。予想外だ」

ラルク
「だ、だから何だよ！？」

零斗はラルクに近付く。

零斗
「ラルク、痛いの我慢出来る？」

ラルク
「え？何？」

そして零斗は「オラァーーー！！！！」と言って蹴り上げ、ラルクは天井に刺さる。

零斗
「よし！一回戦は俺達の一勝だ。次は誰だい？」

すると一刀は制服からハンクの衣装に着替える。

ガスマスクとヘルメットは着けていない。

一刀
「俺に行かせてくれ。零斗」

零斗
「一刀、良いのか？」

すると一刀はヘルメットとガスマスクを零斗の前に出す。

一刀
「今の俺はハンクだ！死神ハンクだ！」

すると右側の扉が開き、劉備ガンダムと曹操ガンダムが現れる。

劉備ガンダム
「零斗！ここは俺に行かせてくれ！」

零斗達は劉備ガンダムの方へ向く。

零斗
「あれ？先生どうしてここに？」

劉備ガンダム
「お前達だけ良いところを見せるわけには行かないだろ！？ここは主役である俺が・・・・」

零斗は劉備ガンダムを掴み、睨む。

零斗
「じゃあ行ってこぉーーーーーい！！！！！」

零斗は劉備ガンダムを殴り飛ばし、二つ目の扉に激突し、開いて入った。

劉備ガンダム
「うぅ、帰ったら特別指導だ！！！！」

目の前には、眼鏡をかけており、二つの剣を持った少女、沙和がいた。

劉備ガンダム
「お前誰だよ」

沙和
「曹魏五人衆が一人、沙和なの～」

劉備ガンダム
「そんな装備で、俺に勝てると思ってるのか？」

沙和
「沙和をバカにしちゃダメなの～」

劉備ガンダム
「だったらかかって来いよぉ！来いよぉーーーーー！！！！」

劉備ガンダムと沙和の戦いはご想像にお任せします。

零斗達は・・・・

零斗
「ほい、スリーカード」

一刀
「畜生、また負けた」

零斗と一刀はポーカーをしており、フランケンとアリスは昼寝をしている。

因みにラルクは天井に刺さったままである。

千歌音は天井に刺さっているラルクを抜こうとしている。

扉が開き、零斗と一刀はそこに向く。

現れたのはボコボコにされた劉備ガンダムである。

劉備ガンダムの後ろには、ＵＺＩのマシンピストルを持った一刀と
１００ｔハンマーを持った零斗がいる。

その後、劉備ガンダムは「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！」
と叫んで神火鳳凰の外へ飛ばされたという。

二回戦

沙和ＶＳ劉備ガンダム

沙和の勝利。

零斗
「ったく、先生は空気は読まないんだな」

隣を見ると、曹操ガンダムがいなくなった。

零斗
「あれ？」

六つの扉に向くと、三つ目の扉が閉じる所だった。

零斗
「くっ！なんてこった！！！！」

曹操ガンダムはどうしてるかというと・・・・

曹操ガンダム
「余の相手は誰だ?」

目の前には、1つのショートケーキが置かれてた。

曹操ガンダム
(ふざけているのか?)

そして後を戻ろうとすると、フォークを持った璃々がいた。

璃々
「お腹空いた~」

そして曹操ガンダムはショートケーキを見る。

曹操ガンダム
(そうか!そういう事か!!!!)

そして懐から袋を取りだし、カレーパンを出す。

曹操ガンダム
(ショートケーキとカレーパンの勝負って事か!)

璃々はカレーパンの所へ向き、歩く。

曹操ガンダム
(来た!)

そしてどんどん近づいて来る。

曹操ガンダム
（この勝負、余がもらった！）

しかし、ショートケーキの方へ行ってしまい、曹操ガンダムは膝をつく。

三回戦

曹操ガンダムＶＳショートケーキ

ショートケーキの勝利。

零斗
「あーあ、早く一刀の出番来ないかな～」

一刀
「だよな～」

扉が開き、曹操ガンダムが出てくる。

曹操ガンダム
「余は負けてしまった！何がいけなかったんだ！」

しかし、零斗達は曹操ガンダムを無視している。

それでも曹操ガンダムは笑顔でいるが・・・・

曹操ガンダム
（無視された・・・・）

と寂しく心で呟く。

アリスは起き上がり、零斗の所へ向かう。

アリス
「零斗ぉ～」

零斗
「アリス、やっと起きたか」

一刀
「おい、まさか四つ目の扉をアリスに譲るなんて言わないよな？」

これを聞いた零斗は少し驚く。

零斗
「何で分かった！？」

一刀
「大体お前のパターンが分かるんだよ」

零斗
「まぁ良いだろ？デザートはお前って事でさ」

一刀
「面白いな。じゃあ負けたら五千円よこせ」

零斗
「上等だ」

そしてアリスは四つ目の扉を開き、入る。

零斗
「アリスが入ったぞ。四つ目の扉に」

一刀
「こっからが勝負だ」

零斗と一刀は火花を散らしたという。

アリスはどうしているかというと・・・・

アリス
「私の相手は誰かな?」

すると目の前には、頭に人形を乗せた少女、風が現れた。

風
「曹魏五人衆が一人、風なのです」

そしてアリスは二つの刀を取りだし、構える。

アリス
「何だか知らないけど!この勝負、私の勝ちだね!」

風
「・・・・」

アリス

「はぁーーーーーーーーーー！！！！」

アリスと風の戦いはご想像にお任せします。

四つ目の扉が開き、涙を流しているアリスが現れた。

アリス

「うぅ、零斗ぉ・・・・」

アリスは二つの刀を放り投げ、零斗に抱きつく。

アリス

「零斗ぉーーー！負けちゃったよぉ！負けちゃったよぉ！」

そして零斗はアリスを慰める。

四回戦

風ＶＳアリス

風の勝利。

一刀

「やれやれ、やっぱ俺が行くしかないのか」

零斗

「俺がいるだろう」

一刀

「お前は華琳の為にとっとけ」

零斗
「何でぇ？」

一刀
「よく考えろ、六つの扉の先に部屋があるだろ？カメラが全部設置されてるし、華琳に見られている。そしてお前が戦えば、動きを読まれてアウトだ」

零斗
「一刀、お前・・・・」

一刀はガスマスクを着け、ヘルメットを被る。

一刀
「言ったろ？今の俺はハンクだ」

そして一刀は、五つ目の扉を開き、入った。

一刀
「さて、俺の相手は誰だ？」

目の前には、黄色のキャミソールにミニスカ姿で鎖鎌を持ったロングヘアのエーリカ？がいた。

一刀
「お前、誰だ？」

？？？
「あたしの名は竜巻のジルバ、曹魏五人衆の一人さ」

一刀
「なるほど、竜巻という事は風を操るのか？」

ジルバ
「どうかな？まぁ試してみたけりゃどうぞ」

そして一刀は走りだし、ジルバに奇襲を掛けようとするが、かわされる。

ジルバは鎖鎌の鎖を投げ、一刀はそれを掴み、投げる。

しかし受け身をとられる。

一刀
「中々やるじゃねぇか」

ジルバ
「こう見えてもエーリカはあたしの子孫だからね」

一刀
「何っ！？じゃあお前、過去からか！？」

ジルバ
「そうとも言うね。鎖鎌真拳奥義！チェーン拘束！」

鎖鎌の鎖が一刀を捕らえ、動きを封じる。

一刀
「くっ！これは！？」

ジルバ
「あたしが風だけが使えると思ったら大間違いだよ！」

一刀
「なるほど、殺人術として葬り去った鎖鎌真拳か！」

ジルバ
「あたしだけだと思った？エーリカも使えるよ！」

一刀
「あの小悪魔娘が？どう見ても鎖鎌は合わないと思うんだけど！」

ジルバによって動きを封じられ、出す術がなくなった一刀であった。

第五十五話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（前編）（後書き）

次回！我流マイティ真拳の最終奥義が！

第五十六話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（後編）（前書き）

遂に一刀が・・・・

ルッキーニのファンの皆様は注意してください。

第五十六話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（後編）

ジルバの鎖鎌真拳により一刀は拘束され、成す術が無くなっていた。

ジルバ
「あはははは、そんな状態じゃ抜け出せないね。どうする？」

一刀
（これだけは使いたくなかったが、やるしかないか）

一刀は青いオーラを湧き出す。

ジルバ
「何？今更技を出すの？」

一刀
「我流マイティ真拳奥義！マイティ召喚！ハルトマン&

エーリカはジルバの方へ向くと、驚愕する。

エーリカ
「誰この人!?」

一刀
「お前の先祖だってさ」

エーリカ
「私の先祖!?」

ジルバが先祖だと聞き、エーリカは混乱する。

ルッキーニ
「ねぇねぇ、どうしてあたしとハルトマンを呼んだの?」

一刀
「あぁそうだった。この鎖を切って欲しいんだ」

エーリカとルッキーニは鎖を見る。

エーリカ
「この鎖、なんか硬そう・・・・」

一刀
「そうか、ならば自力で、うおぉーーーーーーーーー!!!!!」

そして己の力で鎖を破る。

ルッキーニ

「ウジャーーーーー！！！！」

エーリカ
「えぇーーー！？ってか最初から私とルッキーニ意味無くね！？」

ジルバは鎖鎌の鎖を回す。

ジルバ
「あっはははは。あたしの子孫を呼ぶとはねぇ～」

一刀
「俺が攻撃だけのバカだと思ったか？」

するとジルバ鎖を一刀達に向けて回す。

一刀
「おいおい、そんな物見せて。まさかそれで竜巻を起こすってわけじゃないよな？」

ジルバ
「当り！鎖鎌真拳奥義、竜巻台風！」

竜巻状の風が一刀達に向かい、直撃する。

一刀
「くっ！なんて風だ！」

この風を受けたエーリカは何かを思い出す。

エーリカ

「これ、シュトゥルムと同じ感じ・・・・まさか！」

ルッキーニ
「うじゃ～涼しい～」

隣では、浴衣姿になっているルッキーニがいた。

エーリカ
「何で浴衣姿！？」

風が止み、一刀は体勢を立て直す。

しかし、一刀の服に切れ目が出来る。

エーリカの服に多くの切れ目が出来ていた。

エーリカ
「さっきの風で・・・・・」

しかしルッキーニは何故か服に切れ目が無い。

エーリカ
「何で切れ目が無いの！？あんな風受けて切れ目無いとかおかしいって！」

一刀
「不条理ギャグだからね～この小説は」

エーリカ
「だからっておかしいよ！」

そしてジルバは再び鎖を回す。

ジルバ
「どう?あたしの鎖鎌真拳は」

一刀達はジルバの方へ向く。

一刀
「鎖鎌真拳・・・・こんな危険な真拳があると厄介だな。どうにかしないと」

そして真剣な表情にし、エーリカは驚愕したような顔になる。

エーリカ
(一刀、考えてる!これはもしかして・・・・・)

しかし、一刀はＰＳＰで『モンスターハンター３ｒｄ』をプレイしていた。

エーリカ
「考えた結果がこれぇーーーー!?どんな思考してんの!?」

ジルバ
「残念だねぇ。貴様らの命はこれまでだよ!」

鎖を回しながら走るジルバ、これを見たエーリカは恐怖のあまり足が動かない。

エーリカ

（このままじゃ、私達やられちゃうよ～！）

ジルバ
「あっはははははははは」

エーリカ
（それに私、固有魔法奪われてるし、どうしたら）

そう考えてるうちにジルバの鎌がエーリカに向かってくる。

エーリカ
（私、ここで死ぬの！？）

そう思いながら目を閉じる。

その時・・・・

？？？
「貴様、フラウに手を出すとは、どういう了見をしてるんだ！」

ジルバ
「何っ！？」

ルッキーニ
「うにゃ？」

一刀
「なんとか間に合ったな」

エーリカの前に、鎌を受け止めたバルクホルンがいた。

バルクホルンは鎌を投げ、ジルバは鎌を自分の所に持ってきて手に取る。

ジルバ
「お前、確かエーリカと同じストライクウィッチーズの・・・・ゲルトルート・バルクホルン！！！！」

バルクホルン
「貴様は一体誰だか知らんが、フラウに化けた偽物・・・・」

一刀
「おいおい　、そいつはエーリカの先祖だってさ」

バルクホルン
「何っ！？」

バルクホルンはジルバを見て、エーリカを見る。

バルクホルン
「何を訳のわからないことを」

一刀
「ほんとだよ。ジルバはエーリカの先祖だって言ってたからさ」

エーリカ
「トゥルーデ、一刀の言う通りだよ！あいつの鎖鎌で私のシュトゥルムと同じような風を起こしたんだよ！」

そしてバルクホルンは再びジルバを見る。

バルクホルン
「ただ鎖を回してるだけじゃないか！」

ジルバ
「ただ回してるだけだと思ったら怪我するよ！鎖鎌真拳奥義、竜巻台風！」

ジルバは鎖を回して風を起こす。

一刀
「ぐっ！またか！」

ジルバ
「あっはははははははは、泣け、喚け、そして叫べ！」

その風の中で、ルッキーニはバレリーナの姿で回っていた。

エーリカ
「何でバレリーナなのぉーーーーーー！？」

風がおさまり、一刀は無傷であるが、バルクホルンは・・・・

一刀
「なんとか助かったぜ」

一刀に盾にされ、ボロボロになっていた。

バルクホルン
（一刀、後で覚えていろ）

一刀
「解ったぜ、竜巻台風の攻略法を」

ジルバ
「どうやって?岩でも鋼鉄でも切れる技を攻略できるの?」

一刀
「竜巻の中であったその現象は、かまいたち現象という」

ルッキーニ
「かまいたちげんしょう?」

これを聞いて首をかしげるルッキーニ。

一刀
「刃物で切られたかのように皮膚がパックリ裂ける現象だ」

ジルバ
「よく知ってんじゃない。でもどうやって攻略するの?」

一刀
「それはなぁ・・・・」

そしてサバイバルナイフを取りだし、素早く走り、鎖をを切る。

ジルバ
「そ、そんな、あたしの鎖鎌をナイフで・・・・」

一刀

「それが弱点となるんだ、注意しな」

エーリカ
「よし！これでジルバの鎖鎌が無くなったし、鎖鎌真拳は使えない！」

するとジルバは、不適な笑みを浮かべる。

ジルバ
「バカだねぇあんた、鎖鎌が無くても鎖鎌真拳は使えるよ！鎖鎌真拳奥義、処刑鎌！」

右から十本の鎖鎌が一刀達に向かい、左からも鎖鎌が向かっていく。

一刀
「くっ、不味いぞ！これまともに喰らったら怪我だけじゃすまないぞ！」

そして・・・・

エーリカ　バルクホルン
「「ギャアーーーーーーーー！！！！」」

一刀
「危なかった」

ルッキーニ
「うじゅ～」

エーリカとバルクホルンは一刀とルッキーニに盾にされ、ボロボロ

になる。

一刀
「これで安心・・・・エーリカ！」

ルッキーニ
「危機一髪だった～・・・・うにゃーーーー！？」

エーリカとバルクホルンのボロボロな姿に驚く一刀とルッキーニ。

一刀
「ジルバ！よくも二人を・・・・」

ルッキーニ
「許さない！」

ジルバ
「お前らが盾代わりにしたんだろうが！！！！」

一刀
「まぁいいや。これでも喰らいな！我流マイティ真拳奥義、ワイヤー縛り！」

一刀の袖からワイヤーが出て、ジルバを拘束する。

ジルバ
「くっ！なんだこれは！？」

一刀
「今だルッキーニ！ボコボコにしろ！」

ルッキーニはジルバに向かって走り、腹に跳び蹴りをする。

ジルバ
「ガバッ！」

そして「クソがぁ！」と言って殴り、更に蹴ったり等の繰り返しで攻撃する。

一刀
「協力奥義！八つ当たりサンドバッグ！」

その頃、モニターで見ているフランケンは・・・・

フランケン
「えぇ！？ルッキーニちゃんまさかのキャラ崩壊！？」

数分後・・・・

ジルバ
「うぅ・・・・」

ルッキーニの八つ当たり？でボロボロになったジルバは、ぐったりしそうになっている。

ルッキーニ
「はぁ、はぁ、まだ足りねぇ」

これを聞いたエーリカは驚愕する。

エーリカ
「え!?ルッキーニってこんなキャラだっけ!?ってか以前のキャラはどうなったの!?」

ルッキーニがキャラ崩壊したことにツッコむエーリカであった。

ジルバ
「クソォお前らふざけやがって!」

一刀
「ほぉ、ボロボロになった状態でまだ力が残ってるとはな」

ジルバはボロボロになりながらも体勢を立て直し、腰に付いている鎖鎌を手に取る。

ジルバ
「鎖鎌真拳奥義!死神鎌!」

そして鎖鎌の鎌の刃に紫のオーラを纏わせながら振り回す。

一刀達は伏せたり跳んだりする。

ジルバ
「何で当たらないんだよぉーーーぶっ殺してやるぅーーーー!」

今のジルバは冷静を失っており、目の前の敵を殺す事しか考えていない。

一刀
「やっと本性を現したなジルバ。だがそれが仇となるぜ」

ジルバ
「うるせぇ！あたしは最強だぁーーーー！！！！」

周りの壁や床に切れ目が多くなり、一刀達は反撃する余地もない。

一刀
「どうやら妄想が入っちまったな。このままではジルバの身体と精神が危うくなる」

すると一刀は青いオーラを湧き出して構える。

一刀
「我流マイティ真拳奥義、魂のストレート！」

光っている右の拳で殴り飛ばし、ジルバは壁に叩きつけられた。

ジルバ
「お前ぇ、タダで済むと思ってんのか！？」

一刀
「さっきからよくもやってくれたな。今度はこっちの番だ、我流マイティ真拳奥義！大紅蓮斬！！！！」

炎で纏ったチョップでジルバを地面に叩きつける。

ジルバ
「クソ共の分際でぇーーーー！！！！」

一刀

「さて、そろそろデザートの時間だ」

そして構え、青いオーラを湧き出す。

一刀

「マイティ真拳、最終奥義！」

ジルバ

「ふざけるなぁーーー！」

後ろへ宙返りをし、壁に足をつける。

ジルバ

「鎖鎌真拳最終奥義！デスシュトゥルム！」

そして蹴り、身体を捻らせて黒い竜巻を自分自信に纏う。

しかし一刀は動かず、睨む。

するとワイヤーがジルバを縛る。

ジルバ

「なんだよこれ・・・・」

縛った後、自分の所へ引き、掴む。

そして天井を突き破って飛ぶ。

神火鳳凰より少し高いところで頭を下にかえる。

そしてそのまま甲板へ急降下していく。

一刀
「地獄一刀落としぃーーーーーー！！！！」

ジルバ
「やめろぉーーーーーー！！！！」

そして甲板に叩きつけられ、気絶する。

一刀
「貴様のような人の痛みを知らない奴は、小学校からやり直しだ！」

エーリカ　バルクホルン
「「それはこっちの台詞だぁーーーーーー！！！！」」

いつの間にかいたエーリカとバルクホルンに殴られる一刀であった。

その後、エーリカとバルクホルンとルッキーニは一刀の『ワープフラッシュ』により、加富根総合病院に戻ったという。

五回戦

竜巻のジルバＶＳ北郷一刀

北郷一刀の勝利

第五十六話　現れる！我流マイティ真拳の最終奥義（後編）（後書き）

次回、零斗ＶＳ華琳か！？

お楽しみに。

第五十七話　零斗と華琳、愛と欲望の因縁のバトル（前書き）

劉備ガンダムのファンの皆様は注意してください。

零斗

「今回で京都編は終わりだ。そして華琳と俺の過去が明らかに！？」

第五十七話　零斗と華琳、愛と欲望の因縁のバトル

神火鳳凰の指令室では・・・・

華琳
「今度は零斗達が勝ったのね」

一刀とジルバの戦いをモニターで見る華琳。

華琳
「でも、こちらは三勝よ。これで勝利は確定したわ」

すると凛と曹魏五人衆の一人、張遼ゲルググの方へ向く。

華琳
「三勝を祝して宴をあげるわよ！」

凛
「え！？宴ですか！？」

張遼ゲルググ
「やったー！！！！！」

そして三人は牛乳瓶の蓋を開け、乾杯をする。

華琳
「これで零斗達は手も足も出ないわね」

凛

「そうですね」

華琳は二つの牛乳瓶を持って「うったげ～だうったげ～だわ～いわい」と踊る。

牛乳が凛の胸に溢れてしまう。

華琳

「ごめん、溢しちゃった」

凛

「大丈夫ですよ～」

「うったげ～だうったげ～だわ～いわい」と華琳はコンピューターの上に乗って踊り、今度は足がモニターに当たってしまい、画面にひびが入る。

華琳はモニターを凛と張遼ゲルググに、「見て見て～はしゃぎ過ぎてモニターが壊れちゃった～」と見せる。

そして「うったげ～だうったげ～だわ～いわい」とコンピューターの上で逆立ちをし、側にあった赤いスイッチを押してまう。

「見て見て～はしゃぎ過ぎて神火鳳凰の墜落装置押しちゃった～」と言って凛と張遼ゲルググに見せる。

その時、神火鳳凰が斜めに傾く。

その頃、零斗達は・・・・

フランケン
「何だ！？」

零斗
「あーあ、癖が出たようだ」

と呑気に『ゾンビゲームＢＣ』を読んでいる零斗。

フランケン
「癖ぇ！？」

零斗
「華琳は何か良いことがあるとはしゃぐ癖があってな。多分この部屋にカメラが設置されている。それで見て、勝利に喜んでいるだろう」

フランケン
「だったらここ脱出しなきゃならないじゃないか！」

呑気にしている零斗にツッコむフランケンであった。

劉備ガンダム
「落ち着けぇ！今出来る事を考えろ！」

吹き飛ばされた筈の劉備ガンダムがいつの間にいた。

零斗
「くっ！」

劉備ガンダムに言われた通りに考える。

考えた結果、劉備ガンダムと零斗は『バイオハザード5』を二人プレイをしていた。

フランケン
「考えた事がそれぇ!?どういう思考してんだよ!?」

外では、神火鳳凰が段々落ちていく。

零斗
「こうなりゃこの部屋から出るしかねぇ!」

ラルク
「だが、出ると危ないかもしれないぞ!」

零斗
「一か八かだ!早く出るぞ!」

そして零斗達は闘士の部屋から出て脱出ポットを探す。

零斗
「くそぉ、脱出ポットが見当たらない!」

劉備ガンダム
「あったぜ!脱出ポット!」

そこにあったのは、さっき刺さっていた蒼龍だった。

フランケン
「それ、零斗が乗ってた乗り物!何でこんなところに!?」

ラルク
「何でも良い！さっさとこれ使って出るぞ！」

そして零斗は蒼龍を引っこ抜き、フランケン達を乗せて脱出した。

神火鳳凰は斜め下に落ちていき、そのまま森へ突っ込み、爆発する。

それを見る零斗達。

零斗
「・・・・・」

一刀
「・・・・終わったな」

零斗
「まだ終わっていない。華琳の気配が感じる」

その頃、華琳は・・・・

神火鳳凰の爆発から生き残ったが、凛と張遼ゲルググが気絶していた。

華琳
（はしゃぎ過ぎたわね）

そう思いながら、零斗達が来るのを待っていた。

一方、零斗達は・・・・

零斗
「これで俺達は三勝だな」

フランケン
「何で三勝なんだ?」

何故零斗達が三勝なのか、フランケンは首を傾げる。

零斗
「ほら、神火鳳凰が落ちて曹魏五人衆の最後の一人が巻き込まれただろ?それで俺達は三勝って訳だ」

フランケン
「あぁ、成る程・・・・」

その訳を聞いて納得する。

神火鳳凰の墜落地点に着き、目の前には華琳がいた。

華琳は零斗に睨み、紫のオーラを湧き出す。

零斗
「華琳、これで俺達が三勝だ。ここで決着を着けることを宣言しよう」

華琳
「いいわ、かかってきなさい」

零斗は白いオーラを湧き出し、華琳は死神鎌『絶』を持って構える。

零斗
「マイティ真拳奥義、巨大化！」

零斗の体がみるみる小さくなり、アリと同じサイズになった。

零斗
「どうだ！」

アリ
「でけぇ～」

しかし小さすぎたのか、華琳に蹴られ、元のサイズに戻る。

零斗
「ぐっ！」

華琳
「零斗ぉーーーー！覚悟！」

華琳は走りだし、零斗は構える。

しかし、劉備ガンダムと曹操ガンダムがバナナを食べており、皮を捨てる。

華琳は皮を踏んでしまい、転んだ。

零斗
「大丈夫か？」

華琳
「大じょう・・・・」

言う途中で零斗に蹴られ、転がる。

零斗
「大丈夫なのかぁーーーーー！！！！」

華琳はすぐさま立ち上がり、絶を構える。

しかし零斗は、右ストレートを華琳の喉元に寸止めする。

零斗
「優しさこそ、俺のすべて、だから俺は攻撃しない」

この時華琳は・・・・

猪
「このアホが！」

と猪に言われた気持ちだった。

零斗
「これで勝負は決まったな」

しかし、華琳は紫のオーラを湧き出し、零斗の地面から巨大な十字架が現れ、背中がくっつき、鎖で手足が縛られる。

零斗
「何だこれは！？」

華琳
「裏マイティ真拳奥義、拷問の十字架」

フランケン
「これって一体・・・・」

一刀
「この技は相手を十字架に縛り付け、拷問まがいの攻撃で肉体と精神に攻撃する技だ」

一刀は拷問の十字架について冷静に語る。

フランケン
「それじゃあ零斗が危ないじゃないか！」

一刀
「マイティ真拳の禁断技として封印されている」

零斗はなんとか外そうとするが、びくともしない。

絶が鞭になり、零斗に近付き、鞭で叩く。

華琳
「ははははは！さぁ私の憎しみと哀しみの鞭を味わいなさい！」

華琳は楽しんでいるかのように零斗を叩く。

アリスは口を抑え、フランケンは何かに恐れているような顔になる。

アリス
「いや、零斗ぉ」

フランケン
「このままだと、零斗は死んじまうぞ！」

一刀
「・・・・」

華琳に拷問されている零斗を見るフランケン達の後ろに、ゴミ箱が震える。

フランケン
「何だ？」

蓋が開き、零斗が出てきた。

零斗
「出てきたよ～」

フランケン
「えぇーーーーー！？」

有り得ない展開のあまり、驚く。

零斗
「いや～危なかったぁ～」

フランケン
「危なかった～じゃないよ！？どうやって出てきたの！？」

すると零斗は真剣な表情になる。

零斗
「教えてやるよ、マイティ真拳奥義、身代わりマジックで出てきたのさ」

フランケン
「身代わり!?誰が?」

フランケンは十字架を見ると、華琳が零斗のコスプレをした劉備ガンダムを鞭で叩いていた。

華琳
「あはははは!」

劉備ガンダム
「痛い!うおぉはぁ!」

フランケン
(先生が・・・・・)

これを見たフランケンは青ざめる。

零斗
「華琳、気が済んだか?」

華琳は振り向くと、零斗がいた。

そして零斗は「甘いんじゃボケぇーーーーー」とアッパーで十字架

と劉備ガンダムごと吹き飛ばす。

華琳
「ぐっ、あんた・・・・昔から変わって無いわね」

零斗
「お前も変わっていないな。その甘さ」

華琳は立ち上がり、絶を構える。

華琳
「だけど、忘れてないわよ。私達の過去を・・・・・・」

アリス
「私達の過去って・・・・・まさか零斗!?」

零斗
「ほぉ、まだ覚えてたんだな」

華琳
「私の心の傷は、そう簡単には消えないのよ・・・・・・」

ここから先は華琳と零斗の過去になります・・・・・

それは中学三年の時だった。

私は桜の木の下で零斗と出会ったの・・・・・・

零斗
「君、名前は?」

華琳
「か、華琳よ・・・・」

こうして私と零斗は、運命の糸に結ばれたの。

だけど卒業式で・・・・・

華琳
「何で!?何でなの!?」

零斗
「すまない、俺はお前とは終わりだ」

華琳
「何で終わりなの!?」

すると零斗は・・・・・・

零斗
「俺は・・・・お前と住む世界が違うから・・・・・」

これを聞いた私はショックのあまり、零斗に憎しみを持つようになった。

現在・・・・

華琳
「この憎しみ、私が忘れるわけが無いわ！」

涙を流し、紫のオーラを湧き出す。

零斗
「過去の事は忘れろ。もう終わった事なんだ」

すると華琳は「零斗、これを見なさい」と、切り傷がある右腕を零斗に見せる。

零斗
「あぁーーーその傷はぁーーーーー！！！！！」

傷を見た零斗は動揺する。

華琳
「今怪我した！」

十年前・・・・・・

山の頂上にある『マイティ道場』の前で、零斗と華琳がマイティ真拳でガジェットを破壊している。

そして二人は走り出し、ガジェットの攻撃をかわす。

零斗　華琳
「「マイティ真拳！！！」」

零斗はタイガーアッパーカットをし、華琳はサマーソルトキックでガジェットを倒す。

ガジェットの部品がバラバラに落ちてきて、零斗と華琳は着地する。

零斗
「やったー！！！全部倒したぁ～」

華琳
「全く子供ね、これくらい当然でしょ？」

子供のように喜ぶ零斗と大人びた感じを出している華琳。

？？？
「よくぞ頑張った！」

零斗と華琳は道場の扉のほうへ向くと、扉が開く。

そこに現れたのは・・・・・・

ヴェロッサ
「これで君達はマイティ真拳伝承者候補だ！」

ヴェロッサだった。

零斗
「伝承者！？わーい！わーい！」

華琳

（零斗ってホント子供ね、でも伝承者になれば、数々の修行が報われるわ）

ヴェロッサ
「では、百代目伝承者を決める！」

零斗は子供のように目を光らせ、華琳は真剣な表情をする。

ヴェロッサ
「伝承者は・・・・・・・・・・北郷零斗！」

零斗
「え！？」

華琳
（何ですって！？）

これを聞いた零斗と華琳は驚く。

零斗
「やった～！これで正義のヒーローになれるんだ～」

零斗は更に喜ぶ。

華琳
「師匠！納得いかないわ！どうして零斗なの！？」

ヴェロッサは真剣な表情になる。

ヴェロッサ

「覇王は伝承者には出来ない。お前は確かに修行をした。だが覇王だ、それだけだ」

この時華琳のプライドがズタズタになり、裏マイティ真拳の継承者になったきっかけでもあった。

現在

華琳
「私が覇王だから・・・・ヴェロッサ師匠は零斗を伝承者にしたのよ・・・・・」

零斗
「だったら技を出せよ、師匠が俺に伝承者にさせた理由を教えてやるよ！」

絶に紫のオーラが纏い、華琳は構える。

華琳
「裏マイティ真拳奥義！デスサイズカット！」

絶を振ると、むらさきの巨大なかまいたちが放たれ、

零斗
「マイティ真拳奥義、プラズマザンバーヒール」

零斗は右足を上げ、電気が零斗の足に纏う。

かまいたちが来るタイミングで強く踵で消し、電気が一直線で華琳に直撃し、「ギャアーーーーーー!!!」と叫び声がした。

零斗
「これで分かっただろう」

華琳
「ぐっ、さっぱり分からないわ」

零斗
「そうか、マイティ真拳超絶奥義!」

腰を低くし、両手首を合わせ、電気を集中させる。

零斗
「電撃聖自在波(マイティ)!!!!」

電気の気弾が放たれ、そのままスピードが上がる。

華琳
「裏マイティ真拳奥義!絶回転(デススピン)!!!」

絶を回し、電気の気弾が後ろへ弾かれる。

華琳
「まだまだ行くわよ!」

そして走り出し、絶を構える。

華琳
「裏マイティ真拳超絶奥義！デスサイズパーティ！」
分身するかの様に絶で零斗に攻撃を浴びせる。
零斗
「ぐっ！何て攻撃なんだ」
デスサイズパーティを喰らった零斗は多くの切り傷があったが、余裕そうな顔をしていた。
零斗
「だが、まだ物足りないぜ」
華琳
「じゃあ満足させてあげるわ！」
手のひらを前に出し、紫の気が前に出てくる。
華琳
「裏マイティ真拳最終奥義！デススターキャノン！！！」
紫の砲撃が放たれ、零斗を紫の光に包み込む。
アリス
「零斗ぉーーーーーーーーー！！！！！」
涙目になりながらアリスは叫ぶ。
フランケン

「おい・・・・・まさか・・・・・・・」

一刀
「・・・・・・」

砂煙が晴れると・・・・・・

零斗
「ふぅ～危なかったぜぇ～」

零斗はソウマを盾にして身を守っていた。

フランケン
「おいぃーーーーーーーー！！！！！」

思わず叫ぶフランケンであった。

零斗
「華琳よ、今こそ決着をつけるようじゃねか。劉備ガンダムを亡き者にした罪、償ってもらうぞ」

華琳
「たかが劉備ガンダムごときでガタガタ言ってるんじゃないわよ」

アリス
「頑張って～零斗ぉ～」

曹操ガンダム
「劉備の仇をとってくれぇ～」

離れたところでは、アリスは応援しており、曹操ガンダムは劉備ガンダムの遺影を持っていた。

その後ろでは劉備ガンダムが笑顔でいるが、「何これ？」と心の中で呟いたのであった。

零斗
「いくぞ！これがマイティ真拳だ！」

そして零斗は構え、白いオーラを湧き出す。

零斗
「マイティ真拳最終奥義！！！」

すると空間が網状に変わり、零斗は走り出す。

零斗
「超次元マイティ！！！！！」

零斗は昇竜拳、波動拳、サマーソルトキック、踵落としの順に攻撃し、地面に叩きつけられた華琳にスターライトブレイカーを放つ。

華琳
（これが・・・・マイティ真拳・・・・・私が完成出来なかった技をこんなに・・・・・・・）

着地に成功すると、元の空間に戻った。

零斗は気絶している華琳に近付く。

零斗
「華琳、お前は努力家だ。しかしそれが仇となり、力の使い方を間違ってしまう。覚えておけ」

こうして、金山四天王最後の一人、華琳を倒したのであった。

ラルクと千歌音はどうしてるかというと・・・・・・・

千歌音
「ラルク～」

ラルク
「・・・・・・」

既にヘリに乗っており、加冨根総合病院へ向かっている。

腕にしがみついている千歌音に汗を流すラルク。

その頃、零斗達は宿泊の旅館に帰り、ウェスカーと共にＢＳＡＡ学園へ戻った。

その翌日・・・・ウェスカーが丸坊主になっている事が、学園の話題となった。

第五十七話　零斗と華琳、愛と欲望の因縁のバトル（後書き）

次回はユーノとシャッハを中心とした話です。

零斗

「マジで!?エロとかあるの!?」

う～ん、どうかな？

第五十八話　ユーノの過去とシャッハの出会い、どんな？（前書き）

零斗
「俺たちも出てくるけどユーノとシャッハが中心だからな」

フランケン
「そして遂にユーノが・・・・・・」

第五十八話　ユーノの過去とシャッハの出会い、どんな？

ＢＳＡＡ学園の二年Ａ組にて…

壁に寄りかかり、本を読んでいる青年、ユーノがいた。

ユーノ
（金山四天王最後の一人がやられ、守る壁が薄くなった。これで金山企業が滅ぶのも時間の問題だ。だが鬼川君はどんな手を打つか分からない）

そう心で呟きながら教室を出た。

すると向こうから「ユーく～ん」とシャッハがユーノに飛び付いてくる。

因みにシャッハは原作とは異なり、無邪気で好奇心がある。

あだ名をつけるのが得意で、ユーノの彼女である。

シャッハ
「ユー君み～つけた」

ユーノ
「シャッハ、いきなり抱きついたら驚いちゃうだろ？」

シャッハ
「だってユー君、最近シャッハとエッチしてないも～ん」

ユーノ
「ふふふ、分かった。じゃあ今日の夜、相手になってあげる」

シャッハ
「ホント～約束だよ～」

ユーノとシャッハは恋人の様にラブラブになる。

すると零斗とフランケンがやってくる。

零斗
「よぉお二人さ～ん、仲が良いですね～」

ユーノ
「あぁ、零斗君」

零斗
「ベガのサイコパワーを受け継いだ少年は、シャッハには優しいんだな」

ユーノ
「まぁね、それより零斗君。京都行ってきたんだって？」

これを聞いた零斗とフランケンは、汗を流す。

零斗
「知ってたんだな？」

ユーノ
「気付いてないかもしれないけど、僕は零斗君の後をつけてたんだ

よ」

零斗
「じゃあ、俺達気付いてないって事か?」

ユーノ
「マイティ真拳伝承者が、僕の存在に気付くと思ってたのにな～」

これを聞いた零斗は少し落ち込む。

フランケン
「それより、ユーノはどんな過去を送ったんだ?それとシャッハとはどういう出会いだったの?」

ユーノは少し紳士っぽくなった。

ユーノ
「教えてあげるよ、僕の過去とシャッハとの出会いを!」

ユーノビジョン開始。

十年前、フランスの学校では成績優秀で、スポーツが万能な文武両道だった。

父は冒険家で母は絵本作家。

僕の父は帰ってくると冒険した事をいつも話し、お土産も持ってきてくれた。

実は僕の父は元陸上選手であったが、冒険に憧れて引退したという。

僕の母は絶世の美女で、優しくて冷酷だった。

そんなある日、小さかった僕は母の膝の上に乗っていた。

ユーノ
「母様～人間はどうやって生きるの～？」

ユーノ母
「それはね、何かを捨てて、何かを得る。これが人間の生き方よ」

ユーノ
「そうなんですか～じゃあ役に立たないものは捨てれば良いんですね」

ユーノ母
「そうよ、良く分かったわね～」

母からの教えによって、今の僕がいたんだ。

中学になった年では、父と母が死んでしまった。

僕は涙が枯れるまで泣いた。

しかし、僕は母の言葉を思い出し、泣き止んだ。

僕はこう誓った、『明るい世界にするために、悲しみは捨てる』と。

ユーノビジョン終了。

零斗
「うぅ、ううううぅ〜こりゃ感動するよなぁーーーーーー！！！！！」

フランケン
「ちょっと待て！それユーノの過去か！？」

滝の様に涙を流す零斗の隣では、フランケンがユーノにツッコむ。

ユーノ
「母の事、褒めないでくれよ、照れるじゃないか」

フランケン
「褒めてねぇし！」

シャッハ
「ユー君にそういう過去があったなんてぇ〜」

フランケン
「お前はどうして感動する！？ユーノの恋人だからか！？」

シャッハも涙を流しているのに対し、フランケンはツッコミを入れた。

ユーノ
「それでは、シャッハとの出会いを話してあげよう」

フランケン
「どうせロクな出会いじゃねぇだろうな」

ユーノビジョン再び開始。

中学時代の学校帰りの事だった。

僕の目に映ったのは、マンションの窓越しから少女が寂しそうに景色を見ていた様子だった。

その少女というのは、シャッハだった。

僕はシャッハの可愛さに惚れてしまった。

しかしシャッハは喘息という病気を持っており、療養の為に母親と暮らしている。

何故寂しそうな顔をしてるか?

それは母親が外出しちゃダメと言われているからだ。

翌日、僕は彼女のマンションへ行った。

ユーノ
「やぁ」

シャッハ
「あなたは誰?」

ユーノ
「僕はユーノ・スクライアだけど〜、君は?」

シャッハ
「シャッハはシャッハ・ヌエラだよ」

ユーノ
「良い名前だね」

シャッハ
「ありがとう、あなたも良い名前だよ」

ユーノ
「そ、そうかな～」

彼女と会話が弾み、僕は彼女のマンションへ通うようになった。
僕は彼女の為にデートに誘った。
街を歩き、買い物をしたり、公園に行ったりした。
そして喫茶店でゆっくりした。

シャッハ
「今日はありがとう、ユーノ君」

ユーノ
「気にしなくて良いよ、君が喜んでくれるならそれで良いんだ」

シャッハ
「ふふふ、ユーノ君って優しいね」

ユーノ
「僕は誰だって優しいんだ」

こうして僕は、シャッハとの新密度が上がった。

デートから数日、彼女の喘息は少しずつ治っていた。

ある日、一通のメールが来た。

そのメールは彼女からであり、『夜、公園に来て』と書いてあった。

『夜に?』と疑問を抱き始め、とりあえず夜になるのを待った。

夜になり、僕は彼女とデートした時の公園に行った。

公園に着き、彼女はいた。

ユーノ
「なんだい?」

シャッハ
「ユーノ君、来てくれたんだ」

シャッハ
「実はね、ユーノ君・・・・シャッハね・・・・・・ユーノ君の事・・・・好きになったの」

この言葉を聞いた瞬間、僕の胸が貫いたかのように驚いた。

ユーノ
「こんな僕でも、良いのかい?」

すると彼女は僕に抱きついてきた。

シャッハ
「だって、ユーノ君は病弱な私に笑顔にさせたから・・・・・シャッハは好きになったの」

ユーノ
「そうか、僕は君の事、ずっと前から好きだったんだ」

シャッハ
「ユーノ君」

ユーノ
「シャッハ・・・・・」

月の下で、僕と彼女の唇が重なった。

ユーノ
「ん／／／／／／／」

シャッハ
「ん／／／／／／／」

唇を離した後、彼女は服を脱ぎ始め、僕は顔を赤くして止めようとした。

ユーノ
「な、何をやってるんだい!?」

シャッハ
「シャッハの心と身体、全部ユーノ君にあげるよ」

ユーノ
「そそそそんな事をしたら、君の母親も悲しむと思うよ！？」

シャッハ
「ユーノ君、シャッハが好きなら、抱いて・・・・」

彼女にに押し倒され、ズボンを脱がされた。

シャッハ
「ユーノ君、大好き」

こうして僕と彼女は、月が光る夜を過ごした。

ユーノビジョン終了。

零斗
「なんというロマンチック！」

フランケン
「あれが！？ってか最後エロス的なのがあったよ！？」

ユーノ
「褒めないでくれよ、照れるじゃないか」

フランケン
「褒めてねぇよ！」

フランケンのツッコミを無視して零斗の方へ向いた。

ユーノ
「零斗君、金山四天王を全て倒したんだね」

零斗
「その通りだ」

ユーノ
「気をつけたほうが良いよ」

そしてユーノはシャッハを連れてどこかへ行った。

零斗
（気をつけたほうが良い、どういう事なんだ？）

放課後になり、ユーノとシャッハは一緒に下校していた。

シャッハは子猫のようにユーノの腕にしがみついている。

シャッハ
「ユーく～ん今日は何処に行くの～？」

ユーノ
「そうだな～」

ラブラブな雰囲気を出すユーノとシャッハ。

その時、ユーノとシャッハの目の前で落雷が落ちる。

シャッハ
「ほえ？」

ユーノ
（何で落雷が？・・・・まさか！？）

そしてユーノは、危険を感じたかのようにシャッハを突き飛ばす。

落雷が落ちてきた瞬間、サイコパワーで打ち消した。

シャッハ
「ユー君・・・・・」

ユーノ
「こんな事をするのって、どこの誰だい？」

物陰から出てきたのは、ツンツンした髪に、鬼と思わせる服装の男だった。

ユーノ
「君、誰だい？」

？？？
「俺は稲妻のカヅチ！ペリーヌの先祖じゃ！」

ユーノ
「ペリーヌ、あのペリーヌ・クロステルマンの先祖か」

カヅチ
「その通りじゃ。ユーノ、鬼川様の命により排除する！」

ユーノ

「鬼川か・・・・。シャッハ、どこかに隠れていて」

シャッハは言われた通りにし、物陰に隠れた。

ユーノ
「まずは君から来なよ」

カヅチ
「調子に乗るなよ小童めが！雷光！」

手からクナイ状の電気が放たれ、ユーノはそれをかわす。

ユーノ
「そんな程度かい？」

カヅチ
「ぐっ、ナメおって！」

カヅチは勢いに任せて電気を放つが、これもかわされ、ボディブローでやられる。

カヅチ
「ぐぅ・・・・」

苦しみながら腹を抑え、ユーノはその場に立っている。

ユーノ
「先祖だから強いと思ってたけど、そうじゃなかったみたいだな」

カヅチ

「ワシの本気を知らない奴は痛い目に遭うぞい」

カヅチは立ち上がり、右手から薙刀状の電気が出てくる。

ユーノ
「何だあれは!?」

カヅチ
「喰らうのじゃ!電光乱舞!!」

雷神の如く薙刀を駆使してユーノに切り裂く。

ユーノ
「うわぁーーーーーーーー!!!!!」

シャッハ
「ユーーーくぅーーーーん!!!!!」

カヅチにやられている姿を見て叫ぶシャッハだった。

ユーノは倒れ、カヅチは見下ろした。

シャッハ
「そんな、ユーノ君」

カヅチ
「小童め、思い知ったか」

シャッハは涙を流した。

？？？
「僕の本気を知らない奴は痛い目に遭うよ？」
後ろを振り向くと、無傷でいるユーノがいた。
カヅチ
「なっ！？あれは影武者というのか！？」
ユーノ
「その通り、今度は僕の番だよ」
右手から電気が放ち、鉤爪状の電気になった。
ユーノ
「サイコクロー！！！！」
素早く切り裂き、カヅチは「ゴファーーーーーーーーー」と吐血して倒れた。
ユーノ
「僕のサイコパワーにひれ伏すがいい」
その場を立ち去ろうとすると、カヅチは上体を起こそうとする。
カヅチ
「貴様は一体・・・・・・」
ユーノ
「ユーノ・スクライア、『青光のユーノ』と呼ばれている」

これを聞いたカヅチは気絶した。

シャッハは物陰から出てきて涙目になりながらユーノに抱きつく。

シャッハ
「ユー君！良かった、良かったよぉ～」

ユーノ
「ごめんねシャッハ」

シャッハ
「うわぁぁーーーん！！！」

ユーノ
（全く、鬼川はなんて厄介なモンを放つのかな？）

そう思いながら空を見上げた。

第五十八話　ユーノの過去とシャッハの出会い、どんな？（後書き）

次回は、残念組のソウマとレオンと朱里とクレアが革命を！？

そして零斗達の運命は・・・・・・

第五十九話　革命開始！？レオンのポンデー真拳教えちゃいます（笑）（前書き

零斗
「おぉっと！今回は朱里達が革命を起こそうとするぞぉーーーーー！！！！！！」

フランケン
「誰に？」

第五十九話　革命開始！？レオンのポンデー真拳教えちゃいます（笑）

【クラウザーの居酒屋】

レオンとソウマが落ち込みながら呑んでいた。

レオン
「はぁ～ホント報われないな・・・・」

ソウマ
「そうだな、俺達報われない組だな・・・・」

？？？
「そうね・・・・・」

隣で呑んでいるのは、クレア・レッドフィールドである。

彼女も落ち込んでいた。

クレア
「私なんて、兄さんは芳佳とサーニャに奪われた。

レオン
「俺なんて、張り込み捜査でドーナツ中毒になった挙句、金山企業の倉庫の
作業員二人にポンデー真拳を使ったんだぜ」

ソウマ
「そりゃそうだよな、有名な会社の所有物に手を出すと痛い目に合

うからな」

レオン
「でもその倉庫は銀山企業の倉庫だった。泣けるぜ」

ソウマ
「泣けるのはこっちだよ。俺なんて、零斗ヒロインズと姫宮と姫子に『残念男』って呼ばれた挙句、ライアンに姫子を奪っちゃうし、姫宮はライアンにフラグ建てちゃったし・・・・」

三人は同時にため息をついた。

クラウザーはこの空気に気まずいと感じた。

だが、その隣では、嫉妬と怒りが混ざったオーラを湧き出している少女がいた」

朱里
「皆さん、そんな事で報われると思うんですか？」

ソウマ
「朱里先生・・・・・」

朱里
「だったら革命を起こせば良いじゃないですか」

これを聞いたレオンとクレアとソウマは反応する。

レオン

「革命って先生、何に？」

朱里
「カップル共とハーレム男子共ににでしゅ！」

ソウマ
「カップル達と言えばアックスと朱愛、一刀と愛紗、ライアンと姫子、皇牙とエイラ。ハーレム男子共って零斗とラルクとクリスだよな」

朱里
「その通り！残念組の私達がそいつの等を残念組に蹴落とせば、クレアさんのお兄さんを取り戻せるし、姫子ちゃんと姫宮さんはソウマ君ににくっつくし、レオンさんはハーレム男間違いなしですよ！」

ソウマ
「ちょ、ちょっと待ってくれ、俺は別にそんな事を望んでも無いし、レオンとクレアだって・・・・」

しかし隣を見ると、レオンとクレアが怪しい笑みを浮かべていた。

レオン
「零斗の女共が俺の所にかぁ、それにこの小説の主人公にあがり、零斗が地味な地位に下がる。流石は朱里先生」

クレア
「あの害獣共から兄さんを取り戻せば、外伝のヒロインになれるって事ね」

レオンとクレアのとんでもない考えを丸出しにしている光景をクラ

ウザーとソウマはドン引きする」

朱里
「あとは私がアックスと朱愛さんをぶち壊し、愛紗さんから一刀君を奪えば私も報われるはわわ軍師に上がりましゅ！」

しかし、ソウマはこれ以上付き合ってられないと感じ、出ようとする。

朱里
「あれれ？良いんですか負け犬になって？」

ソウマ
「元から俺は負け犬なので・・・・」

朱里
「そうやって諦めるから姫子ちゃんはあなたに振り向かないんですよ。良いんですか？姫子ちゃんがライアン君に汚されても？」

これを聞いたソウマは、振り向き、朱里の元へ行く。

ソウマ
「分かったやるよ。姫子を、ムエタイ野郎から取り戻す！」

朱里
「その意気ですよ。じゃあ明日、会議をしましょう」

こうして、四人は革命する事を決意した後、居酒屋から出た。

しかし、そんな四人を哀れだと見るクラウザーだった。

翌日・・・・・・

零斗は自分の部屋でケータイのメールを見ていた。

零斗
「成る程、そういう事か」

メールを読んでいる途中で、下の階からクラウザーが呼ぶ声がした。

クラウザー
「おーい零斗～お前の友達が来たぞぉ～」

零斗
「あぁ～分かった。今行くぞ～」

ケータイを閉じ、下の階に下りる零斗。

裏口の扉を開くと、川崎がいた。

零斗
「川崎、久しぶりだな！」

川崎
「零斗君も久しぶりだね」

零斗
「信じてたんだぜ、お前の事！戻ってくるって！」

川崎

「あはは、ありがとう」

零斗は川崎を自分の部屋に入れ、ちゃぶ台とお茶を用意した。

川崎は金山企業の裏の活動、麻薬や兵器に関わっている事を零斗に話した。

零斗
「そうか、これでもう、金山企業を潰す事が出来るな」

川崎
「だけど、警備は厳重だし、下手に騒ぐと僕達が牢屋行きになる」

零斗
「そうかぁ～。それよりサスケとカルロは？」

川崎
「サスケは潜入調査が終わった後、故郷に帰った。因みに転校手続きは済んだらしい。
カルロは妹を救出してアメリカに行った」

零斗
「二人も大変だな。因みにサクヤは転校したぞ。美千子とな」

川崎
「サクヤ、転校したんだ」

川崎は少し寂しさを持ちながらお茶を飲む。

零斗

「金山四天王、最後の一人を倒した」

川崎
「え！？倒したのかい！？」

零斗
「あぁ、死神スカルだったが、正体は華琳だった」

川崎
「華琳かぁ～、裏マイティ真拳使いの」

零斗
「裏マイティ真拳はあってはならない武術。なんとか華琳に手を切るように言っといた」

川崎
「そっか～」

そして二人は、和むようにお茶を飲む。

川崎
「それと、面白い話だけど」

零斗
「何だ？」

零斗は興味があるように耳を傾ける。

川崎
「レオンとソウマと朱里とクレアが、革命を起こすらしい」

零斗
「何ぃーーーー！！！！」

レオン達が革命を起こすと聞いて驚く零斗。

零斗
「そんな、作業員を怪我させて国際警察をクビになったからって流石にそれは・・・・」

川崎
「いや、レオンは停職中だ。カップルとハーレムに革命を起こすそうだ」

零斗
「へぇ～ってかそれで革命起こされちゃ、こっちも黙ってられねぇよ」

川崎
「君はそう言うけど、フランケンは？」

零斗
「絶対に加担するだろうな、彼女いないから」

川崎
「でも、フランケン君が加担するとは思わないな」

零斗
「・・・・そうだな」

川崎
「とりあえず、外に出よっか」

零斗
「そうだな」

零斗と川崎は、クラウザーの居酒屋から出たのであった。

【ＢＳＡＡ学園男子寮】

？？？
「あぁ～今日も良い天気だな～」

背伸びしている青年は『起動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＡＳＴＲＡＹシリーズ』の『ロウ・ギュール』に似ていた。

？？？
「そういや最近、零斗が面倒な事に巻き込まれている噂を聞くな」

そう独り言を言っていると、ポケットからケータイの着信音が鳴る。

青年はケータイを取り出した。

？？？
「何だ？」

零斗
『おぉ五更木ロウさ～ん』

ロウ

「その声は零斗か。あと何でフルネーム？」

零斗
『そこはツッコんじゃダメですよ～それより面倒な事になったんですよ～』

ロウ
「面倒な事？」

零斗
『朱里先生とレオンとソウマとクレアが革命を起こすんですよ～俺等に」

これを聞いて呆れるロウ。

ロウ
「何だそれ」

零斗
『というわけで協力して欲しいんですよ～』

ロウ
「・・・分かったよ。じゃあ何すりゃ良い？」

零斗
「それはですねぇ～・・・・・」

【とある廃工場】

朱里

「これより、第一回『カップル＆ハーレム達に革命しましょう会議』を始めたいと思いましゅ」

そしてレオン達は拍手する。

朱里
「私達は革命しなければならない。そう、特にあの人達は・・・・」

レオン
「そうだな、だがどう革命するのか、考えた方が良いんじゃないか？」

これを聞いて朱里は「私の出番ですね」と怪しい笑みを浮かべる。

朱里
「それはですねぇ～、力だけでは零斗達には負けるでしょう。ここは頭を使った戦術を考えましょう」

クレア
「頭を使った戦術ねぇ～、それで策は？」

朱里
「うふふふ、まずはこの小説の主人公になりたいレオンさん、零斗君を相手になってあげてください」

レオン
「了解」

朱里
「クレアさんはクリスさんが入院している加冨根総合病院を襲撃し、

芳佳さんとサーニャさんを成敗してください」

クレア
「分かったわ」

朱里
「それとソウマさんはライアンさんを相手にすれば良いですよ」

ソウマ
「あぁ・・・」

そして朱里は、怪しい笑みを浮かべ、レオン達は外へ出た。

朱里
（その間に私は、一刀君用の惚れ薬を作りますねぇ～）

朱里は雛里から盗んだ『調合書』を取り出し、怪しい薬品を取り出した。

【新宿の公園】

零斗
「ここか？レオンが来るのは」

川崎
「そうなんだ、道端の花が言ってたからね」

零斗は川崎が指を指している方向を見ると、道端に花があった。

零斗

「ホントに来るのか？」

川崎

「僕は百花繚乱真拳の継承者だよ～花が嘘をつくわけが無い」

そして零斗は「へぇ～」と納得した。

その時・・・・・・

？？？

「見つけたぞ・・・・北郷零斗！」

現れたのは、二つのドーナツを持ち、首にドーナツをつけているレオンだった。

零斗

「へぇ～もしかしてレオン？」

レオン

「その通り、北郷零斗よ、貴様をサブキャラに蹴落とし、俺はこの小説の主人公になる！」

零斗

「やってみるもんならやってみろ、だがお前は負けるがな」

レオン

「・・・・負けるだと？ポンデー真拳を手に入れたこの俺が負けるだと本当かどうか、試してみるか？」

零斗

「上等だ、だったら受けて立つぜ！」

すると零斗は、川崎に止められる。

川崎
「ここは、金山企業の為に力を養えとけ、レオンは俺が相手になる」

零斗
「川崎・・・・・分かった」

川崎
「さぁレオン・S・ケネディ！俺の百花繚乱真拳の真髄を見せてやる！」

そして川崎は緑色のオーラを湧き出し、レオンは黄色のオーラを湧き出す。

川崎
「行くぞ！百花繚乱真拳奥義！」

ポケットから種を取り出し、地面に叩きつけ、種は芽を出し、更にのびて花が咲いた。

川崎
「花の痺れ花粉！」

花は花粉をレオンに撒き散らす。

レオン
「甘いな、ポンデー真拳奥義！ドーナツタイフーン！」

二つのドーナツを持ちながら回転し、花粉を別の方向へ飛ばした。

川崎
「何っ！？」

レオン
「これがポンデー真拳だ！さぁ、喰らうがいい！」

ポケットからドーナツを取り出し、花に投げる。

すると花はドーナツに切られる。

川崎
「う、嘘だろ！？」

レオン
「ポンデー真拳奥義！ドーナツ手裏剣！」

零斗
「それ手裏剣って言うのか？」

レオン
「今度は俺の番だ！ポンデー真拳奥義！」

そして導火線付きのドーナツを投げ、川崎に直撃し、爆発した。

川崎
「うわぁーーー！！！！」

レオン
「ドーナツ爆弾！」

これを見た零斗は、少し驚く。

零斗
「うわぁ～すげぇ」

川崎
「うぅ、不覚」

レオン
「とどめだ・・・・」

レオンは素早く走り出し、川崎のほうへ向かって行く。

川崎
「何だ！？」

レオン
「ははははははは！！！！」

背景には、幼少期から現在までのレオンのアルバムが映り、川崎はレオンにドーナツで吹き飛ばされる。

川崎
「うわぁーーーーーー！！！！！」

レオン
「ポンデー真拳奥義、思い出ドーナッツ！」

吹き飛ばされた川崎は、池に落ちた。

零斗
「やるじゃねぇか。じゃあ今度はマイティ真拳の真髄を見せてやる」

レオン
「言ってくれるじゃねぇか、この小説の主人公にふさわしいのは、誰か決めようぜ」

零斗とレオンは、互いに構えた。

そして朱里に『調合書』を盗まれた雛里は・・・・・

雛里
「朱里ちゃんったら～幾ら一刀君が欲しいからって革命を起こすなんて～」

朱里が革命を起こすと聞いて呆れ、箒に乗って上空から朱里を探していた。

雛里
「見つけたら怖～いお仕置きしないとね～」

朱里をお仕置きする想像して怪しい笑みを浮かべる雛里だった。

第五十九話　革命開始！？レオンのポンデー真拳教えちゃいます（笑）（後書き

次回、加冨根総合病院を襲撃しようとするクレア、しかし彼女の前にロウが登場し、女王様姿で勝負に挑む！

一方レオンと零斗は、互いに真拳をぶつけあっていた・・・・

零斗

「次回もよろしくな！」

第六十話　革命終了！そして殴り込みへ・・・・・（前書き）

零斗
「朱里と雛里が物凄くぶっ壊れてますのでファンの皆様、ご注意ください」

フランケン
「なんか、俺のツッコミが無いような・・・・・」

第六十話　革命終了！そして殴り込みへ・・・・・・

【加冨根総合病院前】

そこには、女王様姿になったクレアがいた。

クレア
「ふふふふ、兄さ～ん。私があの害獣共から救ってあげますねぇ～」

そう呟きながらゆっくりと歩くが・・・・・・

クレア
「ギャアアアアア！！！！」

突然、穴に落ちてしまい、穴の前には、一人の男が立っていた。

クレア
「ぐ、誰よ！こんな穴を仕組んだ奴は！」

？？？
「俺だ」

クレア
「はぁ！？」

見上げると、地上にはロウがいた。

ロウ
「俺の名は五更木ロウ、零斗から連絡があってお前達を止めに来た」

クレア
「ぐっ！あのハーレム男！」

クレアはなんとか穴から這い上がり、ロウの前に立つ。

ロウ
「俺はＢＳＡＡ学園のＯＢであり、男子寮の寮長だ」

クレア
「寮長のあなたが、そんな事していいのかしら？」

ロウ
「理事長の頼みなんだ、さぁ始めようか」

クレア
「面白いじゃない」

手に持っている鞭で地面に叩き、ロウは構えた。

【新宿の公園】

レオンと零斗は、互いに構えていた。

因みに池に落ちた川崎はすぐに出て百花繚乱真拳で服を乾かしている。

零斗
「行くぜレオン、マイティ真拳の真髄を見せてやる」

レオン
「ふっ、お前のマイティ真拳など、この俺が壊してやる。そして俺がこの小説の主人公になる！」

そう宣言すると、零斗の後ろの向こうから、走ってくる音が響く。

走っているのは・・・・・

劉備ガンダム
「零斗ぉーーーーーそしてレオンーーーーーーーーーー！！！！！」

曹操ガンダム
「うおぉーーーーーーーー！！！！！」

劉備ガンダムと曹操ガンダムだった。

劉備ガンダム
「この小説の主人公は俺だぁーーーーーーーーーー！！！！！」

曹操ガンダム
「余のカレーパンを食えぇーーーーーーーーーー！！！！！」

二人は零斗に襲い掛かるが、頭を掴まれ、そして「譲れぇーーーーん」と零斗が叫んでレオンに向けて投げ、レオンは「ごふぅーーーーーー！！」と吹っ飛んだ。

零斗
「主人公の座は、誰にも譲れない」

レオン

「ぐ、どんだけ意地張ってんだよ！」

腹を抑えながら立ち上がり、呟くレオン。

零斗

「人は、譲れないものの為なら意地を張ってまで守るのさ。俺の譲れないものは主人公の座とハーレムだ！」

レオン

「だからお前、意地張ってたのか・・・・・」

零斗

「見せてやるぜ、俺のマイティ真拳をなぁ！」

そして零斗は構え、白いオーラを湧き出す。

零斗

「マイティ真拳奥義ぃ～！！！！！」

レオン

「ぐ、ならば俺も！」

レオンも構え、黄色いオーラを湧き出す。

レオン

「ポンデー真拳最終奥義ぃ～！」

そして零斗はレオンをアッパーし、左手に持っているマイクを添える。

零斗
「午後八時の遊びはカラオケボックスで！」

吹き飛ばされたレオンは、地面に叩きつけられ、泡を吹いて気絶した。

零斗
「さて、ここはもう終わったし、後はロウ先輩と雛里先生とライアン達かな」

すると零斗のケータイが鳴り出し、直ぐに開いた。

零斗
「ん？メール？」

そのメールの送り主は、エリオだった。

零斗
「エリオか・・・・・・よし、行こう」

川崎
「え？零斗君？」

零斗
「エリオは今、金山企業の港でユーノと合流したらしい、キャロは金山企業に潜伏成功した」

川崎
「それで、港に行くの？」

零斗
「あぁ。川崎、フランケン呼んで。あいつがいないとギャグが成立しないから」

川崎
「分かったよ」

川崎は仕方なくケータイを取り出し、フランケンを金山企業の港へ行くようにと電話をした。

【某遊園地】

ライアンと姫子は、遊園地でデートをしていた。

しかし、後ろでは物陰に隠れながら追っているソウマがいた。

ソウマ
（あいつがライアンか、姫子を寝取ったムエタイ野郎か！）

そしてソウマは走り出し、鉄パイプを振り上げた。

姫子
「ライアン君危ない！」

姫子は危険を察知し、ライアンを突き飛ばしてソウマに膝蹴りを喰らわせる。

喰らったソウマは、腹を抑えながら膝をつく。

これを見たライアンは、ソウマのほうへ向かう。

ライアン
「大神じゃないか、何してるんだよ？」

ソウマ
「ぐ、お前が姫子を寝取ったムエタイ野郎・・・・だな・・・・」

ライアン
「はぁ？寝取る？」

姫子
「違うよ！ライアン君は私をヤクザから助けてくれたの！それで一目ぼれして後から恋人になったの！」

ソウマ
「どうして・・・姫子、俺の所に来い。そいつは危険だぞ」

姫子
「危険なのは大神君だよ！」

ライアン
「ど、どういう事だ？」

ライアンは状況が全く分からず戸惑っている。

姫子
「ライアン君、大神君はライアン君を殺そうとしてたよ！」

ライアン
「え！？」

これを聞いてライアンは驚く。

ライアン
「大神、本当なのか？」

すると大神は鉄パイプを再び持った。

ソウマ
「あぁそうだよ、姫子をお前なんかに汚される前にお前を消すんだよ！」

これを聞いた姫子は・・・・・

姫子
「ごめんね大神君、私ライアン君とエッチしちゃった」

ソウマ
「何ぃ！？」

ソウマは鉄パイプを落とし、膝を地面につく。

姫子
「ライアン君は私の命の恩人であって肉体関係なの～」

ソウマ
「そんな・・・・・」

そして姫子はライアンの腕を掴み、ライアンと共にどこかへ行った。

ライアン
「あんな事言って良いのか？」

姫子
「だって大神君は残念さんだし報われない男だもん」

ソウマはショックのあまり、倒れてしまった。

その後、加冨根総合病院へ運ばれたという。

【加冨根総合病院前】

クレア
「うぅ・・・何でこうなるのよ・・・・」

ロウと戦い、クレアはボロボロになっていた。

ロウ
「俺の能力は、掌握（コンプレクシオー）だ」

クレア
「掌握（コンプレクシオー）！？」

ロウ
「あらゆる事象や空間を掌握する事が出来る能力。さっきお前がユーノのサイコクラッシャーを喰らったり、バナナの皮で転んだりしたのも、その能力だ」

クレア
「ぐっ、なんて能力を・・・・・」

ロウ
「だがこいつを使うとカロリーやエネルギーが消費するんだぜ」
これを聞いたクレアはにやける。
クレア
「ならばそれをカロリーとエネルギーが尽きるまで使わせるのみ！」
そしてクレアは突撃し、ロウはクレアを見る。
ロウ
「残念だが、決着は着いた」
すると空から大仏がクレアに降り、クレアは下敷きにされる。
ロウ
「もうこれで動けないな、助けがくるまで反省してろ」
クレア
「待ちなさいよぉ！これどかしなさいよぉーーーーーー！！！！！五更木ロウ！次会ったら絶対殺す！」
憎しみを抱きながら、ロウの背を見るクレアだった。
ロウはクレアから去った後、腹の鳴る音がした。
ロウ
（腹減ったな）

その後、ロウは男子寮に戻った。

【とある廃工場】

惚れ薬が完成した朱里は、隅の所で寝ている一刀に近付こうとしている。

朱里
（ふっふっふっふ、これで一刀君は私の物、そして愛紗さんと鈴々ちゃんと紫苑ちゃん達には悪いけど、一刀君は私の物に・・・・）

その時、後ろから「朱里ちゃ～ん」という声がし、後ろを振り向くと笑顔な雛里がいた。

だが、目は笑っていない。

朱里
「雛里ちゃん!?どうしてここが!?」

雛里
「朱里ちゃん忘れたの?私は魔術真拳の使い手だよ～?」

朱里
「まさか!?」

朱里は雛里が持っている水晶玉を見た。

雛里
「聞いたよ～レオンちゃんから、一刀君を睡眠薬で眠らせ、ここに運んだって～?」

雛里は隅の所で寝ている一刀を見る。

朱里
「レオン、あの裏切り者！」

雛里
「裏切り者もなにも、レオンちゃんはＢＳＡＡ学園の卒業生だもの～しかも私の子分よ」

すると朱里は、顔を下げる。

朱里
「雛里ちゃんには分からないよ、一刀君が愛紗さんに奪われた悔しさ、そしてイチャイチャするカップル達に対しての嫉妬を・・・・・。私だって一刀君とイチャイチャしたかった！でも一刀さんと愛紗さんがイチャイチャしてる所を見ると嫉妬したくなるの！」

そして惚れ薬を懐にしまい、サバイバルナイフを取り出し、雛里に向ける。

朱里
「一刀君と雛里ちゃんを殺して私も死ぬ！」

これを聞いた雛里は、朱里にビンタする。

朱里は驚いたような顔をし、雛里は真剣な顔をする。

雛里
「私も、朱里ちゃんと同じように愛紗ちゃんを嫉妬してた、でもそ

れは間違いだった。私は思ったの、その人の幸せならば良い、もしその人が躓いたら、手を差し伸べて手助けするの」

朱里
「でも、嫉妬し続けた私には出来ない・・・・・出来ないよ！」

そして雛里は、両手を開く。

雛里
「嫉妬から足を洗えばきっと出来るよ。私が保証する」

朱里
「雛里ちゃん・・・・・雛里ちゃーーーん！！！！」

雛里
「朱里ちゃ～ん」

そして朱里は、雛里に向かって走る。

朱里
「雛里ちゃーーーん！！」

が、雛里は「甘えちゃダメぇーーー！！！」とステッキで朱里を後ろに吹き飛ばす。

そして朱里は地面に落ちる。

雛里
「全く、私の調合書を盗むなんて～これはすっごく大事なんだから」

朱里が持っていた調合書を拾い、懐にしまった。

すると雛里の帽子からケータイの着信音が流れ、帽子は蓋の様に開き、雛里はケータイを取り出した。

雛里

「はぁい天才魔女っ娘。ヒナリンで～す☆あら零斗ちゃ～ん・・・・・そう、分かったわ。一刀ちゃんを送り込むから待っててて」

電話を切った後、帽子にしまい、閉じた。

すると一刀が起き、背伸びした。

一刀

「う～んここは、それに何で俺ここで・・・・」

地面を見ると、魔法陣が刻まれていた。

一刀

「何だ？」

雛里

「そこから動かないで」

一刀は雛里のほうへ向くと、少し驚く。

一刀

「先生、どうして・・・・・」

雛里

「説明してる暇は無いわ、あなたを金山企業の港へ送るわ」

すると魔法陣が光だした。

雛里

「一刀ちゃん、最終決戦が見えてきたわ。向こうに送られた以上、戻る事は無いと思って」

これを聞いた一刀は頷く。

雛里

「魔術真拳奥義！魔術転送！」

魔法陣の光に包まれた一刀は、そのまま消えた。

雛里は朱里を見る。

雛里

「さぁて、朱里ちゃんを爆発王さんの所の進鵺さん達の所へ送ろっと」

朱里を地面に書いてある魔法陣まで運び、魔術転送で進鵺達のアジトへ送られたという。

【金山企業の港】

エリオ、ユーノ、川崎、フランケン、一刀、皇牙が合流した。

しかし、零斗だけ来ていない。

皇牙
「零斗が来てないようだが・・・・」

フランケン
「そういえば零斗がいない！」

二人は零斗がいない事に少し慌てるが、ユーノは冷静である。

ユーノ
「愛する者に、挨拶に行ったんじゃないか？」

フランケン
「愛する者？まさか零斗ヒロインズ！？」

ユーノ
「やっと分かったか。僕もしてきたよ」

回想

【ユーノの家の前】

シャッハ
「ユー君、ホントに行っちゃうの？」

ユーノ
「あの会社はあってはならないものだ。手遅れになる前に」

シャッハは暗い表情になるが、ユーノに抱き寄せられる。

ユーノ

「大丈夫、僕は死なない。だから、戻ってくるまで待って欲しい」

シャッハ
「ユーノ君・・・・・戻ってきてね」

そして二人は顔を合わせ、唇を重ねた。

現在

ユーノ
（待っててねシャッハ、僕はいや、僕達があの会社を潰す！）

隣では、ケータイでメールを書いている皇牙がいた。

皇牙
（送信と、エイラ。絶対に戻ってくっから。待ってな！）

【零斗の玄関前】

零斗は金山企業に殴り込みに行く事をアリス達に話すが、アリス達は零斗の胸で泣いていた。

アリス
「零斗！行っちゃダメ！あの会社に行ったら死ぬかもしれないんだよ！？」

夕化
「あたいは行かせられない！零斗が戻ってこなかったら怖くてたまらねぇよ！」

コロナ
「零斗がいない人生なんて耐えられないわよ！もし死んだらあたし、死んじゃうから！」

ネココ
「行っちゃいやにゃーの！ネココは零斗が好きにゃーの！」

泣き止まないアリス達にキスで泣き止ませ、抱き寄せる。

零斗
「大丈夫だ、信じてくれる限り、俺は死なない。俺の事、信じてくれるよな？」

零斗の問いに頷くアリス達。

アリス
「帰ってきてね、零斗」

夕化
「あたいらは待ってるからさ」

コロナ
「戻ってきなさいよ！」

ネココ
「約束にゃーの！」

零斗は、アリス達に約束を交わした後、マイティ真拳奥義『スーパーワープ』で金山企業の港へ行った。

【金山企業の港】

フランケン
「あ、零斗が来た！」

フランケン達は後ろを振り向くと、零斗がいた事に驚く。

零斗
「悪ぃ、遅くなった」

一刀
「待ってたぜ」

皇牙
「よっ」

エリオ
「よく来たな」

ユーノ
「待ってたよ」

そして零斗達は、金山企業のビルを見上げる。

零斗
「さぁ、行こうぜ！」

零斗達は、そのまま金山企業のビルへ走った。

第六十話　革命終了！そして殴り込みへ・・・・・・（後書き）

次回、金山企業へ殴り込み！？

零斗

「これで外伝のほうはどうなるんだろ？」

第六十一話　誕生！竜巻少女呂布レイちゃん！？（前書き）

零斗
「今回は、最強の融合戦士が誕生するぞぉーーーーーーーー！！！！！」

皇牙
「最強か、どんな奴だろう？」

第六十一話　誕生！竜巻少女呂布レイちゃん！？

【ＢＳＡＡ学園　２年Ａ組】

雄真
「あれ？零斗達はどうしたんだ？それにユーノ達もいないぞ」

なのは
「ホントだね、遅刻かな？」

零斗達がいない事にざわめく教室。

ナツル
「きっとどこかで寄り道してんだろうな」

フェイト
「寄り道は有り得るかもしれないね・・・・・・」

なのは
「にゃはは～サボりだったら頭冷やさせよっかな？」

そう言って笑顔でレイジングハートを持つなのは。

フェイト
「なのは！それは不味いって！一話みたいにまたやられるよ！？」

なのは
「でも～今は一話でやられる私じゃないよ～」

これを聞いたフェイトは冷や汗を流す。

杏璃
「ていうかさ～最近あたし達の出番が無かったよね？」

春姫
「そうだった・・・・・」

及川
「ホントや、あの龍の骨の意地悪ちゃうか？」

準
「いじわるって・・・・・まぁ仕方無いじゃない、四天王を最後の一人を倒すまで・・・・」

三琴
「だからって、私達の出番が無いのはどうかと思うわ」

うぅ、すみません・・・・・

紅音
「でも、作者さんを責めるのは良くないと思うよ・・・」

レスター
「というか・・・・零斗達はどこ行ったんだろう」

その頃、零斗達は・・・・・・

零斗
「あれが金山企業のビルか・・・・でけぇな」

零斗達は、金山企業の門前の物影に隠れていた。

川崎
「警備員が二人いるな・・・・」

皇牙
「こうなりゃ俺が眠らし・・・・」

川崎は「待て」と皇牙を止める。

川崎
「今ここで動けば、捕まってアウトだ。ここは僕に任せて」

金山企業の門前では・・・・・

警備員
「ったく暇だな～。ずっと立ってんの」

警備員２
「そう言うなよ～俺は結構楽しいぜ」

警備員の二人は、話し合っていた。

警備員
「この会社さぁ～、黒い噂が耐えないってホントかなぁ～？」

警備員２
「黒い噂？」

警備員
「例えばさぁ～麻薬に関与していたり～、兵器を作ったりとか」

警備員２
「まさか、そんな筈はない」

警備員
「じゃあ、この噂はガセって・・・・何だか眠気が・・・」

警備員２
「俺も・・・・・・」

そして二人の警備員は、倒れてしまった。

物陰に隠れていた零斗達は、そのまま金山企業へ入るのであった。

眠っている警備員の足元には、白い花があった。

川崎が百花繚乱真拳で咲かせ、眠りの花粉で警備員を眠らせたのだ。

零斗達は入り口に向かって走る。

その時、入り口の前に一人の女性が立ちふさがり、零斗達は止まる。

皇牙はその女性を見て驚愕し、青ざめる。

皇牙
「あ・・・・あああああ・・・・・・・」

零斗

「どうした皇牙！」

？？？

「久しぶりね～皇牙君・・・・・」

零斗

「久しぶりだとぉ～？お前皇牙と知り合いなのか！？」

すると女性は近付く。

？？？

「私よ、真倉ロゼよ？」

皇牙を除く零斗達は「え！？」と言って皇牙を見る。

ロゼ

「あなたの真拳、忘れてはいないわ」

零斗

「お前が皇牙が言ってたロゼか、通してもらうぜ！」

ロゼ

「ふふふふ、それは出来ないわ。通して欲しければ、皇牙君をこっちに寄越しなさいよ」

皇牙

「はぁ！？」

ロゼの発言で皇牙は驚く。

零斗
「残念だが渡すつもりは無いんでねぇ～それに二週間ですぐに退職して、変だと思った。まさか金山企業の人間だったとは知らなかった」

ロゼ
「驚いたでしょ？でも一つ教えておくわ、私は雇われたエージェントであって、皇牙君の・・・・ふふふふ」

皇牙
「その笑いはやめてくれぇーーー！！！！！」

皇牙は叫び、零斗は構える。

零斗
「覚悟しな、女だからって手加減はしないぞ！」

皇牙
「待て！零斗、やめた方がいい！やられるぞ！」

皇牙は止めるが、零斗はそれを無視して白いオーラを湧き出す。

零斗
「さぁ行くぜ！マイティ真拳奥義・・・・・」

手で地面に突き刺し、大砲が出てくる。

零斗
「バカ大砲！」

零斗が大砲の紐を引くと、劉備ガンダムが「うわぁーーーー」と出てきてロゼに向かって行き、激突する。

零斗
「続いて発射ぁ！！！」

再び紐を引き、今度は曹操ガンダムと孫権ガンダムが出てきてロゼに激突する。

零斗
「これで最後だぁーーーーー！！！！」

そして今度は呂布トールギスが出てきてロゼに激突した。

攻撃を喰らったロゼは膝を落とす。

しかし、零斗はロゼの何かを感じた。

零斗
「ふ、皇牙がやめた方がいいという理由が分かったぜ」

ロゼは立ち上がり、顔を上げると・・・・・・

零斗
「やはりな、笑ってやがる」

そう、ロゼは顔を赤くして笑っていた。

零斗
「あれはマゾティック真拳だな」

フランケン
「マゾティック真拳？」

マゾティック真拳に首を傾げるフランケン。

呂布トールギス
「攻撃を受け、快感を糧に戦闘力をあげる真拳、あれはもうなくなってたと思ったのだが・・・・」

フランケン
「そうだったんだ、って何で呂布先生が知ってるの！？」

マゾティック真拳をしっている呂布トールギスにツッコミを入れるフランケン。

零斗
「面白くなって来たな。じゃあこの四人で攻撃をしたら・・・どうなるかなぁ？」

零斗は劉備ガンダム達を見る。

劉備ガンダム
「何だ？」

零斗
「つーわけで先生、あの女の人をやっつけてください。俺達では敵いませんので」

フランケン

「ほとんど戦ってねぇだろ!?」

零斗はフランケンのツッコミをスルーをした。

劉備ガンダム
「でも、攻撃したら戦闘力が・・・・・・」

零斗
「行けっつてんだろコノヤロー・・・・・・」

零斗は泣く子も黙るように睨み、劉備ガンダム達は震える。

そして自分の武器を取り出し、ロゼを見る。

劉備ガンダム
「うおぉーーーーー!!!!」

劉備ガンダムはロゼに向かって走る。

劉備ガンダム
「星龍斬!!!!」

やけくそになって涙を流しながら星龍斬をロゼにかました。

曹操ガンダム
「大紅蓮斬!!!!」

曹操ガンダムもやけくそになって大紅蓮斬を喰らわす。

孫権ガンダム

「猛虎獣烈覇！！！！」

孫権ガンダムもやけくそになって猛虎獣烈覇を喰らわせた。

呂布トールギス
「暴風激烈斬！！！！」

上空で発生させた竜巻を破塵戟で纏わせ、ロゼに向けて投げるが、竜巻は凄く小さく、ロゼの所まで消えた。

呂布トールギス
「あれ？おかしいなぁ～？今日は風弱いのかな～？」

零斗は「何やってんだテメェーーーー！！！」と呂布トールギスを殴り飛ばす。

呂布トールギス
「ごふぁーーー！！！！！」

三人の攻撃をまともに喰らったロゼは、いやらしく笑っている。

劉備ガンダム
「俺達の攻撃でも倒れないなんて・・・・・」

曹操ガンダム
「なんて女だ！」

孫権ガンダム
「しぶとい・・・・・・」

ロゼ
「マゾティック真拳奥義、マゾカウンター！！！！」

三つの鏡が地面から出てきて、鏡から劉備ガンダム達が現れる。

劉備ガンダム
「あばーーーー！！！！」

星龍斬を喰らう劉備ガンダム。

曹操ガンダム
「ギャアーーーーーー熱いぃーーーーーー！！！！！」

大紅蓮斬を喰らう曹操ガンダム。

孫権ガンダム
「アァーーーーーーーー！！！！！」

猛虎獣烈覇を喰らう孫権ガンダムであった。

零斗
「マゾティック真拳、恐ろしいな」

その隣では、ボロボロになっている劉備ガンダム達であった。

ロゼ
「ふふふ、切り札は最後までとっておくものなのよ、零斗君」

零斗
「バカか？切り札はまだ無くなったわけじゃないぞ」

ロゼ
「あら、悪あがきかしら？」

零斗はロゼの攻撃を喰らっていない呂布トールギスを見る。

ロゼも呂布トールギスを見て驚く。

零斗
「残念ながら、呂布先生はロゼには攻撃してません。つまり・・・・・
呂布先生の技はマゾカウンターとして使えないって事です～」

これを聞いたロゼは、怒りを露にする。

皇牙
「まさか、マゾティック真拳の技を見破るとは・・・・・」

フランケン
「そうかなぁ～？」

エリオ
「・・・・流石だ・・・・・」

ユーノ
「見直したよ、零斗君」

零斗を見てそれぞれ反応を見せる皇牙達であった。

零斗
「よし！こうなりゃ零斗フュージョンで、マゾティック真拳を超え

る融合戦士を生み出す！」

零斗フュージョンと言ったとたん、劉備ガンダム達は起き上がり、零斗に向かって走るが、呂布トールギスが立ちふさがり、誰がフュージョンするかを殴りあった。

これを見た零斗は少し呆れる。

零斗
「おいおい、喧嘩すんじゃねぇよ。順番だろぉ～？」

煙が晴れ、立っているのは呂布トールギスだった。

呂布トールギス
「零斗ぉーーーー！！！！！フュージョンだぁーーーーーーーー！！！！！！！！！！」

零斗
「はぁ～いいらっしゃいませぇ～」

そして呂布トールギスは零斗のコートの中に入り、光り出す。

【零斗のコートの中】

呂布トールギスはうまく着地した。

呂布トールギス
「ここが零斗のコートの中か、ん？」

呂布トールギスが向いた先には、『融合』と書かれてある扉だった。

呂布トールギス
「あの部屋に入れば、融合できるんだな」

『融合』と書かれてある扉を開き、中に入った。

【金山企業の入り口前】

零斗
「うおぉーーーーーーーマイティ真拳超絶奥義ぃーーー零斗フュージョン！！！！！！！」

叫びと共に光に包まれた。

フランケン
（マゾティック真拳を超える融合戦士・・・まさか！？最強の融合戦士か！？）

光が晴れると、髪型と顔立ちは恋に似ており、玄武装呂布トールギスをセーラー服にしたような衣装を着た少女である。

少女
「融合完了～♪」

フランケン
「女になったぁーーーーーーーーー！！！！」

零斗と呂布トールギスが融合した姿が少女であることでフランケンは思わず叫ぶ。

皇牙
「お前誰だよ!?」

皇牙は少女に尋ねる。

少女
「私の名前は呂布レイだよ～」

フランケン
「呂布レイ!?」

呂布レイ
「この姿でいられるのは五分が限界なの」

フランケンは呂布レイを見て膝を落とす。

フランケン
「なんて事だ、最強だと思ったのに・・・・・」

ロゼ
「ははははは!これが私の真拳を超える融合戦士ですって?笑わせないで!私の真拳を超えるものなど無いわ!」

呂布レイ
「いや、あるよ。自分を信じてる限り!」

呂布レイは白いオーラを湧き出し、ロゼはピンク色のオーラを出すのであった。

第六十一話　誕生！竜巻少女呂布レイちゃん！？（後書き）

呂布レイ

イメージＣＶ　喜多村英梨（魔法少女まどか☆マギカ　美樹さやか）

容姿　髪型、顔立ちが恋に似ており、玄武装呂布トールギスをセーラー服にした衣装を着ている。

武器　武器は持たないが、腰に魔術書らしき本がある。

零斗と呂布トールギスが融合した姿。この姿でいられるのは五分が限界。恋とは反対に、明るくよく喋るが、天然な所がある。胸は愛紗並に大きい。竜巻を操る魔法を持ってるらしい。ある意味最強の融合戦士

呂布レイ

「これが私の設定だよ～次回は私が活躍しちゃうよ！」

フランケン

「・・・・・」

第六十二話　呂布レイＶＳロゼ！コンボ武器作って反撃開始！？（前書き）

零斗
「今回はデッドラ2ネタがでるぞ～」

フランケン
「コンボ武器だね・・・・俺はツッコミ役で疲れる・・・・・・」

第六十二話　呂布レイＶＳロゼ！コンボ武器作って反撃開始！？

【金山企業入り口前】

白いオーラを出している呂布レイとピンク色のオーラを出しているロゼがいた。

その時、劉備ガンダムは後ろから呂布レイに話しかける。

劉備ガンダム
「あの～失礼ですが、あなたの特技は一体なんでしょうか？」

劉備ガンダムの尋ねに呂布レイは振り向き、考える。

呂布レイ
「特技はね～・・・・魔法です！」

これを聞いたフランケン達は、疑うような目で呂布レイを見る。

呂布レイ
「なぁ～に？その信じないような目をして～よく見てね！私の魔法は最強なんだから！」

手を横に振り、呂布レイとロゼの間に竜巻が起きる。

呂布レイ
「いや～ん！見えちゃう～！！」

竜巻の風でパンツが見えそうになった所でスカートを抑える。

これを見たフランケン達は不安を抱く、一人を除いて。

孫権ガンダム
（な、何だ?胸が熱い・・・もしかして俺は呂布レイの事を・・・・・）

ロゼ
「何かと思えば、ただ竜巻を起こしただけじゃない。それで私に勝とうなんて、笑わせるわ」

呂布レイ
「むぅ～!バカにしないで!」

頬を膨らまして少し怒り、腰に付いている魔術書らしき本を取り出す。

呂布レイ
「こうなったら、地上最強!天下無双の呪文でやっつけるんだからぁ～!!!」

呂布レイは本を開き、呪文を読もうとするが・・・・・

呂布レイ
「・・・・・・」

呪文のところで動きを止め、周りは沈黙な空気になる。

ロゼ
「どうしたの?その地上最強やらの呪文でやっつけるんじゃないの

かしら？私に」

そしてフランケンは、「どうしたの？」と呂布レイに尋ねる。

呂布レイ
「・・・めないの」

フランケン
「え？」

呂布レイ
「呪文の文字が分からなくて読めないのぉーーーーー！！！！」

全員（ロゼを除いて）
「エェーーーーーーーーーーーーー！！！！！」

呂布レイの抜けた発言により、ロゼを除いて全員は驚く。

ロゼ
「バカね！最強な呪文さえ読めないなんて、最弱な戦士よ！！！」

そう言ってロゼは走り出し、フランケン達はそこに向いた。

フランケン
「不味い！ロゼが来る！」

ユーノ
「この姿でも零斗君なんだ！守るんだ！」

そしてユーノとエリオは呂布レイの前に出る。

ロゼ
「おーっほほほほほ！終わらせてあげるわ！マゾティック真拳奥義！ドMビーム！」

ロゼの目が光り、ピンク色のビームが放たれ、ユーノとエリオは吹き飛ばされる。

エリオ
「うわぁーーーー！！！！！」

ユーノ
「ぐっ！」

その時、エリオは翼を広げた。

エリオ
「イカロス真拳奥義！銀翼の羽！！！」

翼を動かし、銀色の羽を降り注ぎロゼはかわそうとするが、当たってしまう。

ロゼ
「くっ！イカロス真拳の坊や、やるじゃない！」

エリオ
「イカロス真拳を、甘く見てもらっては困るからな」

その時、ユーノの顔が赤くなり、エリオも顔が赤くなる。

ユーノ
「な、何これ・・・・身体が熱い・・・・何だかいたぶって欲しい気持ちに・・・・」

エリオ
「くっ、俺もだ・・・・き、キャロ・・・俺を・・・・」

フランケン
「え!?どうなってんの!?」

ユーノとエリオの様子のおかしさに、フランケンは驚く。

ロゼ
「おーほほほほほほ、その子達は私のドMビームを喰らったの」

フランケン
「ドMビーム!?」

ロゼ
「そう、そのビームを喰らった者は、私を倒さない限りいたぶって欲しい気持ちが出てくるの。そして時間が経てばその気持ちはどんどんあふれていくの」

フランケン
「え!?」

これを聞いたフランケンは、青ざめ、一刀のほうへ向く。

フランケン
「一刀!お前にしか頼れない!何とかして・・・・」

一刀
「何～？」

一刀と劉備ガンダムと曹操ガンダムと孫権ガンダムは『ＤＥＡＤＲＩＳＩＮＧ２』をやっていた。

フランケン
「お前等遊んでないで助けろよ！」

一刀
「だってぇ～、呂布先生と零斗融合しちまったし～他にやる事無いから～遊んで時間潰そうと思ってさ～」

フランケン
「そんなんで金山企業に勝てないぞ！やる事無いなら探せよ！」

そして一刀は面倒臭そうに立ち上がる。

一刀
「我流マイティ真拳奥義～」

そして一刀達は工具箱のある机に行き、自分達の武器を置く。

フランケン
「えっとぉ～・・・探さないよりはマシか」

一方、呂布レイは呪文が分からない事に涙を流していた。

ロゼ

「ふふふふ、残念ね。呪文が分からず散っていくなんて・・・・ふふふふふふ」

そしてロゼは走り出し、呂布レイに向かっていく。

ロゼ
「これで、終わりよぉーーーーーーーー！！！！」

右手で突き刺すように構えるが・・・・・・・

呂布レイ
「呂布レイ・・・・チョー快かぁ～ん！！！！」

ロゼ
「ゴブァーーーーー！！！！！」

懐からトンファーを取り出し、ロゼを殴り飛ばした。

ロゼは受身を取り、呂布レイはトンファーを振り回す。

呂布レイ
「魔法が使えなくとも、武器で戦えば問題ない！」

ロゼ
「あんた魔法どうしたのよ！？腰に付いてる魔術書の意味ないじゃない！」

勢いで呂布レイにツッコミを入れるロゼであった。

そして「出来たぁーーーーーー！！！！」と一刀達の声が出てくる。

フランケン
「な、何が出来たの？」

一刀
「俺は、これを作った！」

一刀はガムテープで鉈をつけたデッキブラシだった。

フランケン
「デッキブラシと鉈かぁ～、どこかで見たことがあるような・・・・」

劉備ガンダム
「そして俺はこれだぁーーーー！！！」

劉備ガンダムは龍帝剣と爪龍刀をガムテープでつけたパドルだった。

フランケン
「すんごい武器が作られたぁーーー！！！！」

劉備ガンダムのコンボ武器を見て思わず叫んだ。

曹操ガンダム
「余はこれだ！」

チェーンソーにガムテープで七星剣とバッテリーをつけた武器だった。

フランケン

「おい！バッテリーは危ないだろ！！」

曹操ガンダムの武器の組み合わせにツッコミを入れる。

孫権ガンダム
「俺は・・・・これだよ！」

バッテリーと牙王剣に虎錠刀をガムテープでつけた車椅子だった。

孫権ガンダム
「名付けて、車椅子ツインソード！」

フランケン
「おいぃーーーーーー！！！ネーミングが！ネーミングが！しかも二つの剣をつけちゃったよ！」

孫権ガンダムの武器に、フランケンは思わず叫ぶ。

一刀
「よし皆行くぞぉーーー！！！」

劉備ガンダム達は「おぉーーーーー！！！」と叫びながらロゼに向かって突っ込んでいく。

一刀
「くらえ！」

デッキブラシの先端で叩きつけ、ロゼは劉備ガンダムへ飛んでいく。

フランケン

「あれ！？鉈はどうした！」

ついている鉈を使わない事にツッコミを入れる。

劉備ガンダム
「そらぁーーーー！！！！！」

パドルで曹操ガンダムに吹き飛ばす。

曹操ガンダムはチェーンソーで孫権ガンダムに吹き飛ばし、孫権ガンダムは呂布レイの前まで吹き飛ばす。

ロゼ
「ぐっ、バカなのこいつ等。攻撃されただけで戦闘力が増していくっていうのに・・・・・」

するとロゼは目の前では、呂布レイは火炎放射器と組み合わせたトンファーを持っていた。

呂布レイ
「私も作ってみたよ～」

ロゼ
「は？」

そして炎を放ち、ロゼは「ギャアーーーーーーーー熱いぃーーーーーー」と絶叫する。

五分後、ロゼは黒こげになった。

ロゼ
「こ、この娘ぇ～！」

呂布レイ
「全く～マゾで怒りんぼさんなんだからぁ～、穏やかに穏やかに～」

ロゼ
「出来るかぁーーーー！！！！」

呂布レイにマイペースさにツッコミを入れる。

その時、呂布レイは何か分かったかのように魔術書を取り出し、最初のページから読み始めた。

ロゼ
「な、なんなの！？」

十分後、呂布レイは最後の所まで読み終わった。

しかし、ため息をつく。

呂布レイ
「あたしって・・・・・ほんとバカ」

ロゼ
「コラァ！中の人ネタはやめなさい！」

中の人ネタをかます呂布レイにツッコミを入れるロゼ。

呂布レイ

「な～んちゃって・・・・・」

右手をあげ、手のひらから巨大な竜巻が出来る。

ロゼ
「た、竜巻!?」

呂布レイ
「残り三十秒、それが私のタイムリミットなの！マイティ真拳トルネード奥義!!!」

巨大な竜巻を地面に叩きつけ、ロゼは竜巻の中に吸い込まれる。

呂布レイ
「トルネード・ザ・ハート!!!」

竜巻の中では、ロゼは目を瞑っていた。

ロゼ
（私の真拳を超える融合戦士・・・まさかあったなんて・・・・・）

そう心に呟きながら竜巻の上に飛ばされ、海に落ちる。

呂布レイはフランケン達に振り向き、笑顔を見せると同時に、零斗と呂布トールギスに戻った。

零斗
「中々良かったぜ」

呂布トールギス

「そうだな」

零斗
「さて、さっさと金山企業に入ろうぜ」

呂布トールギス
「あぁ・・・・」

その時、呂布トールギスの肩に手が乗り、後ろを振り向くと、怒りを露にしている劉備ガンダム達だった。

融合できなかった恨みなのか、自分達で作った武器で袋叩きをする。

この光景を見たフランケンは少し引く。

エリオ
「これが、融合出来なかった者の嫉妬か・・・・・」

ユーノ
「そうだよエリオ君」

皇牙
「でもロゼを倒したから良いんじゃないか？」

フランケン
「お前等見てないで止めろよ！！」

止める気のない三人にツッコミを入れ、劉備ガンダム達を止めようとする。

会長室では、金山企業の入り口前の様子が写されているモニターを見ている鬼川がいた。

鬼川
「ふっふっふっふっふ。これは面白くなったねぇ～。果たして僕の所へ来れるかな？」

そう呟きながら紅茶を飲むのであった。

第六十二話　呂布レイＶＳロゼ！コンボ武器作って反撃開始！？（後書き）

零斗
「ロゼを倒し、金山企業に乗り込むぞぉーーーーー！！！！！」

フランケン
「そうだね！」

零斗
「所でさ～」

フランケン
「何？」

零斗
「お前はどんな武器を作るんだ？」

フランケン
「作らないよ、ってか作れない！」

読者の皆様は、どんなコンボ武器を作りますか？

第六十三話　地獄の社会見学開始!?俺は三日後に世界を統一する・・・のかもしれない

零斗
「今回はデッドラ2のキャラが出るぞ～」

フランケン
「どんな奴が出てくるんだろう・・・・・」

第六十三話　地獄の社会見学開始!?俺は三日後に世界を統一する・・・のかもしれない

ロゼを倒した零斗達は、金山企業に入ろうとするが・・・・

川崎
「零斗君、僕の役目はここまでだ」

零斗
「おいおいここまでって、どうしたんだ?」

川崎は零斗達に背を向ける。

川崎
「僕、転校するんだ」

零斗
「転校～?」

川崎
「皆にはちゃんとさよならをした、もうすぐ出発の時間だ」

これを聞いたフランケンは動揺する。

フランケン
「でも!川崎君抜きで戦うなんて・・・・・」

川崎
「安心しろ、僕の代わりを呼んでおいた。もう直ぐ来ると思うから」

空からヘリの音がし、零斗達は見上げる。

フランケン
「あれって・・・・・」

川崎
「だろ?じゃ、僕はこの辺で・・・・」

零斗
「・・・・行って来い。だがお前の事は忘れねぇぞ!」

川崎
「感謝するよ」

こうして、花びらが吹くと同時に川崎は消えていった。

ヘリからラルクが飛び、パラシュートを開き、着地する。

零斗
「ラルク、久しぶりだな」

ラルク
「久しぶりだな~零斗~」

零斗
「いや~最近来ないからさ~どうしたのかな~って」

ラルク
「い、いや~色々あってぇ~」

零斗の問いに青ざめながら答えるラルク。

零斗
「何があったんだ?まぁいいや」

そして金山企業の入り口に向く。

零斗
「さぁ行こうか・・・・地獄の社会見学によぉ!」

行こうとした時、銃を構えた黒服の男達に囲まれる。

零斗
「警備はロゼだけじゃなかったのかよ!」

ラルク
「うわぁ~、こりゃヤベーな」

すると皇牙は構える。

皇牙
「破天荒真拳奥義!大紅蓮噴火!」

赤くなった拳を地面に叩きつけ、黒服の男達の足元が赤くなり、炎が炎上し、黒服の男達は吹き飛ぶ。

火が収まり、金山企業のビルに入った。

零斗
「うわぁ~、誰もいないな~」

フランケン
「ホントだ、誰もいない」

ユーノ
「な～んか変だよね～」

ロビーには誰もいない事に不思議に感じる零斗達。

その時、目の前にあるモニターがつき、零斗達は反応する。

モニターに映し出されたのは、会長室にいる鬼川仁だった。

鬼川
『やぁ、真拳使い諸君。とツッコミ一人』

フランケン
「ツッコミ一人って・・・・・」

鬼川にツッコミ一人と言われ、少し落ち込む。

零斗
「お前か、金山企業の会長というのは・・・・」

鬼川
『その通りさ』

鬼川は怪しい笑みを浮かべ、零斗は青筋が浮かぶ。

零斗

「鬼川、俺達が来たのは・・・・・金山企業(ここ)を潰しに来た！こんな腐った薬と兵器を密売し、金に溺れた会社をな！」

鬼川
『腐った？酷いじゃないか～。腐ってるのは人間共だよ』

零斗
「人間が腐ってる！？」

鬼川
『そうさ。何でそういう理由か、最上階に来れば分かるよ。ただし・・・』

上から刀を持った男が降り、零斗達は少し離れる。

鬼川
『本当に来れたらね・・・・・』

男は刀を構える。

鬼川
『あ、こいつは魔剣士のゼロ。無口だけど坂本美緒の先祖だからね～』

ゼロが坂本美緒の先祖だと聞いて驚く零斗達。

鬼川
『しかも疾風真剣を使うから、君達が生き残れるかどうかだね～』

零斗

「疾風真剣か・・・・・面白いじゃねぇか。エリオ！お前のイカロス真拳の出番だぜ」

エリオ
「そのようだな、俺のイカロス真拳をこの場で使う時が来たな」

すると光の玉が現れ、エリオはそれを掴み、光の玉は白い剣イカロスブレードとなった。

エリオ
「・・・・・・」

ゼロ
「・・・・・・」

互いに剣を構え、動きを見せようとしない。

それを見守る零斗達。

零斗
「何だか・・・・時代劇にありそうな場面だな」

ユーノ
「エリオ君も面白い事をやってくれるね～。始めた瞬間が楽しみだよ」

零斗とユーノは始めた瞬間が楽しみみたいな事を言い、フランケンと皇牙とラルクは真剣に見る。

エリオ

「行くぞ・・・・・」

そして二人は同時に動き始め、消えていった。

これを見てラルクとフランケンは驚く。

ラルク
「おい！あいつら消えたぞ！消えたぞ！」

ラルクが慌てているが、零斗達は真剣に見ている。

零斗
「目では見えなくても、音なら聞えるぞ」

フランケン
「音って・・・・何も聞えないじゃないか」

それでも零斗達は動じない。

エリオとゼロが現れ、互いに切り傷が出来ていた。

ラルク
「おい！何があったんだよ！？」

ラルクにはエリオとゼロが消えたように見えなかったため、エどんな事をしてきたのか分からない状況である。

零斗
「ラルク、消えたんじゃなくて目にも止まらぬ速さで戦ってたんだぜ？」

ラルク
「そうなの！？」

目にも止まらぬ速さで戦っていた事を知り、驚く。

フランケン
「目にも止まらぬ速さか～、何か凄いね～」

そしてエリオは青いオーラを出し、イカロスブレードを構える。

エリオとゼロは再び動き出し、互いに剣を激しく打ち合う。

ゼロはエリオを押し返し、刀に紫のオーラを漂わせ、構える。

強く刀を横に振り、衝撃波を放ち、エリオはイカロスブレードを振り上げ、縦に斬るように衝撃波を消した。

自分の技を破られたかのような顔をするゼロ。

エリオ
「この程度か？お前の本気は・・・・・」

その時、宙に浮き始め、背中から白い翼が生え、光りだす。

ラルク
「な、何なんだ！？」

フランケン
「エリオの本気なのか！？」

エリオの姿を見て驚くフランケンとラルク。

そしてエリオはイカロスブレードに白いオーラを漂わせ、振り上げる。

エリオ
「イカロス真拳奥義！白き天使（エンジェル）！」

イカロスブレードをゼロに向け、白のビーム状の光線が放たれ、ゼロは光線に包み込まれる。

光線は壁にぶつかって消え、ゼロは張り付かれたかのように気絶した。

エリオ
「この程度か・・・・・」

イカロスブレードは消え、鬼川が移っているモニターに向ける。

鬼川
『良くやったね～。でも・・・・これで僕の所へ行けると思った？」

零斗
「何っ！？」

鬼川
『この会社はね？君達のような不法侵入者を僕から防ぐ為に、特別な鍵を隠してあるんだ』

零斗
「鍵ぃ～？」

鍵と聞いて零斗は首を傾げる。

鬼川
『そう、鍵さ。でも七つで、それを持っている真拳使いがいる。そいつらを倒せば鍵は手に入る』

ユーノ
「成る程、面白い事を考えてくれるねぇ～。鍵を持っている奴等を教えないのか？」

鬼川
『無いね。自分で探しな！僕は忙しいんでね～。じゃ、鍵を手に入れたら、また後で』

するとモニターが消える。

零斗
「真拳使いだって言ってたよな？」

フランケン
「どうするんだよ・・・・探すって言っても手がかりなきゃ意味がないよ！」

ラルク
「そんならあるぞ～」

零斗とフランケンは振り向くと、ラルクの隣に台車に乗ったストラ

イカーユニットとパンツァーファウスト3とミニガンを溶接やガムテープでつけたシーカーがあった。

フランケン
「何かすんごいよこれ!?」

ラルク
「こいつは全自動後方支援用兵器だ。いや～これつくんのに二時間掛かった～」

フランケン
「その兵器と手がかりどう関係があるの!?」

全自動後方支援用兵器を作ったラルクにフランケンはツッコミを入れる。

ラルク
「気にすんなって。まぁ、役に立つぜ。多分・・・・」

フランケン
(不安だぁーーーーーー!!!!)

ラルクを見て不安を抱く。

零斗
「よ～し、じゃあ別々に分かれるぞ～。ラルクはエリオとユーノと一刀と組んで～。あと残りは俺について来い」

ラルク
「おいちょっと待て、俺のほうが多くないか?」

零斗が組む人数が多いとラルクは言う。

零斗
「そうか、じゃあ孫権先生と呂布先生は俺と一緒にな」

こうして零斗とラルク達は別々に分かれて行動し、零斗達はエレベーターに乗った。

零斗
「え～っと、まずは地下四階に行こうかな～」

フランケン
「零斗、多分倉庫だと思うよ。それか駐車場かもしれないよ」

零斗
「だとしても、鍵を持っている真拳使いがいるかも知れねぇぞ。とにかく行こうよ」

そして地下四階のボタンを押し、ドアが閉まる。

皇牙
「金山企業か、怪しい臭いがするな」

皇牙は怪しいと感じたかのように呟く。

地下四階に着き、ドアが開く。

するとバイクで走れそうな広さな部屋に驚く零斗達。

零斗
「広いな～、こんだけ広ければ何でも自由に出来るな」

フランケン
「零斗！大変だよ！」

呟いた側に横を向くと、フランケン達ミサイルがベルトコンベアで運ばれている様子が出ていた。

皇牙
「こいつは兵器だ・・・・どうりで怪しいと思ってたぜ！」

零斗
「これは酷いな」

劉備ガンダム
「隠れて兵器を作るなんて・・・・・許せない！」

曹操ガンダム
「もはや人の道を外れているかもしれないな」

それぞれ反応を見せる零斗達、その時、背後からバイクの音がし、振り向いた。

？？？
「よう、マイティ真拳伝承者・・・・・」

チェーンソーをつけたバイクに乗った男であり、零斗は前に出る。

零斗

「お前、俺の事を知っているようだな、何者だ」

ベル

「俺か?俺はバイク真拳のレオン・ベル。そして・・・・・」

バイクに乗った男、ベルは懐から玉璽を取り出し、上に上げる。

ベル

「三日後、俺は世界を統一する!」

これを聞いた零斗は、白いオーラを湧き出す。

第六十三話　地獄の社会見学開始!?俺は三日後に世界を統一する・・・のかもしれない

零斗
「政胸どうしてっかな～。俺はすっごく心配だ。あとクリスも」

フランケン
「クリスさん、どうしてんだろ?」

零斗
「だよな～次回も楽しみにしてくれ!」

第六十四話　俺が一番だ！最強！バイク真拳！？（前書き）

龍の骨
「今回は・・・・ギャグが少なめです・・・・」

零斗
「相手はあのレオン・ベルだからな～」

龍の骨
「なので皆さん、温かい目で見守ってください！」

第六十四話　俺が一番だ！最強！バイク真拳！？

零斗達の前にいるのは、玉璽を持ったレオン・ベルがいた。

そしてベルはエンジンを鳴らす。

零斗

「レオン・ベルだっけ？確かＴＩＲで有名なチャンプだったよな？」

フランケン

「ＴＩＲ？それは何だ？」

零斗が言うＴＩＲに首を傾げるフランケン。

零斗

「テラー・イズ・リアリティ、略してＴＩＲ。あらゆる競技でゾンビ殺し、莫大な賞金と名声を得られるを超人気だ。だがこれは悪趣味な番組として日本では放送されていない。そしてベルが使っているバイクは、左右にチェーンソーをつけたオフロードバイクでゾンビを切り刻む『スライシクルズ』のバイクだ」

フランケン

「えぇ！？あのチェーンソーに当たったらひとたまりも無いぞ！」

チェーンソーを見て驚くフランケンだが、ベルは怪しい笑みを浮かべ、エンジンを鳴らす。

ベル

「それと忘れてねぇか？俺がバイク真拳の使い手だって？」

零斗
「忘れるわけがないだろ?」

零斗とベルは互いに睨み合い、フランケンは冷や汗を流す。

フランケン
「零斗、バイク真拳って何?」

冷や汗を流しながら零斗に尋ねるフランケン。

零斗
「バイク真拳は、バイクを乗りこなし、全てのスピードを極めた者だけに使える真拳だ」

フランケン
「バイクを乗りこなし、スピードを極めた者って・・・・・」

零斗
「だが殺人技があるといわれてるからな」

フランケン
「さ、殺人技・・・・・」

フランケンはベルが乗っているバイクを見て青ざめる。

フランケン
(あぁ、確かにありそうだ・・・・・・)

ベル

「高校生が、ここに来ちゃダメだろ?死にたくなかったら帰って勉強でもするんだな!」

零斗
「悪いがそうはいかないな・・・・俺達は金山企業(ここ)を潰すために殴り込みに来たんだ。帰れと言われて大人しく帰る俺たちじゃねぇぜ」

これを聞いたベルはバイクのエンジンを鳴らし、零斗に睨む。

ベル
「潰しにか・・・・やってみろよ!その勇気があるならな!」

零斗
「やってやるさ!だがお前は乗り物を武器にしている。だったら俺達も乗り物だぁーーーーーーー!!!!!」

フランケン
「え!?乗り物って・・・・・・・」

フランケンは再びベルのバイクを見て目を細くする。

フランケン
「ちょっと待って!俺達は高校生だよ!?まさかバイクでいこうと考えて・・・・・」

零斗
「誰がバイクっつった?俺達はバイクではない乗り物でいくんだぜ?」

フランケン
（バイクではない乗り物って・・・・・）

零斗が言うバイクではない乗り物と聞いたフランケンは、どんな物なのかを想像する。

零斗
「バイクではない乗り物・・・・・それはこれだぁーーーーーーー！！！！！！！」

零斗と皇牙と劉備ガンダムと曹操ガンダムは、三輪車に乗っていた。

フランケン
「えぇ！？三輪車ぁーーーーー！？いくらバイク相手でも無理でしょ！？」

ベル
「はっはっはっはっはっはっはっは！三輪車でか？これはウケるぜ！」

三輪車に乗っている零斗達を見て嘲笑うベル。

フランケン
「零斗、無理だって。三輪車じゃ・・・・」

零斗
「やる前から無理って決めつけるな！」

フランケン
（いやいやいやいやいや！バイク相手に三輪車って、無理あるから

！）

零斗の発言でバイク相手に三輪車は無理があると心に刻むフランケンだった。

零斗
「いくぞお前らぁーーーーー！！！！」

そして零斗は「うおぉーーーーーーーーーーーーー！！！！」とベルに向かって突進する。

ベルはバイクで零斗達に向かって走り、囲むように走る。

零斗
「なんだぁ！？」

バイクはだんだん速く、零斗達の周りに火が出て、竜巻が起きる。

零斗
「アチチチチチチチチ！！！！！も、燃えるぅーーーーーーー！！！！！」

劉備ガンダム
「ギャアーーーーーーーーー！！！！水！水ぅーーーーーーーーー！！！！！」

曹操ガンダム
「余の炎より燃えているぅーーーーーーーーー！！！！！」

皇牙

「アッチィーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

炎の竜巻の中で叫ぶ零斗達。

ベル
「バイク真拳奥義！狂炎竜巻（クレイジーフレイムサイクロン）！！！」

フランケン
「炎の竜巻・・・・・まさか・・・・・零斗ぉーーーーーーーーーーーー！！！！！！」

零斗達がやられたと思い、叫ぶフランケン。

炎の竜巻の中では、零斗達は筋トレをしていた。

フランケン
「筋トレしてるぅーーーーーーーーーー！！！ってか大丈夫か！？」

炎の竜巻の中で筋トレをする零斗達を見て思わず叫ぶフランケン。

竜巻が収まり、零斗達は黒こげとアフロヘアになっていた。

「だ、大丈夫かな～？」

零斗達を見て不安に思うフランケンだった。

ベル
「よく俺の竜巻の中で耐えられたな。だがな・・・・・」

再びバイクのエンジンをふかし、零斗達に向ける。

ベル
「俺のバイク真拳はこんなもんじゃないぜぇ！」

零斗
「へぇ～、そうなのか。今度は俺のマイティ真拳を見せてやる！」

向かって来るベルに向き、構えた。

零斗
「マイティ真拳奥義！スプラッシュサマー！！！」

右手の手のひらを地面に強く叩き、その衝撃で水が直線を書くように噴き出すが、ベルは飛んでかわした。

ベル
「おいおい、こんなショボいのがマイティ真拳か？笑わせるぜ！」

皇牙
「次は俺だ！破天荒真拳奥義！」

右手を正拳突きの構えをし、拳が火に纏う。

皇牙
「火炎拳！！！」

拳を強く突き出し、拳の形になった火はベルに向かっていく。

ベル
「馬鹿が！そんな攻撃、俺に通じると思ったか！」

バイクのリアを上げ、回転する。

ベル
「バイク真拳奥義！ジャックナイフサイクロン！」

バイクの回転は高速になり、拳形の火を受け止める。

が、耐えられずバイクごと吹き飛ばされる。

ベルは体勢を立て直し、うまく着地する。

皇牙
「どうやら、俺の技が通じたようだな」

ベル
「クソッ！よくもこの俺に！俺は一番なんだよぉーーーーーーーー！！！！！！！」

皇牙の技にやられたのか、ベルは自分が一番だと訴えるように叫んだ。

零斗
「聞きたい事がある。何でお前は金山企業にいるんだ？」

ベル
「決まってんだろ！俺の走る場所を求めていたからだ！！！！」

走る場所と聞いて零斗は首を傾げる。

ベル
「俺は元々、モトクロスの選手だったんだよ！だがある日、選手の資格を剥奪された！」

零斗
「それで、あの悪趣味番組に出てたって訳か」

そして零斗の問いにベルは頷き、零斗はベルに近付き、バイクの前に立つ。

零斗
「・・・・このバカチンがぁーーーーーーーーー！！！！」

ベル
「ゴブァーーーーー！！！！」

零斗は怒りにまかせ、ベルをバイクごと壁へ蹴り飛ばす。

零斗
「で、この兵器の工場長になったわけだな」

フランケン
「何で分かるの？」

零斗
「会社の社長に何かしてもらうかわりに働く、よくある事だろう？」

フランケン
（いや、確かにそうだけど・・・・・何で工場長！？）

零斗
「さて、とどめといきますか」

ベル
「とどめだとぉ!?」

ベルは倒れているバイクを起こし、乗る。

ベル
「俺はまだ走れるぜ!」

零斗
「まだ走れる・・・ねぇ～。燃料が漏れても?」

ベル
「え?あぁ!ガソリンが漏れてるぅーーーーーーーーーー!!!!!」

バイクのタンクからガソリンが漏れている事に気付き、思わず叫ぶ。

零斗
「どうやら、勝負は着いた様だな」

ベル
「まだだ!俺にはこれがある!!!!」

懐から玉璽を取り出し、零斗達は驚愕する。

そして玉璽が光だし、邪悪なオーラを湧き出す。

ベル
「マイティ真拳伝承者ぁ！！！俺が一番だぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

ベルは玉璽をバイクのタンクに置き、玉璽はバイクの中に入る。

するとバイクが光だし、邪悪なオーラを湧き出しながら形を変える。

光が晴れ、チェーンソーが無くなっており、死神と思わせるようなオフロードバイクになってしまった。

零斗
「これはまた良いバイクを手に入れたな～」

フランケン
「何か、ヤバそうだよ！」

皇牙
「玉璽の力で変わったのか」

劉備ガンダム
「何てことを・・・・・・・」

曹操ガンダム
「・・・・・・」

ベルのバイクを見て反応を見せる零斗達。

ベル
「ハハハハハハハ！！行くぜぇ！玉璽の力を手に入れたバイク真拳

を見せてやる！」

そしてベルはバイクで零斗達に向かって走り、零斗は構える。

ベル
「バイク真拳奥義！ダークアクセルシュート！！！」

バイクは邪悪なオーラを纏わせながら速くなり、零斗を跳ね飛ばす。

零斗
「ぐはぁ！！！」

フランケン
「零斗！！！」

ベル
「どうだ？俺のバイク真拳は？」

零斗
「あぁ、最悪だぜ！」

ダークアクセルシュートを喰らったダメージを負ったまま立ち上がる。

零斗
「ったく、玉璽の力で一番になろうだなんて百年、いや千年早ぇんだよ！！」

フランケン
（あんな強烈な技を喰らっても平気なんだ・・・・）

零斗を見て冷や汗を流すフランケンであった。

皇牙
「俺の破天荒真拳と、御都合真拳を見せてやろうか？」

零斗
「待てよ、俺はまだマイティ真拳の全てを出して・・・・」

前に出ようとする零斗を仰止する皇牙。

皇牙
「零斗、お前は負ったダメージを癒えておけ」

零斗
「分かったよ。じゃあお前に任せるわ」

そして零斗はフランケン達の元へ行き、劉備ガンダムと曹操ガンダムは皇牙の方へ行く。

劉備ガンダム
「これ以上、奴の思うようにさせない」

曹操ガンダム
「玉璽をこんな形で使われるのが気に入らないからな」

劉備ガンダムは龍帝剣と爪龍刀取り出して構え、曹操ガンダムは七星剣を取り出して構えた。

皇牙

「そうか、じゃあ行くぜ！」

ベル
「ヒャハハハハハハ！三人で俺のバイクを止められるのか？無理無理、俺のバイクはどこまでも走り続けるぜ！！！」

バイクのエンジンを鳴らし、皇牙達に向かって走る。

ベル
「バイク真拳奥義！」

皇牙
「来るぞ！」

皇牙達はベルが来るのを警戒するが、ベルは片足を地面につき、回転させ、皇牙達に向かっていく。

皇牙
「何っ！？」

回転するベルに皇牙達を吹き飛ばす。

ベル
「サイクルスピンドライブ！！！」

皇牙
「うわぁーーーーーーーーー！！！！！」

回転を止め、再びエンジンを鳴らす。

皇牙
「なんてパワーだ！これじゃあまともに攻撃できねぇ！」

劉備ガンダム
「これが玉璽の力なのか！？」

曹操ガンダム
「いや、ああいうのは本当の力とは言えない！」

ダメージを負いながらも立ち上がり、構える。

ベル
「そのダメージでどのくらい耐えられる？まぁ、一発で終わりそうだがな！」

劉備ガンダム
「くっ！ふざけるな！」

劉備ガンダムは怒りに任せ、ベルに向かって突っ走る。

ベル
「おいおい、突っ込んで死ぬ気か？バカだな～」

劉備ガンダム
「星龍斬！！！！」

星の軌道を書くように剣を振り回すが、ベルの姿が消えた。

劉備ガンダム
「何っ！？」

ベル
「バーカ、何処見て攻撃してんだよ?」
後ろを振り向くと、バイクに乗っているベルがいた。
そして前輪を地面に着かせ、後輪を上げて劉備ガンダムを吹き飛ばす。
劉備ガンダムは壁に叩きつけられ、ベルは勝利を得たような笑みを浮かべる。
曹操ガンダム
「まだ余が残っておるわ!」
上を見ると、炎を纏わせた七星剣を持った曹操ガンダムがいた。
曹操ガンダム
「大紅蓮斬!!!」
炎を纏わした七星剣で突進するが、軽々とかわされる。
曹操ガンダム
「なっ!?」
ベル
「どうした?そんな程度か?」
後輪を上げ、曹操ガンダムを吹き飛ばし、曹操ガンダムは皇牙とぶつかり、共に倒れる。

フランケン
「そんな・・・・・嘘だろ・・・・・？」

皇牙達がやられている姿を見て驚愕するような顔になるフランケン。

ベル
「見たか！！！これが真のバイク真拳だ！ハハハハハハハハハハ！
！！！！！！」

ベルの笑い声が、工場内で響いた。

第六十四話　俺が一番だ！最強！バイク真拳！？（後書き）

零斗
「おっと？次回は劉備ガンダムがベルの戦い方とやり方に怒りで・・・・次回！『怒れ！劉備ガンダム！翔烈帝・龍装・劉備ガンダム降臨！！！！』」

フランケン
「え！？劉備ガンダム先生が！？」

第六十五話　怒れ！劉備ガンダム！翔烈帝・龍装・劉備ガンダム降臨！！！！

零斗
「今回は『爆発王』さんからのキャラが登場するぞ～」

皇牙
「それと、劉備先生がパワーアップするぞ！」

第六十五話　怒れ！劉備ガンダム！翔烈帝・龍装・劉備ガンダム降臨！！！！

玉璽でパワーアップしたベルの前に圧倒される零斗達。

そしてベルは勝利を得たかのような笑みを浮かべる。

ベル
「くくくく・・・・・ホントに弱いなぁ～」

皇牙
「ぐっ！まだだぁ！」

ベル
「あの技喰らってまだ立ち上がれるのかよ。見苦しいぜ！」

皇牙
「なんてやつだ・・・・・」

その時、零斗は立ち上がり、構える。

ベル
「あぁ？」

零斗
「見てらんねぇな。俺抜きだとどうやら敵わないらしいからな」

皇牙
「零斗！？しかしお前はダメージが・・・・」

零斗
「んなもんかすり傷だよ」

そう言ってベルへ近づいた。

零斗
「レオン・ベル。俺のマイティ真拳の本気を、見せてやるぜ」

右足を前に出し、腰を少し落とし、右手の甲を額に当て、左手の拳を前に出し、白いオーラを湧き出す。

零斗
「マイティ真拳奥義！」

そしてベルの前に朝礼台が置かれ、黒いスーツ姿に髭をつけた零斗が上る。

零斗
「理事長のお話！！！！」

フランケン
「おいおいおいおいおいおい！！！！それ絶対効かないって！！！！」

零斗は長々と話し、フランケンは横からツッコむ。

するとベルはうたた寝し、鼻提灯を出す。

フランケン
「えぇ！？効いた！？」

うたた寝するベルに気付き、零斗は朝礼台の前から降りる。

零斗
「寝るなぁーーーーー！！！」

ベル
「ごふぁ！！！！」

青筋を浮かべながら殴った。

零斗
「寝るんじゃねぇーーー！！！！理事長の話はちゃんと聞けぇーーーーーー！！！！」

フランケン
（うわぁ・・・・ギャグが再び出たよ）

そしてベルは体勢を立て直し、零斗はベルから離れた。

ベル
「この野郎・・・・・」

バイクを鳴らし、零斗の方へ突進していく。

ベル
「死ねぇーーーーーーーー！！！！」

その時、零斗はコートを広げ、中にはマシンガンやロケットランチャー等があり、ベルに向ける。

ベル
「なっ!?何だぁ!?」

バイクを止めようとするが、止められなく、マシンガンとロケットランチャーは一斉に射撃を始め、ベルに集中した。

零斗
「集中砲火!!!」

ベル
「うわぁーーーーー!!!!!」

集中砲火により、バイクが爆発し、ベルは巻き込まれる。

零斗
「・・・・・・」

フランケン
（え?零斗のコートって、あんな事出来るんだっけ?）

零斗のコートからマシンガンやロケットランチャーがあった事に青ざめる。

煙が晴れ、ベルはやられた・・・・と思ったらバイクと服がボロボロの状態で生きていた。

ベル
「よくも俺と・・・俺のバイクを・・・そして俺を汚してくれたな!」

フランケン
「あれだけ喰らってまだ立ってられるのかよ!?」

集中砲火を受けてボロボロの状態で立っていられるベルにフランケンは驚く。

するとバイクとベルが光だし、ボロボロの状態から元の状態になった。

フランケン
「えぇ!?再生した!?」

皇牙
「どうやら玉璽の力で再生したようだな」

フランケン
「玉座の力で!?」

玉座の力で再生したベルに、フランケンは思わず声を上げた。

ベル
「ぶっ殺してやる!」

バイクのエンジンを鳴らし、零斗達に向かって突進する。

零斗
「へっ!お前の攻撃なんざ、最初からお見通しだ!」

そして零斗は白いオーラを湧き出しながら構える。

零斗
「おい皇牙！劉備先生、曹操先生！いつまで寝てんだ！」

零斗の一言で皇牙と劉備ガンダムと曹操ガンダムは立ち上がる。

零斗
「いいか！お前らの怒りを一列に並ぶように俺にぶつけろ！そして俺がベル（やつ）に怒りをぶつける！」

皇牙
「あぁ！やってやるぜ！」

劉備ガンダム
「これ以上玉璽を悪いように使わせない！」

曹操ガンダム
「怒りというものをぶつけてやるぞ！」

零斗、皇牙、劉備ガンダム、曹操ガンダムという順に一列にならんで構えた。

零斗
「マイティ真拳奥義！」

ベル
「防ぐつもりか？バカが！」

零斗
「防ぐんじゃねぇんだよ」

ベル
「何っ!?」

曹操ガンダムは劉備ガンダムの背中を殴り、劉備ガンダムは皇牙の背中を殴り、皇牙は零斗の背中を殴り、零斗はベルに殴った。

零斗
「曹操ガンダムの怒りを受けた劉備ガンダムの怒りを受けた皇牙の怒りを受けた俺の怒りぃーーーーーー!!!!!」

ベル
「ぐぼぁ!!!!」

ベルは零斗に殴られ、バイクごと吹っ飛び、壁に叩きつけられた。

零斗
「どうだ?俺達の怒りは。どれだけ痛いのか、感じただろう」

ベル
「この野郎・・・殺してや・・・・・」

その時、上の階から爆発らしき音がし、零斗達は上を見る。

ベル
「何だ!?何が起こっているんだ!?」

零斗
「爆発音か?何があったんだ?」

フランケン

「何か、嫌な予感がする」

上の階から爆発らしき音に、嫌な予感を覚えるフランケンであった。

その爆発らしき音がした階では・・・・・

アリス

「てやぁーーーーー！！！！！」

夕化

「うおぉーーーーーーー！！！！！！」

コロナ

「はぁーーーーーーーーーー！！！！！」

ネココ

「おりゃーーーーーにゃーーーーーのーーーーーー！！！！！！」

アリス達は、金山企業に入り、次々出てくる警備員とジャック型ロボを倒していた。

警備員

「なんだ、こいつ等！？」

警備員２

「異常にまで強い・・・・・」

因みにアリス達の強さに警備員は怯えたり、驚愕したり等していた。

そして更にアリスは二つの日本刀を振り回し、ロボを切り刻む。

夕化
「へぇ～やるじゃねぇか。だったらあたいも！」

夕化は警備員の攻撃をかわし、片手剣と蹴り技を駆使し、コロナは大剣で周りのロボットを薙ぎ払い、ネココはハンマーと周り、警備員を吹き飛ばした。

だが、警備員とロボは増えてくる。

アリス
「あう～、また増えてきたよぉ～！」

夕化
「倒しても倒してもか・・・・・」

コロナ
「流石に死ぬわね」

ネココ
「大変にゃ～の～」

警備員とロボとの戦いで疲労が見え、警備員達は歩きながらアリス達に近付く。

アリス
「も、もうダメなのかな～？」

？？？
「あとは俺達に任せろ」

アリス
「え？」

その時、後ろから声がし、振り向くと『ＯＮＩ零』の司狼丸似の青年と『れでぃ×ばと』のアイシェ似の少女だが、青髪で髪飾りは無い。

アリス
「あなたは・・・・・」

？？？
「俺は天王寺進鵺だ」

？？？
「私はハスナ・ソウ・エディカシアです」

進鵺と名乗った青年は烈式斬星刀『凱破』を取り出し、ハスナと名乗った少女はライフルグレイブ『キャッツ・アメイジング』を取り出した。

進鵺
「お前達は先に行ってろ。俺達はあの野郎共を片付ける」

ハスナ
「後は私達に任せてください」

アリス
「ありがとうございます！」

そしてアリスは進鵺とハスナにお礼を言い、エレベーターに乗った。

警備員
「たった二人だ、行くぞ！」

警備員達とロボは進鵺とハスナに立ち向かった。

進鵺は走っていく警備員達を走り抜き、警備員達は止まる。

そして凱破をしまい、警備員達は倒れた。

一方ハスナはライフルグレイブで警備員達とロボを倒していた。

そして大型ロボが後ろから襲い掛かり、ハスナはかわす。

連続の突きを繰り出し、飛び上がりながら斬り、上から斬り付つけ、大型ロボは爆発した。

ハスナ
「突発！スプリットセイバー！」

ライフルグレイブから地面に向かってビームを撃ちながら弧を描くように突っ込み、警備員達は吹き飛ぶ。

ハスナ
「爆撃！バスターウィップ！」

警備員達は進鵺とハスナを見て怯え、足を震わせる。

その頃、零斗達は・・・・・

ベル
「クソ・・・・ナメやがって・・・・・・」

零斗
「これで俺達の逆転だな」

ベルはバイクと共にボロボロになっており、零斗は腕を組んでいた。

劉備ガンダム
「よっしゃあ!!!これで一気に叩き込めば奴はお終いだぁ!!!」

ベル
「この野郎!」

皇牙
「諦めろ、お前のバイクはボロボロだ」

ベル
「バカめ!バイクは何度でも再生するぜ」

ベルはそう言うが、バイクが回復する様子が無かった。

ベル
「何っ!?俺のバイクが再生しねぇ!」

零斗
「どうやら、玉璽はお前を見放したようだな」

ベル

「どういうことだ!?」

タンクに付いている玉璽を見ると、力が弱まっていた。

これを見て青ざめ、玉璽を取り、どこかへ投げ捨てた。

ベル

「こんな物が無くたって、お前等を潰してやる!」

零斗

「言ったな?その言葉、忘れんなよ?」

ベルはバイクで零斗達に突進し、劉備ガンダムはチャンスと思い、ベルに向かって走り、爪龍刀を向ける。

ベル

「バイク真拳奥義!」

バイクの後輪を上げ、振り回し、劉備ガンダムは爪龍刀で防ぐ。

しかし、爪龍刀は簡単に砕かれ、吹き飛ばされる。

ベル

「ジャックナイフギロチン!」

劉備ガンダム

「うわぁーーーーーーーーーー!!!!!」

そして壁に叩きつけられ、ベルは狂ったかのように突進する。

ベル
「死ねぇーーーーーーーー！！！！」

もうダメかと劉備ガンダムは目を瞑った。

目を開けると、曹操が盾になり、庇って倒れていた。

劉備ガンダム
「曹操！？」

曹操ガンダム
「りゅ・・うび・・・・」

劉備ガンダムは慌てて曹操ガンダムに駆けつける。

劉備ガンダム
「曹操！何で俺なんかに・・・・・・」

曹操ガンダム
「カレー好きだろう・・・・・カレーが好きな奴を放って置けなかったからさ・・・・」

劉備ガンダム
「そんな・・・俺は確かに好きだけど・・・・具の・・・・」

曹操ガンダム
「俺の作ったカレーパン・・・食べたか・・・・」

劉備ガンダム
「あぁ！食べたよ！凄く美味かったよ！」

曹操ガンダム
「そうか・・・・よか・・・た・・・・・」

そう言って、曹操ガンダムは目を閉じた。

劉備ガンダム
「曹操・・・・すまない・・・・ホントは・・・・カレーパン半分残して冷蔵庫に入れっぱなんだよ・・・・それなのに俺は・・・・俺って奴は！うおぉーーーーーー！！！！」

劉備ガンダムはカレーパンを半分残した事を思い出し、涙を流して光り出した。

ベル
「な、何だ！？」

零斗
「・・・・・・」

フランケン
「な、何があったんだ！？」

光り出した劉備ガンダムは背中から翼を広げる。

光が晴れると、劉備ガンダムは翔烈帝・龍装・劉備ガンダムとなった。

劉備ガンダム
「俺って奴は・・・・マジで恥ずかしいぜ・・・・・」

ベル
「な、なんだぁ！？」

突然変わった劉備ガンダムにベルは驚き、零斗は劉備ガンダムの前に立とうとするが、止められた。

劉備ガンダム
「零斗、下がってな。ここは俺がケリをつける」

零斗
「ケリをつける・・・・か・・・・」

そして後ろから掴み、バックドロップをする。

零斗
「これで、元に戻るな」

後ろを振り向くと、劉備ガンダムは戻っていなかった。

劉備ガンダム
「零斗、気合を入れてくれたのか？ありがとな。安心しろ！俺は必ず勝つ！」

零斗
（どうなってんだ？）

劉備ガンダムは龍帝剣を拾い、龍帝剣は光だし、二つの光の玉となり、劉備ガンダムは二つの光を両手で掴む。

すると光は赤龍翔神刀と青龍烈斬刀になった。

劉備ガンダム
「さぁ、俺の怒りを聞け！！！」

ベルに向かってスピード早く走り出し、零斗達は驚愕する。

零斗
「速ぇーーーー！！！劉備先生速ぇーーーーーーーーーー！！！！！」

劉備ガンダム
「まずは！最初に怒りを覚えた頃だ！」

劉備ガンダムビジョン開始。

俺は、小学生の頃、給食のデザートのプリンを食べようとしたとき、無くなってたんだよ。

隣の席を見ると、自分のプリンが食べられていたんだよ！

劉備ガンダムビジョン終了。

劉備ガンダム
「あの時、早くおかずを食べて食えばよかったと後悔している・・・・だから・・・・そんな自分が恥ずかしいぃーーーーーー！！！！」

叫びながら赤龍翔神刀でバイクを斬りつけ、タックルで吹き飛ばす。

劉備ガンダム
「そして次はぁーーーーーー！！！！！」

劉備ガンダムビジョン開始

休日の事だ。

俺は散歩に出かけるとき、ファーストフード店に行った。

そして美味そうなハンバーガーを注文し、食べたら・・・・・

激辛のハンバーガーだった。

劉備ガンダムビジョン終了。

劉備ガンダム

「見た目で選んでしまった事に・・・こんな事になるとは思わなかった・・・恥ずかしいぜぇーーーーーーーーーー!!!!!」

叫びながら青龍烈斬刀でバイクを斬りつけ、ベルを殴り飛ばしてバイクを真っ二つにした。

ベル

「うわぁー!!!!俺のバイクが・・・・・」

バイクが真っ二つに斬られ、涙を流すベル。

そして劉備ガンダムは赤龍翔神刀と青龍烈斬刀を後ろにしまった。

ベル

「何てことをしやがる!」

劉備ガンダム
「さぁ、トドメといこうか」

両手が光だし、ベルに向かって走っていく。

劉備ガンダム
「喰らえ！俺の怒りをぉーーーーーーーー！！！！！」

ベル
「ひ・・・ひぃーーーーーーーーー！！！！！！！」

ベルは劉備ガンダムの怒りに恐怖したのか、逃げようとするが、遅かった。

劉備ガンダム
「必殺！ドラゴンパンチラッシュ！！！！！」

龍の如く無数のパンチを喰らい、ベルはよろける。

劉備ガンダム
「そして・・・終わりだぁーーーーーーーーーー！！！！！」

アッパーで吹き飛ばし、ベルの服は破れ、全裸になる。

劉備ガンダムは上手く着地し、落ちてきた鍵を取り、光りだして元に戻った。

しかし、だるそうな顔になっていた。

フランケン

「怒りって、凄いよね・・・・・」

劉備ガンダムの戦いを見て汗を流すフランケン。

零斗
「よくやりましたね先生。あのレオン・ベルを倒すなんて。だけど・・・・・俺を差し置いて何良いとこ見せてんじゃあーーーーーーーー！！！！！！」

そして零斗は劉備ガンダムを殴る。

劉備ガンダム
「いてぇ！何すんだゴラァーーーーーーー！！！！」

劉備ガンダムも殴り、更にエスカレートし、殴りあった。

フランケン
「ちょっと二人共！せっかく勝ったんだから見苦しい事はやめようよ」

曹操ガンダム
「やれやれ、やっぱこうなるのか」

フランケン
「え！？曹操先生！？」

ベルによって倒された筈の曹操ガンダムがおり、フランケンは驚く。

曹操ガンダム
「いやぁ～カレーが食べたくなって起きちゃった」

フランケン
「あっそ・・・・・」

するとエレベーターが開き、零斗達は振り向く。

そこに現れたのは、『１１ｅｙｓ』の水奈瀬ゆかのコスプレをしたアリスと『Ｍｉｓｓｉｏｎ－Ｅ』の君塚麻織のコスプレをした夕化と『クイーンズゲイト』のアリスのコスプレをしたコロナと『魔法少女まどか☆マギカ』の佐倉杏子にコスプレをしたネココだった。

フランケン
「って何でアリス達が!?その格好、どう見ても中の人ネタじゃん！」

アリス達のコスプレにツッコミを入れるフランケンであった。

アリス
「零斗～来たよ～」

零斗
「アリス!何で来た!」

アリス達が来た事により、零斗は怒鳴る。

夕化
「だって、あたいらは何も出来ないままではいられなかったから・・・・」

コロナ

「それに、零斗が死んだら、あたし達は耐えられないよ！」

ネココ
「お願いにゃーの。一緒に戦わせてにゃーの」

零斗はこれを聞いて考える。

零斗
「よし！良いだろう！」

フランケン
「良いのかよ！？」

零斗
「どっちにしろ、ヒロインと一緒じゃなきゃ意味ないしな」

フランケン
「確かにそうだけど・・・・・」

皇牙
「良いじゃねぇか？お前達が行きたいなら」

零斗
「よっしゃー！皆行くぞ～！！！」

零斗以外の全員
「おぉーーーーーーーー！！！！！」

こうして、零斗達はエレベーターに乗り、次の部屋へ行ったのだった。

一方、エリオ達は・・・・・・

エリオ
「やっぱこういうのんびりな時間には、紅茶が限るな」

ユーノ
「ホントだねぇ～。でも、ケーキも忘れずにね」

一刀
「そうだな」

ラルク
「・・・あのさ・・・・何でお前等がのんびりしていてさ、俺だけ台車を引くって、罰ゲームか？」

紅茶を飲んでいるエリオ達を乗せた台車をラルクが引いていた。

因みにラルクが作ったストライクバズーカーはちゃんと付いてきている。

エリオ
「まぁ、あの千歌音という子とフラグを立てたことでこういう事をさせているわけじゃないから安心しろ」

ラルク
「思いっきりさせてるようにしか聞えねぇよ！」

エリオのボケにラルクはツッコミを入れる。

一刀
「というかさ、怒られないか？ｃｈａｌｉｅｙさんに」

エリオ
「・・・・・・」

こうして、エリオ達は台車からおり、ラルクと共に普通に鍵のある部屋をさがすのであった。

第六十五話　怒れ！劉備ガンダム！翔烈帝・龍装・劉備ガンダム降臨！！！！

ｃｈａｌｉｅｙさん、申し訳ありませんでした！

零斗
「お前それでｃｈａｌｉｅｙ怒ったら読まなくなったり、外伝が更新出来なくなるぞ」

龍の骨
「そ、それは嫌だな・・・・」

零斗
「さて、次回！『第六十六話　さらば三国ガールズ！お兄ちゃん、僕は忘れないよ』」

フランケン
「三国ガールズが！？」

第六十六話　さらば三国ガールズ！お兄ちゃん僕たちは忘れないよ（前書き）

一刀
「ラルクがツッコミ役になるぞぉ～」

エリオ
「そして、ミーナ達が奪われた固有魔法の真相が明らかになる！！
！」

三国ガールズが・・・・三国ガールズがぁーーー！！！！！！！

第六十六話　さらば三国ガールズ！お兄ちゃん僕たちは忘れないよ

前回のあらすじ・・・・・

金山企業に殴り込みに行った零斗達は、鬼川がいる会長室を目指し、会社内の誰かが持っている鍵を探すと言う地獄の社会見学をする。

零斗達は地下四階の工場で、ミサイルや戦車などの兵器を生産されている事を知った。

そこで、ＴＩＲのチャンプ、レオン・ベルの対決との対決をする。

バイク真拳を使うベルに追い詰められるも、零斗のマイティ真拳で逆転をする。

そして、玉璽の力が弱まったベルは、曹操ガンダムにジャックナイフギロチンをかます。

だがこれが劉備ガンダムの怒りに触れてしまい・・・・・・

火あぶりの刑を喰らってしまう。

フランケン

「いやいやいやいや、火あぶりじゃなかったよ!?本当は劉備先生が翔烈帝・龍装姿になって、ドラゴンパンチラッシュで倒されたんだよ！」

ベルとの激闘後、アリス達がやって来て零斗達の仲間に加わった。

そして、エリオ達は・・・・・・

ラルク
「なぁ、エリオ。本当にここなのか?鍵を持っている奴等がいるって所は・・・・」

エリオ
「あぁ、本当だ。俺のイカロスブレードがそう言っている」

エリオのイカロスブレードの導き?で加工食品の製造室にいた。

ユーノ
「エリオ君がそう言ってるじゃない。信じてあげなよ」

ラルク
「いや、その剣の導きって、信じ難いような感じがして・・・・」

エリオ
「ラルク、俺を信じなければ誰を信じる?そのくらいは信じろ。例え嘘だとしても!」

ラルク
「お前嘘だとしてもって、もし間違ってたらどうするんだよ!?」

エリオ
「貴様、この剣を愚弄するのか!?イカロスブレードの導きは間違っていない!」

ラルク
「愚弄なんてしてねぇし！ってか間違っていないってどうしてそう言えるんだよ！？」

エリオ
「俺は・・・・・この剣と長い付き合いだからな。そう言える」

ラルク
「今の間は何だよ！？考えてたのか！？長い付き合いだからって理由になってねぇよ！」

エリオのイカロスブレードに、ラルクはツッコミを入れる。

その後ろでは、ユーノと一刀と孫権ガンダムと呂布トールギスは麻雀をやっていた。

一刀
「人生って辛い時あんだよな～」

ユーノ
「でもそれを乗り越えて生きていくのが人間だよねぇ～」

孫権ガンダム
「あ、一刀さん。ロンです」

一刀
「え、マジで？」

呂布トールギス
「あらあら」

ラルク
「お前等麻雀してんじゃねぇよ！」

麻雀している一刀達にラルクはツッコむ。

一刀
「あ、すまねぇ」

ラルク
「すまねぇじゃねぇーーーーーーー！！！！！」

一刀達にツッコむラルク。

すると後ろから足音がし、後ろに振り向いた。

？？？
「こいつらが、鬼川会長が言っていた奴等かい？」

？？？2
「だとすれば、殺すしかないようだねぇ？」

目の前にいるのは、筋肉質の青年とスリリングショットを持った少年だった。

一刀
「てめぇ等、何者だ？」

？？？
「ん？俺達か？俺は剛力のゴウ。ゲルトルート・バルクホルンの先

祖だ」

？？？2

「僕は狙撃のジョージ。リネット・ビジョップの先祖さ」

筋肉質の青年、ゴウとスリリングショットを持った少年、ジョージは一刀達に名乗った。

ラルク

「先祖って、お前等は遠い昔からタイムスリップで現代（ここ）に来たのか？」

ジョージ

「タイムスリップ？バカな事はよしてくれよ？僕たちは蘇ったんだよ」

エリオ

「蘇った？それはどういう事だ？」

ジョージ

「教えてあげるよ。僕たちの秘密を・・・・・」

ジョージは、鬼川がストライクウィッチーズの芳佳とサーニャとエイラ以外のメンバーの固有魔法を奪い、ミーナ達の先祖達を蘇らせた事を話し、これを聞いた一刀達は驚愕する。

一刀

「じゃあ、あの鎖鎌女もなのか！？」

ジルバとの戦いを思いだし、驚愕するような顔になる。

ユーノ
「そういえば、僕ほどではないけど電気を操る男がいたね」
そしてユーノは、カヅチとの戦いを思い出す。
ラルク
「じゃあ！何で鬼川はお前らを生き返らせたんだ！？」
ジョージ
「さぁね。多分会長の暇潰しだと思うよ。僕達は詳細なんて知らないから」
エリオ
「暇つぶしか・・・・その為に第５０１統合戦闘航空団の基地を襲撃したのか、奴は」
ジョージ
「まぁ、僕達を生き返らすにはこれしかなかったのさ。さぁ、話すことは話した。君達を永遠の眠りにつかせてあげるよ」
ジョージはポケットからパチンコ玉を出し、ゴムを引っ張る。
エリオ
「来るぞ！奴の真拳技が！」
ジョージ
「スリリング真拳奥義！パチンコショット！」
そして引っ張っている手を離し、パチンコ玉はハンドガンの弾の速

さで向かい、エリオはイカロスブレードで弾いた。

ジョージ
「やるねぇ・・・・けど、僕の本気はこれからだよ」

ポケットから火薬入りのパチンコ玉を十個取りだし、ゴムごと引っ張る。

エリオ
「!?何か来るぞ!伏せるんだ!」

ジョージ
「スリリング真拳奥義!マシンガンショット!」

パチンコ玉はマシンガンのように放たれ、エリオは喰らった。

エリオ
「ぐはぁ!!!!」

ラルク
「エリオぉーーーーー!!!!」

パチンコ玉を喰らっているエリオに叫ぶラルク。

そして受けたダメージで、右足の膝が地面につく。

エリオ
「こ、これがスリリング真拳なのか・・・・・」

ジョージ

「さぁ、とどめだよぉ～」

パチンコ玉をゴムごと引っ張り、黒く光だす。

ジョージ
「スリリング真拳最大奥義！デススリリング！！！！」

パチンコ玉は黒い光とともに放たれ、エリオを貫通した。

貫通されたエリオは、その場で倒れる。

ジョージ
「あはははは！あっけなかったねぇ、君のイカロス真拳も・・・・・
もう少し遊んでいたかったけど・・・・あはははははははは
は」

エリオ
「もう気が済んだか？」

ジョージ
「え？」

自分の技で倒れた筈のエリオの声がし、ジョージの笑いは止まり、
周りが黒い空間に包まれる。

ジョージ
「なんだこれは！？」

エリオ
「どうだ？自分の真拳で俺を倒した気分は」

後ろからエリオの声がし、ジョージは振り向いた。

ジョージ
「どういう事だ!?お前は倒れたはず・・・・・」

エリオ
「ん?あれは俺が作った幻だ」

ジョージ
「ま、幻・・・・・だと・・・・・」

エリオを倒したのが幻と知り、驚く。

エリオ
「お前は、俺の手の中で踊っていたにすぎない」

ジョージ
「そ・・・そんな馬鹿な・・・・・!?」

ジョージの上から鳥籠型の檻が降り、閉じ込めた。

動揺し、檻の棒を掴む。

ジョージ
「何だこれは!?」

エリオ
「その檻は罪のある者を閉じ込める『ジャッジプリズン』」

ジョージ
「何！？」

エリオ
「罪が少なければ雷は小さい。だが・・・・多ければ雷は大きい！」

これを聞いたジョージはスリリングショットとパチンコ玉を取り出し、開こうとするが、びくともしなかった。

エリオ
「無駄だ、どんなに足掻いても、ジャッジプリズンは開かない」

ジョージ
「開かない・・・・何故だ！」

エリオ
「さぁ、お前の罪を数えろ」

エリオの言葉に、ジョージは今まで犯していた罪を思い出してしまう。

そして涙目になって命乞いをするような感じになる。

ジョージ
「いや・・・あの・・・・すみません・・・・・・償います・・・・・・ちゃんと償います！だからここから出してくださ・・・・・・」

エリオ
「裁きを受けよ！イカロス真拳奥義！」

檻の上から雷がジョージに降り、檻全体が包まれる。

エリオ
「裁きの雷（ジャッジメントサンダー）！」

ジョージ
「うわぁーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

ジョージは断末魔を上げながら倒れ、鍵を落とす。

そして元の空間に戻り、エリオは着地する。

ゴウ
「こ、コイツ・・・・」

エリオ
「お前も、裁きの雷をくれてやろうか？」

エリオのイカロス真拳にゴウは驚きも隠せずにいた。

ゴウ
「ぐっ・・・・こうなりゃ俺の筋肉真拳で・・・・お前等をブチ殺す！」

ゴウは赤色のオーラを湧き出し服が破れ、半裸になり、エリオとユーノは警戒する。

しかし、動く様子が全く無かった。

エリオ

「動く様子が無いな・・・・」

ユーノ
「まるで、どうぞ攻撃してくださいって感じだね」

ラルク
「気をつけろ、何か来るかもしれねぇぞ」

一刀
「一度攻撃をすれば良いんじゃない？もしかしたら、倒れるかもしれないし」

ラルク
「おい一刀！」

ユーノ
「良いんじゃない？筋肉真拳というものがどんなのか、見てみたいからねぇ」

エリオ
「ふむ、その通りだな」

そしてエリオとユーノと一刀達はゴウの前へ出た。

これを見たラルクは少し青ざめる。

エリオ
「まずは俺からだ・・・」

イカロスブレードを構え、青いオーラを湧き出す。

エリオ
「イカロス真拳奥義！ザ・ナイト！」

目にも止まらぬ速さでイカロスブレードでゴウに攻撃し、居合い斬りをする。

が、ゴウの身体には全く傷は無く、余裕を見せるような顔をしていた。

エリオ
「何っ！？効いてないのか！？」

ユーノ
「今度は僕の番だね」

ユーノはゴウの前に立ち、宙に浮き、右手から青い炎のようなオーラが出る。

ラルク
「なっ！？あれはベガのサイコパワー！？なんであいつが・・・・」

一刀
「まぁあいつはベガの弟子だからな」

ラルク
「ベガの！？あのシャドルーの・・・・」

ユーノがベガの弟子と聞いてラルクは驚愕する。

一刀
「あいつはベガの弟子になるためにシャドルーに入った。そして弟子になってから五年、ベガを超えるという事から殺害し、シャドルーを滅ぼしたそうだ」

ラルク
「マジかよ・・・・じゃあ・・・あいつもいずれベガと同じように・・・・」

一刀
「いや、ねぇよ。ユーノに限って。あいつにはそんな事が出来ない、恋人もいるし。優しさとかあるしな」

ラルク
「・・・・・・・・」

これを聞いてラルクは冷や汗を流す。

ユーノは掌をゴウに向け、青い炎のオーラはだんだん大きくなる。

ユーノ
「青い炎で塵となれ、サイコブレイカー!!!!!」

青い炎のオーラはスターライトブレイカーと同じように放たれ、ゴウは包まれる。

一刀
「あーあ、凄いの出たよ。こりゃ流石のゴウも・・・やられているはず・・・・」

倒れたと思いきや、ゴウは全く変わらなかった。

ラルク
「あれぇ!?サイコパワーだぞ!?何で効かないんだ!?」

サイコブレイカーでも倒れないゴウにラルクは驚く。

一刀
「こうなりゃ俺の我流マイティ真拳で倒してやるぅ!喰らえ!我流マイティ真拳奥義!」

左腕に大量のサバイバルナイフを抱え、ナイフの刃を上に向けて植えるように地面に刺す。

一刀
「ナイフ植え!」

ラルク
「ナイフ植えって・・・それ意味あんのか?」

一刀の技に、少し引き気味のラルクであった。

孫権ガンダム
「こうなったら、俺達で何とかするしかない!」

呂布トールギス
「おう!」

そして孫権ガンダムは虎錠刀を取り出し、呂布トールギスは破塵戟を取り出した。

孫権ガンダム
「喰らえ！猛虎獣烈波！！！！」

猛虎獣烈波を繰り出し、ゴウに当たる。

呂布トールギス
「暴風激烈斬！！！！」

暴風激烈斬を繰り出し、これもゴウに当たる。

ラルク
「よし！これなら、流石に倒れるだろう・・・」

煙が晴れ、倒れたかに見えたが、まだ立っていた。

これを見たラルク達は驚愕する。

ゴウ
「ははははははは、どうだ？俺の肉体は・・・・・」

一刀
「なんて奴だ・・・俺達の攻撃を喰らったはずなのに・・・・・」

ゴウ
「残念だったなぁ～。俺は筋肉真拳、マッスルウォールを使っていたのさ」

ラルク
「ま、マッスルウォール・・・・まさか！！」

マッスルウォールと聞いて、ゴウの服が破れた事を思い出す。

ゴウ
「その通り、俺のマッスル真拳は、どんな攻撃でも耐えられる防御技中心の真拳だ。例えナイフだろうと刀だろうと銃だろうと防げるのさ、この筋肉でね！」

ラルク
「だがよ、肝心な攻撃技が無いんじゃ、意味ねぇじゃねぇか？」

ゴウ
「バカか？筋肉真拳はただ防御する真拳だと思ったか？実は攻撃技もあんだよ。カウンターを狙うようにね」

ラルク
「カウンター・・・・・それって・・・・」

ゴウ
「よく見ときな」

ゴウはそう言ってユーノとエリオを拳一発で壁まで吹き飛ばした。

これを見たラルクは冷や汗を流す。

ラルク
「これが・・・・筋肉真拳の攻撃技・・・・・」

ゴウ
「ハハハハハハ！これぞ筋肉真拳、ブーストロケット」

ラルク
「・・・・・」

孫権ガンダム
「何が筋肉真拳だ！筋肉だけで強いっていうのは大間違いだ！」

孫権ガンダムはゴウに立ち向かっていくが、首を掴まれ、左右に地面に叩きつけられ、加工食品の製造機に叩きつけられる。

呂布トールギス
「野郎・・・よくも！魂ぃーーーーーーーーーー！！！！！！！」

ラルク
「よせ！呂布先生ぃーーーー！！！！！」

叫びながら走っていく呂布トールギスを止めるラルクだったが、呂布トールギスは耳を傾けなかった。

ゴウ
「バカが！筋肉真拳奥義！部分増加！！！」

するとゴウの右腕が大きくなり、呂布トールギスを掴み、地面に叩きつけた。

叩きつけられた呂布トールギスは気絶する。

一刀
「やられたか・・・・・残るは俺とラルクか・・・・」

ラルク
「こ、これが零斗が言ってた、真拳同士の戦い・・・・・」

ラルクは目の前の光景を目にして足が震え始める。

ゴウ
「おい、足が震えてるぞ？」

ラルク
「くっ・・・・・」

ゴウ
「ふふふふ、終わらせてやるぜぇーーーーー！！！！！！！！」

笑いながら走り出し、一刀達に向かって走り、ラルクは目を閉じる。

その時、紫の魔法の弾幕らしき物がゴウを跳ね飛ばした。

？？？
「そこまでだよ！」

？？？2
「兄ぃとその仲間を傷つける物は許しません！」

？？？3
「私達が成敗いたします！」

一刀
「その声は・・・・紫苑達か！？」

少女の声に、紫苑だと分かり、一刀は後ろを向いた。

パープルプリンセス
「愛と平和を守る！」

レッドプリンセス
「ちょっとお茶目な女の子トリオ！」

シルバープリンセス
「マジカル無双戦士・・・・・」

三人
「「「三国ガールズ見参！！！」」」

ゴウ
「三国ガールズかぁ・・・・・」

するとパープルプリンセスを見た瞬間、ニヤケ顔になり、両腕が大きくなる。

パープルプリンセス
「いっくよぉ～！マジカルランス！」

パープルプリンセスの右手から紫の魔力の球が現れ、掴むとマジカルランスが出てきた。

レッドプリンセス
「マジカルアロー！！！」

レッドプリンセスの左手から赤の魔力の球が現れ、掴むとマジカル

アローが出てきた。

シルバープリンセス
「マジカルブレード！」

シルバープリンセスの右手から銀の魔力の球が現れ、掴むとマジカルブレードが出てくる。

ゴウ
「さぁ、お前等の攻撃、見せてみろよ！」

ゴウはハァハァしながらも防御の体勢になった。

ラルク
「何であいつ、ハァハァしてんだ？」

ラルクはゴウの様子に疑問を抱いていた。

ジョージ
「ゴウは・・・あいつはロリコンだ」

エリオの真拳技に倒れたはずのジョージが立ち上がっており、ラルクは驚愕する。

ジョージ
「あいつは幼女の攻撃が来る予感をするとハァハァしながら防御体勢に入る」

ラルク
「そしたらどうなるんだよ？」

ジョージ
「奴はとんでもない事をする・・・・・」

ラルク
「とんでもない事?どんなのだよ・・・」

ジョージ
「女性の経験のあるお前なら、分かる筈だ・・・・」

これを聞いた瞬間、ラルクは一瞬で青ざめる。

ジョージ
「だから・・・・あいつらに伝えておけ・・・・」

そう言い残しながら、ジョージは倒れた。

ラルク
「おぉい!お前等!奴に攻撃するな!とんでもない事になるぞ!」

パープルプリンセス
「えぇ〜何でぇ〜?」

ラルク
「奴に勝ち目が無いからだ!俺に任せて・・・・・」

パープルプリンセス
「そんなの、やってみなくちゃわからないよ!」

ラルクの言葉を無視し、ゴウへ攻撃に向かうパープルプリンセス達。

パープルプリンセス
「マジカルクロス！」

マジカルランスでＸの文字を書くように斬るが、効かなかった。

レッドプリンセス
「マジカルトライデント！！！」

光の矢を三本放ち、ゴウに当たるが、これを効かず。

シルバープリンセス
「マジカル居合い斬り！！！」

そしてマジカルブレードで居合い斬りをするが、倒れる様子が全く無い。

するとゴウの両腕が大きくなり、パープルプリンセス達を捕らえる。

パープルプリンセス
「ひゃあ！？何！？」

レッドプリンセス
「捕らわれてしまったようです～」

シルバープリンセス
「ど、ど、ど、どうしましょう！」

ゴウはパープルプリンセス達を左手に写し、スカートを右手でめくり始める。

パープルプリンセス
「嫌っ！やめてぇ！」

そしてパープルプリンセス達の胸を指でさすり始める。

ゴウ
「うへへへへ、お次はこれだぜぇ・・・・」

パープルプリンセス
「やぁ！だめぇ！！！」

レッドプリンセス
「やめてください！あぁん！」

シルバープリンセス
「キャアーー！！やめてぇーーー！！！！」

叫びだすパープルプリンセス達に、ゴウは楽しんでいる。

この光景を見たラルクは顔を赤くする。

ラルク
「何なんだよ！というか一刀！お前も見てないで助けろ！」

一刀
「いや、まだだ」

ラルク
「はぁ！？何言ってんだよ！まさかお前、紫苑達が奴にやられる姿

を楽しむつもりか！？」

一刀
「・・・・・」

ラルクの問いに一刀は黙り、ゴウは右手でパープルプリンセス達の服を裂いた。

パープルプリンセス達
「「「嫌ぁーーーーーーーーーーーー！！！！！！」」」

ゴウ
「うへへへへ、さぁお楽しみはこれからだ」

右腕を元に戻し、チャックを開け、これを見たパープルプリンセスは何かが来るかのように抵抗する。

パープルプリンセス
「いやぁ！離してぇーーーー！！！！」

ゴウ
「いただきまぁーーーー・・・・」

その時、一刀は手榴弾を取り出し、ピンを外してゴウの股間に投げた。

手榴弾は爆発し、ゴウは思わずパープルプリンセス達を放し、左腕を元に戻して股間を抑えた。

ゴウ

「俺の・・・俺のアレがぁーーーーーーー！！！！！」

パープルプリンセス
「よくも僕達をこんな目に遭わせてくれたね！絶対に許さないよ！」

レッドプリンセス
「月に代わってお仕置きです！」

シルバープリンセス
「そうですね、あなたにキツい裁きを下します！」

そして三人は、自分の武器を交じ合わせ、青色の魔力を出す。

パープルプリンセス
「僕達の・・・・・」

レッドプリンセス
「正義と！」

シルバープリンセス
「怒りを・・・・」

パープルプリンセス
「受けなさい！」

ゴウ
「え！？何か嫌な予感が・・・・・」

パープルプリンセス達
「「「マジカルハートブレイカァーーーーーーー！！！！！」」」

三人の叫びと共に青い魔力はビーム状に放たれ、ゴウを包み込んでいく。

ゴウ
「う、うわぁーーーーーーーー！！！！！」

壁に叩きつけられ、ゴウは少し顔を上げる。

ゴウ
「さ、流石は魔法少女・・・・俺の筋肉真拳を上回る技・・・見せてもらったぜ・・・・・」

そしてゴウは白目になって気絶した。

一刀はパープルプリンセス達に駆けつけた。

パープルプリンセス
「お兄ちゃん！」

一刀
「紫苑、どうしてここに？」

パープルプリンセス
「ご、ごめん・・・でも僕達は何も出来ずにいられなくて・・・授業抜け出して愛紗お姉ちゃんと鈴々ちゃん達と一緒にここに・・・・・」

一刀
「それでか・・・・でも金山企業は危ない」

レッドプリンセス
「でも、私達の魔力が無くなってしまうんです！それに、無くなったら元に戻っちゃうから・・・・・・」

一刀
「・・・・・」

これを聞いた一刀は、三人を抱きしめた。

一刀
「すまない、それを知らなくて。よく頑張った。後は俺達に任せろ」

パープルプリンセス
「お兄ちゃん・・・・・・」

レッドプリンセス
「兄ぃ・・・・・」

シルバープリンセス
「お兄様・・・・・」

するとパープルプリンセス達が光だし、一刀は少し離れる。

それと同時にエリオとユーノ、孫権ガンダムと呂布トールギスは起き上がる。

エリオ
「三国ガールズ達が・・・・・」

ユーノ
「元に戻るよ・・・・」

パープルプリンセス達を見てこれからどうなるかを気付くエリオとユーノであった。

一刀
「どうしたんだ?」

パープルプリンセス
「魔力が切れちゃった・・・・もう僕達はお別れだね」

レッドプリンセス
「これが、私達の最後なんですね・・・・・」

シルバープリンセス
「長かったような・・・短かったような・・・・・」

パープルプリンセスは、頬から涙が出る。

パープルプリンセス
「お兄ちゃん、僕たちは忘れないよ!」

別れの一言に、光だし、パープルプリンセス達は元の年齢に戻った。

紫苑
「あれ?私達は一体・・・・」

祭
「何だか、子供の頃を思い出すの~」

桔梗
「ワシもじゃな・・・・」

エリオ
「紫苑先生・・・・」

孫権ガンダム
「も、もしかして三国ガールズの正体って！」

呂布トールギス
「紫苑先生達だったのか！？」

驚愕な顔し、そして笑顔になる孫権ガンダムと呂布トールギス。

ユーノ
「ま、漫画で例えるとハッピーエンドって感じじゃない？」

一刀
「先生・・・先生が元に戻ったぁーーーー！！！！」

紫苑達が元に戻った事により、一刀は喜びの声を上げる。

その時、ゴウは起き上がり、股間を片手で抑えながらも歩く。

しかし、紫苑達を見た瞬間、青ざめた。

ゴウ
「まさか・・・・三国ガールズの正体って・・・こんなババァ達だったのか・・・・」

一刀
「あ・・・・」

エリオ
「言ったな?」

ユーノ
「禁句ワードなのに」

ラルク
「え?何が禁句だって?」

ゴウが紫苑達にとっての禁句ワードを言ってしまい、紫苑達は黒いオーラを放ちながら近付いていく。

紫苑
「今・・・なんて言いましたたか?」

祭
「凄く・・・ムカつくような一言が聞えたような~」

桔梗
「覚悟は出来ているか?」

ゴウ
「あ・・・あの・・・・皆さんどうしたんですか?」

青ざめながら目を逸らし、一刀達を見るが、いなくなり、エレベーターのほうを見ると一刀達は既に乗っており、エレベーターの扉が

閉じる。

ゴウ
「え・・・えぇ？」

紫苑
「では・・・・どのようにしましょうか？」

祭
「そうじゃの～」

ゴウ
「え？ちょっと！？何なんだよ！おい！・・・・・アァーーー

第六十六話　さらば三国ガールズ！お兄ちゃん僕たちは忘れないよ（後書き）

零斗
「次回は！ＢＳＡＡ外伝のクリスが登場するぞ！！」

フランケン
「え！？大丈夫なの！？過労で入院中だけど・・・・・」

零斗
「う～ん、ｃｈａｌｉｅｙさんは何て言うか・・・・心配になってきた・・・・」

フランケン
「うぅ・・・次回！『激闘！！マイティＶＳマッハ＆アポロ！クリスが加わって激しくバトル！？』」

零斗
「よっしゃあーーーーーーーー！！！！！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0780m/

ＢＳＡＡ学園！

2011年10月18日12時02分発行